Vivre toute ma vie

灘

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｖｉｖｒｅ　ｔｏｕｔｅ　ｍａ　ｖｉｅ

【Ｎコード】
Ｎ７１７９Ｑ

【作者名】
灘

【あらすじ】
「待つことを知る者には、万事が適当なときにくる」
そう信じて今まで生きてきた。でも、違った。
本当は待っているだけじゃ幸運はこないんだ。自分から行動を起こさないと何もやっこない
悲しき過去を背負った少年　『悠基　波弥斗』（ゆうき　はやと）
ととの
コメディーかつシリアスな物語りの始まり始まり～です！

キャラプロフィール（前書き）

初の連載小説です
はっきり言って話全てを通してグタグタだと思いますがどうか宜しくお願いします！

「そこのあなた！ちょっと何気ない気持ちで開いたのなら連載終わるまで読んでいきなさい！！」
だけど最初はオリキャラプロフィールと言う…（汗）

キャラプロフィール

悠基（ゆうき）　波弥斗（はやと）

年１７歳　　誕生日　２月１０日
身長　１７１ｃｍ　　体重６８？　　血液型　Ｂ型

趣味　ことわざを調べること、知ること
特技　ありとあらゆることわざを言える

好き　動物、ちっこい食べ物（主に柿ピーや黒豆、飴など）
嫌い　ことわざ、でっかい食べ物（主にカレーライスやオムライスなど）

瞳　　金色っぽい茶色
髪の毛　緑っぽい黒色

童顔で一言で言えば美少年。髪の毛は短髪で髪の毛の先っちょがツンツンしている。（所々はねている）頭はよくないちっこい食べ物が大好きでレストランなどに行ってもみんなが嬉しそうにステーキなどを頼んでいるなか一人「定食の端らへんについてる漬物」などといったりしている。ことわざにやけに詳しく暇があったらことわざについて調べている。しかし別に好きというわけではないらしい。
あだ名は　「ことわざの頂点」　「豆」　「ツバメ」など

作者が語る！！～このキャラのについて～
この物語り「Ｖｉｖｒｅ　ｔｏｕｔｅ　ｍａ　ｖｉｅ」の主人公くんです。髪の毛は天パーではないが所々はねていますちっこい食べ

物が好きですけど食べる量が少ないわけではあーりませーん。むしろ多いほうですこれからこの主人公くんの色々な物語りを書いていこうと思いますのでなにとぞ宜しくお願いします！！

小宮（こみや）　広貴（ひろき）

年１７歳　　誕生日　６月８日
身長　１６９ｃｍ　　体重　６４？　　血液型　Ｏ型

趣味　運動
特技　運動何でもできる、家事全般

好き　家事全般、猫、運動
嫌い　本、すっぱいもの

瞳　　黒色
髪の毛　こげ茶色

美衿の１人息子。明るく気さくで誰にでも好かれると言った人である。運動神経抜群でたいていの運動は難無くこなせる。波弥斗と一緒にかぶき町に来たとき神楽と会い、一目ぼれする

　作者が語る！！～このキャラについて～
この物語のもう１人の主人公的な存在です。私は神楽が大好きで、神楽って美少女なのに原作では誰一人として神楽に惚れていないな～なんて思っていてでも美少女だから一目ぼれとかいけんじゃね？みたいな風に思っていたらこんなキャラが出来上がりました（笑）

小宮（こみや）　美衿（みえり）

年　３５歳　　誕生日　１１月２３日
身長　１６４ｃｍ　　体重　５１？　　血液型　Ｏ型

趣味　お料理、編み物作り
特技　　お料理、お裁縫

好き　　お料理、お裁縫、子供、家族、本
嫌い　　人を意味なく傷つける人

瞳　　黒色
髪の毛　こげ茶色

広貴の母親。波弥斗の恩人。年が３５歳で実際にはもうおばさんなのだが見た目はまるで大学生のように若く美人で優しくて、誰にでも好かれている。広貴を１８歳の時に出産しており、父親は１３歳年上。

　作者が語る！！～このキャラについて～
今回最後のオリキャラです。なんか「みんなを包んでくれるやぁ～さしい人がいいなぁ～」な～んて思っていたらこんなキャラになってしまいました。

では、ダラダラと長いことキャラプロフィールを書いてしまいましたが

たぶんみなさま最後らへんは「もう、終われよ」みたいな感じにな

ってたでしょーね（汗）

だけど、もう終わりましたので！！ありがとうございました！！

次回はプロローグを書くつもりでいるのでなにとぞ宜しくお願いいたします！！

キャラプロフィール（後書き）

初めての連載小説なので正直言ってみなさまに気に入っていただけるかどうかがすごく心配です＾＾

たぶん読んでいて不快になることもあるかもしれませんがなにとぞこれから宜しくお願いします！

プロローグ（前書き）

これからがこの物語りの本当の始まりみたいな感じです

どうかみなさま嫌な気分になることもあると思いますが、どうか宜しくお願いします！

プロローグ

始まりは、7年前のあの日……。

すべての元凶である親父は今何処にいるのかわからない始末。

俺は家族さえ信じられなくなった

家族さえ信じられない俺に信じられるものなどあるのだろうか？

そう思っていた

だけどあなたのあの言葉で俺は不確かだけど「信じる」と言うことが少しは取り戻せた

だけど

7年たった今も、あいつの存在は俺を苦しませる

もう7年もたったのに？いやちがう

たった7年しか経っていないんだ…。

なぜ、俺がこんなに苦しまなければいけないのか？

どうして俺は生きているのだろう…。

苦しむ俺を置いていきあなた達はけっして後ろを振り向かない

まるで俺が見えていないかのように、

後ろを向けば俺がいるのに

どんなに走っても走っても追いつけない

あとどれくらいこんなことを繰り返せればいいのだろう

ああ、

俺は本当に生きていてもいいのだろうか…。

プロローグ（後書き）

って暗っ
次回からは明るくなりますので、どうか見てくれた方
何こんなつまらなそうな話ならもう読ーまなーいと言わず
どうか次も読んでってください！

1#運命、運命って言うけどアレ偶然でもいいけんじゃね？（前書き）

今回からちゃんとした（？）1話の始まりです
どうか宜しくお願いします

「あ、親父おでん一杯！」

1#運命、運命って言うけどアレ偶然でもいけんじゃね？

江戸・・・そこは２０年前の天人襲来のせいで「侍」が退化している世界だった。

だけどそんな江戸にもまだ光ある「侍」が・・・？

「おい新八ィ今週号のジャンプ出てたの思い出したわ、ちょ買ってきてくんねー？」

と言ったのは　坂田銀時　万事屋と言う「何でも屋」を経営しているダメ侍。

糖尿寸前の甘党で、甘いものを定期的にとらないといらいらするらしい。

「自分で行って来てくださいよ、僕は家の掃除とかで色々忙しいんですから」

などと言っているのは　志村新八　万事屋の従業員で、ツッコミ担当の駄眼鏡。

新八の特徴？んなもんあったら前の一行目でとっくに言っとるわ。

「って何ですかこの解説、すんごい腹立つんですけど・・・」

ほらね？見ました、聞きました？作者にまでツッコミするこの駄眼鏡っぽさを

「作者も新八もうるさいアル。私の解説はどうしたネ」

あ、はいすいませんさっき喋ったのが　神楽　万事屋の従業員で激辛毒舌のチャイナ娘。
絶滅寸前の種族「夜兎族」の生き残りで常に日傘を携帯している。

「わん！」

と、あともう1人じゃなくてあともう一匹、巨大な犬のような外見をした宇宙生物名を　定春　万事屋の前に捨ててあったのを神楽が拾い、以来神楽のペットである。

「それで銀さん話を戻しますけど、ジャンプなら自分で買って来てください、僕は忙しいんです」

「あ、銀ちゃんジャンプ買いにいくなら私の酢昆布買ってきてヨー」

「てめーで買えクソガキ　ったくしゃあねぇなんじゃちょっくら行ってくるとすらぁ」

社長イスのようなものからだるそうに立ち上がる銀時。

「いってらっしゃい銀さん」

「銀ちゃん酢昆布ー」

そのとき神楽がソファーに寝転んだままだるそうに言う、ついに神楽のしつこさに銀時が折れる

「わぁーたっよ!!買ってくりゃいいんだろ買ってくりゃ!!」

「ありがとアルー♪」

酢昆布を食べられるとわかった神楽はなんとも微笑ましい、見てるこっちが笑顔に・・・

「何?この作者、神楽のことひいきし過ぎじゃね?」

いえまったくそんなことはないですよ、ただ可愛さ余って可愛さ１００倍なだけです。

「それひいきしてんだろ!!何だよ可愛さ余って可愛さ１００倍って!!憎さ１００倍だろ!!」

そんな素晴らしいツッコミをしてくれながら銀時はコンビニへ行く・・・。

「進めんなぁぁ!!!!!」

～コンビニ～

「ふー最後の一冊だけ残っててくれて助かったぜ、後は駄菓子屋に行って神楽の酢昆布だな」

コンビニと自動ドアから出ながら銀時はそんなことを呟く。するとそこへ・・・

「きゃーーーー!!!!!」

「！？」

急に女の悲鳴が聞こえたのだ。

「引ったくりよー誰かそいつを捕まえてーー！！！！」

悲鳴の方へ向くと女物のバックを持った黒い服を着た男がこっちへ向かってきていた。

銀時は腰にさしている木刀　洞爺湖　を掴む。

そして、その男がこっちに近づいた瞬間にすばやくその男に向かって木刀を振る

”ガキィィィィン！！！”

「！？」

銀時が見ると確かにその男は倒れていたが、倒したのは銀時だけではなくもう一本何か長い棒のようなものがあった

棒の根っこの方を見ると１人の男が立っていた。

緑色っぽい髪に金色っぽい瞳。短髪のツンツンヘアーにフード付き黒いコートにこげちゃ色の着物にはい緑色のはかま姿で身長１７０ぐらいで最初は頭の帽子（かさ）でよく見えなかったが童顔で、まさに美少年という感じの少年だった。

「おいおい兄ちゃん、いきなりそんなもんだしたら危ねーだろ気ィ

つけ・・・」

「……アニキ!?」

いきなりその少年は銀時の顔を見ると驚いてそう言った

「やっぱりそうだ!その白髪頭!その木刀!あんた銀時のアニキだろ!!」

「さっきからアニキアニキって何だよ…お前だれ…」

「俺だよ!俺!悠基　波弥斗!」

銀時はその名前を聞いた瞬間いつもの死んだ魚のような目ではなくなりそして、

「波弥斗!?お前ほんとに波弥斗なのか!?」

「ああ!」

わーといい年した男二人がまるで女子高生のようにはしゃぎだす

「お前、ほんっとに久しぶりだな!!元気だったか!?」

「当たり前だろ!アニキも相変わらず元気そうで良かったぜ～!!」

その間にひったくり犯はつかまり、かばんもきちんと返されていって、そして最後に・・・

「あのー君達、そこ邪魔だからどいてくんない?」

まさかひったくり犯を捕まえた銀時達への邪魔扱い。

「…アニキィあいつらぶっ飛ばしてもいい？・・・いでっ！」

「止めろクソガキ」

銀時は波弥斗の頭を叩きながらそう言うそして、

「まー、ここじゃ何だし俺ん家こいよ波弥斗、ゆっくり話そうぜ」

「え、マジ？じゃーお構いなくー・・・」

「行かせるかぁぁぁぁ！！！！！！！！」

”ドガガガァァァァ！！！！！！！”

波弥斗は誰かに蹴られて思いっきり地面に顔を叩きつけられる

「お前何やってんだよ！！俺が買い物いってる間に！俺なんていったっけ？スーパーの前で待ってろっていったよね！？なのに何で人の家にいくことになってるわけぇぇ！？」

「いってーな何すんだ、広貴！！！」

そう、広貴　と呼ばれた少年、波弥斗よりは身長は少し低いがまー変わんねー程度。黒い瞳にこげちゃ色の髪、赤いはかまに白い着物に、グレーの着物の上着。

「ったく、こちとら人様の家に寄ってる時間はねーんだよ！早くいかねーといけーねってのにお前、さっそく足引っ張りやがって！！」

「んだとコラァ！てめーが買い物なんかによらなかったら良かった話だろーが！」

「・・・波弥斗ォこいつは？」

すると横にいる銀時が口を開く

「こいつは、小宮　広貴　って言って俺の恩人の息子なんだ、ほら前に話たことあんだろ？」

「ああ、こいつ」

「こいつって何だよ！ったくこんな町さっさっと出て先に進もーぜ」

「えーちょっと待てよいいじゃんかちょっとぐれー」

広貴はクルッと向きを替え歩き出す、すると・・・

「銀ちゃーーーーん！！！！！」

「神楽！？」

向こうから急に神楽が走ってきたのだ。

「え、誰？アニキ」

「ああ、こいつは神楽っていってな俺がやってる万事屋っていうの

の従業員なんだ」

「銀ちゃん、誰アルか？こいつ」

「よぉ俺、悠基波弥斗ってんだアニキとは昔の付き合いでな、宜しくな」

「私は神楽って言うネ、宜しくアル」

「神楽、お前どーしたんだ？」

「新八が銀ちゃんに洗剤切れてたか洗剤もついでに買ってきてって言ってきてって・・・そしたら酢昆布ひとつ買ってきていいってホラ！」

神楽は手のひらにある小銭を見せる。

「んだよ、自分で買うなら俺が買いにいかなくてもいいんじゃねーか」

「良くないネ！2箱がいいアル！」

「わかった、わかった、と波弥斗お前どーすんの？」

「え？俺としてはできれば寄りたいけど広貴が・・・」

「寄らせてください！！！」

「「は？」」

波弥斗、銀時は声をそろえて言った

「初めまして!俺、小宮　広貴　っていいます!お好きなように呼んでください!いやー神楽さんと言うんですね、かわいらしい名前ですねー♪♪」

広貴はさっきとはまるで別人のような顔、喋り方で言う

「え、何?広貴?どったの?」

キョトンとする波弥斗に銀時が・・・

「まぁ、恋はいつでもハリケーンって言うしな・・・」

まったく別の漫画のセリフをオチに回してきた銀時であった・・・。

1#運命、運命って言うけどアレ偶然でもいいけんじゃね？（後書き）

一話のかんせーです！！
めちゃくちゃダラダラとすいません（汗）

こんな話を長いことありがとうございました！
次回も宜しくお願いします！！

2#仕事を見つけるために何事にもまずはボタンをポチッ！（前書き）

波弥斗「俺プロローグですっげー暗いヤツ的なイメージをもたれていたみたいなんだけど？」

作者「うん、なんか暗そうとか、ナイーブだな、とか言われたよ」

波弥斗「うわっキッツ！どーしよそのままそのキャラ演じた方がいいのかな？」

作者「めんどくせーよ、今更キャラ設定のところに：暗くてナイーブ：って変更すんの超めんでぇーよ」

広貴「やかましわ！！！！はやく始めろよ！！！！」

と言うわけで宜しくお願いします＾＾；

2#仕事を見つけるために何事にもまずはボタンをポチッ！

前回、神楽に一目ぼれしてしまった広貴のおかげで万事屋でゆっくり話せることになった銀時と波弥斗

「へぇ～んじゃその恩人にお礼もかねて江戸に働き手を探すためにきたのか？」

「ああ、そんでその場所に行くのにかぶき町は通り道だったんだよ」

万事屋で新八が出してくれたお茶を飲みながらソファーで語る銀時と波弥斗。

そして広貴と神楽はと言うと・・・

「俺、家事全般できんですよね。あと運動（スポーツ）とかも大得意なんです！」

必死にいい男をアピールする広貴

「ふーん」

まったく相手にしない神楽。

むしろその方が嬉しい作者。

「いや、なんか変な人の解説ありませんでした？」

そんな作者にツッコミする新八（眼鏡）。

「いや、何んですか眼鏡って、いらないでしょその説明」

そんなこんなで・・・

「わかってましたけど！わかってましたけど腹立つんですけどそのスルーの仕方！！！！」

「・・・それで？波弥斗さん達はこれから何処に行くんですか？」

「ん？かぶき町の隣町の小さな保険会社が清掃員を募集してるらしくてよぉそこに行ってみようかとは思ってるけどまぁ明日面接してくれるらしいから決めるのはそれからだけど・・・」

チラッと広貴の方の見る波弥斗。

「それでですね、俺そん時言ってやったんです　ここは俺のなわばりだ出て行け！　って・・・」

「ふーん」

まったく相手にしない神楽に武勇伝を語る広貴。

〜・・・それ昨日のドラマで刑事が言ってたセリフじゃん・・・。〜

ひっそりと心の中でツッコむ波弥斗であった。

「まぁ・・・相方があんな調子だし、ゆっくりしてけよ波弥斗」

「ああ、悪ィけどそうさせてもらわぁ」

「あ、ちょっと待て波弥斗！もうすぐ結野アナのニュースの時間だ！」

「は？結野アナ？」

「ああ、気にしないでください」

急いでテレビをつける銀時を見てそういう波弥斗に説明をする新八。

「いやーこれを見ねーと俺は明日生きていけないんだよいや、ほら今日おこった出来事とか、明日の天気とかしっとかねーと」

「銀さんが知りたいのは結野アナの今日の調子でしょ」

そんな新八の言葉を苦笑いしながが聴く波弥斗すると、先ほどまで天気について話していた結野アナが今日おこった出来事について話はじめる。

「えーそれでは今日午後１３：００におこったニュースです。○○町の小さな保険会社が麻薬の取引を暴力団としていることが発覚しました、現場には複数の白い粉が入った袋と金庫に入っていた大金は実に３０億円にもたっしており、警察は今後に・・・」

そうやって今日おこったニュースを的確に言う結野アナ。そして

「「「「「・・・・・・・・・・。」」」」」

呆然として動けない銀時、波弥斗、新八、広貴

「ん?どうしたアルか?みんな」

唯一よく分かっていない神楽

先ほどまで神楽にありもしない武勇伝を話していた広貴もこればかりは固まったままだった

なぜならその小さな保険会社とは波弥斗と広貴が明日面接をすると言っていた保険会社だったからだ。

「お、おい波弥斗・・・」

呆然としながら聞く銀時

「・・・はい仕事ポーーン・・・」

アハハハハと明日への目で笑う波弥斗。

「・・・ポーーン・・・じゃねぇよ!!!!どーすんだよ!!これから!!仕事の宛なくなったんだぞ!?俺たち住むところも住み込みってお願いしてたからすむところもなくなったんだぞ!?」」

我に返った広貴。

「どーするもこーも、今時あんな風にいい給料でいい仕事ねーよ、恩返しもクソもねーよつーかこの不景気仕事だってちゃんとみつけれるかどうか・・・」

やっと長年の恩返しができると思っていた波弥斗にこれはさすがに

きつかったらしいまだ呆然としている。

そして、広貴もまた混乱している

そんな二人に万事屋三人は目を合わせ、ため息をつく。

〜〜〜なんて不幸なんだこいつら・・・〜〜〜

だけど、さすがにそんな二人を見てかわいそうに思ってきたのか新八が言う

「あ、だったらお登勢さんに相談して見ませんか？」

「「え？」」

さっきまで放心状態だった波弥斗と混乱状態だった広貴が声をそろえて反応する。

「うちの下の階でスナックを営んでる人なんですけど、このかぶき町の四天王だからもしかしたらいい仕事とか紹介してもらえるかもしれませんよ？」

その言葉に目を輝かせて反応する二人。

「マジでか！？眼鏡！！」

「てーことは何！？俺たちもしかしたらこのかぶき町で暮らすようになるかもしれないってこと！？」

身を乗り出して新八に聞く二人

「え、ええ多分、でも眼鏡って・・・」

「細かいことは気にすんな!!さっそくそのお登勢さんって人に聞きにいこうぜ!!」

バタバタと靴を履きだす二人、そんな二人の後を急いでついていく3人

{{{立ち直り、速ぇーなー}}}

万事屋3人は見事に3人同時に同じことを思っていた。

~スナックお登勢にて~

「は?住み込みの仕事?」

そう言ったのはお登勢。先ほども新八がいった通り万事屋の下でスナックを営んでいるママ。そしてかぶき町四天王の1人である。

「今時住ミ込ミノ仕事ナンテ都合ノイイ物件簡単ニ見ツカルワケネーダロ」

とカタカナで読みにくい喋り方をするのは、キャサリン。スナックお登勢の従業員であり、鍵開けが得意なネコミミのオバサン天人である。

＜ですが、銀時様たちの頼みともなると、私も全力で協力したいと

は思っております＞

あれ？「」じゃなくて＜＞になってんだけど、とツッコミも受け持ちます。「」じゃなくて＜＞で話したのは　たま　からくり家政婦で、見た目は可愛い女の子。しかし、お登勢が銀時達の借金取立てのために色々なんかいじってもらったので戦闘力も優れている。

「そうなんですよ、お登勢さん何かいい仕事知りませんか」

「「お願いします！！！」」

声をそろえてお登勢に拝む波弥斗と広貴。

「そうは言ってもねェ～住み込みの仕事なんてそう簡単に・・・」

と急に何かを思い出したかのようにお登勢が言う

「そーいえば西郷の化け物が住み込みで働いてくれるヤツを探してるっていってたけど・・・さすがにアレは嫌だよねェ」

「「西郷？？」」

二人は首をかしげて聞き返す

「西郷さんって言うのはお登勢さんと同じかぶき町四天王の１人でかまっ子倶楽部って言う店を営んでいるんですけど・・・さすがにアレは・・・」

「いや、たとえどんなに変な仕事でも俺達はかまわないぜ！！なぁ広貴！！」

「ああ、希望の光が見えてきたな!!さっそくその店に行ってみようぜ!!案内してくれ!!」

「え、本当に行くのかィ?」

お登勢は自分が進めてものだがそれはオススメしないといわんばかりにとめる

「まぁ、本人達があんだけ行ってんだ大丈夫だろ、んじゃ俺達は案内してくらァ」

銀時、神楽、新八は二人の後をついていく。こうして波弥斗と広貴は・・・

~かまっ子倶楽部前にて~

「ホントにいいのか?波弥斗・・・」

「ああ!俺達はどんなにつらい仕事でも耐えて見せる!!無理だとしてもせめて三日はもって見せる!!」

「俺もだ!」

「・・・んじゃあ知らねーからなホラ行って来い」

「「おう!」」

”ガチャ”

「あらぁ～いらっしゃあ～い」

「「「「「「「かまっ子倶楽部へようこそ～～～」」」」」」」」

”パタン”

「「・・・・・・却下で・・・・・・」」

「三日どころか三秒ももってねえじゃねぇかぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！」

次回、波弥斗と広貴の仕事は見つかるのだろうか？？

2#仕事を見つけるために何事にもまずはボタンをポチッ！（後書き）

以上で2話目の完成です！！

本当にしょうもなくて恥ずかしいんですけど・・・

どうか宜しくお願いします！！

３#男はどんな時もかっこつけたい生き物である（前書き）

波弥斗「今回ちょっと更新遅くなったことね？」

作者　「はい、実は部活の合宿にいってて・・・」

波弥斗「それで？合宿に行ってきてちょっとはうまくなって帰ってきたのか？」

作者　「それでは第３話の始まりです！！」

波弥斗「・・・・・・・・・・・・。」

3#男はどんな時もかっこつけたい生き物である

「はぁ～～～マジやべーってコレ家をかっこよく出てからたった2日で　仕事なくなりました！　ってどーなのよソレ　ヤベーってコレマジ自分が恥ずかしいんだけど」

と公園のベンチで呟く波弥斗

「唯一の望みだったお登勢さんも消し飛んだしな・・・」

独り言のように言った波弥斗の言葉もきちんと返す広貴

「・・・なぁ俺考えたんだけど神楽さんの所で働かせてもらうってのはどーだ？あそこなら・・・」

「馬鹿かお前は、アニキがまともな仕事をしてるよーに見えるか？万事屋なんてそんないかがわしい商売儲かってるわけねーだろ。住み込みで働くにしてもありゃ神楽1人で限界だな」

もっともである。

「っ！てめぇ！！」

波弥斗がそう言うと急に声を上げ怒ろうとしだす広貴

〜どーせさっき馬鹿とかいったことについて怒るんだろ、ったくめんどくせー〜

と座って前を向いたままため息をつく波弥斗

「何神楽さんのこと呼び捨てにしてんだコラァァァァァ！！！！！！！！！！！！！！」

「ってそっちかよぉぉぉぉぉぉぉぉ！！！！！！！！！！！！！」

仕事を探すことなど完全に忘れて、かたや恋愛に夢中なヤツと、かたやツッコミに夢中なヤツと・・・仕事探せ仕事

「おーい何してんだお前らコノヤロー」

「！アニキ！？」

「仕事は見つかったアルか？」

「！神楽さん！！！！！！！」

「僕らの方は見つかりませんでしたけど・・・」

「「・・・・・・・・・・眼鏡。」」

「なんで僕のときだけテンション下がってるんだぁぁぁぁぁ！！！しかも眼鏡って！！！！」

「あきらめろお前はそういう運命だ新八（めがね）」

「そうネ新八（めがね）はそういう運命ヨ」

そうだぞー新八（めがね）二人の（主に神楽の）言うとおりだぞー

「・・・・・・・・何？死んでいい？」

「・・・そっかアニキ達の方もなかったか・・・」

「ああ、悪ィな・・・」

「アニキ達が謝るこたぁねーよ。謝るのはこんなこと頼んでる俺達の方だぜ」

「何いってんだ波弥斗」

とポンと銀時が波弥斗の肩に置く

「きちんと金はもらうからな」

「ってそういうことかよ！！！！！」

予想外・・・いや銀時だから、予想内か・・・。

「すいません、神楽さんこんなこと手伝わして・・・」

広貴は申し訳なさそうに神楽に言う

「何言ってるネ、金を払ってくれるなら私はどんなことでもするアルそれが万事屋ヨ」

とガッポーズをしながら言う神楽

これを聞いていたのが波弥斗ならば「ってやっぱり金とんのかよ！！」とツッコミがきていただろうが・・・

「・・・神楽さん・・・（ジーン）」

ツッコミする気配が一ミリも感じられない

「でも、何でもすると言っても結構手当たりしだいに探しましたけど結局見つかりませんでしたし・・・今日はもう遅いですし、とりあえず今日は帰りませんか？」

「ん？そーいえば俺達昼ごはんも食ってねぇな・・・」

「そーいえばそうだな・・・」

グルルルルと醜い音が響く

「んじゃあ、波弥斗達も来い。行こーぜ」

と銀時、神楽、新八は公園の出口まで歩きはじめるすると・・・

「「いや、俺達はいい」」

「「「は？」」」

波弥斗、広貴は声をそろえて言うまた、銀時たちも声をそろえて声を出す

「オイオイ何言ってんの？お前らどーせ泊まるとこねーと思ってい

ってやってんのにめんどくせーこと言うなよ」

「そうですよ、ちょっと厳しいですけど二人分のご飯が増えるぐらい大丈夫ですよ？」

「寝るのもお前らソファーで寝ればいいだけの話ネ」

なんとか（？）説得しよーとする三人　しかし

「いや、俺達ァずっとアニキ達に迷惑かけてきたんだ一日、二日寝るとこぐらい自分で探せねーでどーするよ」

「心配しないで下さい神楽さん俺達なら大丈夫ですから」

と迷いのない瞳で言う

その瞳には一切の曇りもない

「・・・わかったじゃあ明日の朝１１時にここに集合な、せいぜい凍えてな」

と銀時

「ほざけ、そんなへましねーよ」

「当然だ、波弥斗」

「気をつけてくださいねお二人とも」

と新八

「おうサンキュ新八」

「ありがとな」

「どうしても我慢できなくなったらくればいいアルこの神楽様にひれ伏すと言うのなら入れてやるネ」
と神楽

「言ってろクソガキ」

「俺は神楽さんが言うのならいつでもどこでもひれ伏しますよ！」

「ちげぇーだろ！！！」　”バシッ！！”

「いで！！」

そして、銀時達が公園を出て見えなくなった瞬間・・・

「・・・さぁ～て、んじゃあ・・・」

「アニキ達には内緒でお登勢さんの所に行こうか・・・」

「んなんじゃあそりゃあぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！！！！！！」

”バシッドカッ！！”

「お前何！？かっこつけといてなんか宛があるのかと思っていたら・・結局あの人達に世話になるんじゃねぇかぁぁ！！！！！！」

「ってーな！しゃあーねぇーだろ！！お前だってかっこつけてたじゃねぇかよ！！」

「うっせーお前はともかく俺は神楽さんの前だったんだ！いいだろちょっとぐらい！！」

そうだ！返せ！さっきの「その瞳（め）には一切の曇りもない・・・」とか書いた時間を！！

「やかましわ！！！！！！」

ぎゃーぎゃーと夜の公園ではしゃぐ二人、すると

「おいおいィちょっと静かにしてくれねーかな」

「「！？」」

声のする方へ向くとそこには

　ダンボールをマイホームと呼ぶまるでダメなおっさん略してマダオの　長谷川　泰三　がいた。

「「・・・・・・・・」」

二人はこの時　〜自分達も仕事を探せなかったらああなるのだろうか・・・〜　そう思った。

「・・・えーと・・・どちら様ですか？」

曖昧にいや、あんまり関わりたくないといわんばかりの声で聞く広貴

「俺ぁ長谷川　泰三　って言ってなこの公園の・・・主（ヌシ）だ」

「「・・・・・・・・・」」

関わってはいけない　まさにその答えが頭を支配する。

自分を公園の主（ヌシ）と名乗るこの男に、　すると長谷川もといマダオは

「お前達、もしかして俺の仲間か？」

「「え？」」

何とも失礼な勘違いである

「そうか、そうか、そんな若けぇのに・・・可愛そうなこったぁ」

「い、いや、自分らは・・・」

「何も言うな」

と、煙草をすうマダオ

「来な」

と親指を立ててクイッと向こうを指差す公園の主（ヌシ）。

「「？？」」

関わってはいけない、だけど何故かついていってしまった二人であった。

3#男はどんな時もかっこつけたい生き物である（後書き）

ってなんだこの中途半端な終わり方は
って感じですよねー、はい

まったくもってその通りでございます

・・・次回も宜しくお願いします＾＾

4#風邪の一番早く治る方法は他人に移すこと（前書き）

作者　「ゲホゴホゴホッ！！」

波弥斗「おっおい！最近更新遅いと思ったら・・・大丈夫か！？」

作者　「あははは、ノープログレムノープロエテクション・・・」

波弥斗「ちょっ！おまっ、ぜんぜんだいじょーぶじゃねーじゃん！！」

作者　「3でいいっていってくせに2以上で駄目ってどいうことじゃあああああああ！！！！！」

波弥斗「壊れたぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！！！！！！！！！」

4#風邪の一番早く治る方法は他人に移すこと

前回、見知らぬおっさん（マダオ）に何かしらんけど橋の下のおでんの出店につれいかれた波弥斗と広貴。

「お前ら・・・名前は？」

「あ、　悠基（ゆうき）　波弥斗（はやと）っていいます」

「俺は　小宮（こみや）　広貴（ひろき）です」

「そうか、立派な名前じゃねぇか」

「・・・んで？何があったのよお二人さん、そんな若けェのに・・・」

とグイッとお酒を飲むマダオ・・・。

「「・・・・・・・・・」」

何をどうすればこんな状況になったんだろうとわけのわからない二人・・・。

（なぁ、広貴どうすんだよコレなんか俺達完全にホームレスって思

われてるぜきっと・・・｝

マダオには気づかれないように広貴に話しかける波弥斗

｛｛いや、ある意味間違ってはいねーかも・・・｝｝

「オイ親父、この二人にもなんか適当におでん注いでやってくれ、あと酒も・・・・」

「「！？」」

「ちょ！？おっさん！？じゃなくて長谷川さん！？俺ら未成年なんだけど！！」

「そうッスよ！！まだケツの青いガキッス！！酒なんてそんな大人の階段昇るの早過ぎるッス！！」

そんな二人の言葉など聞こえないかのように親父（店主）は

「あいよ」

とても力強い返事をしたとさ・・・

｛｛｛｛ええっーーーーーーーー！？！？｝｝｝｝

「まぁ飲みな」

グイッと波弥斗と広貴のガラスのコップに酒を入れるマダオ

｛｛だから未成年だって・・・｝｝

「まったくよー俺も最初は根無し草ってわけじゃなかったんだ」

突然、自分のことを語り始めるマダオ。

「最初、俺は入国管理局に居てな・・・結構出世街道まっしぐらだったんだ・・・そん時にゃあまだ妻もいた、ハツっていうんだか・・・」

その時、妻の話をするときのマダオの顔は一段と、寂しそうにも見えた。

「まぁ、ある日どっかバカな国のバカな皇子のバカなペットを探すために万事屋っていう奴らに頼んだんだよ」

その言葉に反応する二人

「アニキ達に？」

「アニキ？誰のことだ？」

「あんたの言う万事屋って言うのをやってる天然パーマだよ」

「へぇ、銀さんと知り合いだったのか・・・」

「まぁな」

「じゃああんた神楽さんのこともしってんのか？」

「神楽さん！？あ、ああ知ってるも何もあの激辛毒舌チャイナ娘のせいでいつも寿命が縮む思いでいるぜ・・・」

「神楽さんのことをバカにすんなぁぁぁぁぁぁ！！！！！！！！！！」

「グボォォォォォ！！！！！！！！」

広貴の強烈なアッパーカットがマダオに入る。

「っててて・・・いっいきなり何すんだよ！！この子はぁ！！」

「悪ィなぁー長谷川さん、今コイツは恋愛期間まっただ中なんだ、何しでかすかわからねぇーぜ」

「え？まさかあのチャイナ娘のことを・・・？」

「そのまさかだ」

それを聞いた瞬間マダオは広貴の肩に手をおき

「広貴くん・・・君はまだ若い、君は見た目もそんなに悪くないから相手ならいくらでもいるじゃないか考えなおせ、な？」

「だぁーーーかぁーーーらぁーーー！！！！！神楽さんのことをぉぉーー・・・」

「いい加減しろぉぉぉぉぉぉぉぉ！！！！！！！！！！」

波弥斗の壮絶な蹴りが長谷川に入る

「って何で俺エエエエエエエ!?!?!?!?」

「すんませーんあの場で暴走しそうな広貴より標的になりそうな長谷川さんの方が蹴りやすかったんですぅー」

「って何その言い方!!全然反省してないよね??全然謝ってないよね??」

「いいから話の続き言えよ」

「何で命令口調!?何で上から目線!?」

「・・・まぁそれで万事屋の奴らに依頼したんだがあ、そん時はあんたの言う神楽さんってのはまだいなかったんだけどな」

「んで探すのを依頼していた矢先にその標的だったバカなペットが現れたんだよ」

「よかったじゃん」

「それで何でやめることになるのかがわかんねー」

「ああ、普通のペットならそれで捕まえて終わりさ・・・だけど」

「そのペットっていうのが、巨大なタコみたいな宇宙生物(えいりあん)だったんだよ」

「「・・・・・・・・・」」

どこのどいつだそんな宇宙生物(えいりあん)をペットと呼ぶバカ皇子は・・・そんなことを思う二人であった・・・。

「それで万事屋の片方の眼鏡・・・じゃなくて新八くん？だっけいるじゃないかその子がペットにつかまってよぉー銀さんが助けに行こうとしたんだ。しかし無傷でとらえろと言われていた俺は銀さんが新八くんを助けに行こうとしたのを止めたんだ」

「だが銀さんは止まらなかった。自分(テメェ)の肉体が滅ぶまで背すじ伸ばして生きていくだけとそれが自分の武士道だと、国が滅ぼうが構いやしねぇーってよぉ」

「「・・・・・・・・・」」

さっきまでとは違いおとなしく聞く二人。

「そこで俺も初めて気づいたんだここは侍の国だ好き勝手やりゃーいい、ハイハイと奴等(あまんと)のいうこと聞かなくてもいいってな・・・」

「そんで俺はその場のテンションに身を任せてしまいそのバカ皇子を殴っちまったんだ。それがおれのマダオ人生の始まりさ・・・」

「「・・・・・・・・」」

それ、7：3で自分のせいじゃん・・・。そう思う二人であった。

「まず、仕事はクビになり、夜逃げでもしようかと考えていたら妻(ハッ)がさきに夜逃げした」

哀れなり白き龍よ・・・（CM風）

「とまぁそんなわけで俺は今こうしてマダオになったわけだがまだ人生諦めたわけじゃねーんだ」

「それから色々な仕事についてきた、何回も何回もクビになってきただがそんな時こそ、今こそ背すじ伸ばさねぇーでいつ伸ばすよ俺はそう思った」

そう言うとマダオは立ち上がった

「こんなおっさんですら人生まだ諦めちゃいねーんだ、まだおっさんにもなっちゃいねぇお前等二人みたいな若僧が諦めてどーするよ」

別に諦めていねーよ　そう心の中でしっかりツッコミをした二人だったが、

「うん、わかったよ長谷川さん。言い話聞かせてもらったよ」

「ああ、俺達もっかい仕事探しにいって見るよくなったら朝まで・・・」

二人も立ち上がる

「そうか・・・そーいえばお二人さんどんな仕事探してんだ?」

「ん?もうこの際仕事なんて選んでいけーねからどんなんでもいいけど、住み込みのがいいんだなるべく」

「ただし、かまっ子倶楽部はなしな・・・」

「住み込み・・・」

「ああ、だから俺達もう行くよありがとな長谷川さんまたな・・・」

「ちょちょちょちょっと待てェお二人さん!!!」

「「??」」

いきなりマダオが呼び止めてきたのだ

「ふっ二人とも、住み込みの仕事を探してェってならいい仕事がある、だけどそこは二人みてぇーな若いもんしかいけねーんだから俺はいけないから二人ともし行く気があるのならちょっと言って見てみねーか?もしかしたら案外気に入るかもしれねーぞ」

「「!!!!!!」」

「まっマジでか長谷川さん!!仕事紹介してくれんのか!?」

「ほんとっスか!?やったぁ!!」

飛んで喜ぶ二人まさかこれを紹介したマダオが実は

〜仕事できそうな奴紹介してくれたら紹介料くれるって言ってたなーんて事絶対に言えねぇな・・・〜

なんてことを思っていたとはこれっぽっちも思っていなかった

――次回、長谷川が紹介してくれた仕事とは一体どんな仕事なのか??――

４＃風邪の一番早く治る方法は他人に移すこと（後書き）

なんか・・・ボロボロだな・・・コレ・・・と思います。

インフルには掛かるわー学校には行けれんわー小説は更新遅くなったわーと

災難続きでした。

こんな作者（ばか）が書いた作品を読んでくださってありがとうございます！！

次回もどうか宜しくお願いします！！

5#言葉は思うところを　偽るために人間に与えられた　（前書き）

作者
「やべーってコレ学年末近いのに、ただでさえ馬鹿なんだから学校いって授業受けなきゃならないのに何でインフル！？」

波弥斗
「おめーの日ごろの行いだよ・・・。」

作者
「何おぅ！！！」

広貴
「んじゃ第5話の始まりです」

5#言葉は思うところを　偽るために人間に与えられた

前回、長谷川さんに仕事を紹介してもらってその場所に行こうとする波弥斗と広貴

「なぁ広貴、ホントにここでいいのか？」

「ああ、たぶんココでいいと思うんだけど・・・。」

二人の目の前には大豪邸があった。

「何だよココはぁ、メチャクチャ金持ちじゃねーか」

「長谷川さんもすげーとこ紹介してくれたモンだな」

そんなことを呟きながらどでかい門をくぐりぬけようとすると、

「待て！そこの二人！！」

「「！」」

何者かが二人を呼び止める

「貴様等何者だ？ここは柳生家であるぞ、凡人が入っていい場所ではないぞ！」

｛｛柳生家・・・？｝｝

「すんませーん、俺らーあのなんかここきたら仕事させてくれるって聞いてきたんですけどー」

疑問には思ったがとりあえずここへきた理由言う

「仕事・・・？そんなもの聞いておらんぞ」

「はぁ？でも俺ら確かに・・・」

「何をしている？」

「「！？」」

後ろから急に声が聞こえたのだ。

見ると屋敷の方からポニーテールで左目の方には眼帯をして下駄をはいてやけに背の低い美少年がこっちへやってきていた。

「門の前で人がいるなとは思って来て見たら・・・何だ？君達は？」

「若！！」

「誰だ、あんた」

「僕は柳生（やぎゅう）　九兵衛（きゅうべえ）この柳生家の次期当主だ」

「へぇ、ずいぶん小せぇ男（ヤツ）だなそんなんで当主できんのか」

「貴様ぁ！若になんたる無礼を！！」

すると、さっきまで波弥斗達と話ていた家来らしき男が急に怒った

「いい、下がっていろ」

「え、は、はい！」

すると男は何処かへ急いで行ってしまった

「――さて、君達は何のようでここへきたのか教えてもらおうか？」

「だぁーかぁーら！さっきからいってんだろ！仕事だよ！し・ご・と！」

「俺らはここにきたら住み込みで仕事ができるってきーてきたんですけど・・・」

「仕事？あぁ・・・」

そういうと九兵衛は何かを思い出したかのような顔をした

「もちろんそれは構わないが、その前に確かめないといけないことがある」

「？確かめないといけないこと？」

「ああ、ついてきてくれ」

そう言うと九兵衛はクルッと向きを替えどこかへ歩いていき始めた。

「おい、波弥斗マジでついていくのか？」

「たりめーだろ、あの人のためにも俺達はぜってー仕事を見つけないといけねーんだよ！」

「・・・そうだな」

そう言って二人は九兵衛の後をおった。

～道場前～

「何だココ、道場？？」

「二人共、入ってくれ」

そう言うと九兵衛はげたを脱いで中へ入った。

入って中央あたりまでくると九兵衛は振り向いた

「二人共、そういえばまだ名前を聞いていなかったな、名は？」

「俺は悠基　波弥斗ってんだ」

「俺は小宮　広貴、宜しく」

「そうか波弥斗に広貴か、では二人共これから二人を雇うかどうかを決める試験をする」

「試験??」

「そう、僕の家柳生家は先祖代々将軍家に使える名家で、いまだに門下生が集まってきたりもする」

「門下生?何の・・・ウワッ!!」

いきなり九兵衛が木刀を振り回してきたのだ。

「ホォ・・・よく避けれたな」

「危ねぇーな!!!いきなり何すんだテメッこのやろー!!!!!」

波弥斗はしりもちをついたまま怒鳴る

「・・・もしかして、門下生って・・・剣の?」

それを見ていた広貴が言う

「そう、柳生家とは剣の名門。そんな柳生家だが最近ある護衛がやめてしまってな、そのかわりがすぐにでも必要なんだ、そこで・・・」

「俺らに護衛の実力があるかどうかを見る試験・・・ってか?」

「ご名答」

「なるほど、そういうことなら喜んで受けるぜなぁ広貴」

「ああ!」

二人は目をあわせて言う

「そうか、では早速してもらっても構わないか？」

「「とーぜん！」」

「では、この木刀を受け取れ」

そう言うと九兵衛は二つ木刀を二人に投げた。

「今から僕の部下十数名と戦ってもらうその部下と戦って無事勝利したら護衛として君等を雇おう」

そう言うと九兵衛の後ろから面の悪い奴等十数名がゾロゾロやっきた

「ヘッ！ゾロゾロと・・・楽勝（よゆー）だよな？広貴」

「誰にいってんだよ」

二人は背中と背中をくっつけて話す。

すると道場の後ろらへんにいる九兵衛が

「よし・・・それじゃ、始めてくれ！」

九兵衛がそう言うと部下達が一斉にかかってきた

「おらぁーー！！！！ぶっ殺してやるーーー！！！！！！」

「くたばれーーーーーーー！！！！！！！」

そして一斉にそいつらが木刀を振り下ろす

「へっ！チョロイぜ・・・何！？」

そこには二人の姿はなかった。

「てめーらに教えといてやる・・・」

「「「「「「「「「！？」」」」」」」」」」

声の方を見ると、二人は宙にいた

「『言葉は思うところを　偽るために人間に与えられた』って言うことわざを覚えとけーーーーー！！！！！！！！！！」

”ドガァァァァァァァ！！！！！！！！！”

そう波弥斗が叫んで木刀を広貴と一緒に一気に振り下ろしたらもう部下は全員倒れていた。

そして、ストンと床についた後・・・

「言葉には行動が伴わないと意味がないって意味だ。てめーら俺等をぶっ殺すって言ったんならちゃんと実行しろよコラ」

そう言う波弥斗そしてクルッと九兵衛の方を見て

「坊ちゃんよぉ・・・いやお嬢さんよぉ、俺等のこと、雇ってくれ

るよな？」

しばらく九兵衛は何かに驚いていたが、しばらくしてフッと笑うと・・・

「柳生家へようこそ」

それを聞き、二人は・・・

「「よっしゃあああああああああああーーーーーーーーーーーー！！！！！！！！！」」

見事に無職から抜けることのできた二人でした　　そして・・・

～公園にて～

「あの二人・・・うまくやってるかな・・・」

そう言うとタバコをフーとはいた長谷川（マダオ）でしたとさ

5#言葉は思うところを　偽るために人間に与えられた　（後書き）

・・・なんじゃこの終わり方はーーーーーーー！！！！！！

話はグダグダだし、めちゃくちゃだし！！

みなさんすいません＾＾；もうホント小説力がなくて・・・

6#きっとどこかにむさくない男がいる（前書き）

灘
「テストなんて消えてなくなれ～～～～～～～～！！！！」

波弥斗
「なっ何だよ急に！更新遅いと思ったら・・・」

灘
「テストだよ！て・す・と！悪い点とってマヂでヤバイんだよ！！」

波弥斗
「何だ学校のテストの話かよ・・・」

灘
「何だとは何だ！」

波弥斗
「テストできるだけいーじゃねぇか、俺なんか寺子屋にだって通えなかったんだからよ・・・。」

灘
「あ・・・（↑寺子屋に通わせなかった本人）」

6#きっとどこかにむさくない男がいる

前回、なんとか柳生家で雇ってもらえて無職から抜け出せた波弥斗と広貴

「クヘッ！クヘッ！クヘッ！」

気持ちの悪い笑い方をする波弥斗

「な、何だよ波弥斗その不気味な笑い方は・・・」

「おめーわかってねーなァやっと仕事が手に入ったんだぜ？これが笑わないでいられるか！」

「仕事が手に入った嬉しさはわかるけどその笑い方はわからん」

「うるせーよウゼーよバケーよ」

「バケーよ・・・？」

よく分からないがとにかく喜んでいるらしい

「二人共、何をそこで喋っている？さっさとついてこないと置いていくぞ」

と言ったのは九兵衛。

「ヘイヘイ、悪ーございましたよお嬢さん」

「！・・・」

そう言った波弥斗の言葉に反応する

「波弥斗・・・だよな？」

「ん？」

クルッと向いて話かける九兵衛

「なぜ僕が女と分かった？」

そう、波弥斗はなぜか九兵衛が女と言うことに気づいたのだ。

「あ、それ俺も聞きたいなんで分かったんだよ」

興味津々そうに聞く広貴

波弥斗は少し考えたがしばらくしてハァとため息をつくと

「・・・この屋敷ん中入ってお前が現れた時、門番みてーなヤツが言ったよなお前のことを『若』って言っただろ？そん時からおかしいなって思ったんだよ」

「は？何でだよ普通じゃねぇ？若って・・・」

「俺だって別にそれだけだったらおかしいとは思わねーよ。ただそん後にあの男お前が下がってろって言ったらすぐに下がっただろ？ふつーに門番とかだったらなァ下がってろって言われたら後ろに下がるだけか、「しかし」とか言ってそこにとどまると思うんだ。その人が次期当主だったらなおさら」

「・・・・・・」

じっと聞く九兵衛。

「だけど、あいつはすぐにどっかに行った、それはそいつが例え襲われても大丈夫な強さをもっていると信じているかそいつが聞かれたら悪い話をする可能性があるかのどちらかになる。」

「だけど俺等の前であんたは名を名乗ったつーことはあんたと俺等は初対面っつーことがあいつにも分かってたはずだ。だから聞かれたら悪い話っーのは可能性が低くなるけど、俺等は二人な上に見知らぬヤツだからなァその人がどんだけ強くても襲われても大丈夫という考えも可能性は低い」

「だけど、男はすぐにどっかに行った。まァ正確には遠くから見守っていたみてーだけどなァ・・・」

ジロッと後ろの方を見ると門辺りで先ほどの男が居た。

「つまり、遠くで見守っていたと言うことは襲われたらすぐに駆けつけれるように、とその人が聞かれたらまずい話をする予想が高い

と思われる人物ってことになる」

「あ、なるほど女の人は聞かれたらまずい話をする可能性が男よりだいぶ高そうだからな」

「そ、だけどそれだけじゃまだ１００％って言えねェーからなカマかけたんだよお前に」

と九兵衛を指差して言う

「な！・・・」

それを聞き驚いて先ほどの言葉を思い出す九兵衛。

＊坊ちゃんよぉ・・・いやお嬢さんよぉ、俺等のこと、雇ってくれるよな？＊

「は、はめたのか・・・」

「悪ィー悪ィーだけど、これから俺等のご主人様のことぐらいしっときたいもんだろ？」

ご主人様を強調して言う波弥斗。

「まぁ思ったとおり、おめーは俺のカマに乗ってくれてお前が女って分かったってわけだ」

「ふーん・・・なァ波弥斗一つツッコんでもいいか？」

「何だよ広貴」

「お前馬鹿って設定だよな？」

グサッ！作者に１００のダメージ！！

ちょお・・・広貴さん？そゆことはいっちゃー駄目ッスよこちらの都合っーもんが・・・

「え？あ、すいません・・・」

今さっきの推理（？）はそーいうことには頭が回るって言うことにしときましょーよ、ね？

「あ、ハイ・・・（それでいいのかと言わんばりの顔）」

「そうか、とにかく君はそういう洞察力には長けているんだな」

ハァとため息をつく九兵衛。

「すまねぇなお嬢さんカマかけちまって・・・」

申し訳なさそうに言う波弥斗

「いや、それに騙された僕にも比はある。しかし、見事だったよ波弥斗」

「どーも」

「君等は頼もしい感じがすごく伝わってくるんだ僕が女と言うこと、君等にはバラしてもよかったんだが、まさか気づかれるとは思っていなかった」

「バラす？ってことはここにいる全員が全員しってるってわけじゃねーんだ」

「ああ、ごく一部だ、あの門番は前おじいさまと父上の話を聞いてしまっただけだ」

「そっかあんたも苦労してんだな」

「無職だった君達よりはマシだったかもしれないがな」

ニヤッと笑って二人にそう言う九兵衛。

「「な！！」」

「ちょおお前そゆこと言うー？」

「そーだぜ！こちとらそのこと忘れようと必死だったのに！」

と波弥斗が九兵衛の肩をもつ、すると・・・

「うわぁぁぁぁーーーーーーーーーーーー！！！！！！」

”ドォーーーーーーーン”

波弥斗は九兵衛に壁に向かって思いきり投げられた

「えぇぇぇぇーーーーーーーー！！！！！！！！」

驚きすぎて開いた口がふさがらない広貴

頭の上でひよこがクルクル回っている波弥斗。

「ハァーハァーハァー・・・はっ！！」

しばらく呼吸が乱れていた九兵衛だったがしばらくして我に返ると

「す、すまない波弥斗！！僕はむさい男に触れられるといつもああした行動をしてしまうんだ！！」

急いで波弥斗に駆け寄る九兵衛

「波弥斗！！オイ波弥斗！！大丈夫か？オイ！！」

ゆすってもゆすっても起きない波弥斗、どうやら思ったよりも強く壁に頭を撃ったようだ。

次回、主人公はどうなってしまうのか！？永眠か！？それとも植物人間に！？それとも餓死状態に・・・

「全部駄目じゃねぇかァァァァァ！！！！！！！！！！！！！」

あ、

起きた・・・。

6#きっとどこかにむさくない男がいる（後書き）

なんか時間がないので話も分かりませんね・・・

てゆーか前回となんら進んでなくね？みたいな話ですよね・・・（汗）

まぁ今回は前回なんで波弥斗が九ちゃんが女とわかったか、がテーマでしたのでそゆことでお願いします・・・＾＾；

ホントにごめんなさい！！

どうかお許しを～～～～

7#つい昨日までは自分達の方が上にいた気がする（前書き）

灘
「どーも！なんとお父上が今日も仕事にいっててていないので、今日も書けます書きます更新です！！」

波弥斗
「それはわかるけどなんかやけにテンション高けぇな」

灘
「ギクッ！」

波弥斗
「さてはこれからご報告する新企画についてだな」

灘
「ギクッ！ギクッ！」

波弥斗
「ハァーこれだから作者という存在は・・・もういい！俺が説明する！」

灘
「あー！！！！！ちょっと待って！ストップ！ストップ！そこは自分に言わせてくれよ・・・（汗）」

波弥斗
「んだよ、んじゃー作者が説明するらしいです」

灘
「ハイ！今日から自分は後書きの方に新企画
＊＊書きたい書かせるお絵かきコ～ナ～＊＊　と言うのをします！！」

波弥斗
「なんか、うちの作者（だん）が書いた絵を載せるというコーナーだけど今回最初は俺、悠基（ゆうき）　波弥斗（はやと）の絵で、次は広貴を載せる予定らしいけど」

灘
「その自分が書いた小説のワンシーンを入れたりもし、読者様からのご希望があれば自分が書いて（死ぬ気で）載せます！！！」

波弥斗
「ただーしメチャクチャ下手くそだから、小説だけにしとけば美少年という設定だったはずの俺の顔がひどいことになってるけどな」

灘
「ちょ！いいんだよそれは、書いて載せたいだけなんだから・・・（ブツブツ）」

波弥斗
「まぁてことで今回は2枚載せてあるので俺を幻滅したくない人は見ない方がいいぜ～」

灘
「自分からもお願いします！」

波弥斗＆灘
「では、第7話の始まりです！」

7#つい昨日までは自分達の方が上にいた気がする

前回、九兵衛がなぜ女とわかったのかタネあかしし、その後九兵衛になげられた波弥斗

～公園にて～

「もう少ししたら、１１時だな・・・」

「そうですね、二人とも大丈夫でしたかね」

「もし時間に遅れてきでもしたらこの神楽様を待たせた罰を受けさしてやるアル！！」

など言いながら昨日、波弥斗達と約束したように公園で波弥斗達を待っている銀時達。

「やっぱり寝るとこ探せなかったんですかね？この寒い中外で野宿なんてしたらあの二人・・・」

「んなことァねーよ少なくとも、俺の知ってる波弥斗はすげーこそくな奴だからな」

と鼻をほじりながら言う銀時

「そーなんですか?てゆーか銀さん何処で波弥斗さんと知りあったんですか?」

「あん?それはなぁ・・・」

と銀時が話し始めると

「あ、銀ちゃん!あの向こうに見えるの波弥斗達じゃないアルか?」

「「え?」」

二人が神楽の指差す方を見ると公園の手前ぐらいに二人の男がこっちに向かって歩いてきていた。

「ほんとだ!銀さん!アレ波弥斗さん達ですよ!!よかった、元気そう!」

「だぁ~から~さっきから言ってんだろ?波弥斗(アイツ)はこそくな奴だって・・・」

すると、銀時達に気づいたのか波弥斗達が走ってやってくる

「ア~ニキ~~~~!!」

オ~イと手を振りながら笑顔でくる波弥斗、そして銀時達の前にくると・・・

「今日の朝ごはん何食った？」

「「何で急にそんな話！？！？！？」」

銀時＆新八のダブル突っ込みをうけて耳をふさぐ波弥斗

「うっうっせーなぁ・・・朝っパラからこんな近くで大きな声だすなよな・・・」

「うるせーよ！！大体もう昼近いっーの！！！何だよお前急に！！！！！」

と波弥斗を怒鳴る銀時。

「わぁーった、わぁーった　で？何食ったの？」

「あ”！？卵かけご飯だよチキショーーー！！！」

「ここ最近毎朝それですよ」

「そーだよ！ピリピリしてんの俺は！！！！それが何だよ！！！」

「クッククククク・・・」

おなかを抱えてなにやら笑っているような波弥斗

「俺達の今日の朝飯は、ホォ～ットケェ～～～キ！！！！！！！と
サンドイッチとサラダと食後にコーヒーもでた」

「「「なっ何ィィィィーーーーーーー！？！？！？」」」

「な、何でだよ！！朝マ〇クじゃあるまいしその洋風てきな朝飯は
！！！」

「しかもその言い方から考えて相当おいしかったんですね！？！？」

「本当アルか！！！広貴ィ！！！」

とグルンと勢いよく神楽は広貴の方を向いて聞く

「すっ！すいません！神楽さん！！！とんでもなくおしかったです
！！！」

「ファ～ハッハッハァ！！！聞いたか愚民どもぉーーーー！！！
！！」

ベンチの上でえらそうに笑う波弥斗。

”ボガン！！”

銀時の強烈なパンチが波弥斗の頭を襲う

「いってぇぇぇーーーー！！！！」

「うるせークソガキ吐け何処でそんな朝飯を食ってきたんだコノヤロー」

「っっっっ・・・俺達の新しい仕事先でだよ」

叩かれた所を擦りながら波弥斗が言う

「新しい仕事先!?」

「え、お二人とも見つかったんですか!?昨日の今日で!?」

「マジアルか!!!!!広貴ィ!!!!!!」

とグルンと勢いよく神楽は広貴の方を向いて聞く（アレ?）

「ハイ!!!俺達仕事見つかりましたよ!!!!!」

「んだとチキショー!!せっかく今日、無職のお前等をからかう言葉を考えていたっーのに!!」

「なんちゅー考えしてたんですかアンタは!!!!!」

新八が銀時へと突っ込む

「ったく・・・で?その仕事先で住み込みで泊めてもらって朝飯も食ったってか?」

「ああ、うまかったなぁー広貴・・・」

「うまかったなぁー・・・。」

なぜか腹立つ（↑朝飯和風派）

「銀ちゃん！！私達も明日の朝ご飯洋風にするネ！！」

「んな余裕あるかぁぁ！！！」

「でも、良かったですね雇ってもらえる所があって、どうやって見つけたんですか？」

「ん？ある長谷川さんって人が俺等に教えてくれてな・・・」

「「「　え？　」」」

その言葉に万事屋3人が反応する

「長谷川って・・・マダオのことアルか？」

「んなわけねーだろ、あの人ァ自分の仕事探すので手一杯な人だぜ？それを他人に仕事紹介するなんざぁ・・・別人だ別人」

「そうですね、長谷川なんていっぱいいますしね」

と笑う万事屋3人。

「いい人だったよなー広貴」

「ああ、最初はグラサンかけててなんだコイツって思ってたけどな」

「「「　・・・・・・・・・・・・・　」」」

「いや、ナイナイ・・・」

「そうヨ、マダオはないアル」

「ですね・・・」

と全否定する万事屋3人

「そーいやぁあの人、アニキ達と知り合いっていってなかったっけ？」

「言ってた言ってた」

「「「　・・・・・・・・・・・・・　」」」

「僕等の知り合いの長谷川さんって・・・」

「やっぱりマダオアルか？」

「ナイナイ！！あの人だけは絶対にナイ！！！！！」

と若干戸惑い気味な万事屋3人　　・・・すると

「アレェ？君達は昨日の・・・と銀さん達じゃねぇーか」

後ろから万事屋3人もよく知ってる長谷川　泰三、通称マダオがでてきた

「あ！長谷川さん！！」

「昨日はありがとうございました！！」

「いや、俺も風の噂に聞いた仕事を紹介しただけだよ、二人の役に立ててオジサンも嬉しいよ」

と波弥斗、広貴、マダオは仲良さそうに話始める

それをボーと見る万事屋3人。

「「「・・・・・・・・・・・・マジでか・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」」」

この日、3人の中での長谷川さんが変わったと言う・・・。

7#つい昨日までは自分達の方が上にいた気がする（後書き）

＊書きたい書かせるお絵かきコ～ナ～＊

波弥斗の絵です（下手くそ）

＞ｉ１８９０１―２４５８＜

＞ｉ１８９０２―２４５８＜

8#投げ出す、それは世界が決めた最後の選択（前書き）

波弥斗
「・・・・・・・・・・・・・・（超不機嫌顔）」

灘
「あのー・・・波弥斗さん?えっと・・・何か怒ってます?」

波弥斗
「お前さー・・・分かるよ?そりゃテストとかあってそりゃ大変だったかもしれねぇけど・・・けど!!!」

波弥斗
「一週間以上も更新してねーってどーゆーことだよ!?!?」

灘
「うるせーー!こちとら色々あったんだよ!!テストだけじゃ終わらないこともあるんだよコノヤロー!!!」

波弥斗
「おかげできっとコレ読んでくれている人達はアレ?前回どんな話だっけ?みたいになってるよ!?きっと!!」

灘
「だぁーかぁーらぁ!!色々あんの!!だから今回頑張るって!!」

波弥斗
「・・・ケッ!どーだか!」

灘
｛しばらく更新しなかったらなんか反抗期おとずれたなー・・・。｝

波弥斗
「まぁ・・・んじゃお忘れの方もいるかもしれませんが今回の＊書きたい書かせるお絵かきコ～ナ～＊は広貴の絵を二枚なんで広貴を幻滅したくない人は見ない方がいいです」

灘
「それじゃ第８話の始まりです！！」

8#投げ出す、それは世界が決めた最後の選択

前回、約束していたどうりに会った万事屋3人と波弥斗、広貴。

「てぇことで、長谷川さんに仕事を紹介してもらったんだ」

昨日の夜のことの状況説明（波弥斗）

「へぇ～・・・長谷川さんよぉあんた人に仕事紹介するなんて自分の仕事はどーした」

「何言ってんだ銀さん。若い二人に未来を持たせてやるのがオッさんの仕事だろ」

そう言ってタバコをふく長谷川。

「ヘッ、違ェーねぇ」

「それで、波弥斗さん達は今護衛としてそこの家で住み込みで雇ってもらったんですか？」

「オウ、護衛っても今のご当主様限定できなヤツだけどな」

「護衛って・・・・・二人とも強いアルか？」

「もちろんッスよ！！俺はできれば神楽さんの護衛として雇ってもらいたいぐらいでした！」

ガッツポーズでキラキラとした瞳で神楽を見ながら言う広貴

「いや、広貴さん。あなたは逆に護衛される方になると思いますよ」

「へ？何でだよ」

「いや、だって神楽ちゃんは・・・・・・」

とチラッと定春のジャレている神楽を見る新八

「ホラ！定春ーーーーこっちアルよーーーー」

”ボカッ！”

「わんわんわん♪」

ジャレてい・・・・・

「定春ーーーー」

”パカッ！”

「わんわんわん♪」

ジャレ・・・・・・・

「定春ー♪♪」

”ボガァ！！！！”

「ワンワンワン♪」

「「・・・・・・・・・・・・・・・」」

「新八ィ神楽あれジャレてるつもりなのか？俺にはどーも格闘してるよーにしか見えん」

「大丈夫です僕もそう見えます」

「広貴ィ俺思うけど神楽はやめとけってあんなあきらか暴力女」

「んだと！？お前には神楽さんの魅力がわからんのか！？」

「魅力って・・・あんな子供（ガキ）ロリコンかお前。どーせならナイスバディの大人なお姉さんの方が・・・」

「大人なお姉さんよりも絶対神楽さんの方がいいって！！！」

「おっ前、ビーチにいるお姉さんと神楽の体を比べてみろ、月とスッポン・・・」

「誰が子供（ガキ）でまな板娘アルか？波弥斗」

「！！！」

波弥斗の後ろには笑っているけど完全に怒っている神楽がいた

「い、いやー神楽は可愛いなーって話を・・・グヘェ！！「バリバリ聞こえてたんだヨコノヤローーーー！！！」

神楽の壮絶な右ストレートが波弥斗の顔にクリーンヒットする

「ちょ、落ち着け！！落ち着け神楽！！今のは全部新八が・・・」

そう言うと波弥斗は新八を指差す

「ハァ！？何で僕にな・・・」

「お前か新八ィィィーーーーーー！！！！」

「グヘェ！！！」

今度は新八に神楽の強烈な右ストレートが入る

「ううう・・・なんで僕が・・・。」

眼鏡を掛けなおしながら新八が起き上がる。

「そーいえば・・・それで銀さんと波弥斗さんは何処で知り合っていたんですか？」

さも今思い出したかのように言う新八

「え、俺とアニキがいつ知り合ったか？」

「ハイ、銀さんと波弥斗さん年もはなれているのにどうしてそんなに仲良くなったのかなー？って」

「そーいえば、俺もその話は聞いたことなかったなー」

新八と広貴、それに長谷川（マダオ）と神楽も耳をたてる

銀時と波弥斗は目をあわせていたがしばらくすると、波弥斗が・・・

「んじゃ今からちょっとした昔話をすっから聞きてー奴はしっかり聞けよー」

「これはむかーしむかし・・・・いやそんな昔じゃねぇか・・・・どれくらい前だっけ波弥斗？」

「ちょーど3年ぐらい前だよアニキ」

「そそ、3年3年。それぐれぇーだったなー」

「で広貴俺が１４歳ぐれーの時に届けモン渡しに一週間ぐれーいなくなった時あったろ？」

「あー、そーいやあったなそんな事」

本当に思い出したかどうか不明だが・・・

「そん時、届けモン渡した帰りの途中に女の子が誘拐されたんだよ」

「えっ！誘拐！？」

この時声を出したのは広貴だがそれを聞いた全員驚いている風だった

「そ、これから話すのはそん時の誘拐の話」

「「・・・・・・・・・・・・（ドキドキ）」」

新八と広貴は真剣に波弥斗話を聞こうとする

「それは・・・・・・」

「「・・・・・それは？？」」

「それは・・・・・・」

はやくじらさず言えよ

「「・・・・うん」」

「次回のお楽しみってことで♪」

「「・・・・・・・・・・・・」」

「「何投げ出してんだよォォォォォ！！！！！！！」」

８＃投げ出す、それは世界が決めた最後の選択（後書き）

と、まぁ・・・ホント下手くそすぎて泣けてくるんですけど・・・

まぁ次回は波弥斗と銀さんがあったときの過去話です♪

どうか次回も宜しくお願いします！！

んじゃそれでは今回の＊書きたい書かせるお絵かきこ～ナ～＊です！！

＞ｉ１８９０５―２４５８＜

＞ｉ１９２８６―２４５８＜

なんか広貴。上着脱いだら巫女の服みたいですね・・・。（汗）

ていうか下手くそすぎて・・・泣いていいですか？

9#過去を話そうとするとこれが案外難しい（前書き）

灘
「今回は波弥斗と銀さんの出会いの過去話です！！」

波弥斗
「んでもって今回は過去オンリーでいくから最初から最後まで過去なので現在のセリフとかはでてこねーらしーぜ」

新八
「ちょっと待ってください！！ってことは僕等の出番は・・・・」

灘
「ありません」

新八
「ええ！？」

波弥斗
「ちなみに今回の絵は小説の1部なので最初から最後まで読んでいかねーとわかんねーぞ」

灘
「まぁてこどで9話（過去話）お願いします！！ちなみに今回はいつもの倍、長いですのでご承知を！！」

9＃過去を話そうとするとこれが案外難しい

これは銀魂の主人公、坂田銀時とこの物語りの主人公、悠基波弥斗の出会いの話である。

――――――3年前。

「おっちゃーん、美衿さんからの届けモンだぜー」

波弥斗・１４歳

「おう！悪ィーな波弥斗！こんな遠くまで」

「いや、別に構わねぇーよ。美衿さんの頼みだし」

「そういえば美衿ちゃんは変わりねぇか？べっぴんさんのままなんだろうな？」

「ああ、変わりねぇよ」

「そうかそうか、そりゃーよかった！そいつが聞けただけで十分だ、ありがとよ波弥斗。美衿ちゃんにも宜しく伝えといてくれ」

「ああ、じゃーなおっちゃん」

波弥斗は美衿さんに頼まれたものを届けに遠くにきていた。

それから2キロ程歩いた所にある小さな旅館の前を通った時に事件は起こった

「♪～♪～♪～」

届け物を届け、鼻歌まじりに帰る波弥斗。

「ん？」

すると、５０ｍほど前に人だかりがあった

波弥斗はそこへ興味本位でそこにいる人達にわけを聞いてみる

「何かあったのか？」

「あ、ああ。今中で小さい女の子が行方不明になったって騒いでるらしいんだが、どうもそれだけじゃないみてーでな・・・俺はよく知らねぇ」

「ふーん・・・。」

行方不明、その言葉にひっかかったのか波弥斗は裏口から中へ入った

「さて、中で何が起こって・・・おわっ！」

波弥斗が旅館の玄関らしき所にたどり着こうとしていたら玄関には人がたくさん集まっていた。

｛あ、あまりにも深刻そうな雰囲気だっから・・・思わず隠れちまったけど・・・なんだ？｝

そう思って波弥斗は玄関の話に聞き耳をたてる

「ああ、何てことなの、大事な一人娘を・・・・・私のせいだわ・・・・。」

「君のせいじゃないさ、あの子が部屋からでるなと言ったのに出てしまったから・・・」

「でもまだ5歳のあの子を1人で部屋においたのは私よ！！」

「お客様！今警察に連絡を入れましたので、今しばらくお待ちを！！」

「これが待ってられるわけないじゃないの！！」

「もう我慢ならないわ！犯人の要求に従いましょう！！」

｛犯人・・・・？｝

「待つんだ！それじゃ犯人の思うツボじゃないか！大体1千万なんて大金そう簡単に・・・！」

「じゃあこのままじっとしてろって言うの！？娘が返してもらえるのなら一千万ぐらい！！」

「それで犯人がきちんと娘を返してくれるかどうかもわからないだろう！！」

「じゃあどうすればいいのよ！！！」

そう言うと、女の人はホールのソファに泣きながらしゃがみこんだ

〜・・・・なるほど・・・・・。〜

そう思うと波弥斗は何かを決心したのかホールの女の人達の前に行く。

「な、何だね君は？」

「おっさんよォ・・・。あんた達の娘・・・誘拐されたんだろ？」

「「　！　」」

「さっきの会話を偶然聞いちまってなァ。で、そこでだ」

「俺があんたらの娘を助けてきてやる」

「な!?」

「あんたみたいな子供(ガキ)ができるわけないじゃないの!さっさとどっかに行って!!」

さっきまでふさぎこんでいた女の人も波弥斗の言葉に反応し、叫ぶ。

「そうだよ!!大体たった一人で・・・・!!」

「1人じゃねーよ」

「「「「「 !? 」」」」」

すると、階段の上の方から声が聞こえた

見ると、そこには銀髪の天然パーマの死んだ魚の目の男がいた。

「あんたァ・・・誰だ?」

「俺ァ坂田銀時ってな、まぁ宜しく頼まァ」

そう言うと男・坂田銀時はだるそうに階段から降りてくるそしてホールに降りて泣いていた女の人達を通りすぎ、玄関の扉の前までくると・・・

「あんたらよぉ、俺があんたらの娘を助けてきてやるから・・・報酬たっぷり用意しとくんだな」

それだけ言うと銀時は扉をでる

「「「「「　・・・・・・・・・　」」」」」

「な、何なんだ君も、あの男も・・・」

泣いていた女の人の旦那さんらしき人が言う

そして、まだ泣いている奥さんを見ながら波弥斗は聞く

「奥さん、あんた娘が好きか？」

「？？」

「あ、当たり前でしょ！どこの世界に我が子を嫌いな親がいるのよ！！」

「！」

その言葉を聞いた瞬間、波弥斗の顔が一瞬くもる

「・・・・そうか、ならもう泣くなよあんた」

「？？え？？」

そう言うと、波弥斗は前を向き歩きだす。

「子供ってのはな・・・・・・・
　　親の笑ってる顔見んのが一番好きなモンなんだぜ
」

それだけ言うと先ほどの銀時と同じように波弥斗も扉から出る

「「　・・・・・・・　」」

波弥斗が言った後、女の人は最後の涙を流した。

「おい！ちょっと待てよあんた！！」

「あん？」

「誘拐された娘さんを探しにいくんだろ？」

「ああ、お前もだろ？」

「そ、だから一緒に行こうぜ、俺は悠基波弥斗。好きに呼んでくれ」

「俺は・・・」

「知ってる。さっき聞いたからな」

「そうか、宜しくな波弥斗。」

「おう！」

「んじゃあとにかく娘さんを助けださねぇーとなァ・・・」

「あ、それなら俺に考えがあるぜ」

そう言うと波弥斗はニヤッと笑う

「クソッ！まだ電話がかかってこねぇ！！」

と言ったのは誘拐犯。一千万をおく日時と場所を向こうが決めると言って切ってから電話をずっと待っているらしい

「ううぅぅ・・・」

そして、部屋のすみの方に体をロープで縛られ身動きがとれず泣いている小さな女の子

「泣くんじゃねぇよ!!うっとぉしい!!」

「ビクッ!」

女の子は体をブルブルと振るわせる

「ケッ!」

”プルルルルル”

「!」

「へへへっ!待っていたぜぇ!この電話を!!」

そう言いながら男は受話器をとる

「もしもし?金はそろったんだろうな?そろってなかったら娘はどうなるかわかってんだろうな?」

『すいません、ですが一千万なんて大金簡単に用意できなくて・・・』

「ふん!まぁいい、で?金を渡す日時と場所は?」

『ハイ、では今夜23時に○○公園に渡しにいきます。あそこなら人目も少ないので』

「わかってんじゃねぇか、もちろん警察(サツ)には連絡してねぇだろうな?」

『ハイ、もちろんです』

「よーしわかったそれじゃあ今夜２３時に○○公園だな、話は以上だ」

それだけ言って誘拐犯は電話を切った

～深夜２３時・○○公園～

誘拐犯は数十人仲間を連れてきていた。警察には連絡していないと言っても本当かどうかはわからないから、用心としてだろう。全員ガラが悪い

「もうすぐ２３時だな・・・」

すると公園の出入り口の方から二つの影が見えた

「お、きたきた・・・ん？」

その二つの影は男二人だったがお金が入っていそうなかばんなどはもっていない

「おいおい、金はどーした・・・よ！？」

男は白髪天然パーマの男にふっ飛ばされた

そして白髪天然パーマの男は腰にさしている木刀を掴む

「うおりゃあああああああああ！！！！！！！」

するとその木刀でいっきに敵を倒し始める

「波弥斗ォ！！はやく誘拐犯つれて娘助けにいけェ！！！！！」

「おう！」

力強く返事をすると波弥斗は誘拐犯本人の顔をまず一発殴り、そしてその男の胸倉を掴む

「誘拐した女の子は何処いんだよコラ」

物すっごい顔と声で誘拐犯を脅す波弥斗。

それに負けた誘拐犯が場所を言う、言った瞬間波弥斗は誘拐犯の頭に思いっきり頭突きをして気絶させる

「ううぅぅ・・・母上ェ・・・。」

女の子はロープに縛られたまま泣いている。すると、ドアの方からすごい勢いでこっちに向かってくる足音がする。誘拐犯が帰ってきた、そう思った。

「女の子！！女の子いっか！？」

ドアを開けて入ってきたのは女の子好みの（？）美少年だった。

「あ、女の子はっけーん」

そう言うと、波弥斗は女の子にかけよりロープを外してやる

「よしよし、もう大丈夫だからな」

そう言うと波弥斗は女の子を抱えその場を後にした

そして、また元の旅館に戻った

「母上ーーーー!!!」

女の子は母と父に駆け寄る

「ああ、ああ、よかった!本当によかった!」

母と父は娘を力いっぱい抱きしめ、また女の子も力いっぱい母と父を抱きしめた。

「あなた達のおかげです!!本当にありがとうございました!!」

「気にすんな、報酬もしっかりもらったしな」

「よかったな、怪我とかもしてなくて」

「うん!ありがとう、お兄ちゃん!」

そして、二人が玄関から出ようとすると・・・

「お兄ちゃーーん！助けてくれたお礼に私がお嫁さんになってあげるねーーーー！！」

女の子は波弥斗に向かって言う

「よかったなァ波弥斗。いい奥さんができて」

「勘弁してくれ」

と苦笑いする波弥斗。

「そーいえば、あんた強いんだなァあの人数相手によく無事でいられたな」

「まぁな」

「・・・あんた、本当は報酬めあてじゃなくて、ただあの家族救いたかっただけだろ」

「さぁな」

そう銀時が言うと波弥斗はクスリと笑った。

「んじゃ俺はそろそろ帰らねーといけねーからいくけど・・・・またな『アニキ』」

「ん？お、おぉ・・・」

こうして二人はそれぞれの帰るべきもとへいった

「ただいまー」

「あ、波弥斗！遅かったんだなーん？なんか嬉しそうだな、何かいいことでもあったか？」

「ああ・・・・・」

そう言うと波弥斗は青空を一回見て、そして広貴の方を見て

『面白い銀髪に会ったよ』

その時の波弥斗の笑顔は今まで広貴が見たことのないほど嬉しそうだったという

9#過去を話そうとするとこれが案外難しい（後書き）

長々とホントにもぉすいませんでした！！

どうだったでしょうか？波弥斗と銀時の過去話。

まぁ、まだ謎が残っていますけど・・・

それは次回で（汗）んじゃ今回の＊書きたい書かせるお絵かきコ～ナ～＊です！

＞ｉ１９４９１―２４５８＜

えーとこのシーンは波弥斗が女の子を助けにいった時、「よしよしもう大丈夫だからな」っていったシーンです

（波弥斗、手が変・・・（汗）　）

１０#美人で悪気がなかったらそりゃ怒れない（前書き）

灘
「今回はついにあの人が登場です！！」

波弥斗
「ついにって・・・いや誰も覚えてねぇよ、あの人のこと」

灘
「時には黒いカラスも白くなってみたいんだよ・・・・。」

波弥斗
「や訳分かんねぇし、どこのヤーサンさんの歌だよ」

灘
「何いってんだよ波弥斗、お前のその言葉こそ誰にも通じてねぇよ？」

波弥斗
「しゃべらせてんのお前だろ！！」

灘
「んじゃ第１０話もお願いします！！」

１０#美人で悪気がなかったらそりゃ怒れない

「・・・・てなあ感じで俺とアニキは出会ったのでした～ハイ、終了。」

「いや・・・あのでもまだ謎とか残ってま・・・」

「終了ったら終了。」

いい加減過去を振り返るのがめんどくさくなったのか・・・波弥斗は無理やりに終わらせようとする

「え、でもどーやって誘拐犯を呼び出した、とかの謎が・・・」

「いいんだよ、お前が気づいてないだけで読者様はわかってるから」

「いや分かりませんよ!!いや、分かる人もいるかもしれませんが・・・分からない人もいますよ!!」

「ヒントはきっとどこかにある。「あ～わかった」という人ははがきに住所・氏名・電話番号、を書いてどしどし送ってください」

「どこのＴＶ（テレビ）ショッピング!?あったよ!そんな感じの最近みたよ!!」

「もぉいいだろ俺ァ自由になりたいんだよ、大空に羽ばたいていけるとこまでいってみてーんだよ」

「勝手にいってろ！！銀さん！銀さんでいいですから教えてください！！」

波弥斗へのツッコミに疲れてきたのか、新八は銀時へとシフトチェンジする。

「俺さ・・・過去話の経路すべて波弥斗にまかせてたんだよね」

「そうだよ！！確かにそうだけど！！あんた一っ言も説明してねーけど！！そんでもなんか覚えているモンがあるでしょーが！！」

「や、そんなモンあったら前回の最後、波弥斗オチじゃなくて俺オチに切り替えてたわ」

「もっともだよ！！あんた確かに覚えてたらそうしてそうだよ！！」

銀時に切り替えても大変なのに変わりはなさそうだ。そこで広貴が、

「じゃ、俺が説明してやるよ」

「いやあんた過去話じゃ一言しかしゃべってないじゃないですかァアアアア！！！！！」

オメーは一言もしゃべってねぇけどな

「まぁ・・・それで?どーやって誘拐犯呼び出したのか、簡潔にどうぞ。」

あくまで話を変えない新八

「オメーもしつこいなぁ、アレだよアレ。俺があーしてこーしてそんでズダダダァン!みたいな」

「納得いくかぁ!!!」

「・・・ハァ・・・。わぁーったって」

とうとう新八のしつこさに折れた波弥斗

「あの俺さ、旅館から出る前に旦那さんに誘拐犯の電話番号教えてもらったわけなの。

そんで、誘拐犯に俺の天才的声マネ技術で奥さんの声をマネして電話をかけます

日時と場所を決めて呼び出す、そんでバババーーーン!みたいな?」

かなりグダグダだが、平たく言えばそんな感じらしい

「はぁ・・・それでその待っている間に色々話して仲良くなったんですか?」

新八は聞き終わって銀時と波弥斗に聞いてみる

「まぁ・・・そんな感じ。妙に波弥斗とは気が合ったし」

「・・・だな」

二人はだるそうに答える、よくこの二人で話が続けられたものだ。

「で?納得か?新八。」

「ええ、二人がどういう経緯でそういうことになったのかわかっ・・・「納得いかないアル」

「「「　え?　」」」

先ほどまでおとなしかったはずの神楽が急に批判する。

「なんだって?神楽」

「だから納得いかネーって言ってんだヨ」

「何が納得いかねーんだよ、ちゃんと説明したろーが」

「そこじゃねーヨ」

銀時と波弥斗の言葉にもピリピリさせながら言う神楽。

「銀ちゃんと波弥斗の過去話だから二人は分かるとして、何で・・・本編にはでてないとはいえ、前書きに新八が出て・・・最後らへんに広貴がでて・・・

何で私はまったく出てないんだヨォォォォォォォォォ！！！！！！」

「おかしいアル！私だけ触れてもないってどゆことネ！？なんか見知らぬおっさんとか活躍してるしヨォォォォォォォ！！！！！！」

「お、落ち着いてください神楽さん！俺はでたって言っても一言ですから！ね？」

「何いってるネ、広貴」

そういいながら神楽は前回の最後の方を広貴に見せる

「『その時の波弥斗の笑顔は今まで広貴が見たことのないほど嬉しそうだったという』・・・ってオチアル、波弥斗オチだけど広貴がいないと成り立たないオチネ、つまり・・・

実質てきには広貴は超重要な役割してんだヨォォォォォォォォォォ！！！！！！！！」

自分だけ出れなかったのがよほど悔しかったのか、神楽が暴れている。

「ちょっと銀さん！神楽ちゃん暴れてますよ！？いいんですかアレ！止めなくて！！」

「ほっとけ、今はストレス発散させてやれ」

「広貴ィ～死ぬなよ～」

そう言うと、3人は暴れる神楽とそれを止める広貴を置いて町の方へと歩いていった

「そーいえば俺達、この町きたばかりでまだこの町のこと全然知らねーんだけどさ～」

町の繁華街らしきところを3人で歩きながら波弥斗が言う

「この町のなんかオススメのモンとかねぇの？」

「ああ？オススメェ？んなもん自分で探せ」

「銀さん、人から進められるからオススメって言うんですよ」

「だってよォ～この町にオススメのモンなんて・・・」

「あれ？旦那達じゃありやせんか」

突然、銀時達は誰かに呼び止められた。

後ろを向くとそこには栗色の髪に蘇芳色の瞳の童顔の甘いマスクで黒い、何かの制服のようなものを着ている見た目はさわやかな美少年がいた。

「あ、沖田さんこんにちわ」

「んだよ、テメーか」

「・・・旦那ァそちらさんは？」

と、沖田は波弥斗を指差しながら聞く

「こいつァ、悠基　波弥斗って・・・俺の昔の知り合いなんだ」

「っと・・・」

波弥斗は沖田の名を呼ぼうとしたがまだ自己紹介をしていないため呼びにくいと思ったのだろう、それに気づいたのか沖田が・・・

「沖田　総悟でさァ」

「あ、宜しくな。沖田」

「沖田さんはこんな時間にこんな所で何しているんですか？見回りとか？」

「いや、土方のクソヤローにサボッてるのがバレやしてねェ・・・今人探し中でさァ」

「人探しィ？」

「ええ、何でも江戸から離れたところからきて人探しを頼みに真撰組きたんでさァ」

「ふーん、で？その人は今どうしてるんだ？」

「今あそこで店のモン見てるぜィホラ、あそこにいる・・・」

そういって沖田が指差す方を見る

「ん？」

「どーした波弥斗」

「いや、あの女の人・・・」

沖田が指差した方にいるのは女だった。少したつと視線に気づいたのか女はこっちを振り向いた

「・・・・・」

女の人はじーっとこっちを見ている。

こげちゃの肩ではねるぐらいのセミロングの髪に、黒色の瞳。オレンジ色の花の模様がついた着物を難なく着こなしている美人だった。

すると、急に女の人は走ってこっちに向かいだしたそして波弥斗の前に来ると

「波弥くん！！」

女の人は波弥斗に思いっきり抱きついた。

「「「　！？！？　」」」

新八、銀時、沖田はあまりに急なことで呆然とする。

「ちょ、美衿さん!?／／／恥ずかしいから離れて離れて!!／／／」

波弥斗は真っ赤にして言う

「波弥斗ォ・・・お前もスミに置けねェーなァ。こんな年上の美人落とすなんて」

「ちげーって!!この人は・・・」

「母ちゃん!?」

急に後ろから広貴の声がする

「あー広貴!!」

すると女の人は今度は広貴に思いっきり抱きついた

「「「　・・・・・。　」」」

今度こそ呆然として立ち尽くす3人。

「この人は小宮（こみや）　美衿（みえり）さん。俺の恩人で、広貴の・・・

『母親』だよ」

１０#美人で悪気がなかったらそりゃ怒れない（後書き）

はい、やっと美衿さん登場！！

ふ～美衿さんを登場させるまでにどれだけかかったことか・・・

では早速今回の＊書きたい書かせるお絵かきコ～ナ～＊は美衿さんです！！

＞ｉ１９５７４―２４５８＜

＞ｉ１９５７５―２４５８＜

１１#黒豆と煮豆の違いが分からなかったとか言えない（前書き）

灘
「前回の　『美人で悪気がなかったらそりゃ怒れない』　が過去最高アクセス数でした！！」

波弥斗
「まぁなぜかとびぬけで上がってたな・・・・。」

広貴
「やっぱ母ちゃんが出たからだろ？」

灘
「え～でも予告とかなんもしてねーんだよ？」

波弥斗
「そりゃ言われてみればそうだな」

灘
「でもま、なにわともあれ多いってことはいいことだしな！」

波弥斗
「だな！確かにそだな」

灘
「まぁお前等が散々頑張って１０話やってきたのに美衿さんがたった一回でてお前たちの過去最高アクセス数の倍なんだけどな・・・」

波弥斗・広貴

11#黒豆と煮豆の違いが分からなかったとか言えない

「「は、は、母親ァァァァァァァァ！？！？！？」」

前回の波弥斗の言葉に叫ぶ銀時と新八

「おう、ま見た目はそうは見えねーんだけどな」

波弥斗は広貴に抱きついている美衿を見ながら言う

それに気づいたのか美衿は広貴から離れて銀時達の前にくる

「初めまして、私小宮美衿と言います。広貴の母です」

「あ、こっこちらこそ初めまして、僕志村新八です」

「俺ァ坂田銀時だ。好きに呼んでくれ」

「新八くんと金時さん？」

「や銀時だから！」

そこへ後ろから、神楽もやってきた

「銀ちゃん！新八！波弥斗！この神楽さまをおいて何勝手に・・・・・」

神楽はそこまで言うと美衿の存在に気づいたのか言葉を止める

「新八、誰アルか？この人。」

神楽は指差しながら新八に聞く

「この人は広貴さんのお母さんだよ、ホラ神楽ちゃんちゃんと挨拶しないと」

その声が聞こえたようなので美衿は神楽に笑顔で挨拶する

「初めまして、広貴の母の小宮美衿です。宜しくね」

「私は神楽って言うネ！このかぶき町の女王アル！」

「へ～そうなの。女王って言うよりお姫様の方がいいんじゃないかしら」

ニコニコしながら神楽と話す美衿。その光景は親子と言うより姉妹にも見える

「・・・・あんた、随分若く見えるけどいくつなんだ？」

「アラ金時さん。女性に年を聞くなんて失礼ですよ？」

「だから銀時だっーの！！何なんだこの人は！わざとなのか！？天然なのか！？」

「アニキ、１０：０で天然だよ」

「でも本当に母親には見えないくらいお若いですね」

「コラ眼鏡ェ・・・テメ母ちゃんを口説こーとしてんのかァ?殺すぞコラ」

すごい形相と声で新八を睨む広貴がいた。

「ちっ違います!!ちょっと話していただけです!!」

ブンブンと手を振りながら誤解を説明しようとする新八。

「美衿さん、どーしてこの町にいるんだ?」

「そーだよ母ちゃん。大体何でここにいるってわかったんだ?」

「ああ実はね、仕事から家に帰ってテレビをつけたら波弥くん達が働くって言ってた所がなんか麻薬がどーたらって言ってたから・・・二人とも仕事先なくなっちゃったでしょ?だから心配で飛び出してきたの
それでこの町を通っただろうなって思って警察の人に聞いてみて探してもらってたの」

「警察の人?」

その言葉に聞き返す神楽

「ええ、そこにいるお若い・・・・」

「呼びましたかィ?」

すると後ろから声を出す沖田。

神楽はその声を聞いた瞬間とてつもなく嫌そうな顔をする

「サドォ・・・この神楽さまの後ろに立つなヨついでに死ね」

「その言葉そっくりバットで打ち返すぜィチャイナァ」

「んだとクラァ!!決めたアル!!今日こそ決着つけてやるネ!!!!」

「上等でィ」

すると神楽に殴りかかろうとする沖田。するとそれを第三者が止める

「テメェ!!!神楽さんに何すんだコノヤロォ!!!!!!」

「ああん?誰だテメー邪魔すんじゃねぇ」

「神楽さんの敵は俺の敵だ!かかって来いコラァ!!!!」

そして三人での激しい戦いが始められた

その姿を見ていた美衿は

「・・・ねぇ波弥くんもしかして広貴、あの子・・・神楽ちゃんの事好きなのかしら?」

「もしかしなくてもそーだよ」

「そーなの。広貴が女の子のことを好きになるなんて・・・なんだか新鮮ね」

「好きっていうか・・・なんかもう信者に近いけどな」

「へぇーまだ出会ったばかりでしょ？なのにもうそんなに好きなんて、神楽ちゃんって子よっぽど素敵な女の子なのね。」

「「「　いや、全然。　」」」

ニコニコ話す美衿の言葉を波弥斗、銀時、新八が粉砕する。

「そーいえば波弥くん。波弥くんの好きな黒豆もってきたんだよ、食べる？」

「マジで！？」

美衿の言葉に目を見開いて反応する波弥斗。

「うん、ホラ」

そう言ってふろしきの中から重箱にいっぱいつめた黒豆を取り出す美衿。

「わー、おいしそうな黒豆ですね。僕もいただいてもいいですか？」

「ええ、どうぞ」

「コラ眼鏡！！俺の黒豆（モン）に触んなァ！！！！」

「誰が眼鏡だぁ！！！！！」

「まぁまたれい。アニキ！万事屋で食わせてもらってもいいか？」

「ああ、構わねぇーよ」

「あ、万事屋にいくのなら鍵をしめてるんで僕もいきますよ」

こうして二人は万事屋へ向かう

「・・・金時さんは行かれないんですか？」

「だから銀時！・・・ハァ・・・もういい、もうそれでいい・・・。」

何度言ってもわかってくれない美衿にもう呆れたのか、銀時は諦める

「俺ァ黒豆なんざに興味でねーよ、重箱（あんなか）にあるのがシュークリームなら別だけどな」

「まぁひどい。結構自信あるんですよ？」

「別にまずそうなんて言ってねぇーだろ」

「私はてっきり・・・金時さんがここに残ったのは私を口説こうとしたのかと思いましたよ」

いたずらっぽく銀時を見ながら言う美衿

「ヘッ、いくら俺がモテないっても人の女(モン)に手ェ出したりはしねーよ」

「アラ、私は未亡人なんですよ」

「・・・・・・は?」

あまりにも美衿が普通に言うので銀時は一瞬その言葉の意味を間違えてしまいそうになる

『未亡人』・・・それは夫に死なれた妻、や独り者を意味する。

「え、あんた・・・旦那は・・・」

銀時がそう言うと、美衿は悲しそうに笑いながら話はじめる

「私の旦那は・・・もう何年も前に交通事故で亡くなったんです。」

その美衿の顔は、銀時は先程までの美衿の言動や行動が嘘のように見えた。

「原因は、天人(あまんと)の余所見(よそみ)運転。旦那はお別れの言葉もなしにあっさり逝ってしまいました。まぁその天人は何の罰も受けなかったんですけどね」

もうその笑い顔は、あきらさまに『無理』な笑い方だった。

「おかげで私や広貴は、ずっとずっと辛いを思いをしてきました。
――いや、本当は今でも辛いのかもしれませんけど・・・」

「・・・るのか?」

「え?」

「美衿(あんた)は天人のことを恨んでるのかって聞いてんだよ」

そう、銀時はどうしても気になっていた。無理して笑ってそんな話をする美衿は・・・

天人のことを恨んでいるようには見えかったから。

でも、そんな話を聞くには恨まずにはいられないだろうと思ったのだ。

美衿は一度銀時を見てニコッと笑うと、

「恨んでなんて・・・いませんよ」

消えるような、そんな声だった――――。

「確かに当時は恨みましたよ？でも、考えたらあの人・・・旦那が好きになってくれた私はこんなにも天人（だれか）を恨んでいる私じゃないだろうって、考えたらなんだか悲しくなって・・・」

銀時は改めて確信した、この人は・・・

――――本当に旦那のことを好きなんだと言うことが――――

「でも、広貴（あのこ）は違うんです」

美衿は広貴の方を見ながら言う

「あの子はまだ天人のことを恨んでいる、旦那（ちちおや）を殺した天人のことを・・・」

「・・・・」

「だから、私は・・・あの子はあまり天人と関わらない生活を送ってほしいんです。」

銀時は少し黙ってその話を聞いていたが、しばらくすると、

「お母さんよォ・・・あんたに一つ面白いことを教えといてやる・・・。」

「・・・？」

「あんたの息子がさっきらから、神楽さん神楽さんって呼んで慕っているあいつな・・・

宇宙最強の戦闘種族、夜兎族の生き残り・・・天人（あまんと）なんだぜ　」

「え！？」

美衿は神楽のことを見る

「あの子が・・・天人！？」

「ああ」

「すぐに広貴と離れさせないと・・・！！」

美衿は広貴達の所へ行こうとするが銀時がそれを止める

「まぁ待ちな、お母さんよォ」

「・・・！金時さん！！離して！もし広貴が神楽ちゃんのことを傷

つけたりしたら・・」

「大丈夫だ」

銀時は神楽のことを見ながら言う

「言ったろ?神楽は夜兎だって・・・人間に簡単に倒されるような奴(タマ)じゃねぇんだよ」

「でも!!」

「例えもし・・・あんたの息子が神楽を傷つけようとしたとしても・・・俺が止めてやる」

「・・・え?」

「それともあんたの息子は、惚れた女を簡単に傷つけたりできる奴なのか?」

「それは!!・・・」

美衿はしばらく考えていたが・・・しばらくすると

「わかりました、では私は金時さんのことを信じます。お願いしてもよろしいですか?」

「ああ、まかしとけ」

そう言うと銀時は、万事屋の方へ歩きはじめる

「じゃーなァ」

美衿はその姿をしばらく見ていた

「・・・・・頼みますよ・・・・・・『銀時』さん・・・・・・・。」

１１#黒豆と煮豆の違いが分からなかったとか言えない（後書き）

えーと・・・なんかすんごいこの後書きづらいので・・・

早速＊書きたい書かせるお絵かきコ～ナ～＊です！！

まず、一枚目が前回美衿さんが好評だったので美衿さんで

今回の話の『私の旦那は・・・もう何年も前に・・・』ってシーンです

＞ｉ１９６７７―２４５８＜

そして2枚目はご希望のあった波弥斗と広貴のツーショットです

＞ｉ１９６７８―２４５８＜

12#まぁ結局嫌な奴は嫌な奴ってことだろ（前書き）

灘
「おっしゃあ!!今日はみんなでファミレスにでも食いにいこーぜ!オリキャラ全員と作者で日ごろの愚痴を語ろーぜ!!」

広貴
「お、あんたにしては気がきくな!いこいこ」

波弥斗
「よっし!俺腹いっぱい食うぞー!!」

美衿
「私も行ってもいいんですよね?」

灘
「とーぜん!みんなファミレスついたら何食うー♪」

広貴
「俺、グラタン!!」

美衿
「私和風定食がいいです!」

灘
「んじゃー自分は無難にラーメンで♪波弥斗は?」

波弥斗
「んじゃー俺も無難に『漬物』とかで♪・・・」

灘・広貴
〜〜・・・・・どの辺が無難!?!?・・・・・・〜〜
美衿
「それでは第12話の始まりです♪」

12#まぁ結局嫌な奴は嫌な奴ってことだろ

ここは柳生家。侍が退化しているこの時代に未だに門下生が集まる剣の名門。

そこに新しく護衛として働き始めた少年二人がいたのであった。

「ふわぁ～あ、オ～スお嬢さん」

「おはよう波弥斗。てゆうか止めてくれないかそのお嬢さんと言うの・・・」

「んだよ、朝ッぱらから細けぇーな・・・広貴は？」

「広貴なら朝早くから道場の方で稽古しているぞ、これから僕も行くところだ」

「ふ～ん朝早くからご苦労なこったぁ・・・じゃ、俺はこれで・・・」

「待て」

だるそうに言う波弥斗を呼び止める柳生家次期当主、柳生九衛兵。

「君は稽古に行かないのか」

「はぁ!?勘弁してくれ・・・こんな朝ッぱらから誰がするかよ」

「東城を呼ぶぞ」

「い”!?あいつはめんどくせぇ・・・」

「ではするんだな?」

「わぁーった、わぁーった。ったく・・・・・・」

仕方なく九衛兵と一緒に道場に行く波弥斗

「若ァ!!!」

すると廊下の角から柳生四天王筆頭、東城(とうじょう) 歩(あゆむ)がすごい勢いでやって来る

「呼びましたか!?わ・・・」

「別に呼んでなどいない!!!!」

九衛兵は東城の顔に強烈なけりを入れる

「げ、東城のおっさん。」

「コラァ!!誰がおっさんだ!?悠基波弥斗!!」

「しかも聞こえてんのかよ何なんだよ一体」

「ほおっておけ、行くぞ波弥斗」

「待ってください若ァァ！！！！！」

そんな東城の言葉を無視して九衛兵と波弥斗は道場へ向かった

「若ァァァァァァ！！！！！」

「チッキショーーーーーー！！！！！！！」

「うるせーーーー！！！！！」

「グヘェェ！！！！！！」

「何なんだよお前！いきなり来たと思ったら急に叫びやがって！！」

東城は万事屋へ来ていた。

「まったく・・・また九衛兵さんに何かあったんですか？」

新八もやや呆れぎみに聞く

「だってよォ！！だってよォ！！あの悠基波弥斗という少年がきてから――――」

「え？波弥斗が何だって？」

「だから悠基波弥斗という少年がうちに護衛として働き始めて・・・
」

「波弥斗達、九衛兵の所で働き始めてたのか!?」

「ええ、まぁ・・・」

「へぇーすごいんですねお二人とも・・・。それでその二人に何か問題でもあるんですか?」

「二人じゃありません!一人です問題があるのは!!!」

「そ、そうですか・・・」

「二人の内、広貴くんの方は特に問題はありません!毎日朝早くからおきて稽古にも励んでいますし、言葉遣いもきちんとしていますし、何よりまじめで若との接点があまりありませんから!」

〜〜あ、本音はそこね・・・〜〜

銀時、新八は心の中でツッコんだ

「だが悠基波弥斗の方は違うんです!!」

東城はさらに目を見開いた

「彼等が着てからもう一週間が経ちますが・・・悠基波弥斗が決めた時間に起きたことはないし!稽古もまじめにしない上、言葉遣いも悪い!何より若がなんか気に入ってるんです!!」

「へぇ・・・九衛兵が？」

「以外ですね、九衛兵さんが男の人を気に入るなんて・・・」

「もしかして九ちゃん、波弥斗に惚れたアルか？」

「「「　！？　」」」

先程まで黙っていた神楽の言葉に全員反応する。

「九衛兵が・・・？ナイナイ・・・」

「そうだよ神楽ちゃん、さすがにそれはナイんじゃない？」

「でも絶対って言えるアルか？」

「どうなんですか？東城さ――――アレ？」

振り向くとそこに東城の姿はなかった

｛若が・・・悠基波弥斗のことを・・・！？｝

トボトボと考えながら歩いていた

だが確かにあの朝の道場では・・・

～今日の朝・柳生家道場～

「あ、波弥斗さんおはよーございます！」

「おゥ」

「波弥斗さん後で自分の素振り、見てください！！」

「後でな」

波弥斗の剣の腕を尊敬し、慕っている下っ端どもが話かけてくる

「おい九衛兵、俺ァ何すればいい？」

「ああ、波弥斗さん駄目ですよ、若のこと呼び捨てにしたら――」

「いい、構わない波弥斗。では僕と軽くするか？」

「へーい」

「おい、若と波弥斗さんが軽く打ち合いするんだってよ」

「マジで！？見る見る！！」

先程まで稽古に勤しんでした人達も集まり二人の打ち合いを見学しだす

「何？なにやってんの？お前等」

「広貴さん！！」

「いや、若と波弥斗さんが軽く打ち合いするらしいんですよ」

「へぇ～若さんと波弥斗が？」

広貴が二人の方を見ると、すでに始まっていた

「おお～」

「すげー！どっちも神速使いだ～！！」

二人はすごいスピードで打ち合いをしていた

だが、二人の顔は涼しいものだった。

「へぇ、さすが『若様』。次期当主はすげーなぁ・・・」

打ち合いをしながら波弥斗が九衛兵に言う

「君に若様と呼ばれるのは・・・馬鹿にしているようにしか聞こえない！！」

九衛兵はブンッと大きく竹刀を振る

それを軽やかにかわす波弥斗

「っと・・・馬鹿になんかしてねーよ素直に褒めてんだ・・・よっ！」

波弥斗も竹刀をブンッと大きく振る

そして九衛兵がよけまたすごい速さで打ち合いが始まった

そして、それからしばらくすると打ち合いは終わった

「ふ～・・・さすがだな波弥斗。僕のスピードについてくるとは・・・」

「俺ァついていくのがやっとだったぜ」

「汗を一つもかかないでよく言う」

その後、波弥斗と九衛兵はしばらく仲良さそうに話していた

東城はそれを道場の木の窓から見ていた。

｛｛　・・・・・・　｝｝

「いや、私の若に限ってナイナイ!!」

オメーの若じゃねぇけどな

｛｛いやしかし・・・｝｝

「・・・っさん!」

｛｛でも若に限って・・・｝｝

「東城のおっさん！！」

「誰がおっさんだ悠基波弥――――斗ォ！？！？」

東城は驚きすばやくズザッと後ろに下がる

「な、何だよ人を化け物みたいに・・・」

「きっ君こそなんでこんなところに！？」

「うるせーなァ・・・俺はアニキん所へ行こうとしてただけだっの」

「・・・アニキ？」

「万事屋の坂田銀時のことだよ」

「し、知り合いだったんですか・・・どうりで・・・」

「・・・？」

「おっさんこそ、こんな所で何やってんだよ」

「おっさんではなく東城です！東城歩！！」

「わぁーったって・・・ん？」

「どうしたんですか？」

「いや、あそこ・・・」

波弥斗が見ている方には人だかりがあった。

「どうかしたんですか？」

東城は人だかりの一人に聞く

「どーもこーも見ろ！あそこのマンションの上！！」

おっさんが指差す方を見るとそこから煙がでていた

「・・・火事！？」

「ああ」

「それは大変ですね、火消しの方達は？」

「今呼んでるってよ」

「お、おいおっさん！見ろあっこ！！」

波弥斗が指差す方には火事が起こっているマンションのベランダに男の子がいた

「やべー！すぐに助けにいかねーと！！」

助けにいこうとする波弥斗を東城が止める

「待ちなさい悠基波弥斗！今いったら危険です！！せめて火消しの方がきてから・・・」

それを振り切る波弥斗

「間に合わなかったらどーすんだよ!!」

そう言うと波弥斗は男の子を助けにいった

「あ!・・・・・・なんて無茶な・・・」

「くっそ!けっこー煙てーな・・・」

波弥斗が入ったマンションの中はすでに大半が煙におおわれていた

「えーと・・・あの子供(ガキ)がいた部屋は確か・・・」

すると、火の元っぽい部屋があった

「あっこか・・・っし!」

その瞬間波弥斗は思いっきり扉を壊す

中は火がすでにほとんどに回っていた

「おーい!どこにいんだー!助けにきたぞー!!・・・お」

ベランダの方にうずくまっている男の子がいるのを見つけた

「おい！こっちだ！！こっちに来い！！」

男の子はそれに気づいたが、怖がってこようとしない

「ったく・・・待ってろ！そっちにいってや・・・」

すると、上から波弥斗に向かって天上が落ちてきた

「チイッ！！・・・」

「あの入っていった少年は無事なのか？」

「オイ！なんか中壊れてねぇか！？」

〜〜・・・悠基波弥斗・・・・〜〜

「あ！見ろあそこ！！」

やじうまの誰かが指差す方を見ると、そこには宙にいる波弥斗がいた。その腕にはしっかり男の子を抱きしめている

「なんて、無茶を――――！！」

「東城のおっさーーん！！！！」

「！？」

「こいつ頼む!!」

そう言うと、波弥斗は男の子を東城に向かって投げた

「なぁ!?!?」

東城は文句を言いたかったがそんなことより男の子を助けなければと思い止めて、男の子の落下地点へ行く

”ガシッ!!”

「おぉ〜ナイスキャッチだ!!あんたスゲーな!!」

「おお、ボウや怖かったろう?大丈夫か?」

やじうまは男の子のもとへかけよる

「・・・ったく俺の存在忘れんなよな・・・・・」

波弥斗は、ボロボロになっていたがしっかり生きていた

「大丈夫ですか?悠基波弥斗」

東城は手をさし伸ばしながら波弥斗に聞く

「大丈夫に見えるか?あの高さから落ちたんだぞ」

「それで生きている君はすごいですね」

「まぁな」

波弥斗は足を引きずりながら歩き始めた。

〜・・・・若・・・・・若が彼を気に入った理由がなんとなく分かった気がします

彼、悠基波弥斗くんはとてつもなく無鉄砲で、言うことを聞きませんだけど人を助けたいという気持ちがとても大きく、自分がボロボロになっても構わない

たとえ見知らぬ人でも命を懸けて護る。

きっと若が彼に感じている気持ちは、私が彼に感じているのと同じ気持ち――――。

信頼と可能性。

私は彼を・・・勘違いしていただけなんですね・・・〜

「波弥斗!?」

「あ、九衛兵。」

「どうしたんだ!?その怪我!!ボロボロじゃないか!!」

「あ、さっきそこで猫とケンカしてよォ」

それから波弥斗と九衛兵はしばらくそこで話して、帰っていった

「・・・・・・・・・・・・・・・

若ァァァァァァァァァ！！！！！！！

！！！！」

１２＃まぁ結局嫌な奴は嫌な奴ってことだろ（後書き）

えーっと・・・何か長引いて・・・ホントすいません・・・

この話は・・・ハイ、よく分かんねぇ・・・

まぁようするに東城は少し波弥斗を認めた・・・と思う・・・。

まぁ＊書きたい書かせるお絵かきコ～ナ～＊です！！

まず一枚目は今回の波弥斗が火事から出てきた後の姿です
（ちょっと変なところで撮ったので写りが悪いです）

＞ｉ１９８２６―２４５８＜

二枚目は『美人で悪気がなかったらそりゃ怒れない』で、美衿さんが波弥斗に抱きついた時の絵です

＞ｉ１９６７６―２４５８＜

13#結局最後はそんなオチ（前書き）

広貴
「最近俺の出番が少ないと思う」

灘
「なっ何だよ急に。いっとー最初から言うことか？それ」

広貴
「俺の出番は少ないわー、俺の絵は少ないわー、どーなのよソレ」

灘
「しょーがないじゃん！こっちにも都合っーもんがあんだよ！なんか波弥斗好きな読者様多いし！波弥斗が出たら好評なの！！」

広貴
「しるかぁ！とにかく俺を出せ！そんで神楽さんと俺の恋・・・」

灘
「ぱす」

広貴
「はぁぁぁぁぁ！？！？！？」

灘
「それじゃ今回も宜しくお願いします♪」

13#結局最後はそんなオチ

「おばちゃーんいつものにぼしちょーだい」

「あ、波弥くんじゃない。はいいつものだよ」

「アリ？なんか中身いつもより多くね？」

「あ、それはサービスだよ。波弥くんいつも買いにきてくれるからね」

「マジで！？サンキュおばちゃん。あいしてるー」

「アハハハそんなこと言ってももうサービスはしないよー」

そう言うとおばちゃんに笑顔で手を振り広貴の元へ行く波弥斗

「遅ェーよ波弥斗。何でたかがにぼし買うのにそんな時間掛かんだよ」

「悪ィ悪ィ、ちょっとおばちゃんと話しててよ」

「大体お前の好みはちょっとおかしいんだよ、にぼしやら漬物やら・

・・」

「そりゃあ俺は・・・ことわざ王だからな」

「関係あんの!?」

「ま、とにかくアニキ達んところへ行こうぜ」

「そうだ!!神楽さん待っててくれー!!」

「うっせーよこの神楽中ど・・・って!?」

波弥斗が言葉をいいかけていると、急に後ろから人がぶつかってきた

「あ、すまない君。急いでいていたらかぶつかって・・・」

「いや、気にすんなよ」

その男は波弥斗が以前見た沖田総悟という少年と同じ黒いおまわりさんらしき人と同じ制服をきておりゴリラ顔のでかい男だった。

「あ、あんたその制服って・・・・・」

「え?この制服が何・・・ってああ!お妙さぁん!!待ってくださァァい!!」

その男は急いでお妙さんと呼ぶポニーテールの桃色の着物を着た女の人の元へ行った

波弥斗と広貴はその時『ああ、あの女の人と恋人なのかな』ぐらい

に思っていたが

ドガァァ！！！！！

ゴリラ顔の男はポニーテールの女の人にぶっ飛ばされた

「「　・・・・・・　」」

その女の人は顔はとても可憐な女性だったのだが男をぶっ飛ばした瞬間

『どこが可憐だ！』と同時に思っただろう

「近藤さん、もう付きまとうのは止めてって言いましたよね？」

「ウググ・・・違うんですお妙さん俺はただお妙さんが心配で・・・」

「ゴリラに心配されるようなことは何もありません」

「そんなお妙さ・・・グヘェ！！」

次の瞬間、また男は女の人に殴られた

その光景を見ていた波弥斗と広貴は察したあの男は・・・・・

『ストーカーだ』・・・と

「あのー大丈夫ですか?」

広貴はゴリラ男に話かける

「アラ、誰かは知りませんがそんなゴリラの心配なんてしなくていいですよ」

「あんた、こいつにストーカーされてたのか?」

波弥斗はポニーテールの女に話かける

「ええ、何度言っても聞いてくれなくて困ってるんです」

「そりゃあ大変だなー綺麗な人ならではの悩みだな」

「まぁ綺麗な人だなんて・・・」

「お妙さん!そんなのただの決まり文句ですよ!?本心はそう思ってないんですよ!?」

「んだよテメー……」

波弥斗は文句を言おうとしたが女の人の言葉で止められる

「そうですかー近藤さんは私を本心で綺麗って思ってないんですねー」

笑顔で言う女の人。

「ちっ違いますお妙さん！！そいつがそう思っているだけで俺は本心で・・・」

「さようなら」

そしてその3秒後、ゴリラの悲鳴が響き渡った

「「　・・・・・・｛｛｛　怖ェェェェ～～～～　｝｝｝」」

「さて、ゴリラの駆除も済みましたし・・・・・」

グルンと向きを波弥斗達に向ける

「あなた達は見ない顔ね？最近この町にきた人？」

ニコッと笑いながら聞いてきたがその笑顔がなぜか怖い

「えっと・・・俺は悠基波弥斗。って言います・・・。」

「俺は、小宮広貴です・・・。」

「そう私は、志村（しむら）　妙（たえ）。宜しくね」

「志村・・・？新八と同じ苗字・・・」

「アラ新ちゃんを知っているの?新ちゃんは私の弟よ」

「「　うそぉ!!　」」

見事に声がそろっていた。そりゃそうだあんな地味な眼鏡とこの見た目は可憐な綺麗な女の人との血縁など驚くなと言うほうが難しい

「そっそうなんですかーぜっ全然兄妹には見えないですねー」

「そうですか?でも確かに似てるとは言われたことはないですねー」

「うん、たぶん言う人は目医者に言った方がいいと思う」

自分も同意で。

「あ、じゃあ俺達この人を警察に連れていきますよ。ストーカーみたいですし…」

「本当ですか?それじゃあ真撰組という所に連れて行くのがいいと思いますよ」

「え、わっわかりました……」

「広貴ィマジで連れて行くのか?」

「ああ困ってるみたいだし、俺達が警察に連れていったらそれで終わりじゃん」

「ったく・・・お前もお人よしだなー」

「お前にはあんま言われたくねぇよ」

「それじゃあお姉さん、俺等これで」

「さいならー」

「ええ、わざわざありがとうございます」

お妙は笑顔で手を振ってきた

「……波弥斗、あの人。見た目は綺麗な人だったなー」

「『見た目』はな」

二人はズルズルとゴリラ男を引っ張りながら話す

「あの人、真撰組ってとこに連れて行けばいいって言ってたよな」

「何、真撰組って」

「さぁ、でもこのおっさん前神楽さんとケンカしていた沖田とかいう奴と同じ服着てんな」

「こいつもおまわりさんなんじゃねぇの、警部補あたりの」

「いやこの顔はたぶん巡査部長だな」

＊真撰組屯所前＊

「え～とここで良いのかな」

「俺に聞くな、聞いてみりゃいいんだろ」

「それもそうだな。あ、おーいそこの黒髪のお兄さん～」

「ん？」

「ちょっと聞きたいことがあんだけど・・・」

「何だよ」

波弥斗達は黒髪の瞳孔が少し開き気味の見た目は二枚目な容姿のタバコを吸っている男に話しかけた

「ここってその…真撰組？だっけまぁそんなかんじのとこなのか？」

「確かにここは真撰組の屯所だが…札が見えなかったのか？」

「見えませんでした」

「俺は札自体には気づいたけど字が読めませんでした」

「そっそうか・・・・」

男は何だこいつ等、そんな感じの目で二人を見た

「で？何か用か？」

「あ、そうそう。俺達ストーカーを連れてきて・・・」

「ストーカー？」

「ああ。この人なんだけど・・・」

そう言いながら波弥斗と広貴はゴリラ顔の男を見せる

「近藤さん！？」

「え”知り合い？あ、同期の刑事とか？」

「この人は、俺の上司の近藤（こんどう）　勲（いさお）さん。でこの真撰組の局長だ」

「え？きょくちょー？何ソレ」

「つまりこの真撰組で一番えらい人だよ」

「「　・・・・・・　」」

波弥斗と広貴は目をパチクリさせる

そしてもう一度近藤を見てからもう一度目の前にいる男を見る

「「　・・・・・・　」」

「・・・ちなみにあんたは何なの？」

波弥斗は男を指差しながら聞く

「俺は土方（ひじかた）　十四郎（とうしろう）。この真撰組の副局長だ」

「・・・つまり二番目にえらい人？」

「まぁ、そういうことになるな」

「・・・ちなみに真撰組って何？」

「武装警察真撰組。まぁ攘夷浪士を叩いたりする特殊部隊みたいなもんだ」

その時、波弥斗達が掴んでいた近藤が目を覚ました

「・・・・トシ？」

「目がさめたか近藤さん」

「アレ。俺は確か・・・お妙さんと・・・ああ！お妙さんは！？」

「ここには居ねーよ、それはそうといい加減ストーカー止めろよ近藤さん」

「それじゃお妙さんに近寄る男たちにお妙さんが危ない目に合わされられるかもしれないぞ、トシ！」

「いや、近づく男達が危ない目に合わせられるな」

などと二人は波弥斗達をほっといて話始めていた

「「・・・・・・」」

それを見つめる二人

しばらくして波弥斗と広貴はフッと笑いお互いに見つめあう

「ハイ広貴、次することはわかってるよな」

「ああ。まぁこんな終わり方多いよなホント」

「「それじゃせーので・・・」」

二人はスゥと息を吸い込み空を向くと……

「「マジでかァァァァァァァァァァァァ！！！！！！！！！！」」

二人の叫び声はすごく響き渡ったと言う。

13#結局最後はそんなオチ（後書き）

なぜか次回に続きます

てーか自分は叫んで終わると言うのがとても多いと思います

なぜでしょうか

・・・・・・

まぁとにかく＊書きたい書かせるお絵かきコ～ナ～＊です！

今回は小説の方でも特に！と言うシーンがなかったのでお遊びですね

名づけて！＊セリフ遊び＊です！！

自分がてきとーに作ったてきとーなモノなので正直言ってわけわかんないです

なので読みにくいかもしれませんが下の絵の美衿さんのセリフの中にお好きな言葉を入れてください

それで感想の際に書いてくださったら自分がその中で一番面白かった！と言うのを次回のせます！

つまらないですが面白いセリフを待っております♪

＞ｉ２０３２５―２４５８＜

１４#それが己の定めと決めた（前書き）

灘
「波弥斗、広貴。どうだった？真撰組の人達と話した感じは」

波弥斗
「いや、なんつーか…なぁ？広貴」

広貴
「まぁ、そうだな……」

灘
「どったんだ？」

波弥斗
「いやだって…局長がゴリラって…」

広貴
「や違ェーだろ！『局長がストーカーって…』だろ！」

波弥斗
「まぁあの土方って言う人はまともそうだったけど…」

灘
「ほォ？まともなぁ…」

波弥斗・広貴
「・・・？・・・」

１４#それが己の定めと決めた

「「　あああああああぁぁぁぁぁぁぁ！！！　」」

何この始まり方。って話ですけど、とにかく前回の続きですねハイ

「おっおいトシ！何か急に叫び始めたぞ」

「何なんだよコイツら……」

かたや驚きながら、かたや呆れながら言う近藤と土方

「どーしたんだ君た・・・」

「どーしたんだじゃねぇ！なんだお前！ストーカーなのか！？ゴリラなのか！？」

近藤を指差しながら言う波弥斗

「どっちでもない！俺は人よりちょっとゴリラ顔なだけだ！それとストーカーでもない！強いて言うなら…『愛のハンター』とでも言おうか…。」

「やかましわ！！このストーカーゴリラ！！」

「どっちもくっ付けてんじゃねぇか！！ソレ！！」

すると真撰組屯所の中から以前波弥斗達と出会ったことのある沖田が出てきた

「何でィ土方さんうるせーな、静かに眠ることもできねーじゃありやせんか」

「いや俺今喋ってなかっただろぉが！！大体総悟！！お前またサボッてやがったな！！」

波弥斗は沖田の存在に気づきおきらくに声をかける

「あれ？お前(メェ)沖田じゃねぇか」

「あ、悠基くんじゃねぇですかィ」

「聞け総悟ォォォォォォォォ！！！」

「お前は前神楽さんとケンカしてた…！」

「あんたァ…前チャイナとケンカしていた時に邪魔してきた……」

「俺は神楽さんの恋人の小宮広貴だ」

「ウソをつくなウソを。」

広貴の頭を叩きながら波弥斗はそう言った

「…それで、お前達二人は何なんだ」

「あんだとコノヤロ。お宅の局長様を連れてきてやったっーのに何だその言い草は」

「何でケンカっぽくなってんだよ！」

少しケンカ越しになりながら話す波弥斗と土方

「まぁまぁトシも君も落ち着け、な？」

「うるせーゴリラ」

「だからゴリラじゃねぇって！君敬語覚えた方がいいよ！？いやホント！！」

”ガッシャーン！！”

その時後ろから何かが倒れる音がした

「「「　！？　」」」

波弥斗、近藤、土方は一斉に音のした方を見ると広貴が沖田に何か言っていた

「もう決めたぞ俺！お前俺と勝負しろコラァ！！」

「上等でィ、こっちに来なせェ勝負できるとこに案内しまさァ」

そう言うと沖田は真撰組屯所の庭の方へ広貴を案内し始めた

「ちょ総悟！？お前マジですんのか勝負！」

「心配しないでくだせェ近藤さん、負けませんから」

「いやそっちじゃなくて！一般市民とお前、真撰組の一番隊隊長が…！」

「大丈夫大丈夫、木刀でやりますから」

「いや何が大丈夫なのォォォォォ！？！？」

そんな感じに近藤と沖田が会話している時に波弥斗も広貴に話しかけた

「…オイ広貴。沖田って奴のことなめてっと痛いめみるぜ」

「誰がなめるか。そんなことわかってる」

「ったく、せーぜー無様に負けねーよーにしろよ」

「わかってる…ってお前もちっと言い方ねーのか」

「え～じゃあ、‥広貴！頑張るネ！！応援してるアルよ！！‥」

「ハイ神楽さ…って波弥斗！神楽さんの声マネ止めろ！！上手いけど！！」

「チッ！」

「何がチッ！？！？」

そんな会話をしながら真撰組屯所の庭へやってきた

庭につくと沖田はどこからともなくもってきた木刀を広貴に渡す

そして二人は庭の一番広いところにいき木刀を構えた

そんな二人を庭にある木の下から見る近藤、土方、波弥斗

「本当に大丈夫かな～あの広貴とか言う子…」

そんな言葉を呟いた近藤にムッとした感じで言い返す波弥斗

「おいゴリラ、あんまり広貴を馬鹿にしてっと怪我するぜお宅の子」

「どんなに強いか知らねーが奴（そうご）は真撰組一の剣の使い手だ。勝てるわけねーぞ」

そう言うと土方はタバコを加え、火をつける

「……」

波弥斗は土方をジッと見ていたがすぐに広貴と沖田の方を見た

「じゃ、どっからでもかかって来なせェ」

沖田は実に余裕そうに構えていた

その言葉に広貴はカチンときたのか沖田にとびかかった

だがそれはいとも簡単にかわされ沖田は後ろから広貴に木刀を振り下ろそうとする

「っ！」

広貴はなんとかそれを避けるが沖田の力強い木刀がまたもや広貴に降りかかる

防戦一方になる広貴と一方それとは逆に涼しい顔で広貴に攻撃をする沖田

そして終止符（ピリオド）をつけようと沖田が一段と大きく振りかぶり広貴に思いっきり叩きつけようとする。

「！」

広貴はそれを木刀で受け止めるものの大きく後ろにしりもちをついた

そして広貴が怯んだ瞬間に沖田は素早く最後に一撃を繰り出そうと

する

「！広貴！！」

波弥斗は思わず身を乗り出す

”ドカッ！”

次の瞬間、広貴は大きく上に飛ばされた

その光景はスロー映像のようだった

「！……」

「…仕舞ェでさぁ」

そう言うと沖田は後ろを向きどこかへ行こうとする

「だっ大丈夫かな！？トシ！なんかすごい飛んだけど…」

「まぁ後で怪我を見てやるとして…おいお前、だから言ったろ総悟には勝てな…ん？」

土方がそう言いながら波弥斗の方を見るとそこに先程まで居た波弥斗の姿がなかった

「どうした？トシ」

「いやさっきまでここにいたあいつが居なくなってて…」

「あの少年ならあそこにいるぞ」

近藤が指差す方には先程まで広貴が持っていた木刀を拾っている波弥斗がいた

波弥斗は木刀を拾うと帰ろうとしている沖田の方を向いた

「ちょっと待てよ沖田」

「？」

「あの広貴をこうも簡単に倒すたァ…お前結構強ェんだな」

「そいつァどうも」

「でな、連戦で悪ィんだが…俺ともいっちょ勝負してくんねぇーか？」

「な、何を言ってるんだ君！」

「そうだぞ、俺達警察は暇じゃねぇんだ大体(こいつ)総悟には他の隊士の倍仕事が…」

「別に俺は構いませんぜィ」

大方沖田は勝負していたらその分仕事をする時間が縮まるとでも思

っているのだろう

「んじゃ決まりなすぐに始めよーぜ」

そう言うと波弥斗は数歩後ろに下がる

「なぁトシ彼、なんかさっきまでと雰囲気違うことないか？」

「そうか？どの辺が？」

「いやなんかピリピリしてるっていうか、怒ってるっていうか…」

「……そういやぁ確かに…」

土方と近藤は何かの不安を感じた

「総悟、油断すんなよ」

「なんでィ土方さん心配してんですかィ？キモ死ねよ土方」

「今ボソッと何て言った総悟ォォォォォォ！！」

「オイ、もう始めてもいいか」

「あ、すいやせん。じゃあ始めやしょうか」

「ああ」

波弥斗はそう言うとすごい速さで沖田の懐へ行った

「　！　」

沖田はそれに素早く反応し、何とか木刀でかわす

が、次の瞬間すごい風が吹いてきた

それにより土方・近藤は一瞬目を瞑った。そう、一瞬だけ…

そして、土方・近藤が目を開けた瞬間、すでに勝負は決まっていた

沖田の木刀は池の方まで飛ばされており

波弥斗は木刀を沖田の目の前ギリギリの所で止めていた

「「　！・・・・・・・　」」

「…沖田ァ、お前…」

『これが本物だったら死んでたぜ』

そう言うと波弥斗は広貴の方へ行き声をかけた

「おいコラ広貴。お前起きてんだろ?行くぞ」

「ちょ待てって!」

そう言うと、二人は門の方へ向い始めた

「ちょ、ちょ待ってくれ！君たち！！」

それを近藤達が駆け寄りながら止める

「んだよ」

「まっまず君！広貴くんって方！総悟の剣をくらって大丈夫なのか！？」

「え？あ、大丈夫ですよ」

「・・・・・」

近藤は信じられない、という顔で広貴を見る

「じゃ、じゃあ次に君！君は一体…」

近藤は次に波弥斗の方を見ながら言う

「俺？俺は悠基波弥斗」

「いや名前じゃなくて！いや名前もだけど…なんでそんなに強いのかって聞いてるんだよ！！」

「何でって…」

そう言うと波弥斗は下を向き、何かを思い出したかのような顔をすると近藤達に背を向け歩きながらこう言った

『俺は・・・・・・

ゃいけなかったから・・・・・・』

強くならなき

１４#それが己の定めと決めた（後書き）

えーと…まず、沖田さんファンの方々に誤ります。

彼が負ける（？）とこなんて見たくなかったでしょうから…

でもどうしても波弥斗に最後のあの言葉を言わせるためにこうするしかなかったのです！どうかお許しを。

そんでもって今回の＊書きたい書かせるお絵かきコ～ナ～＊は前回の絵と同んなじなので手抜きですね。ハイほんと

＞ｉ２０３２５―２４５８＜

まず一つ目のセリフ

『家賃滞納し過ぎて大家のバアさんにオカマの国へ連れて行かれたらしい』

二つ目

『念願のかめはめ波を絶対、取得してやるんだぁ！とか何とかでやけに張り切りながら、修行の旅に出かけてくる』

です！！

そして、こんなつまらない企画にもセリフを考えてくださり本当にありがとうございます！！（セリフはすべて載せました）

15#ぶっちゃけ話　その1（前書き）

波弥斗
「・・・・」

広貴
「・・・・」

灘
「ん？どーした二人とも」

波弥斗
「…いや、何？今日のタイトル。」

灘
「ぶっちゃけ話　その1」

広貴
「そーじゃねぇ！聞きたいのはそこじゃねぇ！！」

波弥斗
「まず第一にぶっちゃけ話って何だ！」

広貴
「そんで『その1』って何だ！続くのか！？第二、第三があんのか！？」

灘
「まぁそれは本編で…」

波弥斗・広貴
「待てコラァァァァァァ！！！」

灘
「ちなみに今回のお話はぶっちゃけスルーしてもらっても全然構いません」

15#ぶっちゃけ話　その1

「どうも皆様！『Ｖｉｖｒｅ　ｔｏｕｔｅ　ｍａ　ｖｉｅ』を書かせていただいておる灘です！」

「の（一応）主人公の悠基（ゆうき）　波弥斗（はやと）です」

「の（一応）副主人公の小宮（こみや）　広貴（ひろき）です」

「の（一応）ヒロイン的な役割をさせていただいております小宮（こみや）美衿（みえり）です」

「……で？何だこれは灘」

「いや～もうちっとしたら長編をしようと思っているわけねコレ、ホラ原作のアニメの方でもそんなことしてるし～」

「だから？」

「だから～毎回長編をする前にぶっちゃけ話をしようかなーみたいなアレよ」

「「本編を書けェェェェ！！！」」

「なんつーもん書いてんだよお前！そんなもん書く必要あんのか！？」

「大体書くなら書くでせめて活動報告とかに書けェェェ！！」

「しかも本編始まって以来俺達喋ってしかねぇじゃねぇか！！」

「まぁ今回は作者が入ってるわけだからナレーションは必要ないかと…」

「いるわ！！バリバリいるわボケ！！」

「前回の絵といいサボんのも大概にしろよマジで！！」

「まぁまぁ、落ち着け二人ともねぇ？美衿さん？」

「私やっと１０話で登場したと思ったらたった二話でまた出てこなくなりましたよね」

「笑顔の美衿…さん。アレ？なんか設定とキャラが違うような、なんか笑顔が怖いなー」

「大体こう言うのは大先生が小説に疲れた時とかに一服するモンなんだよ！」

「それをお前連載初っ端・バカ・下手くそなお前がやっていいと思ってんのか！？」

「いける～いける～いけるとこま～で～俺はい～く～」

「「それ何処の歌ァァァ！？！？」」

「今回は何回『ぶっちゃけ』って言葉使うんだろうなー」

「オイオイお前等、何だよこのグダグダ感。」

「アニキ！」

「やっぱりお前等オリキャラは私達原作キャラがいないと駄目アルな～」

「神楽さん！！」

「まぁ元々銀魂の二次小説ですし…」

「「……眼鏡。」」

「このパターン前も見たわァァァァァ！！！」

「まぁてーわけで俺達でぶっちゃけ話をするわけになったんだが…」

「灘は一体何をぶっちゃけたいアルか？」

「よくぞ聞いてくれた！まずはぶっちゃけオリキャラのモデルを言おうかな～って」

「「…は？…」」

「モデル…ですか？」

「そ、んじゃあまず波弥斗から～」

「ちょちょちょ待ち！モデルってお前！！」

「そうだぞ、そんなことしたら俺等が…」

「大丈夫大丈夫、ぶっちゃけ話だから♪」

「「いや関係あるかァァァァ！！！」」

「ハイでは波弥斗のモデルキャラは、まぁぶっちゃけ分かっている人もいると思いますが

まず一人目は『銀さん』ですねハイ。原作キャラをモデルにすると言う失礼さです」

「オイ、今一人目って…」

「ん？ああ、波弥斗のモデルは二人いんだよ」

「ホントやりたい放題アルな…」

「で、もう一人のモデルがナル・・・」

「ちょーストップ！ストップ！今漫画の題名言おうとしてたよな！？」

「しょーこりもなくまたお前は問題を起こす気かお前！！」

「金時さん、漫画の題名を言うのって問題になるんですか？」

「ん？まぁ…問題って言うか…最悪連載中止になるかも…」

「そんなに何ですか！？」

「じゃあ伏せ字を使えばいいんじゃないアルか？」

「それもそうだな～じゃあ」

「波弥斗のもう一人のモデルはコレは自分が思っているだけで皆様はえ～と思うかもしれませんが一応
こういう感じの人にしたいな～と思っているのがあのジャンプ人気漫画のナ○トのシカマルです」

「「……」」

「ん？どーした二人とも」

「いっ今お前サラッととんでもない漫画とキャラを言ったぞ…」

「な、なれるわけねーだろ。あいつアイキュー２００以上の天才だぞそんで波弥斗（こいつ）はみんなが認める馬鹿だぞ！」

「今回オリキャラは驚きっぱなしアルな」

「でもま、そんな感じですね」

「もぉいちいち驚いているあいつらに反応すんのもめんどくせぇーから続けよーぜ」

「そッスねじゃあ続いて広貴のモデルキャラです

幽○白書と言うこれまたジャンプの人気漫画の桑原と言うキャラですね」

「「……」」

「あ、私そのアニメならしっていますよ私は雪菜ちゃんが好きでした」

「おお美衿さん。その雪菜だよ！神楽は！！」

「え？」

「いやほら面白かったじゃん、「雪菜さーん」ってだから雪菜＝神楽みたいな」

「ほーでも神楽とは性格全然違ぇーだろ、そのキャラ」

「無論・おしとやかで可愛くて神楽みたいに下品なノリは一切しない」

ぱき、ぱき

「…アレ？なんか二つの方向から恐ろしい音が…」

「誰がおしとやかじゃなくて下品アルか～？アーン？」

「俺の目の前で神楽さんの悪口か？えぇオイ」

「…ぎっ銀さーん！新八ー！美衿さーん！ヘルスミー！！」

「「「　……　」」」

「ちょ何で目をそらして…ギャーーーー！！！」

「私のモデルキャラだけ不明ですね…」

「ああ、それなら大丈夫だ。なんせ灘(あいつ)あんたのモデルだけは普段から言ってたからな」

「そうなんですか？なんでまた私のだけ…」

「なんか見てボロボロ泣いたらしい」

「泣い…？」

「それじゃ広貴の母ちゃんのモデルキャラを言うぞー。なんと

『ウル〇の森の物語』の夏子さんだそうだ」

「「……」」

「またすごい人を…」

「確かに感動しますけどアレは」

「最後のビードロ投げる姿なんか見た日にゃあ…」

「そうだな…っておわっ！いつのまに戻ってきやがったお前！」

「もちろん、夏子さんの話が出たら何が何でも蘇ってやんよ！」

「何だこの執念は……」

「それでは次のコーナー行くぞ！」

「よし！二個目として、今回はボツイラストを紹介します！！」

「またそんな勝手なことを…」

「そーだソーダ！大体イラストは小説のおまけのおまけなんだから何もこんなとこで」

「別にいーんじゃねぇか？面白そうだし」

「な！？アニキ！？」

「そうヨ、減るモンじゃないネ」

「いや神楽さん、減っちゃうんですよ読者様の人数が…」

「まぁとにかく一枚目のボツイラスト！本来なら『黒豆と煮豆の違いが分からなかったとか言えない』で載せるはずだった絵です！」

＞ｉ２０５０９―２４５８＜

「ギャーーーーー！！」

「ほー小さい時の広貴とお母さんか…」

「何でまたボツにしたんですか？」

「まず書く紙を間違えたんだよな自分が、それに気づいたのが書き終わった後でなんか統一性がないような気がしてボツ。あと写りも悪かったしそれと美衿さんの着物の色も気に入らないし後…」

「もういい、長くなりそうだから」

「それより波弥斗、広貴が向こうで泣いてるぞ」

「は？」

「（ブツブツブツ）別にあんなの載せなくてもいいじゃんか小さい

時だぜ？そんな…」

「「……」」

「ま、まぁとにかく次の絵に行くか」

「そっそうだな」

「えっと次のシーンは『美人で悪気がなかったらそりゃ怒れない』で美衿さんが波弥斗に抱きついたシーンのボツ絵です！」

＞ｉ２０５１０―２４５８＜

「ギャーーーーー！！」

「抱きつきシーンとかよく描く気になったな」

「いやもうできればあんま描きたくないです、難しいし…」

「作者の精神も引きつってるネ」

「まぁそれでもご希望があったから嬉しいんだけどな」

「いやーそれにしても美衿（あんた）も元気よく抱きついてんなオイ」

「ええ、嬉しかったんですもの♪」

「まぁまさに怒れないそのままだろうな…ってアレ？波弥斗？」

「銀さん、波弥斗さんなら広貴さんの二の舞いになってます」

「（ブツブツブツ）何もあんな絵、わざわざ載せなくてもいいだろ空気読めよマジで」

「まっまぁ…あの馬鹿どもはおいといて、そういえば二枚とも美衿（あんた）が載ってるよな」

「え？」

「描きやすいんですか？」

「そうだな～描きやすい順番で言うと広貴→美衿さん→波弥斗かな」

「何でアルか？」

「まず広貴は基本、顔が描きやすいし着物の色もめんどくないからいい

そんで美衿さんは着物がめんどくさいけど顔とかは広貴似だから描きやすいんだ

波弥斗は髪型がめんどくさいし服がめんどくさいしすべてがなんかめんどくさい」

「考えたのお前だろーが！！」

「でもまぁとにかくこれですべてのぶっちゃけ話が終わりました」

「てなあわけで本当に最初から最後までダラダラと話していたが…最後まで読んでくれてありがとな」

「これからもこの作者（ばか）が書く小説を宜しく頼むネ」

「後書きいんの？みたいな雰囲気になるのもアレだから今回後書きはしっませ～ん」

「でもアニキやっぱ前書きがいつもの通りあるんだからやっぱ後書きも……」

「でも今まさに後書きてきなこと喋ってません？」

「まぁそんなわけで次回から『可憐楔篇（かれんくさび）』スタートです！！」

15#ぶっちゃけ話　その1（後書き）

なんと今回セリフだけしかありません（汗）

これぞホントのトーク…（笑）

16#知り合い（前書き）

灘
「今回から長編（にしようと思ってる）『可憐楔(かれんくさび)篇の始まりです！！」

広貴
「また急に…」

波弥斗
「大体何だよ可憐楔篇ってひねりもねぇ…」

広貴
「原作ではお前どの長編が好き何だ？」

灘
「無論、吉原炎上篇だ（主に神楽や神威や神楽が）二番目が真撰組動乱篇で、三番目がかぶき町四天王篇だな」

広貴
「や、誰もベスト3を言えなど…」

美衿
「まぁとにかく長編宜しくお願いします♪」

灘・波弥斗・広貴
「「「　あぁ！オチとられた！！　」」」

16#知り合い

剣の名門柳生家。先祖代々将軍家に仕える名家である

なので代々仕えてきた柳生家をよく思う者は多い

そして、逆もまたしかり――――――――

「殿」

薄暗い部屋の中で男は話しかけた

「これが今年の実力でございます」

男は話かけながら男に何か書類を渡した

「ほぉ…さすがに柳生家じゃわい今年も強者(つわもの)が揃っとる」

男は扇子を開き扇ぎながら言った

「そうですねあの敏木斎（びんぼくさい）殿もまだまだ現役と言ってもいいですし」

「今年は次期当主である九兵衛も帰ってきたと聞くしの…」

「ええ、それから柳生四天王筆頭の東城歩などもいますしね」

二人の男は思い出しながら話していた

「さて、どうやって、潰していこうかの……」

「クラァ九衛兵ェェェェーーーーー！！！」

波弥斗はものすごい勢いで九兵衛の元へ走っていた

「何だ波弥斗」

「何だこれェェ！！」

そう言うと波弥斗は通帳らしきものを九兵衛に見せていた

「通帳ではないか？」

「ちげーよ！そこじゃなくてこの給料のとこだよ！！」

「それがどうした？」

「何で俺の方が広貴より少ないんだよォォォォォ！！！」

「簡単だ、広貴はこの１ヶ月間お前よりも仕事を果たしてくれていた。それだけだ」

「んだと！？この……」

波弥斗は続けて九衛兵に文句を言おうとしたが殺気を感じ止めた

おそるおそる後ろを向くとそこにはものすごい形相で波弥斗を睨んでいる東城がいた

「お、おっさん……」

「給料に文句があるなら私が聞きましょう」

波弥斗は舌打ちをして下を向きそして次の瞬間に波弥斗は思いっきり窓から飛び降りた

「あ、コラ波弥斗くん！！待ちなさい！！」

「うるせー！おっさん今日から出張だろーが！早く行け！！」

そう言うと波弥斗は門をくぐって階段を下りていった

「出張？そうか、東城は今日から二週間ほど出るんだったな」

「ええ、でもご心配いりません！！若が寂しがらないようにオババに私似の『東城人形』を作らせました！！なので寂しい時はこの人形を私と思ってギュ～～と……」

ザク！ザク！

九衛兵は人形を刀で思いっきり刺し始めた

「ああ、若！！東城人形が！！」

「うるさい、誰が寂しいなどといった。さっさと行け」

「…分かりました。では若！悲しくなったらいつでも電話を――」

「誰がするかァ！！！」

九兵衛の強烈な蹴りが東城の顔にめり込んだ

「よぉ波弥斗、また九衛兵と喧嘩したのかぇ？」

「じっちゃん！」

階段を下っている波弥斗と会ったのは九兵衛の祖父、柳生敏木斎（やぎゅうびんぼくさい）だった

敏木斎とは波弥斗達が柳生家にきてまだ間もない頃に波弥斗が庭にいる時に出会ったらしい。

最初は変なじいさんと思っていたが話しているうちにだんだん面白くなって今では波弥斗や広貴のよき理解者とも言える

「じっちゃんは何してんだ？」

「ん？散歩がてら町の方を歩こうと思っていただけじゃが……」

「そっか、俺も一応護衛だからな。散歩中にじっちゃんに何かあったら示しが付かねぇし一緒にいくよ」

「ワシがそんな簡単にやられるタマかぇ」

こうして男二人は町の方へと向かった

「それにしても、波弥斗とこうして町を歩くのは初めてじゃのう」

「そうだな。なんか嬉しい……」

すると向こうの方ですごい人だかりがあった

波弥斗と敏木斎は興味本位で人だかりの中に入り、一番前の列に行った

すると前には高そうな着物やアクセサリー、扇子をもっている男が優雅に歩いていた

「何だあのいかにも成金そうな男(ヤロー)は……」

「浅生(あそう)　栄一郎(えいいちろう)じゃよ」

波弥斗はびっくりして敏木斎の見た

「浅生　栄一郎？あいつのことか？」

「そうじゃ、表顔では我等柳生家と同じく将軍家に仕える名家の当主じゃが…裏では麻薬や覚せい剤、武器などを攘夷浪士などに高値で売りさばいているアホじゃよ…」

「ふーん。てゆーかじっちゃん詳しいな、知り合いか？」

敏木斎は何かを言おうとしたが、第三者の言葉によって塞がれた

「おお！敏木斎殿じゃないか！久しいのぉ！！」

話しかけてきたのはなんと浅生　栄一郎だった

波弥斗は若干浅生のことを睨みながら一歩後ろに下がった

「どうも敏木斎殿。お元気そうで何よりですぞハハハ」

「ぬしも相変わらず煙草くさいのぉ……」

「これはこれは手厳しい」

浅生の顔は笑っているがまさに作り笑いというやつだった

「それと敏木斎殿。九兵衛殿には例の話を伝えてくれましたかな」

「ふん。伝えたとしても聞くはずがなかろうて」

「まぁまぁそれはご本人が決めることでしょう」

それを聞いていた波弥斗は敏木斎に話しかけた

「じっちゃん、例の話って何？」

「…お主は気にせんで良いことじゃ」

「いや、だって気になんじゃん」

「何じゃそちは、今はワシが敏木斎殿と話をしてい…る…」

浅生は波弥斗に文句を言っている途中で波弥斗の顔を掴んだ

「！？」

波弥斗はびっくりしながらも浅生の手をはじいた

「っ！いきなり何すんだよこのクソジジイ！」

「……」

浅生はしばらく黙っていたが、しばらくすると震える声で波弥斗に話しかけた

「そちはまさか……『鎖蕊家（さしべ）』の……次男坊か……？」

それは、波弥斗にとって運命の歯車がまた回りだした時だったのかもしれない……

１６＃知り合い（後書き）

初めての長編『可憐楔篇』の第一回目のお話が終わりました！

いやー長編ってもなんかこれ本当に長編なの？みたいな感じですねハイ

大体長編の名前もひねりがないですし…（いやでも結構考えたんですよ？）

ですが、この長編は波弥斗に過去に一歩触れる予定です

なので、どうか最後まで宜しくお願いします！！

では、＊書きたい書かせるお絵かきコ～ナ～＊です！！

＞ｉ２０８１８―２４５８＜

すっごい分かりにくいと思いますが今回浅生栄一郎を『若干』睨んでいた波弥斗ですハイ。

分かりにくいですなーでも『若干』だから大丈夫かなうん。

17#来門者（前書き）

灘
「ついに銀魂（アニメ）始まったな！！」

波弥斗
「けっ！何が嬉しくてアニメなんか始まらにゃ～ならんのだ」

灘
「んだよオメー何そんないじけてんだよ」

波弥斗
「だってアニメにしたって漫画にしたって俺達（オリキャラ）は出ねーじゃん！」

灘
「それがそこに生まれてきたお前の運命よ……」

波弥斗
「神よ～～～！！！俺が何をした～～～！！！」

17#来門者

『そちはまさか……『鎖蕊家（さしべ）』の……次男坊か……？』

「！……」

浅生がそう言った瞬間、波弥斗の顔が一瞬曇った

「いやー大きくなったのぉ！しかしなぜそちが敏木斎殿と一緒にいるんじゃ？」

「波弥斗は今柳生家で護衛として働いているんじゃよ」

「何と！」

「そんな事より、鎖蕊とはなんじゃ？」

何かわからない敏木斎は浅生に尋ねる

「鎖蕊家とは…昔ワシと同…「うっせぇ!!」」

浅生が話している途中で波弥斗は声を止めるように声をあげた

「……俺はあんたの言う鎖蕊とかいう家の者(モン)じゃねぇ…勘違いすんな」

波弥斗の口調は静かだったが今の波弥斗は敏木斎が知っている波弥斗は少し違った

いつもの波弥斗とは違い、声に恐れがあり雰囲気も何かから怯えているように見えた

するとその波弥斗の言葉を聞いた浅生は波弥斗の髪を触りながら話しかけた

「そうか?この顔立ちや髪の色や瞳などがそちの父親によく似て……」

「触んな!!!」

波弥斗はそう言いながら浅生の手をはじいた

「お、俺は…鎖蕊家の人間なんかじゃねぇ!…俺は…俺は悠基波弥斗だ!」

「……まぁ良い、では敏木斎殿ワシはこれで。またお会いしましょう」

浅生はそう言うと今度は波弥斗の方を見て声をかけた

「じゃあ鎖蕊の次男坊。そちもまた逢おうぞ」

「っ！だから違うって言って――――」

「波弥斗まて！落ち着くんじゃ！！」

今にも浅生に飛びかかろうとする波弥斗を敏木斎が止める

「じっちゃん離せ！！俺はあいつに！あいつに――――！！」

そんな風に暴れている波弥斗をおいて浅生は車に乗ってどこかへ行った

「あ！テメ待て！！逃げんなコノヤロー！！！」

浅生は車の中で優雅に満足そうに紅茶を飲んでいた

『お、俺は…鎖蕊家の人間なんかじゃねぇ！…俺は…俺は悠基波弥斗だ！』

「……それにしても、まさか鎖蕊家の次男坊がまさか柳生家で働いているとは…」

浅生は紅茶を飲みながら呟いた

「そちはどう思う?鎖蕊の次男坊のことを」

浅生は運転手の男に話しかけた

「そうですね、正直言ってやりにくいですね。鎖蕊家の人間とは……」

「ハッハッハッ!ワシもじゃ!本当によく似ておる!あの男と!」

「ですが、あの者。自分は鎖蕊家の人間ではないと言っていましたが……」

「ふん。何を言っておる、奴が名乗った苗字を思い出してみぃ……」

「ハイ?確か……悠基……あぁ!!」

運転手の男はその名を口に出した瞬間突然何かを思い出したかのように声を上げた

「な、なるほど……そう言うとことですか……」

「ククク…そう言うとことじゃ……さて。」

そう言うと浅生はケータイを取り出した

「もしもし？ワシじゃ浅生じゃ。柳生四天王の東城は今から二週間はいない
そして柳生家の脅威の敏木斎殿も今は外にいる。すぐには帰れまい、今柳生家は九兵衛とその他の雑魚数名しかおらん、叩くなら今しかない」

そこまで言うと浅生は一回間を置きそして――――

「今こそ柳生家を潰せよ」

それだけ言うと、浅生は電話を切った

「ハァ～～～暇だな～～～」

「そうですね～～～」

「何にもすることネーアル」

その頃、我等が万事屋の三人は仕事もなく公園のベンチで暇をもてあましていた

「なんか面白いことねーかな……ん？オイお前等あそこにいるのって…」

「どうしたんですか？何か仕事らしいモン見つけたんですか？」

「つまんねーモンだったらシバくぞ天パァ」

銀時が見るほうには何と、広貴の母の美衿がいた

公園の前でウロウロしていたので探し物だろうかと万事屋三人は駆け寄った

「オ～イ何してんだオメー」

「！金時さん！？それに新八くんに神楽ちゃんも！！」

「お久しぶりです美衿さん。こんなトコで何をしてるんですか？」

「あ、今日はあの二人のお給料日らしいの。だからお祝いしてあげよーと思って…」

「オメーも変な奴だなー普通子供が給料もらったって聞いたらおごらせるだろ？」

銀時がそう言うと、美衿はクスクスと笑いながら答えた

「フフフ良いんですよ、あの子達頑張ってるらしいから…でも何処にいけばいいのか分からなくて困っていたんです」

「波弥斗達がいる所か？あいつらは…確か九兵衛のトコで働いてんだよな？」

「ええ、だから柳生家ですね。」

「それじゃあみっちゃん私達が案内するネ！」

「本当？じゃあお願いね♪神楽ちゃん」

「任せるアル！」

神楽はガッツポーズをして美衿の前を歩き始めた

「神楽ちゃん、何そのみっちゃんって。美衿さんは年上なんだからもうちょっと…」

疑問を思った新八が神楽に聞いた

「広貴の母ちゃんのあだ名アル！広貴の母ちゃん、地元とかではみっちゃん言われてる聞いたネ」

なんて愉快なあだ名だろう…新八はふとそう思った

「てゆーかみっちゃんってすごく有名な漫画から聞いたことあんだけど…」

銀時はふと思い出しながら言う

「ハイ♪私が寺子屋時代によく歌っていた歌詞にみっちゃんがついていたのでそのあだ名に……」

美衿は笑顔で銀時に答えた

「ちょい待ち、あんたが言ってるのってあのジャンプ人気漫画家の

鳥〇明先生の…」

「ハイ、第二巻のあの歌です♪」

「言うな。それ以上はヤバイから」

見た目と性格に似合わない歌を歌っていたと言う過去を持つ美衿だった

まぁこうして、銀時達は柳生家へ向かい始めた。

「…まったく波弥斗は…何処まで行ったんだ…」

その頃九兵衛は逃げ出した波弥斗に苛立っていた

すると、門の方から何やらざわつきが聞こえた

気になって九兵衛は玄関の方へ行ってみたら門下生の者達が集まっていた

「おい、何かあったのか？」

「「「「「　若様！　」」」」」」

「そっそれが…門の前に…柄の悪い連中がたくさんいて…」

「門下生の一人が何用かと聞きにいったらその門下生はボロボロになって帰ってきて…」

「何？」

「うわぁーーーー！！！」

「！」

叫び声のした方を見ると、柳生家の門下生数人が怪我を負わされていた

「テメェらなんか雑魚に用はねぇんだよ、柳生九兵衛を出せ…」

「まぁ俺達はここにいる奴等全員ぶっ潰す気だけどなー♪」

柄の悪い連中の中の大将っぽい奴等が話をしてきた

戦ってもいいが柳生家は十数人に比べ奴等は１００…いや２００はいるように見えた

戦っても勝ち目のない事は九兵衛には分かった

〜クソッ。こんな時に何処に行ったんだ、波弥斗！……〜

そして、九兵衛はしばらくすると玄関を出た

「！若様！！」

「戻ってください若様！！」

「心配するな、ちょっと話をしてくるだけだ…」

そう言うと九兵衛は奴等の前にきた

「あんたァ…誰だ?」

「…僕は柳生家次期当主・柳生　九兵衛だ。
君達の…目的を聞こう…」

すると奴等の大将ッぽい奴はニィと笑った

「…柳生家(テメェら)を…破滅させることさ……」

17#来門者（後書き）

ハイ、長編第二話終了です。

いや何かノリでもう一つ連載始めちゃって？なんかもう辞めとけばよかったかな～みたいな？

もう良い年こいて何してんの～みたいな？（いやまだ中学生ですよ？）

はぁ～駄目だわやっぱ。ノリで生きるもんじゃねぇな～

そんな感じにいいおっさんになったので今回＊書きたい書かせるお絵かきコ～ナ～＊はお休みです

18#発覚（前書き）

波弥斗
「こらテメェ！更新率悪ィーんだよコノヤロー！」

灘
「うるせぇ！こちとらてーへんなんだよ！」

波弥斗
「ホー何がそんなにてーへん何だよ？」

灘
「ぜっ税金……」

波弥斗
「（笑顔）」

この後灘は星になりました

18#発覚

「破滅…？どういう意味だ……」

男の言葉に九兵衛は聞き返した

「そのままの意味さ。柳生家は今日をもって代々の歴史に幕を下ろす」

男はニヤリと笑ったまま答えた

「柳生九兵衛、お前にはついてきてもらう」

そして男は一歩前に出ると九兵衛の腕を掴もうとしながら話しかけた

その瞬間九兵衛は腰にさしてある刀を素早く掴み男の腕に向かって振り下ろした

そして軽やかに男と距離を置き男を睨みながら問う

「僕だけ連れて行くとはどういう意味だ？答えろ」

九兵衛がそう言った瞬間男は意外そうな顔をする

「知らねぇのか？浅生家のご長男様のことを」

それを聞いた時、九兵衛は以前父が言っていた言葉を思い出す

その時父は浅生家と柳生家は代々同じように将軍家に仕えてきた名家だと、

そして浅生家は柳生家のことをよく思っていないと、

浅生家は裏では汚い事に手を染めているという事を聞かされていた

「貴様…浅生家の回し者か?それと僕がどう関係ある、人質にでもとると?」

九兵衛が冷静に答えると男は突然声をだし笑い出した

「何だ、本当に輿矩(こしのり)と敏木斎は何も伝えてないんだな!」

その瞬間、九兵衛はピクッと反応した

男はニヤリと笑ったまま話し始めた

男が言うには浅生家の長男で次期当主の則英(のりえい)は自分を酷く気に入ってくれてくれている

なぜ自分が女と言うことを知っているかは分からないがとにかく則英は自分と夫婦になれるように父、栄一郎に頼んだらしい

だが、栄一郎は柳生家のことを嫌っている。結婚など認める訳がなかった

しかしよく考えれば二人の結婚によりもし栄一郎が柳生家を動かせ

るようになれば…

邪魔な柳生家を潰すことができるし柳生家の規模も手に入る。

そう考えた栄一郎は早速柳生家に話を通して九兵衛にその旨を伝えてくれと頼んだ

しかし、父と祖父は何度言っても駄目だと言い結婚を絶対に認めなかった

九兵衛は結婚など望んでいない、奴の好きにしてやりたい、そう言ったらしい

「……」

「何も知らないこと程幸せなことはねぇよなぁ…」

固まっている九兵衛に男は皮肉のように言い始めた

「お前が自由に生きている間も、お前の父の輿矩や敏木斎はずっと悩んでたんだぜぇ」

九兵衛は何も言わなかったいや、言えなかった

「しっかし輿矩と敏木斎も馬鹿だよなぁ」

それを聞いた瞬間九兵衛はハッとした

――あれほど自分を大事に考えていてくれている父と祖父が馬鹿……？――

「お前なんかのためにいろんなこと犠牲にしてよぉ」

「……」

「俺だったら絶対にそんな馬鹿なことはしねぇなー」

「……ろ」

「お前の自由とか自分には関係ないってわかなかったのかねぇー？」

「……めろ」

「まぁ見た目も小さいし、考えることも小さ…「やめろ！！！」

九兵衛はそう叫ぶと思いっきり刀を強くもち男を斬ろうとした

男はなんとか避け九兵衛と距離をおいた

九兵衛はハァハァと呼吸を整えながら男を睨んだ

「お前が誇り高い父と祖父の何を知っている、お前ごときが父上達を知ったように語るな！！」

そう言うと、九兵衛は男に向かって飛び掛っていった

「ケッ、無傷で連れて帰りたかったんだがな…しょうがねぇ…」

腕の一本や二本が折れたからって文句言わんでくださよ、栄一郎様――――

「！……」

「ん？どうしたのじゃ、波弥斗。」

先程まで団子をおいしそうに食べていた波弥斗の手が急に止まるので敏木斎は声をかけた

波弥斗の顔はなぜか深刻そうだった

「おい、波弥斗…？」

すると波弥斗はやっと口を開いた

「じっちゃん……」

そこまで言うと波弥斗は深刻そうな顔のまま敏木斎の方を向いた

「なんか前回の最後らへんから俺の出番が少ない気がする」

それを聞いた瞬間敏木斎は波弥斗を思いっきり地面にたたきつけた

「ぐぼぉ！！！」

「しばらくそう地に這いつくばっておれ」

敏木斎はお茶を飲みながら悠長に答えた

「ってーな！いきなり何すんだよ！！顔の原形なくなったらどーしてくれんだよ！！」

「やかましいのぉ、急に深刻そうな顔をするから何かと思えばそんなことか…」

悠長に答える敏木斎に頭を撫でながら波弥斗は怒鳴った

「ちげーよ！急に手が止まったのは……」

「何じゃ、本当の理由があるのか？」

しかし波弥斗は目をそらし「何でもない」と言った

{言えねーよなぁまさか……}

『九兵衛の声が聞こえたような気がした』

{なぁ～んて変なこと言えるわきゃねーか…}

波弥斗はボリボリと頭をかきながら忘れようとお茶を飲んだ
すると向こう側から大きな声で叫んでいる一人の男がこっちへ向かってきていた

何かと思い、二人はその男に近づいてみると男は柳生家の門下生で所々傷を負っていた

そして、波弥斗と敏木斎の近くにくると力尽きたかのように倒れた

二人は男に駆け寄り声をかけたすると男は今にも崩れそうな声で話し始めた

「ぐ…波弥…斗、さん…敏木斎…様…柳生家が…若様が…危な、グハッ！」

「お、おい！大丈夫かぇ！？九兵衛に何かあったのか！？」

「変な奴等が…とつぜ…襲って…グッ！」

男はしばらく苦しみ、それ以上喋るのは辛そうに見えた

敏木斎は男をゆっくりと寝かすと波弥斗の方にグルンと勢いよく顔をむけた

「波弥斗！とにかくすぐに柳生家に戻……」

敏木斎が波弥斗の方を向くとそこには波弥斗の姿はなく前を向くと既に商店街の出口らへんまで行っている波弥斗が見えた

「は、速い……」

敏木斎は少しの間あっけにとられていたがすぐに波弥斗に追いこうと走り始めた

そしてその頃波弥斗はがむしゃらに、無差別にひたすら走っていた

「オラァ！！どけどけ邪魔すんなコノヤロー！！！」

{九兵衛！！九兵衛！！無事でいろよ！！！}

「ハァ…ハァ…」

「どーした、柳生九兵衛。もう終わりか？」

男は涼しい顔で九兵衛に聞く

「…！うるさい！！」

そう言うと九兵衛は男にまた飛び掛り力任せに何度も何度も男の刀を叩いた

しかし男はそれらすべて受け止め、隙をつき九兵衛のお腹を刀の峰で叩きつけた

九兵衛は後ろに飛ばされ何度か転がり大きな石にぶつかり止った

「っ！ガハッ！ガハッ！」

九兵衛は苦しそうにお腹を押さえた

「…まぁさすが柳生家次期当主とでも言っとくぜ、これだけの人数相手によくここまでもったもんだ」

男はそこまで言うと「だが…」と九兵衛の方に近づきだす

「これで終わりだ」

男は九兵衛に目の前にくると九兵衛の顔の目の前に刀を近づけて言った

九兵衛はここまでか、と目を強く瞑った

しかし、突然階段の方で叫び声が上がった

「な、何だ!?」

男はびっくりして後ろを振り向く、九兵衛もおそるおそる目を開けてそちらを見た

すると男の仲間達が次々と何者かに倒されていた、そして。

その男は何人かを倒し前に歩きながら出てきながら落ち着いた声で話しかけた

「よぉ……

随分と……

手間どってんじゃねーか……

『お嬢

「……波弥斗……」

＞i2219６―2458＜

さん』」

18#発覚（後書き）

ほんとに更新率悪ィーすね…いやホント

あと、今回のお絵かきコ～ナ～はどうしても小説内に入れたかったのであれです

１９＃裏と表（前書き）

波弥斗
「俺前回登場のしかた超かっこいいーーーー！！！」

広貴
「……」

波弥斗
「なぁ広貴、見た？見た？前回の俺の登場シーン！」

広貴
「……」

波弥斗
「『よぉ……』って…スゲくね？かっこよくね？俺♪」

広貴
「ちょっくらグレてくるわ。」

波弥斗
「え！？ちょ広貴！？何で…オイ広貴ーーーー！！」

灘
「では１９話もお願いします♪」

19#裏と表

「……波弥斗……」

おそるおそる口を開く九兵衛の言葉に反応し波弥斗は答える

「へぇーお嬢さん、随分なやられようじゃねーか」

皮肉のように言った波弥斗に九兵衛は怒鳴る

「何だと!?元はと言えば君がどこかに行かなければこうは……グッ!」

傷口に触れたのか、怒鳴っている途中に苦しそうにした

それを見ていた波弥斗はため息をついて言う

「はーもう良いって怒鳴んな。傷口がもっと大きくなんぞ」

「誰が怒鳴らせたと思って……」

九兵衛がそう言おうとした瞬間しばらく波弥斗の後ろにいた男の仲間達が襲ってきた

「俺等を無視して喋ってんじゃねーぞコラ！！」

波弥斗は後ろからだったが、男の刀の攻撃を片手で刀を持ち軽々と受け止めた

男は自分は両手で握って力いっぱい振り下ろして、波弥斗（あいて）は片手なのにピクリとも動かないことに驚いていた

すると波弥斗は刀を受け止め、前を向いたまま喋りだした

「まぁ慌てんなよ♪慌てなくてもお前等の相手はちゃ～んとしてやるからさ♪…そう…」

そこまで言うと波弥斗はクルッと攻撃してきた男の方へ振り向き言った

「柳生（うち）家の大切な次期ご当主様を傷つけた礼はきちんとさせてもらうからよ」

その時の波弥斗の顔と声は先程までふざけていた波弥斗とは別人の

ようだった

それに一瞬恐れた男は怯えながら一歩後ろに下がろうとした

しかし波弥斗は逃がさないと言わんばかりの勢いですばやく男の懐に潜りもっている真剣の峰で勢いよく斬りつけた

峰打ちだったがすごい勢いだったため男はすぐに気絶した

それを見ていた男の仲間達は驚きながら全員そろって一歩後ろに下がる

波弥斗は奴等を見ながら言う

「……次は？……」

その言葉に戸惑いながらも勢いづき今度は大勢で一斉に波弥斗に飛び掛っていった

しかし波弥斗はそれらの攻撃すべてを受け止めたり避けたりしながら一人一人確実に倒していった

いくら波弥斗でもやはりそれだけの大人数で全員真剣だったから顔にかすり傷とか腕も少し斬られたりもしたが、致命的な傷はなくいた

それを見ていた九兵衛と九兵衛を先程まで傷つけていた男は呆然と見ていた

「な、何だあいつは…あんな奴がいたなんて聞いてないぞ！」

男はもちろん九兵衛も驚いていた

〜波弥斗の奴……実戦でもあんなに強かったのか……〜

大将っぽい男は九兵衛の方をギロッと睨みながら言う

「こうなったらお前を人質にとってあいつの動きを封じてやる！」

そう言うと男は九兵衛の腕を掴もうと手を伸ばす

九兵衛は避けようにも体が痛くて動きがとれずチッと舌打ちをした

すると九兵衛達がいた所の木の上から突然小さい人がでてきたかと思うと九兵衛の腕を掴もうとしていた男の手を木刀ではじいた

「！？」

その者は軽やかに地面につくと九兵衛の方へ振り向いた

「九兵衛大丈夫かぇ？」

「お、お祖父さま…」

九兵衛を助けたのは祖父・敏木斎だった

男はその光景を見て話しかける

「貴様…敏木斎じゃねぇか。めんどくさい時に帰ってきやがって…」

「ふん…お主ごときが九兵衛をここまで痛めつけるとは…刀に何か仕組んでおるのじゃろ」

それを聞いた瞬間男は眉を少し吊り上げたがすぐに元に戻して

「言いがかりはよせ、俺は実力でここまでこいつを痛めつけたんだ」

「……そうか」

そう言うと素早く敏木斎は男の下にもぐりこみ男が刀を振り下ろしてきた瞬間に素早く逃げ男の刀をはじいた

「！クッ…」

敏木斎は素早く刀のところへ行き刀の先を自分の手で触った

「…なるほど、ピリピリするの。麻痺する道具でも刀に塗ったのか」

「このっ…返しやがれ！！」

男はでかい図体を利用して敏木斎を上から取り押さえようとしたがヒョイと敏木斎はいとも簡単によけた

そして敏木斎は男の後ろに回ると一気に男に木刀を振り下ろそうとした

こいつを倒せば男の仲間も混乱し敏木斎達の勝ちは目と鼻の先だった

「お待ちください」

敏木斎が後数センチで男を叩きつけると言うところでその声は聞こえた

「!?」

敏木斎が声のする方を見るとそこには長身のそこそこ美男の男が立っていた

もう少しで敏木斎に殺(ヤ)られそうだった男もその男を見た瞬間顔が青ざめた

「……関白(かんぱく)…様……」

「…オイ小僧。あいつは誰じゃ、答えろ」

怯えている男に敏木斎は質問した、すると男は震える声で答えた

「あの人…あのお方は…若干２４歳にしてその素晴らしい知性と圧倒的な強さで浅生家の関白の座につき普段は栄一郎様の運転手や側近としている『仁丘(におか)　竜彦(たつひこ)』様だ…」

「いや関白って…いつの時代じゃ。」

しかし、それを聞いた限りでは少なくともあの竜彦とか言う男は味方のはず

それなのになぜこの男はこんなにもあの者恐れているのか、敏木斎は疑問だった

{…何だあの男(ヤロー)は…にしても背でけぇな１９０ぐれーあんじゃねぇか？}

波弥斗は戦っていた者達が一斉に竜彦を見て怯え始めたので戦いを一時止めていた

その男は顔は無表情だが何故か波弥斗には一瞬その男から寒気が感じられた

するとその男は止まっていた場所からゆっくり歩き出し敏木斎の前で止まった

「敏木斎殿…この度(たび)はうちのものが失礼した」

そう言いながら竜彦と呼ばれる者は敏木斎の前でしゃがみこんだ

「「「！？」」」

「お詫びなどはまた後日に…それでは…」

そう言うと竜彦は立ち上がりクルッと向きを変え歩き出そうとした

「ま…待て！」

歩き出そうとした竜彦を九兵衛は苦しみながらも呼び止めた

「お、お前達は…僕達…柳生家を破滅させると言った…なの…に今度は下手にでてわびだと？意味が分からない…」

九兵衛はそこまで言うとまた痛みがきたのかグッとふさぎこんだ

敏木斎は九兵衛にかけよりだいじょうぶかと声をかける

竜彦はしばらく黙り込んでいたがクルッと振り向き九兵衛達に向かって言う

「……アレは冗談です♪」

「「…ハァ？」」

笑顔でそういった竜彦に二人はあっけにとられた

すると竜彦は笑顔のまま悠長に喋り始めた

「いやホラ敏木斎殿達はいつまでたってもあの件を認めてくれませんから、少し気付いてもらおうかと思い…このようなことを…」

「っ！冗談で九兵衛をこんなに傷つけたのかよ！？」

それを聞いていた波弥斗はいらつきがきたのか竜彦の所へ行き胸倉を掴んだ

怒りに満ちてる波弥斗とは違い、竜彦の顔は無表情だった

{この方は…鎖蕊の……}

竜彦はスルッと波弥斗の手から抜けると敏木斎達に笑顔でお辞儀をし、歩き始めた

「!テメッ、まだ話は終わって――――」

波弥斗は竜彦の肩は後ろから勢いよく掴んだ

「明日に浅生家へ来てください」

「!?」

竜彦は前を向いたまま思いもよらぬことを話だした

「なっ何言ってんだお前…」

「何と言われましても、ただあなた方を浅生家へ招待しているだけです」

そう言うと竜彦はクルッと波弥斗の方を向いた

「戦士を6・7人ほど連れてきてくださいあと必ずはあなたと敏木

斎殿は来てください。

そして、ランダムでペアを組みサバイバル大会をしましょう」

竜彦はいたって笑顔のままだった

が、波弥斗はそんな話だれがのるかと思った

「んなの俺達には何の特もねぇ、断――」

そう波弥斗が言っている途中で竜彦はニヤリと笑って答えた

「この勝負に勝ったら九兵衛殿から手を引きます。」

「!?」

「おや?その顔は知らないって顔ですね。教えてさしあげましょう
実は我が浅生家の次期当主・則英様は九兵衛殿を気に入っておられ
ましてね前々から嫁いでくださるよう言っていたのです
しかし、敏木斎殿たちはずっと反対しておりましてね、則英様も一
向に諦めようとしませんしどちらも困っていた時に考え付いたのが
この勝負だったのです」

波弥斗はびっくりした顔で九兵衛の方を一度見てもう一度竜彦の顔
を見た

そんな波弥斗を見て竜彦は話しかけた

「どうします？あなた方に選択肢はないのでは？」

「……」

波弥斗はしばらく下を向いて考えていた、そして…

「…分かった」

そう言うと波弥斗は顔を勢いよく上げまっすぐ竜彦の顔見ながら答えた

「ただし、勝つのは俺達だ！そうすれば九兵衛から手を引けよ！！」

竜彦はもう一度ニヤリと薄気味悪い笑い顔をすると階段をおりていった

「決まりですね、明日の午後１７時に浅生家へきてください。ただし九兵衛殿にはこのことを伝えぬように。それでは」

波弥斗は竜彦の後姿が小さくなるまで見続けてた

絶対勝ってやる！！九兵衛が望んでねー結婚なんてさせるもんか！！

「ククク…馬鹿な奴等だ……」

１９＃裏と表（後書き）

てなあわけで１９話のしゅ～りょ～です

いや～実際考えなしポンポン書くもんじゃありませんねーだって何も考えずにサバイバル大会とか言いましたけど

『何も考えて』ませんもん自分。

いやはや困った…

では＊書きたい書かせるお絵かきコ～ナ～＊です！！

＞ｉ２２５８９―２４５８＜

今回の絵は普段はピンクやオレンジの明るい色の着物しか着ない美衿さんが初めて青色とかそんな系の着物を着させてみました

髪型も普段のおろしているのからチェンジ！みたいな感じです

２０＃決意（前書き）

カッ！

灘
「やぁどうも皆様。今宵の宴、存分に楽しんでくださいませ
さて今宵の宴。皆様に考えていただくのは愛。
そして人から人へと伝わる運命（デスティニー）
ゆっくりと楽しんでいってくださいませ。では、
番組の最後にまたお会いしましょう。ごきげんよう」

波弥斗・広貴
「……」

波弥斗
「なぁ広貴。あいつ、大ウソツキだな…」

広貴
「愛とか人から人へと伝わる運命もねぇしな」

銀時
「の前にあんなキャラじゃねぇだろ、後番組って何？」

灘
「後、今回は後書きをできるかぎり見てください！」

美衿

「それでは始まり始まり～です♪」

20#決意

「へぇーココが広貴と波弥くんが働いているとこか～広いですね～」

と美衿は銀時達に案内されながら柳生家の階段を上っていた

そこで今まで見たこともないような大きな屋敷の柳生家を感動しながら見ていた

「みっちゃん！屋敷の方はもっとすごいネ！」

「本当？わー楽しみだなー？」

などと神楽と会話しながらはしゃいでいる美衿を見て銀時と新八はため息をついた

本当に美衿（あのひと）は母親なのだろうか、絶対嘘だ。と疑問に思うことはいくらでもあった

だが、銀時はそんなことより今は回りの雰囲気の方が気になっていた

いつもいる門番達も見当たらないし何故かいつもの柳生家とは違うように感じられた

そんなことを考えながらもやっと４人は階段を上りきり門の前にきた

「「「「！！」」」」

すると４人の目の前にはボロボロになって倒れている柳生家の門下生らしき者達と

横たわっている九兵衛の傍にいる敏木斎と波弥斗が現れた

４人はその光景にしばらく驚いていた、すると銀時達に気付いた波弥斗が声を出した

「！アニキ！！それに新八と神楽に…美衿さん！？」

波弥斗は急に３人がきたことにも驚いていたが一番美衿がきたことに驚いていた

そんな波弥斗達に４人は急いで駆け寄った

波弥斗達の元にくると美衿と神楽は九兵衛の元へ行き様子を見た

「アニキ達なんでココに…特に美衿さん。」

「んな事ァどーでもいい。どーしたんだよこれ、何があったんだ？」

銀時がそう言うと波弥斗は少し黙っていたが銀時と新八を九兵衛達から少し離れているところへ誘導して説明をする

先程浅生家と言う者達に襲われたこと。

浅生家は九兵衛を嫁がせようとしていると言うこと。

そして、嫁がせるのを諦めさせるために明日浅生家と戦うことになったこと。

その戦いには6．7人戦力となる者が必要なこと。

それらのことを話し終えた波弥斗はため息とついて先程の話に付け加える

「…そんでもって明日浅生家に行くことは九兵衛には話ちゃいけねーんだ…」

銀時と新八は驚きながら九兵衛のことを見た

銀時と新八は普段の九兵衛の行動を思い出し、よく嫁にする勇気があると思っていた

「戦いには絶対俺と敏木斎（じっちゃん）は出ないといけねーらしいんだ。後広貴がもうすぐ
輿矩のおっちゃんの護衛から帰っているから広貴ももちろん連れていくつもりだ
だから、後最低でも3人ほど戦力になる人が必要なんだ、そこで…」

そこまで波弥斗が言うと銀時が何かを察したように口を開く

「俺達に出てほしいってことだろ？」

波弥斗は何も言わずコクリとうなずいた

「波弥斗さん！もちろん任せてください！僕達が絶対阻止して見せますから！」

やる気の新八とは逆に銀時はダルそうに頭をかきながら呟く

「ハァ、勝ったら糖分プリーズな。」

そう言うと銀時はゆっくりと敏木斎の元へ行った

そんな銀時と見て波弥斗と新八は顔を見合わせて笑った

「よぉ兄(あん)ちゃん、おめーさんも明日の戦いに出んのか？」

自分の横を通ろうとした銀時に敏木斎は話しかけた

「ああ。」

それだけ言うと銀時はまた歩き出した、敏木斎はそんな銀時を見て話しかける

「絶対に勝てるという自信があんのか？ワシ等とやった時のように」

銀時は無表情のままピタッと止まった

そして敏木斎の方を見ずに前を向いたまま口を開いた

「別に、あん時自信があったわけじゃねぇよ。ただ……

『勝たなきゃいけなかっただけだ』」

そう言うと銀時は美衿達の元へ行き九兵衛の様子を聞きに言った

銀時は九兵衛の様子を聞くと九兵衛を自分の部屋で寝させてあげるように言った

そしてそういい残すと銀時は門下生達も柳生家の中へと運び出した

そんな銀時の行動と言葉を感じ敏木斎は銀時ならできると心の中で安心ができた

「…美衿さん。九兵衛の様子、どうだ？」

九兵衛の部屋から出てきた美衿に、波弥斗は問う
心配そうな顔をしている波弥斗に美衿は優しく微笑んで答えた
「大丈夫。今はグッスリ寝ているよ」
波弥斗は自然と心が安らぎ笑みがこぼれた、ホッとしたのだろう
だが波弥斗が心が安らいだのは九兵衛が無事だということが分かったと言うのもあるが、何より
『美衿に久しぶりに会えた』と言うのが大きかった
美衿のまるで本当の母親のような穏やかで綺麗な声。
辛さも痛みもすべて包み込んでくれるような優しい笑顔。

今の波弥斗にとって美衿は『全て』であり、『存在理由』であった

そして九兵衛が無事と知った時の波弥斗の顔を見て、美衿も笑顔になった

＞i２２７６０―２４５８＜

「良かったね波弥くん。大切に思える、そんな人ができて」

「…え？」

いきなりの美衿の言葉に波弥斗は戸惑う

「この町に来てまだ一ヶ月程だけど…でも広貴が神楽ちゃんを大切に思ってるように
きっと波弥くんもあの子のことが大切なんでしょ？」

美衿はたった一ヶ月と言う短い月日の中でも波弥斗が大切に思える人を見つけたことに気がついていた

その想いは恋愛とかそういうのではなくて、きっと自分が波弥斗や広貴に感じているとの同じようなそんな気持ち。

護ってやりたい、救ってあげたい、美衿が感じているのと同じよう

な感情が波弥斗の中にもできた

そう、美衿は感じた。

「波弥くんは…護衛としても親友としてもあの子の事を守ってあげたいんでしょう？」

美衿がそう聞くと波弥斗は驚きながらも答える

「ああ、こんな風に思えたのは美衿さんと広貴以来だ」

波弥斗がそう言うと美衿は真剣な目で波弥斗を見ながら話す

「そう、だったら負けたら駄目よ？波弥くんならきっとできるから」

波弥斗は小さく笑いながらコクリと頷くと銀時達の元へ向かった

波弥斗が廊下の角を曲がると美衿はスッと九兵衛の部屋の中へ戻った

「まぁ……いつから起きていたの？」

「……二人が、話している途中ぐらいからです……」

部屋の中に入った美衿は九兵衛が目を覚ましていることに気付いた
そんな九兵衛を見ながら美衿は九兵衛が寝ている布団の横に正座で座った
「体は大丈夫？怪我は痛まない？」
「…まだ、少し体が麻痺しているように感じます…」
「そう、焦らずゆっくり治しましょう。無理しないでね」
「……はい」
九兵衛と美衿はしばらく黙っていたがお互い聞きたいことは似ていた
九兵衛は先程の言葉の意味、美衿は先程の言葉を聞いていたのか。
そして我慢ができなくなった九兵衛が美衿に聞いた
「あの、波弥斗達は…負けるとはどういう意味ですか？何か…」
九兵衛は美衿と波弥斗の会話の中にあった”負ける”とは何の事か気になっていた
しかし、その事は九兵衛に言ってはならないことになっている
美衿は知らされていたので九兵衛に言う気はない。だが九兵衛の顔

を見ていくうちにこの子だけ真実を知らせれないのはあまりにも残酷にそう思えてきた

「…大丈夫。波弥くんは本当にあなたを大切に思っているから」

「…え？」

「だから波弥くんは絶対に負けないよ、だから…安心して」

九兵衛は何も言わなくなった、いや言えなかった

それから先の言葉を聞いてしまってはいけない。そんな気がしたから

そして九兵衛は今度こそ眠りについたただ『安心して』その言葉を信じて――――――

～次の日　ＰＭ１６：００～

「つーわけで行くのは俺、じっちゃん、広貴、アニキ、新八、神楽で決まりだ」

「ったくよー久々の出番でいきなりコレかよ…」

先程から文句を言っている広貴に波弥斗は納得させるようにと神楽に頼む

そんなこんなで１７：００に間に合うように波弥斗達は出る準備をした

そして全員柳生家の門の前につくといったん止まって銀時と波弥斗が口を開く

「「　よし、行くか　」」

そう言うと、６人は浅生家へ向かった

２０＃決意（後書き）

ハイ、まず最初に一言。

『波弥斗と九兵衛』の関係は恋愛ではありません！

断固拒否します。絶対嫌です。

…てなあわけで以上、灘のここは分かってもらいたいのコ～ナ～でした～

ちなみにお絵かきコ～ナ～は小説内のアレです

そんなわけで、次回もお願いします！

21#五人（前書き）

波弥斗
「そーいえば俺前々から聞きたかったことがあんだけど……」

灘
「なんじゃい」

広貴
「キャラ変わってんぞ…」

波弥斗
「…まっまぁ聞きたいのは絵描くのって時間かかんのか？」

灘
「いやそんなに掛かんねーよ？長くて２０分早くて１５分程度もあれば描けるし」

広貴
「そーいや何で下のコーナーって『書く』って言う字なんだ？普通絵だったら『描く』じゃねぇのか？」

灘
「ああ、それは……（遠目）」

波弥斗・広貴
｛｛え、何！？｝｝

（あと今回は短いです、ハイ。）

21#五人

「…今頃広貴達、浅生家ってとこに向かっている頃だよね……」

そう言うと美衿は手をギュと握り、お願いする

『どうか全員無事に帰ってこれますように――――――』

「…ここが浅生家か、でっけー家。」

波弥斗達6人は浅生家に戦う思われる場所へ案内されていた

波弥斗は浅生家の庭と屋敷を見て柳生家も大概だが、浅生家も負けてないと思った

屋敷の中は何もかもがキラキラに光っていてなんだかとても居心地が悪い気がしていた

それは他の5人もきっと同じで……

「おい神楽、見ろよこれきっと本物の金だぜ」

「ちがうアルよ銀ちゃんこれ金じゃなくて黄金ヨ」

きっと同じで……

「こんだけあんだからちょっとぐらい盗(と)ってもバレなくね？」

同じで……

「銀ちゃん！この銅像のケツの黄金とかならきっとバレないアル！」

「「やめんかいいいいい！！！」」

波弥斗と新八は一緒にツッコんだ

そりゃ普段はいつも金欠な万事屋だ。こんなピカピカな家にいるだけ舞い上がってしまうに決まっている

それはもちろん他の人でも言えることで誰しも一度は憧れを抱きそうな家であった

だが、波弥斗は不愉快そのものであった

なぜ自分がこんな家にこなければならないのか。

なぜここまで来てまたこんな黄金な家にいなければならないのか。

思うことはたくさんあった。だが

それはけっして人には言うつもりのないことであり、言えない感情であった――――

そんなこんなで波弥斗達は戦いをすると思われる扉の前についた

案内をしてくれた者は扉に手をかけ開けてもいいかと聞いてきた

波弥斗達は最後の確認をして扉を開けてもらうように頼んだ

そして案内人はゆっくりと扉を開けた

「「「「「「……」」」」」」

6人の目の前に広がったのは『サバイバル大会』に相応しい広いジャングルだった…。

6人は驚きながら声を出す

「何だここ…つーかこの家無駄なことに金かけすぎだろ…」

「なんじゃ広貴、よく分かっておるではないか」

そんな感じの会話を繰り広げていると突然後ろから

「いやーようこそお越しくださいました」

急に声が聞こえ6人は一斉にバッと振り向いた

そこには竜彦と、その他3人いた

そしてその中にいるただ一人の女の人が口を開いた

「お初にお目にかかります、私(わたくし)『桃(もも)』と申します。どうぞよしなに」

その女は青色の髪を上の方で一つに束ねて前髪をくくっている背の高い美女。

「僕は『源（みなもと）』といいます」

源と言った男は身長の随分低いおとなしそうな男だった

今度の男は大柄な、声のでかい男である

「オイラは『郷（ごう）』だ！宜しく頼む」

三人が言い終わると今度は竜彦が口を開く

「私達はこの４人と、まだ来ていませんがこれからくるもう一人とあなた方のお相手をいたします」

それを聞いた瞬間、６人はギョッとした。

そりゃあこっちは６人であっちが５人だと言うのは誰だってびっくりするに決まっている

お互いに負けられない勝負のはずなのに手加減などしている余裕などあるのだろうか

おそらく全員疑問に思っただろうがその中でも一番に広貴が質問した

「こっちは６人なのに５人でなんて、いいのか？」

すると竜彦は笑ったまま答える

「問題ありません、むしろ多い方だと思っていますから」

ピキ

この時、全員何か嫌なものが心の中にできた

「そうですわ、こんな相手に関白様まで参戦する必要ありません」

ピキピキ

（また）全員何か嫌なものが心の中にできた

「むしろ僕一人でいいんじゃないでしょうか？」

ピキピキピキ

（またまた）全員何か嫌なものが（～以下略）

「それはいいな！どうせいるのは餓鬼やジジイやヒョロヒョロ男だしな！」

カッチーン！

ほとんど…いやおそらく全員の心の中のものが限界値にきた

「おいおいお前等よぉ、こっちが黙ってりゃ好き放題言ってくれんじゃねーか」

銀時は一歩前にでながら文句を言う

「まぁ今のうちに馬鹿にしとくんだな、この勝負が終わってるころにはお前等俺等の前で土下座して『すいませーん命だけはー』とか言ってるんだからよ」

銀時はケケケと笑いながら話を続けた

しかしそんな銀時の言葉にも無表情のまま竜彦はルール説明をし始めた

・二人で一つのペアを作り、一緒に行動すること
・この中でならどんな武器等、道具を使っても良い
・制限時間は3時間。その間にどちらかのチームが全員戦闘不能と

なったらそこで終了
・時間内に全員が戦闘不能となっていなくても戦闘可能な人物が少ない方の敗北

以上がルールであり、ルールは実にシンプルで分かりやすいものだった。

そしてランダムでペアが決まり、結果こうなった

柳生家チーム

銀時・広貴ペア
波弥斗・敏木斎ペア
神楽・新八ペア

浅生家チーム

竜彦・桃ペア
源・郷ペア

となった。

あとから来るもう一人の者は相当な実力者らしいので別に一人でも良いとのこと

まぁこの瞬間にもまた全員プチッときていたようだが…

そして波弥斗達がくぐってきた扉の上に大きな時計が用意された

この時計は三時間たつと大きな音がなるしくみなっているらしい

その時計がまもなく開始の音を鳴らすことになっている

「……じっちゃん。」

「ん？何じゃ波弥斗」

波弥斗は始まる直前に敏木斎に話しかける

『絶対勝(ぜってー)とうな』

それを言った時の波弥斗の顔は真剣だった

敏木斎は一瞬驚いたがフッと笑い、答える

『ああ、そうじゃな絶対じゃ』

”カァァン！！！”

その音とともに柳生家対浅生家のサバイバル大会が始まった

しかし

まさかこの大会に別の意味がある事をまだ6人は知らなかった――

――――

２１#五人（後書き）

んーまぁ…オリキャラが次々と出てきて覚えれないと言う方のために…

出てきたオリキャラの絵を載せようと思います

では＊書きたい書かせるお絵かきコ～ナ～＊です

最初は今回始めて出てきたオリキャラの一人『桃（もも）』です

見にくくてすいません

＞ｉ２３０６３―２４５８＜

桃はナイスバディな身長はたぶん１７０前後（おそらく１６９あたり）

まぁ桃は書きやすいキャラなので、今度全体図でも載せようかなと思います

ちなみに年はたぶん２０、２１くらいです。

それではまた次回も宜しくお願いします♪

22#それぞれで（前書き）

灘
「いや～この長編もそろそろ真ん中だな～」

美衿
「灘さん、どうか広貴達に怪我だけはさせないでくださいよ？」

灘
「……え゛！？」

美衿
「……」

灘
「……」

美衿
「お願いしますよ？」

灘
「頑張ります……。」

22#それぞれで

サバイバル大会が始まると、全員ペアでそれぞれ分かれて行動していた

銀時・広貴ペア

「よーし広貴、まずは糖ぶ…食料を探しに行くぞ」

「いや何で!?関係ないじゃん!!つーか今あんた糖分って言おうとしてたよね!?」

そんな風にまったく関係ないものを探しにいくようなペアと…

波弥斗・敏木斎ペア

「じっちゃん、俺はあの竜彦って奴ブン殴りてぇ。探しに行こうぜ」

「よし、では行くとするかの」

こんな風にまじめに戦いに取り組もうとしている者もいる、そして…

新八・神楽ペア

「新八、ジャングルでは眼鏡は不要ネ、私一人で十分アル。どっか行くヨロシ」

「ペアで行動の意味分かる神楽ちゃぁぁぁぁぁん！！！」

こんな風に早速ルールを破ろうとする者達もいた…。

そして開始から１０分波弥斗・敏木斎ペアは歩いていると突然後ろから気配がした

二人はバッと後ろを振り向くとそこには何もなく、前をまた向き歩き始めた

すると今度は上から寒気がして急いで上を向くと刀を向けている竜彦が宙にいた

波弥斗と敏木斎は急いで素早く避ける、すると波弥斗は後ろからま

た気配を感じる

「まずは一人目よ」

そう言いながら桃は刀を波弥斗に向かって振り下ろしてきた

波弥斗は今度は避けるのではなく自分の刀で防いだ

鉄と鉄同士が当たり、嫌な金属音を響かせる

「波弥斗！！」

敏木斎はそう言いながら波弥斗に近づこうとする

「大丈夫だじっちゃん！じっちゃんはそっちのヤサ男の相手をしてくれ！！」

そう言うと波弥斗は桃の刀を力任せに弾いた

敏木斎は若干まだ不安そうだったがすぐに竜彦の方へと向きを変えた

そんな波弥斗達逆に相手は落ち着いた声で話しかけてくる

「良いのですか？助太刀しなくて、桃さんを女性と思ってなめていませんか？」

竜彦はそう言いながら波弥斗達の方をチラリと見る

そこにはまるで花びらのようにフワフワと動きながら波弥斗に攻撃している桃と

そんな桃に苦戦する、波弥斗が見える

敏木斎はフッと笑い答えた

「お主こそ、波弥斗をガキと思ってなめていないか?言っておくが波弥斗は強いぞ」

竜彦はああそうですかと言いながら刀を構えた

そして、波弥斗達の方は先程も言ったとおり桃に苦戦する波弥斗だった

波弥斗はひとまず桃と間合いと開け、息を整え話しかけた

「ったく…俺できれば女とは戦いたくねーんだよね、特にあんたみたいな人とは。

俺…あんたみてーなナイスバディな年上の女の人かなり好みだし」

波弥斗は若干口説いているような感じの喋り方で言った

だが、そんな波弥斗の言葉にも桃は無表情で答えた

「私はあなたのような弱い年下の男は嫌い」

その瞬間、波弥斗の心にグサッと槍がささった
（ちなみに波弥斗は生まれてこの上女の子にけなされたような事は一度もない）

しかし波弥斗は落ち込んだものの、笑いながら話しかけた

「いいねぇ強気な年上の女って…ますます好みだ」

そう言うと波弥斗はまた桃と刀の叩き付け合いを始めだした

「だーいすきなのわー♪すーこんぶの種～♪」

「いや神楽ちゃん、酢昆布に種はないよ」

愉快に歌を歌いながら歩いている神楽と新八は（新八は歌ってないけど）ゆくあてもないジャングルをさまよっていた

だが新八は考えてみれば自分達はいつ敵に襲われてもおかしくない状態なのだ

いくら神楽が強いと言ってもおそらく相手も十分強いであろうから油断はできない

そう新八が思った瞬間神楽が向こうの方で声をあげた

新八はびっくりして神楽に急いでかけよった

「神楽ちゃん！どうしたの！？」

新八は神楽の近くにくると神楽はゆっくりと新八の方を見て話しかけた

「新八……」

そう言うと神楽は目の前にあるものを指差し新八の方を見ながら口を開く

「ここ家の中なのに川があるネ」

ドテッ！と新八はずっこけた

確かに神楽が指差す方には横幅直系３ｍ程の浅そうな川があり、奥の方まで続いていた

だが、今この空気の中では、そんな事はどうでも良いように思え新八はため息をついた

「神楽ちゃん。そんな事より今は――――」

新八が神楽に話しかけている最中に川の中から突然、郷が出てきた

そして、郷は新八の方を見て気付いていない神楽にその刃を向けていた

「神楽ちゃん!!!」

新八は叫びながら急いで神楽を押し倒した

新八が神楽を押し倒したため、郷の刃は空振りをした

神楽は何か分かっていなかったため新八へと怒鳴った

「新八ィ!!急に何アルか!!お前のせいで頭打っ――――」

そこでやっと神楽は郷の存在を気付いた

郷が地面にスッと降りると木の上から源もおりてきた

「何やってんだよ郷。一発で決めるんじゃないの?」

「うるせー、ちょっと予定がくるっただけだぃ。」

そんなやり取りをしている源と郷を見ながら新八と神楽はゆっくりと立ち上がった

そして、それに気付いた郷と源は二人を見ながら話し出した

「で、どうする？こんな連中さっさと片付けて桃さんと関白様のとこに行こうよ」

源は郷を見上げながら言う

「それもそうだな、じゃあ……」

そう言うと郷の目線が神楽の方へ行った

「オイラはあのチャイナ服のお嬢さんの相手をすんぜ」

神楽はギロッと郷のことを睨んだ

「……神楽ちゃん、二人で一人ずつ倒していこう、その方が…」

新八が神楽を心配し、提案すると神楽は新八を見ながら低い声で言った

「馬鹿にすんなヨ眼鏡。こんな奴、私一人で十分アル」

そう言うと神楽は片足を後ろにした

「せいぜい私の足を引っ張るな…ヨ！！」

神楽は喋り終わると同時に郷に突っ込んでいった

新八は神楽を引き止めようとしたが、ああなってしまった神楽を止めることはおそらく不可能だと思い、諦めた

そして、新八は目の前にいる敵、源に集中することを決めた

すると源は神楽と郷の方を見て呟いていた

「あの子かわいそうだな～郷にギッタギッタにされても知らないよ～」

新八は源の言葉に冷静に返した

「神楽ちゃんはそんじょそこらの男のやられたりしない、なんせ夜兎だから…」

それを聞いた瞬間、源は目を見開いて新八の方をバッと見た

「…夜兎？夜兎ってまさかあの…宇宙最強戦闘種族の…夜兎のこと？」

新八が頷くと源はふーん…と神楽のことを珍しそうに見た

「そっか…じゃあ郷はあっちを選んで正解ってわけか……」

新八はもっている木刀を強く握った

そして、一つ確信したことがあった。目の前にいる敵、源は――

『強い』、と……。

しかし、それでも絶対負けたりしないと新八は強く思った

そして

「……神楽さんが……天人（あまんと）？……」

この会話が”ある者”に聞かれていることを新八は気付いていなかった…

22#それぞれで（後書き）

なんか、最近終わり方が1パターン…いやいや何でもありません

そんでもって最後のセリフ誰が言ったかって？

いやたぶん皆様全員わかっていると思いますが…あえて名前は出さないでくださいませ

何でって？…なんとなく…

それでは＊書きたい書かせるお絵かきコ～ナ～＊です！（流す）

今回の絵は『源（みなもと）』です

＞i23288―2458＜

源はあの3人の中では（おそらく？）最年少です

身長はおそらく155ぐらい、で年は13、4くらいとと思います

そんでもって着物の色とか手抜きじゃん！とか思わないでください！

そんでもって源はそばかすのあるだけど案外頭は郷よりはいいかもしれません

それでは次回もお願いします！！

23#様々な（前書き）

波弥斗
「はぁ～更新速度が遅くてホントにすいません…」

灘
「すいません」

波弥斗・灘
「「……」」

波弥斗
「な、なんか……」

灘
「広貴がいねーと……」

波弥斗・灘
｛｛しまらねぇ～……｝｝

てなわけで始まりです

23#様々な

浅生家にて始まった『サバイバル大会』そこでは、それぞれ戦いが繰り広げられていた

”ガキィィン！”

ジャングルの中で鈍い金属音が聞こえるのは、波弥斗と桃が戦っている場所である

二人共互角の力でお互いの刃をぶつけている

だが、どちらかというと波弥斗の方が基本的には不利だ

なぜかというと波弥斗は前回も言ったように女に手は出したくないと思っている

しかも自分の好みともなるとさらに増すものだ

それに気付いたのか、桃は波弥斗に不機嫌に話しかけてきた

「…あなた、本気で戦っているの？」

そう言った瞬間桃の刀の力がすこし強くなった

「あなたは…いえあなたも、私(わたくし)が女だから…馬鹿にしているのね！」

そう言うと桃はここ一番の力を使って波弥斗を吹き飛ばした

波弥斗は木に勢いよくぶつかりそのまま仰向けになって倒れてた

倒れた波弥斗はけっして気絶などはしていなかったし、起き上がる力もあった

だが、なぜだが立つ気持ちにはなれなかった

先程の桃の言葉が頭の中でずっと響いていたからだ

『あなたは…いえあなたも、私が女だから…馬鹿にしているのね！』

女だから馬鹿にしている?そんなことはない

女だから本気がだせない?それも違う

俺は知っている、『女の人』がどれだけ強いか――――――

その時ふいに頭をよぎったのは自分を強く愛してくれた、『強い女の人』

そして、自分がもっとも愛した『女の人』の顔――――

「！」

桃が振り返ると、そこには下を向いたまま立ち上がっている波弥斗がいた

波弥斗は下を向いたまま話し出した

「……あんた、何か勘違いしてるぜ」

それを聞いた瞬間、桃はピクッと反応した

「俺は別に女(あんた)を馬鹿にしてねぇし男(おれら)より格下なんて微塵も思ってねーよ

ただ単に、あんたが俺より強かったってだけだ」

桃はなにがいいたいの、みたいな顔で波弥斗の言葉を聞いていた

波弥斗は弱く握っていた刀を力強く握ってもう一度口を開いた

「でも、そんな『強い女の人』にも俺は勝たなきゃなんねーんだよ」

波弥斗は刀の先端を桃に向け、その言葉を放った

「ヘンッ！この程度かよ！！嬢ちゃんの力は！」

「何言ってるネ！私が本気を出したらお前なんか跡形も残らないアル！」

浅生家が金をかけて作った木々を次々と倒しながら、神楽と郷は戦っていた

もはや『ペアで行動』など頭の中から二人とも消えており、互いに力をぶつけていた

片方の攻撃が当たれば片方の攻撃が当たる。そんな光景が続いていた

そして二人は一区切り攻撃が終わると一時離れた、郷はニヤリと笑って話しかけた

「嬢ちゃん…強ェーな…！
オイラと力勝負でこんなに互角の戦いしたのお嬢ちゃんが初めてだよ！」

すると神楽もニヤリと笑って皮肉のように話しかけた

「オィオィこれだから坊ちゃんは、私はまだまだ力の半分も出してないネ
それなのに互角？自惚れも大概にするアル」

その言葉に郷はカチンと…くると思っていたが、怒りもせずに、いやむしろより楽しそうにして言う

「面白い嬢ちゃんだな！まったく……」

「ったくあの広貴（バカ）！どこ行ったんだ！」

銀時は先程新八の言葉を聞いた瞬間にすごい勢いで走り始めた広貴を追っていた

しかしジャングルの中に入った瞬間見失ってしまし、とりあえず大きな音のする方へ向かっていた

{…まずいな…あいつおそらく神楽んとこ行ったんだろーし……}

銀時は美衿との会話を思い出した

『あの子はまだ天人のことを恨んでいる、旦那を殺した天人のことを…』

『だから、私は…あの子はあまり天人と関わらない生活を送ってほしいんです。』

『わかりました、では私は金時さんのことを信じます。お願いしてもよろしいですか?』

『ああ、まかしとけ』

確かに銀時は約束した。

だがそれは、広貴に神楽が天人と言うことがバレないようにすると言う約束ではなく

『広貴が神楽を傷つけない』と言うことの約束。

銀時はそんな約束をしていたと言うのにこうもあっさり見失ってしまったのだ

広貴を信じていないわけではないが、絶対とも言えない。

「……～！あーもー！めんどくせぇなぁ！！子供（ガキ）ってのは！！」

なんだか急にむしゃくしゃした銀時は頭をクシャとした

……天パだから気持ちよさそうとか思ったのは内緒の方向で……

「……なんかめちゃくちゃ不服な言葉を言われた気がしたんだけど…」

気のせいです

「……あっそ……」

銀時は見えない誰かと話した後、また広貴を追って走り出した

しばらく進んで大きな岩がたくさんある所にたどり着いた時銀時は後ろの茂みから気配を感じた

銀時は素早く木刀洞爺湖を握り茂みの中から何かが出で来るのを待った

そして、その茂みから出てきたのは……

「……！てめぇは……」

「ホワタァァァァ！！」

一方その頃神楽はまだ郷との力勝負を繰り広げていた

最初戦いを繰り広げた所からだいぶ離れている所にいた

その時郷は心の中で、感じていた

『このままでは自分は負ける』と……

先程から自分とほぼ互角の力で戦っていると言うのに、神楽（あいて）は全然疲れていない

むしろ、だんだん力が上がっているようにも感じる
神楽は近距離戦では自分のとてつもない力（パワー）で敵（じぶん）を圧倒し
その力に臆した自分が遠距離戦にすると番傘で攻撃してくる
実に巧妙だった。とてもまだ１３、１４ほどの少女とは思えない程の戦いセンスであった
郷は、まずいと感じていながらもそう思っていることを気付かれないないためにも戦かっていた
だが、郷は目の前にある『ある事』に気付き、勝利を確信した
「何気持ち悪い笑いしてるアル！！」
その笑いに気付いた神楽が郷に怒鳴った
しかし郷は笑いを止めずにそのまま喋りだした
「いや、嬢ちゃんがあまりにも強ェーから嬉しかったんだよ」
神楽は意味がわからないと言わんばかりの顔をしてバク転をして後ろに下がった
〜よし…もう少し……〜
郷は考えながら神楽に勢いよく突っ込んでいった

「っ！？」

神楽は急に力の増した郷に驚いていた

神楽は押されるように後ろに行った

「！？」

後ろに行った瞬間に、神楽は何かにぶつかり気をとられてしまった

とっさに振り向き触るとそれは何か、ジャングルの絵を描かれた壁だった

しかし、そのとっさに気をとられたのが神楽の敗因だった

郷は壁に気をとられた神楽の隙を狙って上から神楽に向かって大きな岩をおとした

「！……」

「おしまいだな！嬢ちゃん……」

神楽は顔と左腕だけが、岩から出ている状態になり、身動きがとれなくなった

神楽はなんとか動く左腕と顔を使ってなんとか出ようとしたが、上手い具合に岩がのっかっていて結局意味がなかった

悔しがっている神楽に郷は話しかけた

「残念だったな嬢ちゃん。ここはどれだけジャングルに似ていようが室内だ
いつかは壁が現れる、嬢ちゃんはまんまとはまっちまったってわけさ岩だけにな」

「うまくねーヨ」

絶体絶命のようなピンチのくせに神楽は変わらず言葉を発した

しかし郷はフゥと息をはくと先程まで喋っていたような大きな声ではなくなり

今までただ差しているだけで使っていなかった刀を抜いた

「嬢ちゃんには悪ィが、これも栄一郎様と関白様のため。悪く思わねーでくれよ」

郷はそう言うと首だけがでている神楽に刀を向けた

次しようとすることは大体分かる。脅しなのか、はたまた本当なのかは分からないが

神楽は平静を装っていたが、その顔には汗がたれていた

郷は刀を上に上げるとそのまま思い切り振り下ろした

神楽はふいに目を強く瞑り、とっさに刀を避けることを考えた

「！！＿＿＿＿＿＿」

”ガキィィン！！”

「ぐわっ！！」

「！？」

鈍い金属音がして、神楽が目を開けると目の前には郷がフッ飛ばされていた

そして、自分の目の前には、一人の少年……

郷は自分をフッ飛ばした少年に話しかける

「……お前は……」

すると少年は真顔でこう答えた

「俺？俺は神楽さんを守る愛のヒーロー、『小宮　広貴』だ！」

＞ｉ２４０８３―２４５８＜

「こんな所で何をしているんだ？銀時」

「！……ヅラ！？」

23#様々な（後書き）

めちゃくちゃ大変だったぞコンチクショー！！

『誰かさん』が前回ヘンな登場のしかたをするから…今回めちゃめちゃ困ったじゃねーか！！何度やり直ししたことか！

……すんませんただの愚痴です……

しかし、久しぶりに広貴は描いててとても楽しかったです

やっぱり簡単だし、でも着物の上着の色とかめんどかったなぁ～とか思いました

では、今回はオリキャラ『郷（ごう）』です

＞ｉ２４０８２―２４５８＜

郷はおそらく年は１８、１９あたりと思います

もぉ本当に手抜きです

でもって身長はおそらく１８６とかそんあたり

声がいつも大きい設定ですのでいつもでかいです（？）

次回も宜しくお願いします♪

24#そして時は遡る（前書き）

銀時
「おい！今回俺達あんまり出てねーじゃねぇか！」

灘
「だ、だからこのコーナーを上げてるんじゃないですか！」

新八
「銀さんは前回出れただけマシでしょ！
僕は前回も出ずに今回も出れないんですから！！」

神楽
「私も出たっつっても超少ないアル！どゆことネ！」

灘
「まぁまぁみなさんそれぞれ出番はこれからですし……」

銀時
「しかも一話で終わらねぇのかよ！」

灘
「う〝……」

新八
「出番これからとか言って出さない可能性もありますしね……」

灘
「……」

神楽
「もうこのコーナーこれからは万事屋（わたしたち）がやればいいアル！」

灘
「え〝！？」

銀時
「おーそれいいな神楽。じゃ次回からこの前書きコーナーは『万事屋の駆け込み乗車危ないよ～浅生家篇～スタートな」

灘
「えー！！！」

次回、のっとられた灘（さくしゃ）の運命やいかに！？

２４#そして時は遡る

「！広貴！！お前何でここにいるアル！銀ちゃんはどうしたネ！！」

などと言っているが神楽自身だって新八とはまるでペアで行動などしていない

「おい広貴！聞いてるアルカ、広…き……？」

神楽は途中で喋るのを止めた、なぜなら喋っても無駄だと思ったからだ

今の広貴にはこんなに近くから喋っている神楽の声ですら聞こえていなかった

すると、広貴は目の前で広貴にフッ飛ばされて立ち上がっている郷を見ながら喋った

「…神楽さん、すいませんがあいつの相手は俺にやらせてください」

「……は？」

突然、何をいいだすかと思えば広貴はそんなことを言い出した
神楽は当然文句を言おうとした

『お前がやるんじゃなくて、まずお前は私の岩をどけろヨ』

そんなことを神楽は言おうとしたが今の広貴にはおそらく何も通じないのだろう
そう、感じたのだった
神楽は何も言わずに広貴を見上げた
すると、広貴は前を向いたまま話しかけてきた

「……神楽さん、俺実は…神楽さんにずっと言ってなかったことがあるんです」

広貴がそう言うと、神楽は?とそんな顔をした
広貴はクルッと神楽の方を見て、再度口を開いた

「そのことを…あいつを倒した後……聞いてもらってもいいですか」

その時の広貴の顔を、神楽は今まで見たことがなかった

神楽は何も言わずに広貴を見ていたが広貴は神楽の考えていることがわかったのか、郷の方へとゆっくり歩いていった

その間に郷は立ち上がっており広貴の方を見ながら考えていた

いくら自分が油断していたとはいえ、あんな簡単にフッ飛ばされるのはおかしい

そう思っていた。

郷は、握っている刀を強く持ち広貴の方へゆっくり歩き出した

そして郷は広貴に歩きながら話しかけた

「さっきはよくも隙をついてやってくれたなぁ……びっくりしたろーが」

すると広貴は不機嫌そうな顔で言い返す

「誰がお前なんかを好きだって？」

「いや違うって！！『隙』な『隙』！」

そんな郷のツッコミも無視して広貴は続ける

「俺が好きなのは……ここにいる『神楽さん』だ！！」

広貴はその言葉を合図と言わんばかりに郷に思いっきり突っ込んでいった

こうして郷との激しい刀同士の打ち合いが始まった

戦っている最中に広貴が思い出していたのは遠い昔の過去の記憶―

―――――

――――――――――――――――――――8年前。

「父ちゃん！父ちゃん！」

広貴：9歳

明るく、無邪気に話しかける息子に父親は優しく聞き返す

「どうした？広貴」

笑顔で振り向いてくれた父に、広貴は思いっきり抱きついた

突然のことにも驚きながらも父は笑って声かける

「何だよ急に、まだまだ甘えたい年頃なのかー？」

からかってくる父に広貴は口を膨らませながら言う

「いいじゃんよー父ちゃんは俺の『自慢』なんだからー」

自慢、と言う言葉を聞いた時、父は感じた

広貴（このこ）にとって自分はもっとも頼れる誇りなんだと。

それはやはり子供の親として子供にそう思われることこそ、親にとっての『自慢』。

父はニッコリ笑うと広貴に話しかける

「よーし広貴！今から母ちゃんに内緒で美味い蕎麦（そば）でも食いにいくか！」

それを聞いた瞬間広貴は目を輝かせながら言う

「よっしゃぁ！！蕎麦なんて久しぶりだぁ！！」

大きな声で言った広貴に父は慌てて口に手をあてて話す

「しーっ！馬鹿！美衿に聞かれたりしたらどーすん……「もう聞いてますよ」

部屋の扉の方から聞こえたその声に二人はギクリとゆっくり振り向いた

そこには口を膨らませ、若干怒っているような美衿がいた

「もぉ二人共、行くならいくでどうして私を誘ってくれないんですか」

美衿：２７歳

広貴と父は慌てて美衿に弁解した

「いっ今から誘いに行こうとしてたんだ！なっ広貴！」

「そ、そうだよ母ちゃん！」

「嘘言わないでください」

美衿にそう一言ビシッと言われた二人は何も言えなくなった

しょぼんとしている二人を見て、美衿はため息をついて口を開いた

「さぁおいしい蕎麦でも食べにいきましょうか」

その言葉を聞いた瞬間広貴と父は顔を見合わせる

広貴と父は笑顔でハイタッチをして喜んだ

そんな二人を見て美衿も楽しそうに、幸せそうに笑う

そんな普通な会話。普通の家族でのやりとり。

特別な事なんていらない、ただそれだけたったそれだけの事でよかった

そんなある日、広貴が通っている寺子屋で話題になった隣町のおいしい和菓子

すでに寺子屋ではほとんどの生徒が食べていて評判になっていた

広貴は自分も食べてみたいと父にお願いした

父は最初は断ったが広貴がとても必死に頼むのでしかたなく買いに行く事にした

父は行く準備をしている時に美衿と話していた

「隣町だから、帰ってくんのはたぶん夜になると思うけど…夕飯は残しといてくれよ」

美衿はくすっと笑って答える

「わかりました♪食べる事にはきっちりしてますね♪本当は今回の事もただ単に自分が食べたかっただけなんじゃないんですか？」

父は顔を赤くして答えた

「違うって！！／／ちゃんと食べとかないとお腹すくからだよ！！／／」

そんな事にむきになって言う夫に美衿はとても夫が十歳以上も年上の人には思えなかった

父は言い終わると玄関の方に歩いていき始めたので美衿もその後を付いて行った

玄関で草履を履き終え、外に出て玄関の前に立つと美衿の方を見て言う

「それじゃ、行ってくる」

「はい。あっこんなご時世なんですから気をつけてくださいね」

２０年前の天人襲来から天人はこんなちっぽけな町のところにも来るようになった

聞けば、天人は幕府や将軍に見せつけるために一般人まで襲うこともあるとか

それを知ってか知らずか父は笑いながら答える

「ははは、大丈夫だってたかだか隣町だろ」

美衿はその安心こそがとても不安だった

美衿の心配そうな顔を見てか父は笑うのを止めて美衿に話しかける

「……心配してくれてありがとな、お前は優しい奴だからな。
でも、俺は大丈夫。お前達を置いてどっかに行ったりしないから」

父はそう言いながら美衿の顔に優しく触れた

美衿が少し安心したような顔をすると父は優しく微笑み手を離す
そしてそのまま何も言わず父は前を向きまっすぐ歩き始めた

「いってらっしゃい……」

美衿はその大きな背中を見えなくなるまで見つめていた

この会話が二人にとって最後の会話になるとは
この時の二人は思いもしなかった
――――――

それから父は歩いて隣町の和菓子の所にまで行き、団子と饅頭(まんじゅう)を買った

後は帰るだけだと安心し、父は歩き始めた

父は歩いている途中に先程自分が買った団子などが入っている袋を見て微笑んだ

『やったぁ！！ありがとう父ちゃん！！』

（……広貴、喜ぶだろーな……）

そう思うと父は袋を強く握って歩くのを早くペースを少し上げた

その時、後ろから何かが来る気配が感じた

父はバッと気配の方を見ると何やら大きな、すごい速さで動く『何かが』こちらにきていた

それが後に知る『車』なわけだが、父はその何かを避けるように小走りをした

しかし運転していた獣らしき者はちょうど他の何かに気をとられ、前を見ず自由に運転していた

そのため本来ならまっすぐ進んでいた車はずれ、横に移動した

そして、次の瞬間。悲劇は起こった

道からずれた車は本来ならば当たるはずのない広貴の父親に……激突した

父は、ぶつかった瞬間大きく飛ばされそのまま落下した

車の中からは大きな、猫っぽい天人が出てきた

「うわぁ汚ったねー！！地球人（カス）の血が車についちまったぜ！！」

その天人は広貴の父親のことなど気にせず自分の車のことを気にしていた

その天人から数メートル離れた場所で、父は気絶寸前の状態だった

「……美…衿……。広貴……」

辛うじてそう言った父はその言葉を最後にその場に倒れた

「父ちゃんまだかなー」

父親の帰りを今か今かと待ちわびている広貴に美衿は笑いながら答えた

「クスクス、焦らなくてももうすぐ帰ってくるよ」

２４#そして時は遡る（後書き）

この時に車があったかどうかなんてしりませんから！
ただの勝手な付け加えですので、原作と違うとか知ってますから！
てなわけですいません。原作キャラがあんまりでなかったと言うこの現状。

銀魂の二次小説のくせに何考えてんだコノヤロウとかお思いの方々
自分だって原作キャラ出したいです！でも何やら都合がつきまして…
すいません！本当にすいません！！
それでは＊書きたい書かせるお絵かきコ～ナ～＊です

今回の絵は…他に出してないオリキャラいるかなーとか思ってたら
最初らへんに出たくせに……『竜彦』出てないやん！と気付きました
そんなわけで竜彦です

＞ｉ２４４４９―２４５８＜

関白こと『仁丘竜彦（におかたつひこ）』です

竜彦は身長１８７ｃｍぐらいの長身で年は話に出てきたとおり２４歳です

一応イケメンつーかハンサムつーかそんな設定なんですが…

美形は難しいです、ハイ。

竜彦はこれからその戦闘力が現れていきます。

それでは次回もお願いします！！

25#約束（前書き）

……前回銀時達に前書きをのっとられてしまった灘（さくしゃ）

＜万事屋の駆け込み乗車は危ないよ～浅生家篇～＞

新八
「……と思っていたら、『浅生家はやめておけ！まだ！』と言うスタッフ（？）からの声が上がりましたので……」

銀時
「タイトルこっちだ！」

＜万事屋の駆け込み乗車は危ないよ～真撰組篇～・・・1＞

近藤
「まずい！！この電車にのらないと…！乗らないと…！」

新八
（銀さん、すごい急いでますよ。仕事にでも遅れそう何ですかね…）

近藤
「お妙さんの乗っている電車に間に合わない！！！」

バキィィィ！

新八
「駆け込み乗車は危ないよォォォォォォォォ！！！」

近藤
「グハッ！新八くん！？朝っぱらから何非常識なことをしてるんだ！」

銀時
「警察のくせに堂々と犯罪を犯しているお前が常識を語る資格はねぇ！！」

神楽
「本当ネ！！大体ゴリラが歩いて喋ってるって時点でもう非常識アル！！」

近藤
「……え？何で？何で万事屋（おまえら）が此処に…？」

プシュー（電車の扉が閉まる音）

近藤
「あぁぁ！！」

銀時
「……良い気味だ……んじゃ今これを読んでるそこのお前。
オメーが電車に乗っててゴリラ顔のオッサンが駆け込み乗車をしよーとしたら

『迷わずドロップキックを食らわして乗車を阻止』しなさい」

神楽
「それじゃ、第25話の始まりアル！！」

25#約束

広貴は父親が帰ってくるのを待っていると言ったが結局待ちきれずに寝てしまった

しかし、夜になったら帰ってくると言っていたのに結局父は朝になっても帰ってくることはなかった

広貴は何かあったんだろうと不安で寺子屋を休むと言い始めたが美衿がそれを阻止した

美衿は広貴を寺子屋に行く準備を手伝っていた

広貴は美衿に準備をしてもらっている時にも美衿にお願いをした

「……母ちゃん、俺父ちゃんが心配だよ…だから……！」

「駄目」

美衿は迷うことなく言った

がっくりする広貴に、美衿は広貴を優しく抱きしめ話しかける

「大丈夫。お父さんはちょっと何か用事があって遅くなってるだけだから
もうすぐおいしい和菓子を持ってケロリと帰ってくるよ」

美衿がそう笑って言うので、広貴は何も言えなくなった

広貴はしぶしぶ重い足取りで寺子屋へと向かった

広貴を玄関の前で見送った後、美衿は肩を落として家へ入った

美衿は家に入って玄関に一番近い部屋の畳の隅に三角座りで手をあて座っていた

（……大丈夫、大丈夫。きっとすぐ帰ってくる……）

広貴の前では心配させまいと笑っていたが、美衿だって広貴以上に心配に決まっている

『俺は大丈夫。お前達を置いてどっかに行ったりしないから』

美衿は昨日夫に触れられた顔の部分に触れた

広貴の父親は、昔から約束はキチッと守っている人だった

だから今回も約束を守ってくれるはず。そう美衿は思いながらもう一度強く手を握った

その時玄関が勢いよく開く音がした。美衿はハッと顔上げて急いで玄関の方へ向かった

そして美衿は笑顔で口を開きながら玄関近くの曲がり角を曲がった

「お帰りなさい!!心配してたんですよ!遅かったです……ね…?」

玄関の前にいたのは、自分が待ちわびていた夫ではなく近くに住む男の人だった

男の人は体全体汗びっしょりで息も非常に荒くとても急いでいると言うことが分かる

「どっどうしたんですか?そんなにお急ぎのようで……」

男の人はゼェゼェ言っている息がまだ終わる前から話し出した

「はぁはぁ…みっちゃん…落ち…落ち着いて…きっ聞いて…くれよ……?」

辛そうにしている男の人を見て美衿は休むように言おうとしたが、男は拒否した

美衿はこれはただ事ではないと思いおとなしく聞くことにした

「……昨日の夜、もうあたり真っ暗で深夜過ぎぐらいに…俺はちょうど隣町の民宿から飲んで帰ってきていたんだ…

それで暗い中森ん中で何かにぶつかってこけちまったんだ。

俺は怒ってそのぶつかった何かを見た。……それ、何だったと思う

……」

男の人はそこまで言うと辛そうに、悲しそうに目を伏せた

美衿は顔に汗が一筋落ちた。そして男は拳を強く握ると、口を開いた……

「……広貴の父親の……あんたの旦那の……屍だったよ……」

…………――――――――――――――――――――

―――。

目の前が真っ暗になる。まさにこの時の美衿のような状態だろう……

美衿は馬鹿ではない。目の前の彼が嘘でこんな事を言っている訳がない

だが、つい昨日だ。つい昨日まで自分の横に。自分の顔に頬に触れた。その本人が

昨日まで、あんな笑顔だった人が……屍になっていた……？

『大丈夫、お前達を置いてどっかに行ったりしないから』

最初で最後、夫が約束を破った瞬間

どっかって何処？置くって何処に？何が…大丈夫だったの――――？

＞ｉ２４６８５―２４５８＜

美衿の頬には美衿が無意識に出した涙が伝っていた

そして、次の瞬間美衿はその場にスロー映像のように倒れた

「おっおい！みっちゃん！！しっかりしろ！！オイ！！」

そんな男の必死の叫びも聞こえるわけなく、美衿は気絶した

「ただいまー」

寺子屋から帰ってきた広貴はまず一番に父の草履があるか確認する

しかし何処にも見当たらなかったのが分かると広貴はため息をついて肩を落とした

そのまま広貴は玄関から出て庭の方へ行き、家の中を見た

「！」

そして、広貴が見た部屋には美衿が布団の中で辛そうに寝ている姿だった

その横には近所に住んでいる、男の人が深刻そうな顔で母を見つめていた

「母ちゃん！どうしたんだよ！！大丈夫か！」

広貴は美衿のところに急いで草履を投げ捨てて向かった

美衿の寝顔は辛そうに悲しそうに目から出ている涙の後がクッキリ残っていた

広貴はそんな顔の母を見るのは初めてだった

しばらく、美衿の顔を見つめた後広貴は横にいる男に話しかける

「母ちゃん……どうしたんだ？何で…こんな辛そうに……」

広貴が尋ねると男の人はいいにくそうに一旦目をそらした

しかし覚悟が決まったような顔をすると広貴の方をまっすぐ見た

「いいか広貴。落ち着いて聞くんだぞ？いいな……」

広貴は力強く頷いた。すると男の人は一旦間を置き、口を開いた

「……実は――――――――――――――――――――――――――――――」

あたりが薄暗くなってきた夕方ごろ小宮家にて、通夜が行われていた

小宮家に入る人々は皆、黒い着物をまとい泣きながら入ってきていた

皆入る時も入った後も広貴の父親の亡くなった経緯について語っていた

「隣町に住んでいる人が見たって言ってたけど…みっちゃんの旦那。

何かすごい勢いで動く鉄の物体にぶつかったんだって、それでその中から出てきたのはあの天人らしいの余所見してたーとかぼやいてたらしいわよ」

「酷い話よねぇ、あんなに若い妻と子供を残して逝っちゃうなんて……」

その言葉が美衿や広貴にも聞こえる位置にいた

広貴は握っていた拳をより強く握った

何もかもの言葉が遠くに聞こえる。何も聞こえなかった

広貴は未だに信じられていなかった

近所の人が、自分と母の近くに来ては気の毒だったなどと言っていることも

父の遺体が家（ここ）に運ばれて木の箱の中に入れられたことも

何もかも、すべて――――――――――

広貴が放心状態になりかけそうな瞬間、玄関の方から何やら騒がし

い声が聞こえた

広貴と美衿は顔を見合わせて玄関の方へ向かった

二人が玄関の近くに言ってみるとそこにいたのは猫のような顔立ちの『天人』だった

そして、天人は広貴達に気付くと土足で家の中に上がりこみ話しかけてきた

「お前等が昨日俺が跳ねた男の家族か？」

天人がそう言った瞬間回りがざわめいた

この目の前にいる天人こそ、広貴達の愛する父を奪った本人――――――――

広貴はハッとし天人を見た。広貴は生まれて初めてみる天人に驚いていた

しかしそんな事よりも、何よりも、今は広貴にはただただ苛立ちが立っていた

（……こいつが父ちゃんを殺した奴……天人……）

そんな事を考えていたら天人は続けて口を開いた

「てめぇの家族のせいで俺の車が汚れちまったんだ

汚ねぇカスの分際で俺等天人様の私物を汚しやがって…しっかし落とし前付けやがれ」

「……！！……」

広貴と美衿は一瞬、何を言ったのか理解できなかった

広貴はギリッと歯を食いしばると我慢が出来なくなったのか、天人にくらいついた

「お前！！父ちゃんを殺したくせに！！他に何か言うことないのか…グハッ！！」

広貴は天人に足で思い切りお腹を蹴られ、尻餅をついた

美衿は急いでお腹をかかえて痛そうにしている広貴の元へ行き声をかけた

「広貴！大丈夫！？大丈夫！？」

美衿は天人の方へ勢いよく向き天人の顔をジッと見た

天人はそんな二人を見て、鼻で笑って玄関の方へ行った

そして玄関のドアに手をかけると広貴達の方を見て言った

「フン、たかだか地球人（ゴミ）が一匹死んだくらいで大騒ぎしやがって……ゴミが一匹や百匹死んだからと言って何も困りはしねーだろうが」

広貴はそれを聞いた瞬間耳を疑った

『広貴、おいしい蕎麦(そば)でも食べに行こーか』

あんなに温かくて、優しくて…本当に優しい父を……地球人(ゴミ)……？

天人はそれだけ言うと外に出て無差別に運転して、どこかへ行ってしまった

天人が行った後、広貴の頭の中には先程の天人の言葉がこだましていた

美衿は下を向いて喋らなくなった広貴に話しかけようとした

「……広「許さない」

美衿は思わず聞き返した。すると広貴は顔を上げて迷いのない目で言った

『絶対に天人を許さない』

その日から、広貴は決意した。

天人は絶対に許さない。一生憎むべき存在。これから先どんな事があっても――――

『天人なんて、大嫌いだ』

「俺は、神楽さんを守る！！！」

広貴は郷と戦っている途中そう叫んだ

そうしないと、とても自分を保っていられそうになかったから――

――

「さっきから何叫んでんだよ！！」

郷はそう言うと力任せに広貴を殴ろうとした

広貴はそれを刀で防ごうとした瞬間、横から刀が襲ってきた

「グ……！！」

広貴はその際にわき腹らへんをかなり深く斬りつけられた

「…！広貴！！」

神楽はその瞬間を見て、思わず叫ぶ。

広貴は倒れそうになったのを両足で必死に踏ん張った

だが立っているのもやっとで今は指一本でも触れられたら倒れそうな状態だ

しかし、そんな広貴の状態など関係なく郷は襲い掛かってきた

広貴は朦朧（もうろう）とした中で郷を力なく見る

「避けるアル広貴ィィィィィィィ！！！」

（……！！神楽…さん……っ！！）

『……いいか広貴、約束を破るのは最低だ。そんな奴は男じゃねぇ』

「……っ！」

広貴は斬りつけられ出血の多いわき腹を左手で押さえ右手で刀をもう一度強く握り
両足でしっかりと支え、郷を思い切り刀で叩き落とした
その瞬間郷が地面に叩き付けられてその反動で一ｍ程はねた郷。

広貴はその場で回転をして勢いを付け、今度は両手でしっかりと刀を握り締め
神楽の岩がある方へ強く叩き飛ばした

ドゴォォォン！！！

郷は神楽をはさんでいた岩に思い切りぶつかり広貴の攻撃もあり、
そのまま倒れた

神楽は郷がぶつかった事により岩から自由になれた。

広貴は神楽が自由になった事を確認すると安心しその場に倒れた

「……ハァ…ハァ……」

広貴は斬られたわき腹の血を押さえながら上を向いていた

――――――――――――神楽さん…『あいつを倒した後』聞いてもらってもいいですか

……父ちゃん、俺……約束……守れる男になるからな

２５＃約束（後書き）

ハイ２５話終了です！（超早口）

今回美衿さんの昔（２７歳時）を描くに当たって実は超迷った事があったんです

ホラ、若いころと今とまったく変わってないってゆーのはなんか変かな～とか思っていたら…

「じゃあ美衿さんの髪伸ばすか短くすっか！」

ってな感じになって…めちゃめちゃ迷いました

でも最終的に少し短めと言うことに決めました

何でって……自分がショートの子好きだからってだけです

……はいでは＊書きたい書かせるお絵かきコ～ナ～＊です！！

今回の絵は（ただ単に描きやすいと言う理由だけで）桃です

＞ｉ２４６８６―２４５８＜

桃は下の靴は膝より少し上の黒のブーツです

そして着物を止める（本来なら帯）物を帯ではなくひも？みたいなの一本で止めているので着物は美衿さんやお妙さんが着ているよう

にビシッとなりません

なのでめちゃめちゃ動くんです、だから足とかも超見えます。困ったものだ…

それでは次回もお願いします！！

26#物事は突然と（前書き）

（主に）全員
「誕生日おめでとー！！！」

広貴
「あ、ありがとな…みんな……」

銀時
「いやー“散々更新伸ばしていたら気が付いたら広貴の誕生日間近だからもう広貴の誕生日に更新しよう”って作者の言葉なんか気にせずおめっとさん」

広貴
「……え？」

神楽
「やっと“広貴のなっがい話が終わって私達の出番が来るとか思っていたのにまた更新遅いのかヨ”って言うのもおいといておめでとうネ広貴」

広貴
「……かっ神楽さん…？」

新八

「しかも“本編だったら大怪我してるくせに何でこういう時は出てこれるんだろう”って言う疑問も置いといておめでとうございます広貴さん」

広貴
「……」

ポン

広貴
「…波弥斗……」

波弥斗
「気にすんな広貴。原作（あのひとたち）は今出番のせいでちょっとアレ何だよ……」

広貴
「……そっそっか！」

波弥斗
「そうさ……“広貴しね（ボソッ）”……」

広貴
「……」

広貴
（お前もかィィィィィィィィィ！！！）

灘

「それでは第１６話の始まりです！と、たんじょびーおめでと広貴♪」

２６＃物事は突然と

残り時間：２時間　　開始から１時間経過

戦闘不能：郷（続けて大会への参加資格なし）

重傷者　：小宮広貴（戦闘不能はしてないので引き続き大会に参加できるが深手のため途中棄権も可）

「オイ広貴！大丈夫アルか！オイ！！」

神楽は倒れて何も喋らなくなった広貴を揺すりながら声をかけていた

傷が深く出血量の多い今の広貴は揺すったりはあまりしない方が良いのだが…

それをやっているのが神楽なので仕方ないっちゃ仕方ないのだろう

それに、広貴も大好きな神楽さんに心配されて死ねるのなら本望……

「死なねぇよこの馬鹿！！」

広貴は天の声の人（作者）に怒鳴る拍子に勢いよく起き上がった

しかし、それが傷口に響いたのか広貴は傷口を叫びながら押さえた

神楽が見た限りでは広貴の怪我は思っていたより重症で、よく立っていられたと思った

だが、このままでは出血多量で死んでしまう。神楽は難しい事はよく分からなかったがとにかくこのままではよくないと感じた

「広貴、今から銀ちゃん呼んでくるアル。それまでにくたばんなヨ」

神楽はそう言うと立ち上がり銀時の元へ向かおうとした

すると広貴は銀時の所へ行こうとした神楽の左手を力なく掴んだ

「……待ってください…神楽さん……」

「…お前があいつと戦う前に私言うって言ってた事アルカ？そんな事後で――――」

すると広貴の神楽の手を握っている力が少し強くなった

「……今で……お願いします……」

神楽は少し考えたがハァとため息をついて広貴の横にドスンと座った

広貴はそれを見て力なく微笑むと小さな声で話し始めた

自分の天人への思いを、自分の父親のことを、すべて――――

――――

「……流石です敏木斎殿。これほど素晴らしい剣技、私は初めて見ました」

その頃広貴達とは全然違う場所で戦っていたのは敏木斎と竜彦だった

竜彦は先程まで戦い始めてからずっと口を開いていなかったのに一時間たった今、急に話しかけてきた

敏木斎は何やら少し不思議に思ったが何も言わずに竜彦の言葉に返した

「お主が言うな、その若さでわしとこれほど長時間戦って涼しい顔をしくさって……」

敏木斎がそう言うと竜彦はにっこり笑って答えた

「それは敏木斎殿も同じでしょう?」

敏木斎はそう言われると何も言わずに鼻で笑ったが、その顔には汗が一筋垂れていた

敏木斎は皮肉のような事を言ったがいくら強くても、襲ってくるのはやはり年。

若くして強い竜彦に体力が持つかどうか、心の中ではとても不安になっていた

そんな姿の敏木斎を見ながら竜彦はニヤリと笑い、心の中である者を呼ぶ

（……早く来てください、時はすぐそこまで来てますよ……）

「……ヅラ!?お前何でここに!?」

「ヅラじゃない桂だ」

広貴を追っていた銀時の前に現れたのはヅラこと桂小太郎（かつらこたろう）とエリザベスだった

銀時は突然現れた桂に気を取られ広貴を探すことをうっかり忘れてしまっていた

しかし、ここは浅生家の室内。桂がいることはどう考えてもおかしい

銀時はそのことを桂に聞こうとしたが、先に口を開いたのは桂だった

「銀時お前こそ何でこんな所にいるんだ?」

桂が聞くと後ろでエリザベスが?と書かれているプラカードを出した

「いやテメーこそ何でこんなトコにいんだよ。
ここは九兵衛がいる柳生家のライバルみてーなとこなんだぞ」

銀時がそう言うと桂はフッと鼻で笑い愚問だなと呟いた後銀時に話しかける

「…銀時、何を当然の事を聞いている」

銀時ははぁ?と怪訝そうな顔をして聞き返すと桂はむかつく笑い方をしたまま

「九兵衛殿のライバルならば俺が出るのが当たり前だろう!!!」

バッチャーン!

銀時は近くにあった川に思い切り桂を投げた

そして、桂は川の中からゲホゲホ言いながらすぐに出てきた

「ブハッ!銀時!!いきなり何をするん…ブバァ!!!」

銀時は足で桂を再び川の中へと押し戻した

「お前頼むからさ…いやほんっとマジで３００円上げるから一辺死んでくんない？」

銀時はもう言葉を発するのですらめんどくさそうな声で言った

銀時は呆れたのと同時にホッとしたと言うこともあった

もし、桂が浅生家の味方であればあの桂と戦わなくてはならない。

そんな事態は避けたかった、まぁ桂がこんな奴等に手を貸す事はないと思うが……

銀時はしばらく桂を見てそう感じると立ち上がり声をかけた

「おぃヅラ、テメーがしょうもねぇ理由でここにいるって事はよーくわかった
んな事よりも今は俺達に手ェ貸……」

銀時が喋っている途中に急に横の草むらから何かが動く音が聞こえた

銀時と桂は少し身をかがめ音がした何かが出てくるのを待った

すると、草むらの中から出てきたのはなんと神楽と離れた新八だった

「新八１？テメッまぎらわしい事しやがって…！！」

「新八君、ご無沙汰だな。元気にしてた……」

ドサッ

「「！！」」

草むらから出てきたと思ったら新八は急に倒れた。

銀時と桂は急いで声をかけながら新八に歩み寄った

近くで見ると新八は所々怪我をしておりとくに眼鏡の傷がひどかった

「新八！！どうした！？誰にやられ――――――――――――――――」

「僕ですよ」

突然銀時の後ろから声がし、銀時は急いで後ろを振り向いた

後ろには色々な箇所に擦り傷やかすり傷をしているが余裕そうに立っている源がいた

銀時はこんな小さな奴に新八が……と驚きをかくせなかった

源は銀時に近づきながら悠長な声で喋りだした

「その人と僕はさっきまで向こうの方で戦っていたんですけどね……
もうそろそろだから僕がこうしてとどめを刺して楽にしてあげよう
と思ってたのに
中々逃げるのが速くって……まったく手間取りましたよ」

そこまで言うと源は右手にもっている刀の先端を銀時に向けた

「……あなたなら…僕を本気にさせてくれるんですか？」

それを言っている時の源の目は本気だった

いくら相手が小さくて貧弱そうだったとしても
新八（メガネ）をここまで痛めつけた相手だ、弱いわけがない

「……あの…さっきからさり気なくメガネって言うの止めてくれま
せんか」

出ました新八の十八番、天の声の人へのツッコミ。

「……」

新八はしばらく黙って上を向いていたが、次に銀時に顔を向けて喋
り始めた

「…銀さん……さっき…神楽ちゃんの叫び声が聞こえたんです……」

「！」

『あの子はまだ天人のことを恨んでいる、旦那（ちちおや）を殺した天人のことを…』

「……ほんとか新八…どこだ、どこで聞こえた！？」

銀時が慌ててそう聞くと新八は黙ったまま声が聞こえたと思われる方向を指差した

銀時はそれを聞くと急いで立ち上がりその方向へと向かおうとした

「！？」

しかし銀時が行こうとした瞬間後ろから刀が飛び掛ってきた

銀時はなんとかそれを避けると

洞爺湖を握ってすぐにまた襲い掛かってきた刀を受け止めた

ギリギリと刀同士をぶつけて保っている時銀時は口を開く

「……てってめぇ…何で邪魔しやがんだ……“ヅラァ”！！！」

銀時はそう言いながら桂の刀を思い切り弾いた

桂は弾じかれた後、源の横へとゆっくり並んだ

桂は横へ並ぶと銀時の目を見ながらゆっくりと口を開いた

「……銀時……悪いが……お前を先へと行かせるわけには行かんのだ」

「……！！っとにうぜぇー奴だなテメーは…！！」

～柳生家～

「……！……」

その頃柳生家の九兵衛の部屋の中で九兵衛の看病をしている美衿は何か不安を感じた

『俺は大丈夫。お前達を置いてどっかに行ったりしないから』

「……」

また……誰かがいなくなったりする……そんな不安を感じたのだった

美衿はふたたび両手を強く握った――――――――――――――――

２６＃物事は突然と（後書き）

今回は前回に比べたらかなり短いです。

いや、前回が異常だったのか……

それではお絵かきコ～ナ～です！ちなみに今回は久しぶりにセリフ遊び版です♪

＞ｉ２５３５２―２４５８＜

どうぞ『美衿さんらしい天然っぷりのセリフ』を考えてください♪

あと字がきたなくてみにくくてすいません

たくさんのセリフを待っております！！（アレ？何コレ前もやったよ？）

次回も宜しくお願いします！！

27#気付いた裏（前書き）

灘
「前回広貴の誕生日のおかげでなんとか流れで前書きを取り戻せたわけですが…」

銀時
「おぃおぃおぃ、ちょっと待て。誰がテメーに返したっつた?」

神楽
「私達の出番が少ない事に変わりはないアル！」

新八
「と言う訳で、前々回に引き続き＜万事屋の駆け込み乗車危ないよ～真撰組篇～．．．２＞を、どうぞ！」

＜万事屋の駆け込み乗車は危ないよ～真撰組篇～．．．２＞

土方
「（スタスタスタ…）」

新八
「…あの…銀さん。前回の近藤さんはともかく土方さんは駆け込み乗車なんてしないんじゃあ……」

銀時
「甘いなぱっつあん、まぁ見てろ……」

新八
「……なんか、嫌な予感しかしないんですけど……」

土方
「（スタスタスタ…）」

（電車内にて）
店員
「ハ～イ今ならマヨリンマヨネーズ一年分券が当たるかもしれない夢のくじびきが、残り一名様になりましたよ～」

土方
「（ドビュン!!!（超ダッシュで））」

銀時
「駆け込み乗車は危ないねぇぞコラァァァァァ!!!」

バキッ！

土方
「…いってーな！いきなり何すんだ万事屋ァ!!」

銀時
「見たか神楽、いい年した大人がしかも警察が駆け込み乗車したぞ、

これがマヨラーの慣れはてだ。恐っそろしーだろ」

神楽
「ほんとネ、私たとえ全てのラーになってもマヨラーだけはならないようにするアル」

土方
「何を勘違いしてんだテメーらは!!何だラーって!」

新八
「…土方さん…あなただけは社会の常識を守る人だと思ってたのに…」

土方
「ちょっと待て眼鏡!!テメーまで何勘違いしてんだ!何…」

プシュー（扉が閉まる音）

土方
「ちょ待…あぁ!!マヨリンんんんん!!!」

銀時
「…よし、そんな訳でマヨラーは電車に乗れねぇってのが分かったなそんじゃ、27話の始まりな」

27#気付いた裏

残り時間　1：50（一時間五十分）　開始から　1：10（一時間十分）経過

戦闘不能：郷（続けて大会への参加資格なし）

重傷者　：小宮広貴（戦闘不能はしてないので引き続き大会に参加できるが深手のため途中棄権も可）

軽傷者　：志村新八（続けて大会への参加資格あり）

―――――――――――――――――――――――――

銀時の邪魔をして源の横に並んだ桂は源に話しかけた

「源殿、ここはまかせるぞ俺は早く『竜彦殿』とこに行かねばならんからな」

それを聞くと源はおきらくに返事した

「は～い、関白様にお願いしますよ～桂さん」

桂はそう言うとおそらく竜彦のもとへと行った

銀時はそれを追おうをしたが源によって防がれる

「…っこ・の子供(ガキ)…!!邪魔しやがって……!!!」

それから銀時は小さな子供相手に無機になりながら子供では絶対に勝てない力で源に木刀をぶつけた

（……!!ヅラァ!!何でテメーが浅生家側(そっち)にいるんだよ!!!）

いくら強いと言ってもやはりまだ子供。銀時の力任せの攻撃には後ずさりをした

しかし銀時が焦っているような様子を見て源は笑って話しかけた

「……あなた……桂さんと知り合い何ですか…？」

「あ〝あ〝！？誰があんなヅラと！！」

源はその様子を見てクスッと憎みたらしく笑った

「……ねぇ、なぜ桂さんがどう見てもあなたに力で負けていそうな僕をここに置いて、一人で関白様のところに行ったかわかりますか……？」

銀時も確かにそれは疑問だった。

いくら新八をここまで痛めつけた相手だからって自分と戦わせても勝負は見えている

それなのに、桂は源をここに置き、一人で竜彦の元へ行った

まるで、『時間稼ぎ』でもしてるかのように……

そこまで考えて銀時はハッとした

「てめぇ等！まさか……！！」

一方その頃、桃と戦っていた波弥斗だが……

（ハァ…ハァ…何処にいんだよ……アニキ！！）

――――――――――――つい先程――――――――――――

桃は何やら立ち上がった後の波弥斗に苦戦していた

さっきまではへなへなしていてまったく相手にならなかった波弥斗（あいて）が急に良い動きをし始めたので、桃は焦っていた

このままでは、『あの事』に間に合わなくなると

桃は急いでけりをつけんと言わんばかりに刀の動きをより一層速くした

しかし波弥斗はその動きに完璧についていった

（……どういう……事！？

さっきまでのなよなよが変わったってだけでも驚いてるのに……ましてや

『神速』と呼ばれる私の動きについて来るなんて…！！

このままではあの事に間に合わなくなるどころか…私が勝つことさえ……）

「……あんた……もしかして焦ってんのか？」

波弥斗がそう言うと桃は波弥斗を見ていた目つきをより鋭くした

「……別に……焦ってなんて……いませんわ！！」

桃はそう言いながら波弥斗に殺意まるだしの刃で思いっきり斬りつけようとした

波弥斗はその刃を避けるようにその場に一旦しゃがみ後ろを見た

すると桃の先程の刃で後ろにあった太い木が倒れていた。

おのなどを使っても手間取りそうなのに、ましてや刀が、女の人が、刀の風圧だけでこの木を折ったことに波弥斗は素直に驚いた

ふと桃の方を見るとハァハァと言い息を切らして呼吸を戻している
桃が目に入った

波弥斗はその姿を見ながらゆっくりと立ち上がった

そして明らかに桃は今焦っている、とそう確信した

「悪ィーな”桃さん”あんたも相当な神速らしいが……
俺も、あんたに負けず劣らずの『神速使い』と毎日刀まじ合わせてるもんでよ」

「！……柳生……九兵衛……」

「当ったりー」

桃は歯をギリッとし、波弥斗をジッと睨んだ

そして、桃はキョキョロと当たりを見回して近くにあった山を見つけると
そちらに向かってすごい速さで走っていった

波弥斗は最初逃げたのだと思い込みながら桃を逃がさぬように追った

しかし桃は逃げるのではなく山の頂上に来ると出口の上の所にある大きな時計を見ていた

（……もう…時間がない……）

時間を確認した桃は刀を上に振りかざし下へと力いっぱい突き刺した

桃がそんな決意しているのなど知らずに波弥斗は桃に追いついた

そして、出口の方の時計を見ている桃を見て不思議に思いながらもゆっくり近づいた

１０ｍくらいの距離になると桃は波弥斗の存在に気付き波弥斗の方を見た

波弥斗は時間を気にしていたのか、と考えながらゆっくりと一歩近づこうとした

波弥斗が桃にもう一歩近づこうとすると、桃は突然口を開いた

「ねぇどうして関白様がこんな大会（こと）を開いたのだと思います？」

桃がそう言った瞬間、波弥斗はピタッと足の動きを止めた

それは、波弥斗にとっても疑問の所だったからである

桃は無表情のまま波弥斗をじっと見つめていた

その目には先程までのような、焦りはなかった

そして、桃は続けて喋った

「あなた、関白様がこの大会を開くにあたってあなた方に出した条件を覚えています？」

波弥斗は記憶を読み返して思い出した

そしてあるおかしな点に波弥斗は気がついた

『”必ず”あなたと敏木斎殿は来てください』

そう、奴等（あそうけ）が本当に九兵衛をほしがっているのならば……

自分はともかく柳生家歴代最強と言われている『敏木斎』まで呼ぶことはない

それだけ浅生家側が不利になるからだ。　にも関わらず浅生家は敏木斎を呼んだ

なぜ？そもそも制限時間が3時間と言うのも気になる

奴等は最初からすごい自信があった、ならば3時間などいらないのではないか？

1時間などで十分のはず、なのに3時間と言った。そして1時間たった今、なぜ桃（このひと）は急にこんなこと言い始めたのか……

まるで、この大会中に『どこか離れている所』へ行っても制限時間内に帰ってこられるようにのための時間のように……。

波弥斗はそんな事を考えながらハッとした。

なんと、気が付いたら桃が頭上にいたのだ。波弥斗は急いで刀を構

えた

しかし桃は波弥斗に攻撃するのではなく波弥斗の後ろに着地した

波弥斗は急いで振り返ると桃に思いっきり刀で弾き飛ばされた

刀で防いだので怪我はなかったが波弥斗は１０m程飛ばされ先程桃がいた場所まで来た

そして波弥斗が反動で一瞬目を瞑ってしまうと桃はもう一度波弥斗の頭上へと舞った

（……ごめんなさい……でも、これもすべては栄一郎様と関白様のため！！）

桃は心の中でそう叫ぶと波弥斗の頭を峰で思いっきり叩いた

波弥斗は勢いよく地面に叩きつけられ、その反動で先程桃が刀で弱くしておいた場所は崩れはじめた

崩れ始めた場所から桃はふわりと場所変えると頭を強く打たれて気絶をしている波弥斗は崩れた中へと落ちていった

桃はその姿を見ながら申し訳ないと言う気持ちが大きくなっていった

（ごめんなさい……殺すつもりなんてなかったの……

でも…あなたがあまりにも強いから……『あの事』に間に合わなくなると思って…）

桃はそこまで思うと考えるのを止めて竜彦の元へと走り出した

そしてそれから１０分後（この時開始から１時間１０分経過）

「……ってぇ～……」

崩れた山の地面から落ちた波弥斗はすごい高さから落ちたものの、
なんとか生きていた

波弥斗は目を覚ますと頭の激痛に思いっきり頭を押さえた

「てててて～…あの女（アマ）思いっきり頭叩きやがって……つーかここ何処？」

波弥斗はふと上を見上げると自分が落ちてきたと思われる穴のようなものがあった

あっこから落ちたのか…と納得しながら波弥斗は立ち上がろうとした

――――――――――――――――ピキッ！！！――――――――――――――――

突然、波弥斗の左足に激痛が走った

「い…ってェェェェェェェェェェェェ！！！」

あまりの痛さに波弥斗はまたもやふさぎこんだ。
どうやら落ちた際にねんざでもしたようだ

急いで波弥斗は靴下を脱いで左足を見た、すると左の足首が綺麗に紫色に変形していた

波弥斗はマジやべぇ…そんな事を思いながらその場に両手を広げて倒れた

（はぁ～どうしょっかな…マジで。足は痛てーし、頭は痛てーし…）

そんな感じで半場諦めかけながら波弥斗は上の穴のあいた部分を見ていた

その時に波弥斗は今までのことをボーッとしながら整理していた

不利な状況になると分かっていながら浅生家が敏木斎を呼んだこと

不可解な時間。

一時間経過してからの桃の突然の慌てよう、行動。

波弥斗はそこまで目を瞑って考えていたそして
急に何かを思いついた様にガバッと勢いよく起き上がった

「……まさか……あいつらがこんな大会(こと)開いたわけって……」

そう呟くと波弥斗は左足を引きずりながら壁の方まで行き壁を思いっきり刀で壊した

そして、穴が開くと波弥斗はその穴から急いで走って出た……

こうして波弥斗は今にいたるわけなのだが、

波弥斗はとにかく急いで左足を引きずるように走っていた

（そうだったんだ…！奴等の目的は……）

「なるほどな……あんだけ自信があったてめぇらが……
何で制限時間を『3時間』なんてそんな時間にしたのか…
ずっと気になってたが……そういうことか……」

何かを気付いたような銀時は、源に対してその言葉を放った

「3時間っーのはどっか遠くへ行っても往復して帰ってこられるための時間。
つまりさっきヅラが行ったのはあの『竜彦』ってヤローをどこかへ行かせるために
邪魔な敏木斎（ジジィ）を足止めするため……つまり……」

そこまで言うと銀時は木刀を握っていない方の手をグーに変えた

「浅生家（てめぇら）の目的は…最初（ハナ）っから……」

「…柳生家にいる……九兵衛達だったんだ！！」

27＃気付いた裏（後書き）

今回、最後の分かりにくかったでしょうか？でしょうね…

一応最初の
「浅生家（てめぇら）の目的は…最初（ハナ）から……」

が銀さんで

「…柳生家にいる……九兵衛達だったんだ！！」

って言うのが波弥斗のセリフになっています

すいません……分かりにくくて……

後、今回のお絵かきコ～ナ～はお休みです

それでは次回も宜しくお願いします！！

28#守るために（前書き）

＜万事屋の駆け込み乗車は危ないよ～真撰組篇・・・3＞

沖田
「（すたすたすた）」

新八
「……」

新八
〜銀さんんんんんん！！！おきっ沖田さんにはまずいんじゃないですか！？〜

銀時
〜ああまずいな、このままじゃあいつ駆け込み乗車しないかも……〜

新八
〜そっちのまずいじゃねぇよ！！〜

沖田
「アリ？旦那達じゃねーですかィ」

新八・銀時
〜〜〜なんかアッサリばれたァァァァァァァ！！！〜〜〜

沖田

「こんなトコで何やってんで……」

神楽
「駆け込み乗車は危ねぇアルぞ死ねサドォォォォォォォ！！！」

新八
「神楽ちゃんんんん!?!?何やってんの!?何で殺意丸出しなの!?」

銀時
「ほっとけ、いつもの事だろ」

プシュー（閉まる音）

新八
「しかも沖田さん乗り遅れました…あれ?」

気が付くと神楽の横に居た沖田が消えている

沖田
「それじゃ～旦那方俺はこれで」

気が付くと電車内にいる沖田

万事屋
「「「……（どんな手を使ったんだあいつ…）」」」

灘
「それでは２８話も宜しくお願いします！」

28#守るために

「おお…やっと着てくれましたか…『桂殿』……」

「ああすまない、少々思わぬ知り合いがいてな……」

銀時の相手を源に任せて竜彦の元へと向かっていた桂はようやく竜彦の元へと来た

敏木斎は桂の姿を見て、どこかで見たような、そんな感じがしていた

すると突然草むらの方から音がし、敏木斎が後ろを向くと自分の頭上を舞う一人の女がいた

その女はフワリと竜彦の横へと着地すると無表情に敏木斎の方を振り向いた

「遅くなりました、関白様……」

女の言葉に竜彦は笑顔で答えた

「いえいえ桃さん、作戦通りですよ」

そして、桃はそのまま竜彦の横へ通り過ぎようとしたが
竜彦の横に居る桂の姿が目に入ると桃は何も言わずに桂の目の前まで来た

「……どうも、桂様」

「おお桃殿！無事だったか、よか――――――――ゴフッ！！！」

桂は言葉の途中で桃に思い切り蹴っ飛ばされた

そして、桃はそのまま何も言わずに竜彦の横へと並んだ

桂は転がり倒れていたがすぐに起き上がって桃に文句を放った

「桃殿ォ！！『また』いきなり何をするんだ！」

桃は桂のその文句にも冷静に答えた

「…『また』言わせないでください
関白様の隣は私の場所です。よそ者のあなたが居て良い場所ではありません」

一見気が合いそうだった二人だが、どうやら仲はあんまり良くないようだ

……まぁ桃が一方的に仲を悪くしているだけのようだが……

「まぁ桃さんそう言わずに…
桂殿はわざわざ私達に手を貸してくださってるんですから……」

竜彦がそう桃に言うと桃は口を尖らせて返事をした

「……わかりました……関白様が…そう言うなら……」

＞ｉ２５９３４―２４５８＜

そこまで言うと桃は今度は桂の方を向いて言葉を続けた

「…桂様”大変納得いきません”が関白様の横に並ぶ事を許可いたします
そのかわり！左側は絶対駄目です！何があっても右にいてください！！」

左になんのこだわりがあると言うんだ……

桂はその言葉を聞くとしぶしぶとだけど素早く竜彦の右側へと並んだ

二人が横に並ぶと竜彦はため息をついて、敏木斎の方を向いて口を開いた

「さて、お二人共……しっかりと頼みますよ……」

そんな風にどんどん浅生家側がうまいこと言っている間、浅生家の目的が分かった銀時や波弥斗だが……

銀時には源が、波弥斗は足を。

お互いあまり動ける状態ではなかったのだった…

「ピンポンピンポーン♪大っ当ったりー?」

銀時に目的がばれてしまったと言うのに、源は無邪気にそう言いながら答えた

そしてその言葉の最後にでも…と付け足した

「それが分かったからって…今更遅いですよ。今頃…関白様はきっと……」

しかし銀時は源のそんな言葉など聞かずにすぐに森の中に入ろうとしていた

源はそんな銀時の行動を見て急いで向かう

銀時はふと後ろから追ってくる源を見て、舌打ちをするとまた前を見た

ドン！！！

「いって…！！……誰だこの……」

銀時がそういいながらぶつかった相手を見るとそこには自分のよく知っている緑髪の少年がなぜか倒れていた

「……波弥斗……？」

銀時がそう小さく問いかけると倒れこんでいた波弥斗はガバッと起き上がった

「アニキ！？アニキか！！よかった～探してたんだ…っていってェエェエ！！」

波弥斗は話している最中に急に左足と痛そうに抱えた

銀時は先程のぶつかったので足を痛めたのかと思い声をかけようともしたが
後ろからくる源のせいで、そんな余裕はないと感じた

「波弥斗！今はとにかく立て！！新八連れて行くぞ！！」

「…！！りょーかい！！」

銀時は急にこんな事を言ったから絶対聞き返されると思っていた

だが波弥斗は先程浅生家の目的が分かったわけだから銀時もそれを理解して言ったんだろうと感じた

即ち、行く場所は『敏木斎と竜彦の居る所』そう、判断したのだった

銀時は静かに笑うと新八を抱えて走り出した

しかし、すぐに波弥斗に異変に気付いた。

本当ならばきっと自分と同じくらいに走れるはずの波弥斗が自分より数m遅く、
顔色も悪くて、どうやら左足を引きずっているように見えた

おそらく波弥斗の足は、ずっと走りっぱなしだと言うのもあり……

もうねんざの域は超えている。おそらく、ひびが入っているように見える

だが銀時は波弥斗の足が今どんな状態なのかは知らないだけど違和感のある波弥斗に銀時は話しかけた

「波弥斗…お前……足…「アニキ」

銀時の言葉は波弥斗により途中ふさがれたそしてそのまま波弥斗は続けて喋った

「…俺の足なんか……九兵衛やみんなに比べてたらちっぽけなモンだからさ……
だからさ……アニキ……」

『俺の足は捨ててもいいんだよ』

波弥斗はそう言いながら銀時を見ながら笑った

その時の波弥斗は汗はだらだら、顔色はよくない、息は荒く本当に状態が悪いんだと思われる

そんな風に考えながら二人は森を抜け、出口の扉の前に出た

「「……！！」」

二人の目に移ったのはゼェゼェ言いながら桂と桃と戦っている敏木斎だった

「じっちゃん！」

波弥斗はそう言いながら敏木斎に駆け寄ろうとした

ヒュオ……

突然後ろから風の切る音がした思ったら波弥斗の頬を石が掠ったのだ

波弥斗の頬からは血が一筋垂れて、後ろを振り向くとそこには呼吸を戻している源が居た

そして、源は桂達の方へ向くと無邪気に話しかけた

「すいませ～ん桂さん、桃さん～ここまで来られちゃいました？」

源が笑顔でそう言うと桂は敏木斎を見ながら答えた

「いや、十分だ源殿。竜彦殿はすでに行った」

「ええ…後は……」

そう言いながら桃は刀の先端を敏木斎に向けながら口を開いた

「関白様が帰ってくるまでにこの方達全員を倒しておく事ですわ」

その言葉に何か来たのか波弥斗は一歩前に出て桃に見えるように立った

「おいおい姉ちゃん、この俺をふってどんないい男の所に行ったのかと思いきや……
こ～んなジジィとランデブー中だったのかよ」

桃は波弥斗の姿を見ると目を大きくして、心底驚いているような顔をした

「なっ何であなた生きてるの!?あんな高さから落としたのよ!?生きてるわけ……」

「残念～でもこのっとおり何一つ怪我もしってませ～ん」

波弥斗がそう言うと桃はぐっと黙り込み何かを覚悟したかのような顔をした

「……そう……なら、今度こそ関白様のために死んで!!」

桃はそう言いながらまた高く波弥斗の頭上に跳び波弥斗に向かって思い切り刀を振り下ろした

銀時はフォローしようと思ったが源が邪魔をしてきてそれもできなくなった

波弥斗は今そんな高い所から振り下ろされても支えるだけの力が足には残っていなかった

「……ちっ……」

舌打ちをしながら桃は振り下ろしてくるのを待った、そして――――――

ガキィン！！！

桃の刀を受け止めたのは、波弥斗ではなく…紫色の番傘だった

そして、それを持っているのは自分も良く知っているチャイナ娘……

「うっす波弥斗！そのふぬけたマヌケそうな顔は何アルカ？」

「……！！…うるせーぞまな板神楽」

桃は一瞬悔しそうな顔をするとフワリとまた舞って桂の横へ並んだ

銀時はその様子を見て、安心すると源に隙を付かれ

源からの刀が銀時を襲いかかってきた

バチィン！！！

今度、源の木刀を弾いたのは先程まで自分(ぎんとき)が抱えていた一人の少年

その少年は自分の足で立つと眼鏡をくいっと上げて源を見ながら口を開いた

「…銀さん、後は任せてください」

「……ったく……起きるのおせーんだよ」

そして、神楽より十m程離れた場所にはわき腹らへんから多く出血をしている広貴。

神楽と新八は銀時と波弥斗の前に来ると二人を見ずに声をそろえて言った

「「ここは任せて早く竜彦達(あいつら)ぶっ飛ばしてこいよ」」

二人がまったく揺らぎのない声で言うので銀時と波弥斗は顔を見合わせた

「そこの二人の言う通りじゃ、早く行け」

「……じっちゃん……」

「……ジジィ……」

波弥斗は戸惑いつつ広貴の方へ駆け寄った

「広貴……大丈夫か？血の量すげーぞ」

すると広貴はとぎれとぎれに、だけどしっかりと声を出した

「……だい…じょぶ…か…ら…母ちゃん……と…若さん……助けて…こい……」

「！」

その時波弥斗は思い出した。

今、柳生家には……九兵衛だけでなく……

『美衿』も居ると言うことを……

波弥斗はすっと立ち上がりクルッと銀時の方を向いて言った

「行こう、アニキ。柳生家に……」

＞ｉ２５９３５―２４５８＜

波弥斗は顔色の悪い顔で、しかし揺らぎのない言葉で言った

銀時はそれを聞き、いつもの死んだ魚の目でない目で言った

「…ああ、いっちょ生意気な浅生家（あいつら）を小突きに行くとしよーぜ」

28#守るために（後書き）

もうそろそろ可憐楔篇もクライマックスです！

でもこの長編もノリで書いたヤツが多くて…話ちゃんと絡みあってるか不安です…

それでは次回も宜しくお願いします！！

29#兄弟、そして二人（前書き）

灘
「いやーアハハハハ更新速度おっせぇなぁーって話ですけど…まぁそんなことよりも……今日はみなさんにご報告があります…」

波弥斗
「実は…作者都合で今回よりお絵かきコ～ナ～が……」

銀時
「無くなんのか？」

灘
「いえ……あまり載せれなくなるかもしれないんです…」

広貴
「はぁ！？マジか！？」

灘
「いやめんどくさいとか違いますよ？いやほんっとすいません…」

神楽
「大丈夫アル！お前の下手くそな小説にあまり役立ってない絵なんか無くてもあんまり変わらないアル！」

灘・波弥斗・広貴
（それはそれでちょっと悲しいんですけど……）

新八
「あ、えっと…そっそれじゃ２９話の始まりです！！」

29#兄弟、そして二人

「栄一郎様、ご気分はどうですか？」

車の運転をしている竜彦は後部座席に乗っている栄一郎に声をかけた

「最高じゃ、奴等…見事罠にはまりおって……」

そういいながら栄一郎は不気味に扇子を仰ぎながら笑った

――――――――――――これで…これでやっとワシは……鎖蕊(さしべ)を……

「桂様ァ！！何をやっているのですか！２人行っちゃったじゃないですか！！」

先程、扉から出て竜彦を追っていった銀時と波弥斗の方を見て桃は叫んだ

しかし桂はまるでこの事態が起こるとわかっていたかのような顔をして喋った

「桃殿、俺だって銀時をずっと足止めできるなんて思っていなかったんだ」

その言葉を聞くと桃は桂を見る目つきを鋭くして、桂の胸倉を掴んだ

「……っ！！やっぱりあなたは…信用できませんわ……元々、どうして私達に加担しているのかも分かりませんし…！」

桃は拳を強く握って歯をギリッと食いしばった

「姉さん！」

そう言いながら桃の片腕をしっかりと抱きしめたのは『源』。

その瞬間、柳生家側は全員はい？とそんな顔をした

「落ち着いて姉さん！！今桂さんとケンカしたって何にも良いことないよ！！」

「放しなさい！！この人は…！！この人は…！！」

そこまで言うと桃はハッとして新八達の方を見た

そして、桂を静かに放すと桃は一旦ため息をついた

「……源……。あなたが余計な事を言ったから…
あちらさんが気が付いているかもしれないでしょ」

「暴走しかけてた姉さんに言われたくないね」

その会話を聞くと新八達は全員目を見開いきながら桃に話かけた

「まっまっまさか…！！……きょ…『兄弟』！？！？」

うろたえながら新八が聞くと桃と源はコクッと頷いた

その瞬間、浅生家の室内ジャングルの中に驚きの声が響き渡った

本当か？と敏木斎が問うと桃は本当よと目を瞑って答えた

「私が一番上で…次が郷そして源……
私達３兄弟は親に棄てられていた所を浅生家に拾われたのですわ」

「いやいやいや…あなたと源君はまだ分かりますけど……
あなたと郷って人との血縁の場所が見当たりませんよ」

新八がそう言うと柳生家側は全員そろって顔をうんうんと頷いた

すると桃は若干怒ったように新八達に言葉を返した

「失礼ですわね。私達は正真正銘血が繋がった兄弟です。家族なのですわよ」

「そんな事ってあるんですね……」

「新八ィありえない話じゃないアル。私のパピーだってあんななのに私はこんな可愛い娘で生まれてきたからナ」

「神楽ちゃんちょっと黙って」

そんな会話をしているとその話を止めさせるように、源が口を開いた

「さぁ姉さん。お話はそれくらいにしようよ
関白様が帰ってくるまでに……でしょ？」

源がそう言うと桃はそうね、と頷き新八達の方を見つめる

見つめる、といってもそんな可愛らしいものではない。

『殺意』。本物の殺意

（……銀さん、波弥斗さん…頼みますよ。それまで…こっちは……）

（……絶対に……負けたりしないアル！）

こうして、新八達の銀時達抜きの戦いは始まった

「……」

そんな風に新八達が戦い始めてからだいぶ時間がたったころ
柳生家にいる美衿は九兵衛の看病をしていた

九兵衛は銀時達が出てからずっと眠っており今は随分と楽そうな顔をして休んでいる

そんな九兵衛を不安そうな顔で美衿は見つめいてた

先程自分が感じたあの感じは何だったのだろうか

もしかしたら、波弥斗達に何かあったのだろうか

そんな考えで頭の中がいっぱいだった

とそんな時柳生家の玄関あたりで何やら騒がしい声が聞こえたのだった

美衿は何だろうと玄関に向かおうと部屋の襖を開けたが九兵衛の部屋の前で
警備をしている者に止められしぶしぶと部屋の中へと戻った

それから美衿が部屋の中にいたが騒がしい声はだんだんと大きくなってきていた

美衿はもう一度部屋の襖を少し開けてみるとボロボロになってこちらに向かってきている先程の護衛の者がいた

美衿は急いで部屋を出て護衛の者に駆け寄った

「どうしたんですか!?何があったんですか!?」

美衿がそういって声をかけると護衛の者は慌てて人差し指をたて美衿に知らせた

「シーッ!!静かに美衿様!今はとにかく急いで若様を連れてお逃げ下さい!!」

しかし美衿は怪我をしている護衛の者をほっといて行くことなどできず
でも……と続けて口を開いた

しかし、護衛の者は何かを感じると急いで!と美衿に声を上げた
先程の声がする方へと向かった

美衿はその背中を追おうとしたが、部屋の中からの声がそれを防いだ

「美衿さん、今は護衛の者の言ったとおりに動くのが先決です」

美衿はびっくりして振り返るとそこには
いつも九兵衛が着ている服に着替えている九兵衛がいた

「きっ九兵衛ちゃん…だっ大丈夫なの?起き上がって……」

「平気です、看病していただいたおかげでだいぶ動けるようにはな

りましたから」

九兵衛はそう言いながらいつものあの上着を羽織った
しかし、浅生家にやられた時に着ていた服なのでボロボロだった
そんな事も気にせず着ている九兵衛を見て美衿は口を開いた

「九兵衛ちゃん……その服でいいの？」

「は？」

九兵衛が思わず聞き返すと美衿は少し悲しそうな目をしながら言った

「九兵衛ちゃんは女の子なのに…そんな男の子っぽい服……
と言う前にそれもうボロボロでしょ？だから……」

美衿の問いに九兵衛は戸惑いながらも美衿と目を合わせずに答えた

「……僕は…柳生家次期当主だ……」

静かにそう言う九兵衛に、美衿はまっすぐ九兵衛を見て答えた

「次期当主だとか言う前に……九兵衛ちゃんは『女の子』よ」

その瞬間九兵衛は目を大きく見開いて美衿の方を見た

美衿は九兵衛と目が合うとニッコリと優しく微笑んだ

こんな風にどんな人にでも優しく、温かく接することのできる美衿だから……

波弥斗も、『信じる』ことができているのかもしれない……

しかし、そんな温かい空気が流れたのも束の間、後ろから『それ』はやってくる

「グワァ！！」
「うわぁ！！！」

すぐそこの廊下の角の方から叫び声が聞こえ、
九兵衛は急いで美衿の手を引っ張りかけていった

そして、その廊下の角から出てきたのは、浅生家の関白こと竜彦。
それと

浅生家の現・当主である栄一郎だった。

栄一郎は柳生家の屋敷内を見ながら呟いた

「…九兵衛殿がおらんのう……
それにしてもこの屋敷はいつ来てもなんと味気のない……」

「そうですね……おや？」

竜彦はそう言いながらふと横にある部屋の中をまじまじと見た

部屋の中に入ると竜彦は部屋のど真ん中にあった布団の中を触った

そして竜彦は意味ありげに笑うと栄一郎を連れてまた歩き出した

急に早足になった竜彦に栄一郎は慌てて問う

「お、おい竜彦。何じゃ急に…あの部屋の中に何かあったのかえ？」

すると竜彦は足を止めることなく前を見ながら栄一郎の問いに答えた

「……あの部屋の布団はまだ温かかったんです、おそらく先程まで九兵衛殿が寝ていたのでしょう

しかし、騒ぎに気付いて急いで声のない方へ逃げていった、と言う所でしょう」

それを聞くと栄一郎は理解したように手をポンと叩き竜彦の足取りについていくように自身も早足にした

そんな頃九兵衛と美衿は屋敷を出て森の中へときていた

そして、ずっと走って疲れたのか九兵衛と美衿は止まって呼吸を戻していた

「はぁはぁ…大丈夫ですか？美衿さん……」

九兵衛がそう聞くと美衿は辛そうにだが笑って答えた

「だっ大丈夫だよ……九兵衛ちゃんこそ…大丈夫？」

美衿が問うと九兵衛ははいと言いながら頷いた。

呼吸が少し戻ってくると九兵衛達は呼吸が完璧に戻るようにゆっくりと歩き始めた

「……そういえば九兵衛ちゃん。広貴や波弥くんはお仕事どんな感じなのかしら？」

突然の質問に九兵衛はびっくりしながらも答えた

「あ、えと…広貴の方は仕事にも真面目にとりくんでくれて…早起きで…
こちらとしてもとても感謝しています、でも……」

そこまで言うと九兵衛は一旦喋るのを止めて憎みたらしそうに今度は喋った

「波弥斗の方は仕事は不真面目で、起きるのは遅いし…すぐに僕に文句を言うし…」

九兵衛はそう言いながら目の前にあった邪魔な木の枝を掴んだ

九兵衛がそう言うと美衿はくすくすと笑いながら九兵衛の話を聞いた

「本当に波弥くんと仲がいいのね♪

これからも波弥くんの『彼女』として波弥くんの事宜しくね？」

バキッ！！

その瞬間、九兵衛は掴んだ枝を勢い良く折った

美衿はあれ？と言いながら九兵衛の顔を覗き、九兵衛はワナワナと震えだした

そんな九兵衛に何も分かっていない美衿はどうしたのと問う

「誰が！！いつ！！あんな奴の彼女になんかなりましたか！？？そんな事、例え地球が逆方向に回りだしてもない！！！」

九兵衛は赤い顔をして怒鳴ったが美衿はくすくすと笑ったままだった

九兵衛が続けて文句を言おうとした次の瞬間九兵衛の後ろから突然寒気がした

「お取り込み中失礼します、九兵衛殿。」

九兵衛が急いで振り向くとそこには（こっちからしたらただ単に怖い）笑顔の竜彦がいた

そして、もう一人。自分も良く知っている…浅生家現当主・浅生栄一郎。

「おっお前は…浅生栄一郎！」

九兵衛は即座に竜彦達を見たまま美衿の横にジャンプして行き
美衿の手を持つと急いで走り出した

「……うっ！！……」

しかし、走っている途中九兵衛は転んでしまった

美衿が急いで駆け寄ると九兵衛は苦しそうに体を押さえていた

やはり、昨日の今日。体が痛むのだろう

だが後ろからやってくる竜彦達の気配を感じると九兵衛は苦しそうに
急いで立ち上がりまた走り出した

だが走っている最中に急に美衿は立ち止まる

「九兵衛ちゃん！あそこ！！あそこの中に行きましょう！！」

美衿が指差す方には森の奥で暗くてよく見えなかったが洞窟があった

九兵衛は急いでそちらに方向転換すると洞窟に向かって走り出した

洞窟の中に入ってしばらく一本道を走ると広い所へと出た

そこの中央には洞窟内の暗さの中でとても透き通った水をした綺麗

な湖があった

九兵衛と美衿は一瞬その美しさに呼吸を戻すのを忘れてしまった

九兵衛と美衿は呼吸を戻しながら後ろを見ると誰も来ていなかったので

九兵衛は安心し、ため息をついた

「おや？何に安心したのですか？」

「「！！」」

振り返らずとも分かる、すぐ後ろ自分の真後ろに…竜彦（あいつ）はいると言うことが…

九兵衛は腰に差してある刀を掴み思いっきり後ろにいる竜彦へと刀を叩き付けた

しかし、弱っている九兵衛の力など竜彦に聞くわけもなく涼しそうな竜彦の顔とは対象に九兵衛の顔はとても顔色が悪かった

「竜彦よぉ～さっさっと九兵衛殿を捕らえるのじゃ～」

竜彦の数m後ろから悠長に言う栄一郎一瞬気を取られた九兵衛は竜彦に弾かれた

そして九兵衛は美衿の手を引っ張り湖のある下へ降りようとした

「「！！」」

しかしその際に九兵衛と美衿の足場が崩れてしまった

九兵衛は必死で何かに捕まろうとしたがそれも無駄だった。

「うわあぁぁぁぁぁぁ！！」

「キャアアアアア！！！」

ガシッ！！！

「「「「！」」」」

「おぃおぃ……必死にやってきてやっとこさ追いついたかと思ったら……」

「いきなり……めんどくせーなコノヤロー」

「……！！波弥斗！？」

「金時さん！！！」

落ちかけていた九兵衛の左手首を掴んで助けたのは波弥斗
そして、落ちかけていた美衿の右手首を掴んで助けたのが銀時だった

二人はそのまま九兵衛と美衿を引っ張り上げた

突然の出来事に戸惑っている栄一郎を竜彦は落ち着いた様子で収めた

しかし栄一郎を収めている竜彦の銀時達を見る目は、鋭いものだった

その視線を感じているだろうが、波弥斗は九兵衛の姿を見て話しかけた

「…ったく。ケガ人のくせになんでそう無茶すんのかなオメーは」

何も言えずに俯いている九兵衛を見て、波弥斗は頭をかきながら立ち上がった

「でもま……無事でよかった……」

ちなみに最後らへんの言葉はほんともぉ小さい声ですから

まそんな小さな声が九兵衛に聞こえているはずもなく波弥斗はまるで九兵衛の盾になるように九兵衛より数歩前に出た

そして、竜彦と栄一郎をじっと鋭い目つきで見ながら銀時の方を見ずに口を開いた

「アニキ……アニキはあの竜彦ってヤローを頼んでもいいか？」

銀時はあれだけ竜彦と戦りたそうにしていた波弥斗がなぜにそれを退いたのか疑問に思ったが

聞き返す事はせずにその後の波弥斗の言葉を静かに聞いた

「……俺……ちょっとあのおっさんに聞きたい事あっからよ……」

29#兄弟、そして二人（後書き）

今回はたぶん今まで一番長かったんじゃないかなと思います

まぁこれからお絵かきコ～ナ～がなくなるのは自分としても寂しいですが…出切る限り自分も描きたいです。

こんな下手くそな自分の絵でも楽しみにしてくださってくれていた方々！

本当に申し訳ありません！！

３０＃震える手（前書き）

灘
「いやー長いなーこの長編」

銀時
「全くだテメー」

波弥斗
「マジこっちはシリアス相当疲れてきてんだからな」

広貴
「ちなみに俺の怪我は長編終わったらギャグ的思考で直るよな？」

灘
「さ、さぁ……？？」

神楽
「広貴、それは作者の気分アル」

新八
「それはともかくもう少し更新速度はなんとかならないんですか？」

灘
「あ、その件に関してはもうすぐ夏休みだからだいじょうぶかと…」

美衿
「それでは、３０話の始まりです？」

３０＃震える手

（ぐぬぬぬ……何故じゃ…何故…鎖蕊がおる！！）

突然目の前に現れた波弥斗を見て、苛立ちながら栄一郎は自身の扇子を勢い良く閉じた

やっと、やっと鎖蕊に勝ったと思っていたのに。

柳生家を取り込みもっと力を大きくすれば…あの鎖蕊にも……

なのに…なのに……なぜ『また』ワシの邪魔をする！！

歯を力強く食い縛っている栄一郎を、竜彦は黙って見ていた

「波弥斗、あいつに話したいこととは…何なんだ？」

先程の言葉に疑問を持った九兵衛が波弥斗に尋ねる
だが波弥斗は関係ないとだけ答えると美衿の方へ向かった

そんな波弥斗を九兵衛は不安そうな顔をして見ていた

「気になるか？」

銀時にそう聞かれて思わず銀時の方を見ると銀時は続けて喋った

「まぁそりゃ気になるわな。
普段ダラダラしてる波弥斗が珍しくあんな顔して言ってたら……」

その言葉。銀さんには言われたくないが……

九兵衛は波弥斗の方を見ると銀時の言葉に返した

「別に…波弥斗は最初から…何かを抱えている様だったから……
あんな顔をしようが気になったりしない……」

九兵衛はその後にでも…と付け加えて続けた

「その心に、何を抱えているのかが…知りたいんだ。
だがきっと僕では理解できないような…そんな苦しみを背負ってい

るようで……」

九兵衛がそういうと銀時も何かを考えたように黙り込み、口を開いた

そうだな。と……

「美衿さん…大丈夫か?怪我とかしてないか?」

心底心配そうな目をして聞く波弥斗は優しく微笑み答える

「大丈夫だよ。九兵衛ちゃんが助けてくれたから」

波弥斗はその時、自分が傍にいれば九兵衛も美衿も守れたのにと強く後悔した

怪我をしている九兵衛と大事な美衿を危ない目に合わせた自分を強く恨んだ

そして、波弥斗はしばらく黙り込みある決意をすると美衿と目を合わせて尋ねる

「美衿さん……俺あのおっさんに用があるんだ」

美衿はその言葉を聞き、?と言う顔をした

「だから……いってくる。済ませてくる……」

波弥斗は小さな声でそう言うと美衿に背を向け銀時の所へ歩いていった
その瞬間、美衿はハッとした。

ずっと心を閉じていた波弥斗が今、目の前にある真実に近づこうとしている

それはこのかぶき町が、万事屋が、九兵衛が、目覚めさしてくれた波弥斗の心。

だけど、それをすれば波弥斗はどこかへ行ってしまうかもしれない……

美衿は理解すると波弥斗の背中に手を伸ばそうとする

だけどその背中は大きく、暗く、そして……遠かった……。

「そんじゃあアニキ！九兵衛と美衿さん、頼むぜ！！」

「あ、波弥斗！！」

波弥斗はそう言うと九兵衛の声も聞かず竜彦の方へと怪我をしている左足などものともしないスピードで竜彦の懐まで行った

竜彦の重い一撃を刀で受け止めると一歩後ろへと飛んだ

そして、勢いおいをつけてもう一度竜彦へと攻撃をした

（……え？……）

すると、どうしたことか波弥斗はいとも簡単に竜彦を抜けることが出来た

まるで手でも抜いたかのように。

しかし、抜けたのは良いことだったので波弥斗は一気に栄一郎の元へと行った

その光景を見て栄一郎は慌てて竜彦を呼んだ

「たっ竜彦！！なっ何を簡単に抜かれておるのじゃ！！
早くこの鎖蕊の次男坊を止めよ！！」

すると竜彦は急ぐ様子もなく栄一郎の方へ向き口だけは開いた

「すいません栄一郎様。うっかり抜かれてしまいました今止めます」

しかし、そこを許さない者

「おっとまてよ……そっちは通行禁止だぜ？」

銀時はそう言うと波弥斗達から遠ざけるように竜彦を木刀でフッ飛ばした

しかし竜彦は飛ばされた後ものともせず無表情で着地した

「……テメー…わざと波弥斗とあのヤローを二人っきりにしたろ。どういうつもりだ」

すると竜彦は一瞬何かを考えたような目をしたがすぐにいつもの作り笑顔を作った

「どうもこうもありませんよ。私はあの方の実力で抜かれたのです」

そんな答えで納得する銀時でもないが、先程の栄一郎の言葉と言い…波弥斗は一体こいつらとどういう関係なのか。気にならないわけがない

『早く鎖蕊の次男坊を止めよ!!』

――――――――――――――――波弥斗ォ…お前、鎖蕊ってなんだよ……

銀時と竜彦の、激しい刀のぶつけ合いが始まった

……栄一郎様……その者はお任せいたします……。
鎖蕊を完全に断ち切らないと…あなたは天下をとれません……

一方竜彦を抜けた波弥斗は、栄一郎を前に仁王立ちして栄一郎を睨んでいた

そんな波弥斗に栄一郎は慌てて手を前に出した

「ま、待て！落ち着くのじゃ鎖蕊の次男坊！ワシが何をしたのじゃ

！！」

栄一郎がそう言うと波弥斗は刀を地面に思い切り刺した

「俺を……俺を……その名で呼ぶんじゃねぇ！！！」

そう言うと波弥斗は大きく刀を上に振りかざして栄一郎へと振り下ろそうとした

「……波弥斗！？」

その瞬間九兵衛は急いで波弥斗を呼んだ
そして、そのまま波弥斗の元へ行こうとした

「ちょ…駄目よ九兵衛ちゃん行ったら！！」

が、九兵衛は美衿に手首を捕まれその場で立ち止まった。

（……波弥くん……駄目よ…駄目……！！）

「ぬわあぁぁぁ!?? 止めろ!! 止めるのじゃあぁぁぁ!!!」

栄一郎は必死に叫んで両手をぶんぶんと振っている

それを見ていた銀時は竜彦の一歩も動かない様子を見て
舌打ちをうちをすると波弥斗の元へ行こうとした

しかし、竜彦はすぐに銀時の目の前に現れて銀時を防いだ

「…!テメー!!……何で邪魔すんだよ
テメーんとこの大将やられるかもしれねぇんだぞ」

「……」

竜彦は何も言わずに銀時を止めていた

――――――こいつは……こいつは俺の名前を知っている……!!

いや違う、俺はもうその名は捨てた。

あんな親父からもらった名など！！捨てた！！だけど――――――――

『お前がそこへ居たという事実は、変わらない。変えられない…そうだろう』

「……うるせぇ！！黙れ！」

『お前がどうあがこうと、お前の過去は変わらない……』

誰のせいだ！誰のせいで、俺は……！！

『お前は逃げているだけだ、目の前で見た俺を。事実を――――――――』

「黙れェェェェェェェェェェェェ！！！」

波弥斗はそう叫びながら本気で栄一郎に刀を振りかざした

『一緒においで。人を信じるってこと私が教えてあげるから――――――――――』

「！」

『ふーん……じゃあ俺がお前の信じれる相手だ』

ビタッ！！！

波弥斗の刀は栄一郎の顔の数ミリ手前で止まった。

そして、波弥斗の腕は震えている一方だった

栄一郎は顔にあるすごい汗をふくことも出来ず、その場に崩れ落ちた

「波弥斗！！」

九兵衛は美衿の手を振り払い、波弥斗の元へと駆け寄った

「おい波弥斗。大丈夫か？？すごい汗だぞ……」

「……九兵衛……」

栄一郎はしばらく高鳴っている呼吸を戻していたが少し経つと
波弥斗と九兵衛の方をジロッと睨んだ

そして、腰にさしてあるただ単に飾りのためだけに差していたような
な刀を抜くと
波弥斗の方へと想いっきり突っ込んできた。

すると栄一郎の刀はちょうど波弥斗の怪我している左足のふとももを斬りつけた

「…っ！！……」

「波弥斗！？大丈……ぐわぁ！！！」

栄一郎は九兵衛の首に刀を押さえつけながら立ち上がった

波弥斗は立ち上がろうとするが、左足が支えきれず倒れてしまった

「は、ははは一ー！！体が思うように動かんじゃろう！！
それには麻痺する薬を万遍なく塗ってあるからのう！」

それだけ言うと栄一郎は九兵衛を連れたまま湖の方へと下りていった

「ま、待ちやがれ…この……」

波弥斗は口では文句は言えるものの左足の痛みなどから追いかけることはおろか

立ち上がることも出来なかった

（ち…きしょ……九兵衛！！）

「波弥くん！九兵衛ちゃ――――――――――」

波弥斗たちの様子を見ていた美衿は呼びながら駆け寄ろうとする

「行くんじゃねぇ！！！」

しかし、銀時がそれを呼び止めた。

銀時は一旦竜彦と距離をとると呼吸をもどしながら美衿の横へと並んだ

「…あんたは今すぐ外に出て、手当てできる奴連れてくるんだ」

「え……」

美衿が戸惑ったかのような声を出すと、銀時は少し声を荒くして続けた

「波弥斗も怪我をしたし、九兵衛も傷がきっと開いたはずだ
だから…あんたが連れ来てくれ」

「……」

銀時は美衿（じぶん）を逃がそうとしている

そんなこと、美衿も気付いている。

だけど…自分があの時感じた嫌な感じはもしかしたら…銀時にあるかと思うと……

美衿は素直に動くことが出来なかった

しかし、美衿はしばらく俯いて考えていると急に自分の首にかけている何か小さく刺繍されたような赤い布を取り出した。

そして銀時に駆け寄るとそれを両手に大事にもったまま手を広げ見せた

「金時さん……これは…この包みの中には夫の髪が入っているんです……」

「！」

そう言うと美衿は俯き悲しそうな顔と声で言う。

「夫の遺体から私が切り、それを私がこの布の中に入れて縫ったんです……」

そこまで言うと美衿は両手を銀時の方へと差し出した

「……もっていてください……」

しかし、以前旦那の話を聞いていた銀時は形見などとそんな大事なものを受け取る事はできないと思った。

なので断ろうとしたが、美衿の震える手を見るとそれが言えなくなった

銀時が黙り込んでいると、それを察したのか、美衿は震える声で口を開いた

「……私には……これぐらいしか……できません…から……」

銀時は泣きそうな美衿の声を聞くと、美衿の手のひらから包みを優しく取った

それを受け取ると銀時は美衿の方を向かず口を開いた

「……あんがとな…ぜってぇ返すからよ……」

その言葉を聞くと、美衿はゆっくりを洞窟の外へと走っていった

そして美衿が見えなくなると、竜彦は銀時に話しかけた

「良いのですか？あんな約束をして返せなくても知りませんよ」

竜彦は馬鹿にしているような顔をして言った

すると銀時は美衿からもらった包みを大事そうに自分の着物の袖に入れると

一回大きく息をはくと木刀を握りなおして口を開いた

「…俺を誰だと思ってんだ？こんなデケー依頼金もらとってできなかったら万事屋の恥だぜ……」

「……依頼金……？？万事屋……？？」

竜彦は心底何を言っているのかわからないような顔をしていった

そこまで言うと銀時は木刀、洞爺湖を竜彦の方へと向けた

「今までの分、きっちり返させてもらうからな『坊主』」

３０＃震える手（後書き）

今回は少し波弥斗の過去に若干触れたかも……たぶん次回も……

あー長い！すげく長い！！

でも、やりがいがあるとはまさにこのことなんだなぁとはふと思ったりしてます

本当に長くてうざいかもしれませんが、どうか最後までお付き合いお願いします！！

31#『勝つ』・『負ける』（前書き）

灘
「やばい…やべーよマヂでコレ。更新速度が……」

波弥斗
「お前はもう見放されても文句言えねーからな」

広貴
「それを言っている間にはもう遅いのかもしんねーけどな」

灘
「いやほら、色々あったんだよ?ブログには書いたけど…」

波弥斗
「?ああ…もしかして部活のことか?」

灘
「ああ……悲しすぎた…悲しすぎた引退だった……」

広貴
「まぁまぁ、ソフトボールだっけ?おかげで小説が書けるようになったんだし…
いいんじゃねぇの?」

灘
「（ポロポロポロ……）」

広貴
「え゛!?ちょおまっ…!?わっ悪かった!!俺が悪かった!!ごめん!!」

神楽
「そんな男勝りでも一応女という部類に入るんだから泣かすなんてサイテーアル広貴」

広貴
「かっ神楽さん!??そんな!!」

波弥斗
「まぁとにかく…31話の始まりだ、宜しくな」

31#『勝つ』・『負ける』

一方、浅生家の方にて戦っている者達は……

「まぁ～ったく～一度僕に負けたあなたが…僕に勝てるわけがないでしょー」

源は新八と戦っている最中にゆったりとした口調で言った

「あの時とは違う！僕は君を倒す！！」

新八は源に怒鳴るように放った
しかし源は口元をいやみのように緩めるとまた口を開いた

「……手加減は…しませんよ……」

源がそういうと新八は手に持っている刀を強く握って源に飛び込んでいった

「この程度なのかしら？夜兎の力は」

神楽と戦っている桃は神楽が自分に簡単に所々斬られている所などを見て、口を開いた

しかし、神楽はその言葉に対しいつもの余裕そうな声を…出さなかった

「……あの源って奴から聞いたアルカ？」

神楽がそう聞くと桃はいいえと顔を振り、続けた

「あなたとその肌の白さと傘。それを見てそう思っただけですわ……というか、あなたそんなことを気にしていましたの？夜兎のくせに随分小さいことを気にするのですわね。だけど…」

桃がそう言っている間に神楽は桃の後ろに行き、桃の頭に番傘を構えていた

そして神楽はいつもの高い声ではなく低い声で口を開いていた

「それ以上は…喋んじゃねーヨ」

……本気の…殺意ですわね……これは……

「確かに私は夜兎アル、天人アル。でも！」

神楽はそう叫ぶと同時に桃のおなかをひじで思い切り殴った

「お前を倒せるアル！！」

あの神楽の馬鹿力がまともにあたったので桃は苦しそうにおなかを押さえた

するとその桃の行動を待っていたかのように神楽はもう一度桃に飛び掛っていった

桃はその神楽の行動に気付くとおなかを押さえたまま後ろへと飛んだ

「そんなことお見通しアル！！」

「！？」

その声を聞き桃が急いで上を向くと
自分より高い位置に浮いている神楽が笑ってこっちを見ていた

（……ま、まずいですわ……空中じゃ…身動きが……！！）

「お前等のせいで苦しんだ九ちゃんの痛みィィィィィ…！！」

神楽はそう叫びながら強く拳を握った

「の倍アル！！！」

神楽はそう言うと思いっきり桃のおなかを殴った……はずだった。

神楽の拳は見事に空振りをした。神楽は驚きながら横をキョキョロと探した

すると桃を抱えて地面に着地しようとしていた桂がいた

桃は突然のことに何が起こったのかわからなかったがしばらくして状況を理解した

『自分は桂に助けられた』と言うことが。

桂は着地すると桃に大丈夫かと声をかける、が。

ドカッ！！！

桂は桃の蹴りによって岩にぶつかった

「……余計なことをしないでください桂様
あなたに助けてもらうなど…屈辱の極まりですわ」

折角助けてもらったというのに桃は不機嫌そのものの顔をしていった

（……まったく！！私があなたを嫌っていることをしっていながら…
なぜ助けるのか理解に苦しみますわ！！）

そうこうしている内に神楽も桃達の近くに着地し、神楽も不機嫌な
顔をして放った

「ヅラァ！！お前何するアルカ！！どうせこの長編が終わったら
出番なくなるからって目立とうとしてんじゃねーヨ！」

神楽がヅラのいる岩の方をゆびさしながら叫ぶと桂はちょうど姿を
あらわした

「ヅラじゃない桂だ！
桃殿！！リーダー！！何で助けた俺が怒られなくてはならないんだ
！！！」

「助けてなどと言っていませんわ！」

「それが迷惑なんだヨ『ヅラ』ァ！！」

二人揃って声を放った瞬間、桂の岩の後ろから一人の小さな老人が出てきた

そしてその老人は持っている刀を桂に向けてそのまま振り下ろした

しかし桂はそれを感じとると横に素早く交わして次の攻撃に反応できる体勢に入った

「若いくせに中々やるもんじゃの」

その老人、敏木斎は桂の戦いを見て一言呟いた

するとそれを聞いた桂はむっとした感じの顔をすると皮肉のように放った

「柳生家歴代最強といわれる敏木斎様が聞いて呆れますわ
桂(そのかた)のどの辺がすごいと言いますの？もう一度よく見てから言った下さいまし」

桃がそう言うと神楽は呆れたように突っ込んだ

「お前…どんだけヅラのこと嫌ってるネ……」

その言葉が聞こえてか、桃は突然神楽の懐にきて素早く刀を突き出

してきた

それを神楽が番傘で受け止めると桃は神楽の腹にむけて刀の頭の部分で思いっきり殴った

神楽がそれを受けて一瞬ひるんでいると桃は涼しい顔をして放った

「さっきのお返しですわ」

桃がそう言うと神楽は憎らしそうな顔をして桃に飛び掛っていった

「……まったく…この時代の女子(おなご)みなああなのか？
もっとこう…おしとやかな女子はおらんのかのう…」

向こうで激しい戦いを繰り広げ始めた桃と神楽を見て敏木斎は呟いた

「……のう？長髪の兄(あん)ちゃん？
お主…最初からわしらと戦う気などありゃせんのじゃろう？」

敏木斎が桂の方を向きそう話しかけると桂は意外そうな顔をした

「ああ、その通り…俺は最初から銀時達と戦う気などないなぜなら……」

――――――――――この戦い、最初から勝つのは決まっているからな

桂は、そう言いながら天井を眺めていた。

「うおぉぉぉぉぉぉぉぉ！！！」

”ガキィィィン！！”

一方、源と戦っている新八は源と互角の力で戦っていた

いくら源が強いと言ってもやはりそこは銀時と戦うのと同じ原理。

力勝負となると新八が勝つに決まっている、なので何度も何度も力任せに
刀をぶつけてくる新八に源は苛立ちを感じていた

（も～腹立つな～だけどいくら力任せにぶつけてこようが……）

そして源は刀をぶつけてくることに集中している新八の片足を素早くはらった

そのせいでバランスを崩した新八はその場にこけてしまった

新八が顔を上げる頃にはもう遅く源は新八の起き上がる顔の前に刀を向けていた

「…ま確かに、最初戦った時より手ごたえはありましたよ……」

「くっ！！……」

しかし、新八は何かこの状況を抜け出せる方法はないかと固まって考えていた

”ドゴオォォン！！”

「「！？」」

そしてその瞬間、
突然自分の後ろぐらいから聞こえた大きな音に源はびっくりして後ろを見た

その瞬間を見逃さず新八は刀をしたから出して、峯で源は上に上げた

「ぐっ！！」

源は苦しそうな声を出し、すぐに新八がどこにいるかをキョロキョロと探し出した

しかし、どこにも新八がいないのでおかしいと思っていた

「源！上ェェェ！！！」

桃の声に反応した時はすでに遅し。新八は源の上から思い切り刀で地面に叩きつけた

”ドゴオォォン！！！”

「はぁ…はぁ…」

新八は地面に着地すると荒くなった息を戻していた

しかしすぐに後ろから近づいていた殺気に新八は気付いた

「このっ！！よくも源を！！！」

桃は弟・源をやられた怒りで新八を殺そうとかかった

「新八ィ伏せるネ」

その瞬間、桃の後ろにはもう一つの殺意があった

新八はその声にとっさに伏せると桃は神楽の番傘により飛ばされた

「なっ……！？」

桃は今起こった出来事を受け取ることができなかった。

しかし自分が地面にゆっくりと落ちていき、自分の体が動かないことで気付いた。

――――――――――私(わたくし)が……負け…た……？――――――――――

桃は気付くと自分のすぐ傍にきていた新八と神楽の存在に気付いた

「……弟を大事に思いすぎた……それがあなたの敗因ですよ、桃さん……」

桃の姿を見て、新八は小さな声で話しかけた

「！お前……」

すると神楽は桃が涙を流していることに気付いた

桃は手を目にあてて泣いている顔が見えないようにした

「……勝ち…たかった！！栄一郎様のために…関白様の…ためにっ！！」

そんな桃の姿を見て新八と神楽はお互い顔を見合した。

そして、桃の姿が見えないように後ろを向き、広貴のいる場所に静かに向かった

ごめんなさい、ごめんなさい。栄一郎様、竜彦様――――――――――――

桃はその場でずっとくやしそうに、悲しそうに泣き続けた

戦いの終わり、それはいつでも『勝つ』ものと『負ける』ものが現(あらわ)れる……

31#『勝つ』・『負ける』（後書き）

31話の終わりです。

この話の最後の

『戦いの終わり、それはいつでも『勝つ』ものと『負ける』ものが現る……』

と言う言葉は自分が試合に負けて泣いてたときに思ったからです。

引き分け？そんな中途半端な答え納得行くか！

勝負するなら勝つか負ける。はっきり出るまで戦えや！！

と思ったからです。ま・負けたらそれは本当に悲しいんですけどね……

なので、正直言ってあんまり勝った新八と神楽の気持ちが分かりませんでした

自分は勝てなかったので。

…それでは次回も宜しくお願いします！！次回はできるだけ間を空

けずに投稿したいと思ってます！！（汗）
（本当に長すぎる長編ですが。）

32#超えたい（前書き）

灘
「次回、可憐楔篇完結です！」

波弥斗
「いやー長かった！本当に長かった！」

広貴
「だってあれだろ。この長編始めたの…お前これ三月の終わりだろあれ」

灘
「まっまあ…とにかくめでたく完結ということで…！！」

波弥斗
「フォーエバー！！」

広貴
「いやフォーエバーじゃ困るんだけど……」

銀時
「まそんなこんなで32話…宜しく！！」

32#超えたい

（……やべ……目が…霞む……）

先程栄一郎にやられた部分からの麻痺が波弥斗の体中に広がっていた

栄一郎が下りていった方向に波弥斗は弱弱しく腕を上げて手を伸ばした

「……九…兵衛……」

そう一言言うと波弥斗の腕はぱたりと地面に落ちた

「おおおおおおおおおおおおおお！！」

その頃、銀時は竜彦と互角の力で戦っていた。

先程浅生家で戦った源とは違い、竜彦は大人なので力勝負でも大差なかった

おそらくこの戦いを制すは強さではなく…想い。

「なるほど…柳生家にこれほどの手ごまいたとは…驚きです……」

銀時と刀をまじ会わせている最中に、竜彦は独り言のように言った

その言葉に銀時はあえて返さずにいると竜彦は続けて口を開いた

「……坂田銀時さん……あなた…『白夜叉』ですね……」

”ガキィィィン！！！”

銀時の方は木刀というのに激しい金属音がすると銀時は竜彦と間を素早くとった

「てめぇ……どこでそれを…？」

竜彦のことを睨んでいるような目で見ながら銀時は竜彦に喋りかけた

だが竜彦の方はいつもの作り笑いで答えた

「なに…私の友人が攘夷戦争に参加していましてね……その時白夜叉の特徴などを教えてもらって…その特徴があなたと似ていましたので……」

「知り合い……？ヅラのことか？」

その部分の言葉にひっかかった銀時は桂のことかと尋ねた

その友人が桂だったらこの戦いに協力しているのもなんとなく頷けるからだ

しかし竜彦はいいえといいながら顔を横に小さくふった

「桂殿とは先日そば屋であった時お金がなくて困っていたようなので…
お金を貸してさしあげた時に知り合ったのです。
お礼がしたいと申してくださったので失礼ながらこのような形で……」

（あんのヅラ……攘夷浪士のくせに金に困ってんじゃねぇよ……）

銀時は心の中でそう突っ込むとハァとため息をついた

そして竜彦は瞑っていた目を少し見開きながらあなたも知っているでしょうと冷たい声で続けてこういった

「……あなたも知っているでしょう、『高杉晋助』という方を……」

その瞬間、銀時の頭の中にはその者の顔が寒気と同時に過ぎった。

「……攘夷浪士の中でも最も過激で危険と言われている…あの方のことです」

知り合いなのでしょう?と竜彦は最後に付け足して言った

「……高杉とは何処で知り合ったんだ」

銀時がそう尋ねると竜彦は不気味な笑みを作った

「それは……あの少年に聞けば分かるかもしれませんよ」

そう言いながら見ている竜彦の目線の方には……

――――――――――――波弥斗…！？

そして、銀時がはっと我に帰ると目の前には先程まで話していた竜彦がいた

銀時は急いで木刀を前にだし竜彦の攻撃を防いだ

「おめぇら波弥斗と一体どういう関係なんだよ！！」

先程から気になっていた疑問を銀時は隠すことなく怒鳴って問いた

「だから…それは…波弥斗（かれ）に聞けばわかる話ですよ！」

竜彦がそう言いながら刀を前に突き出すと銀時はそれをかわし、竜彦の横に素早く現れ

横から竜彦に向けて木刀を突き出した

しかし、竜彦はその木刀を間一髪で避け、着物の上着を失ったものの怪我はなかった

「…うへぇ…高そうな着物に穴あけちまった……」

銀時は自分の木刀に刺さっている竜彦の着物を見てそう呟いた

するとその声が聞こえたいたのか竜彦はまた作り笑いをして答えた

「ご安心ください。ほんの３０万程度の安物です」

その言葉に銀時の時が止まりそうになったのは言うまでもない…

「さっささささ三十万…？一ケタも二ケタもケタが違うんじゃねーか……」

震える声で銀時が聞き返すと竜彦はキョトンとした顔をした

「そうですか？ついでに言わしてもらいますと栄一郎様がもっていた扇子…
あれはおそらく５００万ぐらいですよ」

「だーから!!ケタが違ェーってんだろ!!!」

誰か、この金銭感覚ゼロのこいつらに物の大切さを教えてやってください

銀時が激しく突っ込むと竜彦はまぁいいですとため息をしながら呟いた

一方……

「このっ…！！放せ！放せ！」

栄一郎につかまれいる九兵衛は弱弱しい体で必死に暴れていた

そんな九兵衛に苛立ちが着たのか栄一郎はむかっとした顔をして叫んだ

「あーうるさいうるさいのじゃ！！キーキーキー猿かそちは！」

「猿ならまだましだ！薄汚い鬼のようなお前に比べればな！」

九兵衛が反論してそう言うと栄一郎は何も言わなくなった

そうこうしている内に栄一郎達は湖のところに降りてきていた

湖の美しさは何ともいえない美しさだったがこの状況でどう観賞に浸ればよいのか…

「ふん…柳生家にもまぁましな所があったもんじゃの……」

その湖を見てふと呟いた栄一郎に九兵衛は俯き話しかけた

「……なぜ…柳生家にこんなことをする……」

九兵衛のその言葉に栄一郎はそちを嫁にするためじゃと栄一郎は言った

「ちがう！それはただのたてまえだ！
お前は…それ以外に…柳生家を潰す目的のその上に目的があるのだろう！」

栄一郎の言葉を完全に否定した言葉で九兵衛が怒鳴ると栄一郎は黙りこんでしまった

栄一郎がふと九兵衛の方を見ると教えろ、答えろと言わんばかりの顔だった

「……わしには…昔からどうしても敵わん者がおった……」

「敵わん者……？」

そうじゃ、と栄一郎は九兵衛の疑問に答えた

「その者に…勝ちたいのじゃ…超えたいのじゃ……」

その栄一郎の言葉に九兵衛はふざけるなと怒りをぶつけようとした

ふざけるな、お前のたった一人のそんな勝手な望みのせいで……
どれだけの柳生家の者が傷ついたと思っている

だが、栄一郎のその顔を見たら九兵衛は何もいえなくなった

その顔は、くやしそうに、だが愛おしく、何かを思い出している顔
だったからだ

「……」

＞ｉ２８４６３―２４５８＜

――――――――――のう鈴……あの時どうしていたら…そちは……

”ヒュン！！”

「「！」」

突然風をきる音が聞こえたと思うと栄一郎の頬には一筋の血が垂れていた

どうやら石をかすめたようだ。その石を投げた方向には……

「おっさんよォ……九兵衛（そいつ）のレンタル時間はとっくに過ぎてんぜ……」

「……波弥斗！！」

顔色悪いものの、現れた波弥斗の姿に九兵衛の表情はぱあと明るくなった

「……季龍（きりゅう）……？」

波弥斗の姿に突然そのような言葉を発した栄一郎は驚いてみた

その言葉はまだ遠い場所にいる波弥斗には聞こえているはずもなく波弥斗は足を引きずりながらこっちに近づいていた

しかし、栄一郎の顔は心底波弥斗を恐れ入るような顔だった……いや正確には波弥斗ではなく、波弥斗に感じる面影に…恐れているようだった

そんなことも知らずに近づいてきた波弥斗は１０ｍくらい近くにくると九兵衛の方を見た

「大丈夫か九兵衛……まお前のことだから大丈夫か」

殺しても死なないような奴だしな。と波弥斗が付け足すと九兵衛はかちんときたのであろう

「波弥斗…お前は給料さらに減らすようにと東城に言っておこう」

「え〝、バビ!?勘弁してくれよーお嬢さん～」

「だから！そのお嬢さんというのを止めろといつも言っているだろう！！」

九兵衛がそう怒鳴ると波弥斗はそんだけ叫べる元気があるなら大丈夫そうだなと
ぼそりと言うと九兵衛から栄一郎へと目線を変えた

「さておっさん…今から俺の聞く質問に…知っているようなら答えてもらおうか……」

そして、銀時と竜彦の戦いはより一層激しいものとなっていた

一方が片方を傷つけると、一方が傷つける……そのような形になっていた

少しでも気を抜くとすぐに終止符がついてしまいそうだった

「はぁ…はぁ…」

「さすが…です…ね…白夜叉殿……」

一旦血がとくに出ている所を押さえている時に竜彦はそういった

そしてまたすぐに銀時を斬りにかかった

浅生家関白の座と言うのは伊達ではなかったということが銀時にもよく分かった

しかし銀時も負けじと竜彦の刀を受け止めたり弾いて攻撃したりとしていた

お互い息切れも強くなり、血もたくさんでていた。

「……なぜ…そこまでするのです…か……」

「ああ？」

竜彦は息切れを治している時に銀時に話しかけてきた

あなたが柳生家とどういう関係かはしれませんが……

そこまで他人に命をかける必要がどこにあるというのです

それほどの恩があると言うのですか。

「は…くっだらねー……」

竜彦の疑問の言葉に銀時は息切れを直している時にそう呟いた

必要だぁ？恩だぁ？んなもんしるか。

俺はただ守ると決めたから守るだけだ

それがたまたまこうやって命をかけるようになってるだけって話だろ

銀時はいつもの口調でそう返事をした

竜彦はその答えに驚いた表情を見せたがしばらくすると小さく笑った

（…なるほど……晋介殿が言ってたとおりの人ですね……）

「そろそろ終わりにしましょうか！」

そして、竜彦は急に刀を振りかざし銀時の着物の袖の部分を斬った

「あ……」

その拍子に銀時が自分の着物の袖に入れていた美衿から渡された包みが出てきてしまった

銀時は急いでそれを取ろうとするが竜彦の刀がその包みをちょうど斬ってしまった

「っ…！！」

「！」

そして竜彦が斬った際に包みの中から出てきた髪の毛が竜彦の目に入ってしまった

竜彦は目をこすり急いで開けると目の前にいた銀時の姿はいなかった

「どっどこに…！？」

「あーあーこんなボロボロにしてくれて……ったく……」

その声に竜彦が急いで後ろを振り向くとそこには

「まー……おかげで助かったんだけどな……」

その言葉と同時に銀時は木刀・洞爺湖で竜彦を斬った

「がっ…！！」

竜彦は銀時の攻撃をくらうとその場に崩れ倒れた

そして銀時はしばらく斬った後の格好でいたが、竜彦が倒れた音を聞くと立ち上がった

「この私が負けるとは……思いもしませんでした……さすが…白夜叉殿……です…」

竜彦のとぎれとぎれの言葉を銀時は振り向かず聞いた。

そして、そのまま振り向かずに白夜叉じゃねぇと言った

「『万事屋銀ちゃん』、何でも屋だ。覚えとけ」

32#超えたい（後書き）

今回は久しぶりにお絵かきコ～ナ～が描けて楽しかったです！

っても、よく分からない絵でしたけど……

まそんなこんな次回、可憐楔篇……完結です！！

長い間本当に申し訳ありませんでした！

ですが、どうか最後までお付き合い願います！

33#失って、そして笑って（前書き）

灘
「今回で可憐楔篇完結です！みなさま長い間本当にどうもありがとうございました！」

波弥斗
「いやもうほんと、あんがとーございます」

広貴
「で俺の怪我は治るよね？ギャグ的な関連で…」

灘
「それはたぶん次回の気分？」

広貴
「うぉい！！！」

灘
「まぁ何わともあれ…どうか可憐楔篇の最終話…」

広貴
「どうかお願いします！！」

波弥斗
「ちなみにいつもの倍らしいので、そこんとこどうか宜しくお願いしまーす」

33#失って、そして笑って

何と恐ろしい……。

一瞬とはいえ季龍の面影を感じさせるとは……

「おい！聞いてんのかおっさん！」

その言葉に栄一郎は焦りながら我に返った

「そっそれで…何なのじゃ！！わしに聞きたいこととは……」

栄一郎がごまかす為に急いでそう言うと波弥斗は目つきを変え、口を開いた

「『Ｖｉｖｒｅ　ｔｏｕｔｅ　ｍａ　ｖｉｅ』……この言葉に意味を…あんたは知ってるか……」

その頃銀時は竜彦に斬られてしまった美衿から渡された包みの残骸を拾っていた

「あーあー…大切な形見を……こりゃ死ぬ気で誤るしか……」

その言葉を言っている途中に銀時の頭の上にちょうど何かが落ちてきた

いってーなと思いつつ銀時が上を見るとそこにはパラパラとたくさん上から岩が落ちてきていた。

（……まさか…崩れてきてるとか言わねーよな……）

なーんてことを思っていると銀時の上からさらに大きな岩が落ちてきた

「おいィィィィィィィィィィィ！！！
そりゃねーだろがァァァァァァァァ！！！」

銀時の悲痛の叫びとともに上から岩はそつなく落ちてきた

「ぶ…ぶわぃとぅまぁびぃ？」

いきなりよく分からない発音した波弥斗の言葉を九兵衛はカタコトながら復唱した

しかし栄一郎は目を見開き何かを思い出しているかのような顔をした

「……そち…その言葉を誰から……鈴（すず）から聞いたのか……？」

「ああ…そうだ……」

「……そうか……」

そんなやり取りをしている栄一郎と波弥斗を九兵衛は黙ってみていた

（……鈴……？）

そして、波弥斗は知ってんなら答えろと言わんばかりの顔…目つきで見ていた

「波弥斗ォ！！！」

上から聞こえてきたその声に波弥斗達はばっと反応した

「……アニキ!?すげー怪我だけど……何だどうしたんだ!?」

「上が崩れ始めてきてんだ!すぐにこっから非難するぞ!!
あの竜彦ってヤローはもう外に出した!」

その言葉にえ?と言いながら波弥斗が天上の方を見ると確かに岩が
上から落ちてきていた

「おいおっさん!聞きたいことはこの洞窟を出た後で聞かせてもら
う!
とにかく今はこっから出るぞ!!」

波弥斗が慌ててそう言うと栄一郎は小さく返事をして九兵衛を放した
九兵衛が驚いたように振りかえった

「逃げるのならそちも自由になった方が動きやすいであろう」

その言葉を聞いた瞬間、九兵衛は栄一郎は根は悪い奴ではないのでは
はないかと感じた

自由になった九兵衛は波弥斗の元へと急いで向かった

「波弥斗!急いでここから出よ…う……」

近づいてきた九兵衛に波弥斗の体はゆっくりと倒れていった

「え?／／ちょおいどうした波弥斗投げるぞおい…?」

そして、そこで九兵衛は初めて気付いたのだ。

波弥斗がすごい熱を出しているということ。

波弥斗の左足がもう立てないくらいボロボロになっていることを。

そんな状態で、自分を助けにきてくれていたということを……。

「……波弥斗……」

九兵衛は感謝の気持ちを込めて波弥斗の体を支えた

「これは…ボーナスくらい上げないとな……」

普段の九兵衛の顔とは思えないくらいの穏やかな優しい顔をして九兵衛は呟いた

「おい九兵衛!!」

その時、ちょうど下におりてきた銀時の声に驚いた九兵衛は
波弥斗を思わず地面にたたきつけた

「何してんだ早くしろ……って波弥斗どうしたんだ?」

「あ、ああどうやら立てないようなんだ銀時が運んでやればいいだろう」

何動揺してんだお前?という銀時の言葉を聞こえてないふりをして
九兵衛は栄一郎の方へと顔を向けた

「おい!浅生家の、お前も早くこっちに――――」

九兵衛は栄一郎へと声をかけたが栄一郎はなぜか顔を横に小さくふった

「わしは良い…そち達だけで……逃げてくれ……」

銀時と九兵衛はその言葉に突然何を言い出してるんだと
聞き返すと栄一郎はもう良いと一言口にした

「わしは……もう良いのじゃ……鎖蕊に……いや季龍に勝ちたかったが……
その望みも儚く終わった……」

そう、わしの負けはもう最初から変わらんかったのじゃ。
鈴を失ったあの時点で……

「だからもう良い、ゆけ……」

栄一郎の顔はもうすでに覚悟を決めた顔だった。
九兵衛と銀時はしばらく黙っていた

「銀時」

その声に銀時が反応すると九兵衛は栄一郎の方をじっと見ながら言った

「……行こう」

おそらく僕達が何を言っても聞かない。九兵衛はそうも言いたげだった

銀時は納得してないような顔だったが栄一郎の顔を見ると自分も何も言えなくなった

二人は止む無く上へ上がろうとした。

「それと」

栄一郎の言葉はまだ続いた

おそらく、これが人に向ける最後の言葉だろう。

銀時と九兵衛はしっかりと聞く体制を作った

『鎖蕊の次男坊を…守ってやってくれ』

「「え？」」

「それって波弥斗のこと――――――――――――」

九兵衛がそこまで言いかけると急に先程よりも強く岩が崩れ始めた

そしてさっきの言葉を最後に栄一郎の姿は見えなくなった

その場所を九兵衛はしばらくじっと眺めていたが銀時に声をかけられ我に帰った

こうして波弥斗を抱えて銀時、九兵衛は洞窟を脱出した。

ばらばらばら…

上から自分の近くなどに落ちてくる岩を浅生栄一郎は黙って見ていた

（則英……竜彦…桃、郷、源……すまぬな……本当にすまぬ……だが……）

わしはもう…枯れることしかできない。

『Ｖｉｖｒｅ　ｔｏｕｔｅ　ｍａ　ｖｉｅ』……わしには叶わん夢であった……

その時ちょうど栄一郎の真上に大きな岩が落ちてきていた

鈴……もう一度……そちの笑った顔が……見たかった……

そしてそれからまもなく、浅生家現・当主栄一郎は息をひきとったらしい

「……なんつーか……お前ん家は…手入れが不十分何だな……」

壊れていった洞窟を見ながら銀時は座って呟いた

その言葉に九兵衛はこれからはするようにするとそれだけ言った

その時ちょうど誰かが起きる声がしたので二人はそちらを振り向くとなんと竜彦が起きあがっていた

「お前……起き上がって……「栄一郎様はどこです」

起きたばかりと言うのに竜彦のその質問に、銀時と九兵衛は思わず黙ってしまった

「なぜ…黙るのですか……お答え下さい。九兵衛殿、『万事屋』殿」

竜彦は頭が良い。この状況とこの二人の反応を見れば分からない竜彦ではない

しかし、あえて竜彦は何も言わず黙り込んでいると銀時は竜彦から目をそらさないようにきちんと竜彦を見て口を開いた

「……死んだ……」

できれば、当たってほしくなかった事実。

竜彦はこの時初めて自分の頭の良さをうらんだ

「……そう…です…か……」

終わった、何もかも終わった……。

枯れないと思っていた浅生家は、今日この日をもって消滅をする

竜彦はそう思いながら立ち上がり森の奥へと行こうとした

「何処に行くんだ」

しかし、銀時のその言葉により竜彦は立ち止まった

「……浅生家は…栄一郎様があっての浅生家。
栄一郎様が亡くなった今、浅生家は、まるで楔文字のように枯れていくだけ……
私がここにいる必要は…もう…ありません……」

竜彦はいつもの余裕そうなむかつく声ではなかった。

主を失った竜彦はまるで抜け殻のような状態であった

それだけ言うと竜彦はまたふたたび歩き始めた

「枯れねぇよ」

竜彦の足はまるで銀時の言葉によって止まるように足を止めた

「枯れるんなら、水をやりゃいい
　寂しいなら、仲間といりゃいい
……まだ…お前等は枯れねぇ、終わらねぇだろうが」

その時竜彦の頭をよぎったのは、栄一郎の息子、『則英』。そして
桃達三兄弟。

そんな竜彦の変化を感じたのか銀時は自分も竜彦に背を向けて喋った

『お前等は……まだ生きてる』

――――――――――――――――――――――――………。

そして、竜彦はそれから何かを覚悟したかのような顔をすると少し
間をおき口を開いた

『ええ、浅生家は……私が枯れさせません』

――――――――――――――――――――それから数日後

「ーっ！！ってぇんだよ馬鹿九兵衛！もういい！！お前もうクビ！！」

「人がせっかく看病してやっているというのに何だその言い草は！」

「誰も頼んでねーよ！！」

柳生家では、波弥斗の部屋で怪我をしている波弥斗を九兵衛が看病していた

…が、これは逆に波弥斗の怪我を悪化させているだけなのでは……。

ちなみに広貴は流石に出血量が多すぎるので大江戸病院へと運ばれた

「……まったく…安静2週間だなんて……ついてねーな……」

そんな感じで波弥斗が暇を持て余している必ずくるのが……

「よーう波弥斗。部屋の外までお前等の痴話喧嘩聞こえてきたぞー」

と言いながらやってくる万事屋オーナー坂田銀時。

「だーから！痴話喧嘩じゃねーってんじゃんいつも！」

来るなら土産でも持ってきてくれよなと波弥斗がぼそりと言うと銀時はニヤリと不気味な笑い方をした。

「波弥斗ォ、今日は俺だけじゃねーもう一人客が来てんだ」

「客？」

おーとだるそうに銀時は言うと入れやと襖の方に向かって言ったすると襖はゆっくりと開いていき、そこから出た顔とは……

「！……あんた…浅生家の……？」

そう、波弥斗を尋ねてきたもう一人の客とは浅生家の三兄弟長女・桃だった。

「おい何してんだ、入れよ」

入りにくそうな桃に、銀時はだるそうにそう放った

すると桃はおずおずとゆっくりと銀時の横へといった

「あの～…今日は…どういうご用件で……「ごめんなさい」

おそるおそると聞いた波弥斗の声を、桃の謝罪の言葉が閉じた

「栄一郎様達のためとはいえ…あなたをこんな目に合わして…本当に申し訳ないと思っています……ごめんなさい…」

桃は謝罪の言葉と同時に頭を深く下げた。

そんな桃を見て、波弥斗は優しく笑うと口を開いた

「浅生家はあれからどんな感じなんだ?」

桃はえ?と戸惑いながらも今の浅生家の状態を説明始めた

「あ…浅生家は…栄一郎様の死という大きな悲しみを…全体で必死に乗り越えようとしています……。今は則英様が新しく当主になられ、関白様と共に皆を引っ張ってくださっております」

桃の悲しそうな、しかし嬉しそうなその顔に波弥斗はそっか。と納得した

そして、それだけでは納得しない桃は戸惑いながらもう一度波弥斗に問いた

「そっそれで…あなたの…怪我は……「二週間安静だってよ」

その波弥斗の言葉に桃は俯き暗い顔をした。しかし波弥斗は小さく笑うと口を開いた

「この怪我は…俺がべっぴんさんに見とれて生んじまったまぬけな怪我さ」

その言葉にバッと顔を上げた桃に波弥斗はとびきりの笑顔を見せた

「……」

桃はまた俯くと立ち上がり部屋を出ようとした

銀時は思わずもう帰るのかと聞いた、そして桃はええと答えると続けた

「……悠基波弥斗くん…私(わたくし)…あなたのような弱い男は嫌いと言いましたけど……」

そこまで言うと桃はくるっと向きを波弥斗の方に向けた

『あなたみたいな人、案外嫌いじゃありませんわ』

その時の桃の顔は波弥斗達が初めてみた、桃の笑った顔だった。

それだけ言うと桃はまた会いましょうとだけ言いかえっていった

「…アニキィ…俺次浅生家の奴等と会う時が楽しみだよ」

「……そーだな…」

桃が行った後、波弥斗と銀時はポツリとそんな会話をした

「桃殿」

柳生家の門をくぐった瞬間にその聞き覚えのあるむかつく声に桃はくるりと反応した。

「……何かご用で？桂様」

そう、桃に声をかけたのは桃が大嫌いな桂小太郎であった

桃が返事をすると桂はもたれかかっていた場所からどけて桃の目の前にきた

そして、桃の肩に手を乗せると

「桃殿、やっとツンデレの”デレ”の部分が現れたなハッハッハ――――――ゴフッ！！」

桂はセリフの途中でまたもや桃に飛ばされた。

だが桂を殴った後の桃の顔は、今までのただ嫌いという感じではなくまるで桂を『ライバル』のように思っているかのような感じであった。

「あ、母ちゃん」

その頃病院に入院している広貴の元に母・美衿がやってきていた

「広貴具合はどう？大丈夫？

新八くんに神楽ちゃんもいつもお見舞いありがとう」

その笑顔はこの長へ…戦いの疲れをとるかのような笑顔だった

「今長編って言いかけましたよね。何?戦いってそういう戦いのことですか」

「触れてやるなヨ新八ィ。そんなことにも気付かないとはだからお前は新八ネ」

そこでまたいつもの新八の反論が始まってしまったが
怖い看護士さんに注意され、やもなく静かになった

「そういやーさ母ちゃん」

椅子に座って林檎をナイフで綺麗に切っている美衿に広貴はふと何かを思い出したように話しかけた

「母ちゃん、銀さんに父ちゃんの形見の包み渡して壊されたんだろ?」

広貴のまるで地雷のような言葉に美衿の動きは止まった

そして、しばらく間があいて美衿は広貴達の方を見るといつもの優しい微笑みを見せた

「そのことなら…もういいんだよ」

「「「え？」」」

――――――――――――――――――――数日前

銀時に医者を連れてきてと言われた美衿はあの後わざわざ柳生家まで連れてきてくれた

しかし銀時のあやふやなその態度に美衿はどうしたのかと問う

『実はよ……えーと…その…』

おそるおそる銀時が出したのは無残に真ん中らへんが斬られていたあの形見だった

それを見た瞬間の美衿の間、銀時はさぞ辛かっただろう

『…どうしてこんな事に……』

さすがの美衿もこれには聞き返してしまった

そして銀時はこんな事になった経路を話し始めた

『ほんっとーに俺のせいだ！本当にすまねぇ！！」

銀時は説明が終えると深く深く誤った。しばらく銀時は誤り続けた

『銀時さん…確かにそれは大事な夫の大切な形見です……』

黙り込んでいた美衿が口にしたその言葉で、銀時はますます誤った。

『今は…亡くなってしまった人より…生きてる皆(あなた)の方が大事です』

美衿はそう言うと悲しそうにだが、確かに微笑んだ

『あんた……』

銀時は笑っている美衿の顔を見て、信じられないという顔をした。

『ですが』

美衿の終わったと思っていた続きの言葉に銀時はびくっと反応した

『今まで持っていた物が無くなったままと言うのも悲しいので……』

そして美衿はにっこりと笑ったまま自分の袖の中から裁縫用のはさみを取り出した

『おわびとして……金時さんの髪をくださいね♪』

その後、その場から銀時の叫び声が聞こえたという……

――――――――――――――――――――――――――――――――――――

「あははは！！！」

柳生家と病院からは、同時に笑い声が聞こえたらしい

「そっかそっか～それで美衿さんに許してもらったのか～よかったな、アニキ？」

波弥斗は笑いながら銀時をからかうように言った

「笑ってんじゃねーよクソガキ。右足も同じようにするぞ」

銀時は波弥斗の右足を掴みながらめんどくさそうに言った

「銀ちゃんいい気味アル！！どうせなら髪全部刈ってしまえばよかったネ！」

神楽も美衿からその話を聞き大笑いしていた

「それで、その髪はどうしたんですか？」

新八も笑いながらも疑問を美衿に聞いた

「金時さんの髪なら…夫の形見と同じようにこうしたよ」

そう言いながら美衿は自分の首にかけている赤い包みを見せた。

「……なっなんか銀さん死んだみたいですね…」

「それじゃあ金時さんが死んだらこれは形見ってことにしましょ♪」

笑顔で悪気もなしにそれを言う美衿に新八は天然って怖いなと若干恐れを覚えた

「まぁ色々あったし…浅生家もこれから大変そうだけど……なんとか立ち直ってるみたいで、無事終わってよかったよかった」

布団の中で波弥斗は体を気持ちよさそうに伸ばした

「ん？あ、ああそうだな……」

そう普通に返事をしたが、銀時と九兵衛は、考えていることはおそらく同じだった

鎖蕊（さしべ）、次男。栄一郎の不可解な言葉。竜彦の言動。

今回のことで、波弥斗には疑問が大きく上がった。

だがなんとなく二人はそのことを波弥斗に聞けなかった

誰にでも、知られたくない過去の一つや二つはある。

いつか、波弥斗自身から語られる日を二人や皆は待つことにした――

――――――――――――――――

そして――――――――――――――

「……ここが…かぶき町か……」

かぶき町には、今日もまた新らたな人がやってくる

33#失って、そして笑って（後書き）

長い間本当にありがとうございました！

可憐楔篇今この場にて完結いたしました！
長い間お付き合い本当にありがとうございました！
（アレ？なんか最終回てきなセリフだなコレ…）

ちなみに色々疑問が残ったりして終わっていますが…

一番何が疑問かっていうとそりゃーもちろん『長編名』ですよねー

それはまぁ…あのアレですよアレ…

・浅生家、柳生家潰そうとする

・昔、楔文字は滅びてしまった

・だけど楔文字と違い柳生家は滅びまいと頑張る

・結果、見事（？）柳生家勝利！

・ここでアレ？楔文字って滅びるもいけるけど表すなら枯れるの方か？

・浅生家当主、帰らぬ人に、浅生家楔文字のように滅びてしまう？

・だけど滅びない枯れなーい

・楔文字（柳生家的な浅生家的な）枯れない→枯れん→可憐……

・・・・・・みたいなー？

……なんか、ほんともうすいませんでした…。

次回も宜しくお願いします！

34#コラボとかいっておきながら自己紹介だけで終わった気がする（前書き）

灘
「いえす！今日は自分…『誕生日』何です！！いえぇー！！」

波弥斗
「へぇー…別にどうでもいいけどなー」

灘
「何言ってんだよ！生みの親の誕生日だぞ？もっとお祝いしろ！」

広貴
「親とかいっておきながら俺等より年下っていうアレだけどな」

波弥斗
「何歳になったんだっけ？」

灘
「ああそれはじゅう――――――――――――――――」

波弥斗・広貴
「……？」

灘
「いやここで年をいったら色々まずいかなーって…」

広貴
「ばれてる人にはばれてるよ」

灘
「……まぁそんな訳で！誕生日祝い？みたいな感じで
ｇａｎｍａさんのオリジナル小説、『召喚師の旅路』とコラボなる
ものをしてくださりました！！」

波弥斗
「え！？んなの聞いてねぇぞ！？？」

灘
「ｇａｎｍａさん！どうもありがとうございます！！
そんな感じで…本編へごー♪」

波弥斗
「ちょっと待てェェェェェェェェェェェ！！」

３４＃コラボとかいっておきながら自己紹介だけで終わった気がする

ここは江戸はかぶき町、回りからは無法の町とかも言われている場所だ

そんなところに、『彼等』は突然やってくる　――――――――――

――――――――――

ＰＭ　８：００

「おはようございまーす」

万事屋の従業員志村新八は、今日も朝早くから万事屋にやってきていた

だが神楽も銀時も起きていなく、新八は重くため息をしながら起こしにいく

「ほら神楽ちゃん起きてー少しは早起きする習慣をつけないと駄目だよ」

押入れの扉を開けながら新八は言うと神楽は眠たそうに目を開けた

「うるせーヨ…駄眼鏡に駄目とか言わたくないネ」

「誰が駄眼鏡だァァァ!!!」

朝からそんなことを言う神楽にきちんとツッコミをしてから銀時の方へと行く

そしていつもどおりにてきとーなことを言って銀時を起こす…はずだった……。

ピシャッ

銀時が寝ている部屋の襖を開けたと思うと新八は静かに閉めてしまった

それを見た神楽はまだ眠たそうに目をこすりながら新八にどうしたのかと問う

しかし新八は来るなと大きな声で叫んで神楽をこさせないようにしたが、そんなことをすれば神楽は逆におもしろがって銀時の寝ている所を開けようとした

「銀ちゃんに何かあったアルか？ストパーか？ストパーになってたアルか！！」

「止めろォォォ！！あっちには汚れた世界しか広がってねーぞォォォォ！！！」

そんな感じで新八が止めるのも聞かず神楽は勢いよく襖を開けた

「ん？」

そこには寝ている銀時の上に…

見たこともない格好をした美少女が気持ちよさそうに寝ていた。

柳生家

あれから二週間後、波弥斗足もすっかり良くなって…広貴も昨日無事退院した。

そんな感じで二人はダラダラとくつろいでいた

しかし、二週間が立つと波弥斗達も怪我も治ったが波弥斗には一つ嫌なことがあった

「若ァァ!!!私のいない間にそんなことが起きていたのですか!」

二週間の出張的なのから帰ってきた東城歩のことである

波弥斗は大きくため息をつくとくつろいでいるのをやめ、窓の方に向かった

「波弥斗?どこいくんだ?」

窓の方に向かっている波弥斗に気付いた広貴はそう聞いた

「決まってんだろ、東城のおっさんが来る前に逃げる」

広貴の問いに波弥斗は窓の方を向いたまま答えた

「なるほど…あの人あの話聞いたら真っ先にここ着そうだもんな」

それだけ言うと広貴も立ち上がり俺も行くよと言い波弥斗の後ろについた

波弥斗と広貴の部屋は柳生家の中で最も門から遠いところにある

なので、基本は何をしようがばれないのだが…

なぜかこういう時だけばれてしまうのが波弥斗達である

「波弥斗、昨日ギブスが取れたばかりだというのに何処に行くんだ?広貴も昨日退院したばかりだろう」

窓から出ようとした波弥斗達にその言葉を言ったのは我等がご主人様・九兵衛だった

波弥斗は九兵衛がここに来たということは東城がくるのも時間の問題だと思った

そして一筋汗をかくと波弥斗は九兵衛の方を向いてぎこちない笑顔を作った

「け…稽古だよ稽古!ほら、俺達ずっと体動かしてなかったし?」

ぎこちない波弥斗の顔や言葉に九兵衛はなんとなく鋭い目で二人を見た

「……波弥斗が自ら稽古？そんなこと今の今まで言ったこと……」

九兵衛がそういうので波弥斗はもう知らねと投げ出して窓を突き破って外に出た

広貴はその行動に驚きながらも九兵衛にお辞儀をして続いて出て行った

一人残された九兵衛は本当によく分からないと言わんばかりの顔をしていたらしい

「はーっ…あの窓の修繕費用はもちろん波弥斗が出すんだろ？」

柳生家の門の前の階段を下りている時に広貴はため息をつきながらそう言った

しかし波弥斗は文句を返してこずに自身の足の動きを急に止めた

広貴はどうした？と問い聞くと波弥斗が指差した方向を見た

波弥斗が指差す方は階段の横の森からわずかだが出ている人の手だった

「…あれ…人の手…だよな？」

「……だな…」

広貴があれを見ると波弥斗は小さな声で広貴に問いた

そんな会話をポツリとすると二人は一斉にその手の方向に走っていった。

そして二人が一生懸命その手を引っ張るとその手の主が姿を現した

オレンジ色の髪で黄色いTシャツに赤い短パンで左の腰には不思議な剣がさしてあり年はおそらく13、14歳くらいだろうと思わせる、見たこともない少年が倒れていた。

「…死んでんのかな……？」

その光景を見た広貴がポツリと言うとちょうどその少年のお腹が大きく鳴った

「「……」」

それを聞いて二人は呆れた顔をした。

「……腹減ってるだけみてーだ」

波弥斗は少し笑いながら広貴の方を見て言った

そのころ万事屋では、いつもより一人多い人数で遅めの朝食をとっていた

「……で、誰何ですかこの人は銀さん」

「……いや…知らねーけど」

「とぼけないでくださいあんたが連れ込んだんでしょ」

「いや、銀さんガキには興味ねーから」

銀時の上に乗って寝ていた少女は水色の服を着ていて何やら戦闘用っぽいベストを羽織っおり、腰には二丁の拳銃らしきものがあり黒い髪をポニーテールにしてそれがそのまま肩ぐらいまで伸びている美少女だった

見たこともない格好をしているこの少女。まぁ聞きたい事は他にも色々あるが…

とりあえず新八達の誤解を解くため銀時は少女に質問をした

「あのさ…お嬢さん…俺あんたに変なことした？」

銀時がそう直球で聞くと少女は赤い顔をして必死に手を振った

「へっ!?／／あ、今朝はすいませんでした!!／／
へっ変なこととかはありませんでしたけど…本当にすいませんでした!!」

少女はそう言うと横に座っている銀時に深く頭を下げた

するとその光景を見ていた新八は違うのかなと思ったのか、少女へと質問をした

「あの…あなたは??」

「あっ…私は『りとる』って言うの。
何でこんな所にいるかは…私にも分からないの」

そういうと少女はショボンと悲しそうに下を向いた。

三人は変な名前だなと思いながらもっと詳しいことを聞いた

どうやらこの少女が言うには森の中で仲間と寝て、朝目が覚めたらここにいた
とのことらしい

「…今頃…その仲間が…どうしているのか…心配で……」

心底仲間を心配している様子のりとるを見て、万事屋達は顔を見合した

「りとるさんがここにいるってことは、そのお仲間さんもこのかぶき町に
いるって可能性がありますよね？」

「え？う、うん…たぶん……」

「そーアルな、りとる。なんかそいつの物とかないアルか？
定春に嗅がせて探してやるネ」

「う、う～ん…あったかなぁ…」

そこまで会話をすると、りとるは探してくれるの？と小さく問う
銀時は立ち上がり自身の社長イスの方へと座った

「ま、勘違いしちまったお礼？てきな感じでな……」

銀時がめんどくさそうに頭をかきながらそう言うとりとるは素早く
銀時の両手を握った

「おぅ！？」

「…ありがとう…本当に…ありがとう……」

りとるは銀時へ本当に心からお礼を言うように強く手を握った

そんなりとるの様子を見て万事屋三人は小さく笑った
そして銀時は窓の方を見るととりあえず波弥斗(あいつら)達の所行ってみるかと考えた

「いやーちょうど美衿さんが来てくれて助かったよいやマジで。」

「ううん、でもどこから来た子なのかしら?」

柳生家の波弥斗達の部屋では、食べ物を食べている音と会話が聞こえていた

先程目の前のオレンジ髪少年を二人の部屋に運ぼうとしようとした時に
二週間ぶりに波弥斗達に会いにきた美衿とであったのだった

そして、美衿が持ってきた重箱に入っているお弁当をそのまま少年にあげたのだった

勢い良く食べ物にガッつく少年を見て、二人は若干驚きながらも見ていた

そして食べ終えたらしき少年に質問をしようと少年の方を波弥斗が改めてみた

「アリ？」

だが先程まで食べていた少年の姿が見当たらず波弥斗はクルリと３６０℃向きを変えた

「この弁当、あんたが作ったのか？？」

「え？う、うんそうだよ…」

美衿が頷きながらそう言うと少年は美衿の手を強く握った

「！！！」

その瞬間広貴が少年を強く指差し何かをうったえるように波弥斗の方を見た

「いや、落ち着けって」

波弥斗が冷めた目でそう言うと広貴は言葉にならないような、悲鳴のような、
そんな声で上げ、少年を指差す腕をブンブン振った

「ありがとな！こんなにうまいもん…リトルのおにぎり食った時以来だ！」

「喜んでもらえたのなら、私も嬉しいよ♪」

そんな感じで二人が仲よさそうに話し出したのを見て、広貴は硬直する

「お、おい広貴…でーじょうぶだって、美衿さんだぞ?あんなガキ……」

今にも暴れだしそうな広貴を見て波弥斗は落ち着くようにと言うするとタイミング良しか、悪しか、美衿は少年に質問をし始めた

「君…どこから来たのかしら?名前は?年は?」

「俺は『さもん』っていうんだ年は『１８』だ」

それを聞いた瞬間広貴は目つきを変え、自分の刀を抜いた

「わーっ!!!ちょ落ち着け広貴!早まるなァァァァ!!」

刀を抜いて、サモンの方へと斬りかかりに行こうとした広貴の体を波弥斗は必死に止めに入った

「放せェェェ!!１８だぞ!?俺等より一つ年上なんだぞ!?あのビデオ屋だった時代から憧れてるあの場所へ入れる年なんだぞ!??」

「お前今さらっと自分の願望言ったぞ!?

そうだったのか!?俺もそうだけど!!」

そんな感じで母を守らんと暴れる広貴を波弥斗が押さえている中、
美衿はさもんという少年から色々聞いていた

「……まぁそんな訳で…オレ、仲間を探したいんだ」

「いやそんな訳でって…俺等何も聞いてないからね。何普通に言ってんの?」

散々暴れる広貴を押さえてたのかボロボロになって座った波弥斗は
静かに言った

「そーいう訳なら手伝ってあげましょうね、波弥くん広貴♪」

「いやあの美衿さん?聞いてました?俺の話」

相変わらずの天然っぷりに波弥斗はこの親子は疲れるとか思いながらまたツッコんだ

「まぁそーいう訳なら仕方ないか。
手伝ってやるけどそのかわり母ちゃんには半径2mで近づくなよ」

「お前は俺が話を聞けなかった原因だよな?何?俺だけなの?ハミってんの?」

そんな感じにいつもにまして不幸な目にあっている波弥斗は一人ツッコミをしていた
まぁとにかく人探しのようなので
波弥斗は壊れている窓の方を見て、とりあえず銀時(アニキ)達の所に行くかと考えた

「どうアルか?その仲間はいたアルか?」

「ううん、見当たらないわ…」

一方万事屋はとりあえずブラブラ町を歩きながら波弥斗達の所へ行こうと言うことで
江戸の町を見ていた

りとるは今まで見たこともないような景色に驚きを隠せないようでいた

人探しというより観光のような感じで万事屋はのんびりと柳生家へと向かった

しかし、こののんびりがとてつもなくめんどくさい事になるとは知らずに……

３４#コラボとかいっておきながら自己紹介だけで終わった気がする（後書き）

そんな感じで次回に続いたりします（笑）

自分もなんやかんやでそんな年になったとさ。

ｇａｎｍａさん！コラボの件に関しては本当にありがとうございました！

とっても面白いので、どうかみなさんも拝見してみてください♪

以上、灘１〇回目のばーすでーでした

35#一晩後の料理の味（前書き）

灘
「あれですよ、あれ誕生日が8月11日だったからその一ヶ月後にしたらどうだろうって思ってだけどもうまてないから今日更新しちゃえって思ったわけで本当にすいませんっていうかそのなんという夏休みの宿題にとらわれてたっていうか呪われてたっていうかなんかもうまだ暑いなとか思ったりなんかもう本当暑いなって思ったりなんか勉強めんどくせーなとか受験生あるまじき発言してたりなんか色々あったりしてたわけでしてでもその分一生懸命考えましたみたいな感じですがなんかもう本当色々あってそして暑いなって思ったりしてていうか自分の小説なんかより回りの先生方の小説が面白すぎてなんか自分のに集中できなかったっていうかていうかほんと暑いなって思ったりして――――――――――――――――」

全員
「かったるい言い訳はいいんだよ」

灘
「……すいません……」

35#一晩後の料理の味

「そんじゃあま、行ってくるわ」

人探しへと出向くために不本意ながら九兵衛にきちんというと波弥斗達は向かった

「おい、さもん。お前人探しってもどんな奴なのかちゃんと――――――――――」

波弥斗がめんどくさそうに後ろに振り向きながらそう言うと、

「……」

先程のお弁当で美衿に懐いてしまったようでさもんは美衿の横に並んで話していた

そんな二人ははたから見たらまさに親子のようだ。が、

その二人の後ろにいるメチャクチャ暑苦しい背後霊・広貴さえいなければ……

「……おーい…そこの『顔面凶器の背後霊君』？

暑苦しいから存在しないでくれねーかなマジで。」

そんな背後霊に向かって波弥斗は冷めた口調で言い放つ

その声に気付くと広貴は波弥斗の肩をいきなり両手でしっかりと掴んだ

「波弥斗…お前大丈夫大丈夫って言ってけど…本当にそうと言いきれんのかよオイ」

「一億パーねぇよ」

あの美衿さんがこんな俺達より子供(ガキ)みてーな奴を好きになる？

２００歳過ぎたジジイがプロのサッカー選手をやってる確立の方がまだあるわ

波弥斗はそう最後に付け加えると広貴の手を静かにふり払い足をまた動き始めた

広貴はその言葉を聞き確かにそうだけど、と納得しているような素振りで
全く納得してないような素振りをしていた

そんな感じで波弥斗達は万事屋までやってきた

しかし、玄関を叩いても返事がないので仕方なく下に降りてみると
下のスナックお登勢からちょうどお登勢が出てきていた

「ん?あんた等…あん時の無職のガキ達じゃないかイ」

「あ…ハイその節はどーも」

こんなとこで何してんだイ?お登勢が続けて聞くと波弥斗達は後ろにいるさもんを
指差しながら事のあらすじを話した

「まそんな訳で…アニキ達どこいったか知りませんか?」
「どこに行ったかはしらないけどねェ…銀時(あいつら)達も見たこともないような
小娘つれてどっかにいってたし……もしかしたら……」

お登勢の話を聞く限りでは、おそらくその少女がさもんの言っている子なのだろう

しかし何処に行ったかがわからなければ意味がないし……

しばらく口に手をあてて波弥斗は考えていたがお登勢にどうるるのかと聞かれると
我に帰ったように顔を上げた

「え?あ、えっと…そうッスね…とりあえず一旦帰ってみることにします
アニキ達帰ってきたらこの番号に知らせてもらってもいいッスか?」

波弥斗はそう言いながら何かの切れ端のような小さな紙を出すとお登勢に渡した

「…別に構わないけど……あんたらそれまでそのガキを預かるつもりなのかィ？」

お登勢はそういいながら美衿と仲よさそうに話しているさもんを見ながら言った

波弥斗はお登勢と同時にさもんを見るとため息をしてはいと頷いた。

そしてお登勢と話を済ませると波弥斗は広貴達の元へいきことをあらすじを話し

一旦帰るということを説明した

こうして、波弥斗達は柳生家へと向かった……

「波弥斗達がいねぇ？」

一方柳生家へとついた銀時達は九兵衛から事情を聞き驚いていた

「ああ、見たこともないような格好をした少年をつれて行ったよ」

その事を聞いたりとるはその少年とはどんな格好だったのかと具体的な事を聞くと
銀時達に知らせた

「…なるほど…んじゃ波弥斗達が連れてるガキが…お前の連れってわけか」

「うん」

銀時はりとるからその話を聞くとしゃあねぇなと呟き立った

「銀さん?どっか行くんですか?」

先程まで神楽の相手をしていた新八は急に立ち上がった銀時を見て問う

すると銀時はめんどくさそうに頭をかきながら

いないのなら意味がないので一旦帰る

とだけ言い、柳生家の玄関を出ようとした。しかしすぐに何かを思い出しかのように
振り返った

そして、九兵衛に紙とペンを借り何かを書き込みとそれを九兵衛に渡した

「これは？」
「万事屋（おれんち）の電話番号。波弥斗ら帰ってきたら連絡くれや」

銀時はそう言うと今度は新八達も連れて柳生家を出て行った。

そして柳生家の門を出てしばらくたち、ＣＤ屋の前を通る時に新八が立ち止まった

「あ、銀さんちょっと待ってください
実はお通ちゃんの新しいＣＤ出たんです。ちょっと寄らせてください」

新八は自分達の横にあるＣＤ屋を指差しながら銀時に声をかけた

「あぁ？自分だけで行ってこいよ、俺神楽達と先帰ってっから」

しかし、銀時はめんどくさそうに返し神楽達がいるほうを向いた。

が、そこに神楽達の姿はなく新八と一緒にＣＤ屋に入ろうとしていた

「おーい神楽お前までどこに…」

「銀ちゃん、りとる色々なとこ回りたいっていってるアルついでに私の演歌のＣＤも買ってほしいネ」

「それ絶対ついでじゃないよな？そっちが本命だよな？」

「つべこべ言わずに入れヨ天パァ」

ウィーン……（扉の開く音）

神楽は最後のセリフだけ低い声で言うと
銀時の頭をわし掴みにして暴れる銀時を店の中へと無理やり入れた。

ウィーン……（扉の閉まる音）

「なぁなぁ波弥斗、あのうるさい音が聞こえてくるあっこ…アレ何だ？」

その頃ちょうどCD屋の前を通っていた波弥斗は
CD屋を指差しながらさもんに聞かれた。

「ん？あぁ…CDっつーなんつーか…音楽を売ってる？店なんだ、寄ってみるか？」

「いや、めし食えねーとこなんならいいや」

さもんはそう元気良くいうとすぐまた美衿の横へと並んだ

「なぁなぁまたうまいメシ食わせてくれよ！」

無邪気に笑いながらさもんは美衿にお願いする、その笑顔のように美衿は笑うと

「私なんかの料理でよかったらいくらでも作るってあげるよ♪」

優しく笑いながら言う美衿を見てさもんはより懐き、美衿の横で再び歩き出した

そんな二人を見て波弥斗は微笑ましいなと思いながら見ていたが、そんな二人を再びめんどくさい目でみる背後霊もいるが……

「……」

なんかもうツッこむのがめんどくさくなったので

波弥斗は広貴を冷めた目で見て何も言わずに美衿達に追いつこうと歩き出した。

ウィーン……（扉の開く音）

「ったく…お前何で同じＣＤを何枚も買うわけ？おかしいだろ」

「銀さんにはわかりませんよお通ちゃんの歌の良さは」

銀時は別に分かりたくねーよとつけたしながら店から出てきた

そして神楽とりとるが出てくるのを確認すると銀時達は万事屋に向かって帰りだした

「たっだいまー」

「ただいま帰りましたー若さん」

波弥斗と広貴がお互いそう言いながら玄関を入るとちょうどそこにいた九兵衛は驚きながら波弥斗達を見た

「え…波弥斗？途中で銀時達に会わなかったのか？」

九兵衛が驚きろきながらそう言うので波弥斗達も驚いて会ってないという

そして、そこで波弥斗達は初めて銀時達が自分達を尋ねてきたことを知った

……すれ違い??……

波弥斗と広貴は冷めた顔でゆっくり目を合わせると
今なら間に合うかと急いで玄関を出ようとした。

しかし、それにさもんはともかく美衿まで、ついてこようとするので二人は
必死になって美衿に説得しはじめた

「かっ母ちゃんは柳生家(ここ)にいてくれねーか??
ほら、さすがに俺達の走りに母ちゃんついてこれねーだろ?」

「大丈夫だよきっと、」

だいじょうぶじゃねーからいってんだよ。広貴は心の中でそう思うともう一度
美衿が納得するように説得をした

が、まったくもって理解してくれない美衿に困っていると…

「では……」

「「ん?」」

そんな感じの会話をしていると先程まで黙ってみていた九兵衛が急に口を開いた

「こういうのはどうだろう？」

＃＃十分後＃＃

「「……」」

「これは屋敷の倉においてあるものでな、春の花見の時ぐらいしか使わないんだが…
美衿さんが走れないというのならこれに乗っていれば文句はないだろう」

「わーすごーい流石ね九兵衛ちゃん♪」

「俺も乗っていいか！？」

目の前に現れた『それ』を見ながらいつもの冷静な顔で言う九兵衛に美衿とさもんは
嬉しそうに騒いでいたが残り二名はあっけにとられた冷めた顔で『それ』を見ていた

そしてしばらくそれを見ていると波弥斗は分かっていながらも静かな声で口を開いた

「…お嬢さんよぉ……乗っていればってこれ……『籠』じゃねーかぁ！！！」

※籠…一人が前を、もう一人が後ろを持って人を運ぶ江戸時代などの移動手段。
　江戸時代はお姫様など、身分の高い人が乗っていて内装も豪華なものがある

「若さん…あの…ちなみにこれは誰が母ちゃんを運ぶんすか…？」

ただ怒っている波弥斗とは違い、広貴は大体話かっていながらも九兵衛に問うた

「波弥斗と広貴しかいないだろう」

ブチッ!!

その瞬間、波弥斗の中で何かがきれた。

「ふ…ざけんなよこの馬鹿九兵衛!!!何が乗っていればいいだろうだ!
お前コレ…結局俺達が苦労すること山の如しじゃねーか!!!」

「だったら美衿さんに走らせるのか?辛い思いをさせるのか君は?」

そう言われると何も言えなくなり、波弥斗は確かに恩人に辛い思いをさせるぐらいならと思うとしぶしぶ…ほんとにしぶしぶと納得した

広貴はまぁ…色々と扱いやすいから簡単に行ったわけで……。

そんなこんなで前が波弥斗、後ろが広貴で中には美衿とさもんが乗るような形となった

「よ～しじゃ出ぱ……」

波弥斗は普通にそういいかけるとしばらく黙って立ったままの形となった

「ってちょっと待て！！何でさもん！お前まで乗ってんだ！？お前は歩けよ！！！」

重もいだろーがと付け加えながら波弥斗はいがるとさもんは口をとがらせて答えた

「いいじゃんかー、オレも乗っけててくれよー」

「……はぁ…分かった…そんかーり、おとなしくしてろよ」

「りょーかい！」

一通りそんな会話をすると二人は肩に籠の持つところを乗せ走り始めた

そして、しばらくそのまま走っていると広貴はふと口を開いた

「…なぁ波弥斗…さっきから誰も触れてなかったけどさ……」

「あぁ？」

波弥斗は走るのに集中したいのか、そっけなく返した

「結局この籠とか出す時間とか色々グタグタやってた時間のせいで…
『今ならまだ間に合う』とかいうことまったく関係なくなったよな」

ガンッ！！

広貴がそういった瞬間、広貴の頭は横道のどこかの家の壁へと突っ込んでいった

そして突っ込んでいった…いや正確には波弥斗が突っ込ませた広貴を冷めた呆れた顔をして見ながら波弥斗は静かな口調で口を開いた

「……お前さ…分かってたよ？俺も作者ももう冒頭部分から気付いてたけど…
あえてそこに触れてなかったっつーのに…お前ほんっと空気読めねぇな」

それから数秒ほど壁にめり込んでしばらく動かなかった広貴は
急に目を見開きながら起き上がった

「……神楽さんの……足音が聞こえる……」

「はぁ？」

突然起き上がったかと思うと訳の分からないことを言った広貴に
波弥斗は呆れた声を出した

「だーから！！神楽さんの足音が聞こえたんだって！！お前にも聞こえるだろ！？」

「聞こえるわきゃねーだろ！？」

波弥斗がすかさずそうツッこむと広貴は立ち上がり美衿達が入っている籠の前を
持つと波弥斗に後ろを持てと素早く指示した

そして波弥斗はしぶしぶ後ろを持つと前の広貴のばかげたスピードに引っ張られていった

しばらく広貴の暴走走りが続くとかぶき町にある丘の上にやってきた

波弥斗はやっと走りが止まったと思うと息を切らしながら広貴の元へ歩いた

「おまっ…ほんと…何??…いい加減に……」

所々切れながら波弥斗は広貴に文句を言っていると広貴は町の方を指差した

「??どした…?」

「あっこに……神楽さんがいる」

広貴がそう言った瞬間波弥斗は!?という顔をしながら指差す方を見た

しかし波弥斗が見たところ神楽どころか人なんてありのようにしか見えなかった

その中から神楽を見つけるなどたとえ視力3．0あっても見えないものだ

「広貴…悪いがお前の幻覚に付き合っている程俺は暇じゃねぇ」

「誰の幻覚だ!
お前には見えんのか!?あの愛らしい神楽さんが!!」

「ああ、少なくともお前の幻覚はな」

そんな感じに馬鹿二人がギャイギャイ騒いでいると放置していた籠の中からさもんが出てきた。

「どうしたんだ？大きな声だして」

二人の様子を籠の中から聞いていたさもんは籠から出てくるとそう聞いた

そして波弥斗が広貴のおかしなことをさもん達に言うとさもんも広貴が指差す方を見た

「え…りとる……！？」

その方向を見たさもんがそう言うので今度は広貴も一緒に！？という顔をして振り向いた

「波弥斗！！広貴！！あそこにりとるが…オレの探してる仲間がいる！！」

さもんは驚いたように波弥斗達にそのことを伝えるとその方向を指差した

しかし、分かった所でここから大声を出しても聞こえるわけもなく、今から追いつこうと走ってもその場所に行く頃には銀時達はいない

だろうしと
波弥斗達は頭を数秒の間頭を悩ました

「オレに任せろ！」

そんな感じにしていた途中、急にさもんが声を上げた

「は…？お前…なんかいい方法があるってか？？一体どんな……」

「こいつを使うんだ」

波弥斗が驚きながらそう聞くとさもんは腰にさしてある刀をポンポンと叩きながら言った

それを見た波弥斗はガクッと肩を落とすと力ない声でさもんに言った

「いやお前…んな刀で何ができ……」

「刀じゃなくて、こいつさ」

さもんはそう言うとポケットの中から五ｍｍほどの薄いカードを出した
それには紅い、竜の絵が描かれていた

波弥斗と広貴はそれを見ても全く分からないという顔をしてさもんの行動を見ていた

「行くぜ!ディノ!!」

さもんは叫ぶと同時にそのカードを上から下へと振り下ろした

「「……」」

数秒後…二人の目の前には信じられない光景が現れた。

先程まで、カードに描かれていた紅い竜が、なんと二人の目の前に突然現れたのである

体長はさもんと同じくらいなのに開く翼がそれ以上に大きく見した

「え…天人(あまんと)……??」

広貴がおそるおそるそう口にするとさもんは何だそれというとその竜の背中にのり

町の方へとおりていった

#

「「……」」

「何アルカこれ!?これがりとるの仲間アルカ!?」

数分後、波弥斗達のいる丘の上にやってきた銀時達はさもんの横にいる竜を見て
ただただ驚きを隠せないようにしていた

「さもん!無事だったのね!!」

「りとる～腹減った～」

久しぶりの再会とういうのにいきなりそんなことを言うさもんにりとるは
しょうがないなぁと笑いながら自分が持っていたカバンに手を伸ばした

「ハイ、万事屋さん家で作ったおにぎり」

「やった!!」

さもんはそういい喜ぶとりとるからおにぎりをうけとると素早くお

にぎりを食べ始めた
その光景を波弥斗と銀時は木によりかかりながらしみじみと見ていた
「たった半日だったけど…何だろこの疲労感」
波弥斗はそう呟くと銀時と同時にため息をついた
しかし、
「うぉ!?」
「きゃあ!?」
さもんがおにぎりを食べ終えた瞬間、さもんとりとるの体が光りだした
「どっ…どうなってんだコレ!?」
広貴は身を乗り出し、驚きながらそう言った
「もしかして…元の世界に帰れるんじゃ…」
ふと呟いた新八の言葉に誰もが耳を使った
そして、その言葉を聞くとさもんとりとるは一瞬だけ驚くと少し残念そうに笑った
「銀さん、新八くん、神楽ちゃん、ちょっとの間だけだったけど

すっごい楽しかった！ありがとう！！」

「りとる！また会おうナ！！きっとアル！！」

「お元気で！」

「…ま、今度はちゃんとしたとこで寝るんだな」

最後に銀時がそう言うとりとるは苦笑いしながら笑った

「じゃーなっ！！波弥斗！広貴！」

「おう」

「元気でなー…あ、母ちゃん！呼んで来る！！」

さも今思い出したかのように広貴は籠の方を向いた

しかし、さもんはそれをいいと首を横にふり断った。

「…メシ…すっげーうまかったって伝えてくれ！！」

さもんはそういうとニカッと歯を見せて笑った

「「お…おぉ！」」

波弥斗と広貴はその笑顔を見ると少し寂しそうにだけどしっかりと笑って

さもんにそう言った

……・・・・・・・・――――――――――――――――――――――――――――

＃

チュンチュン……

「ん……」

ここは万事屋、そこに一人銀髪の天然パーマの男が寝ていた
そして男は朝の日差しが少し入ると少しだけ目をあけ、
次の瞬間勢いよく布団から起き上がった。

「…アリ?俺何で……確か丘にいたはずじゃ……」

夢?それにしては随分現実感があったかのような…
銀時はそんなことを思いつつ冷蔵庫の方にいちご牛乳をとりにいった

「!……」

銀時は冷蔵庫をあけた瞬間何か理解したかのように小さく笑った

「おはようございまーす…ってあれ?銀さんが起きてるなんてめずらしいな…
神楽ちゃんは寝てるみたいだけど……」

そんな感じに万事屋にいつもどおりにやってきた新八は神楽が寝ている
押入れへと向かった

「神楽ちゃん起き……「銀ちゃん!!」

新八が押入れの襖を少し開けた瞬間、

神楽が飛び出てきて新八の顔に神楽の足がめり込んだ。

しかし、そんな新八のことはおかまいなく神楽は銀時の方へ向かった

「銀ちゃん！私不思議な夢みたアル！！
朝起きたら銀ちゃんがりとるっていう――――――――――」

そこまで言うと神楽の言葉は銀時の目線にあるものによって止まった

「あ……」

すると押入れの前で神楽のせいで倒れていた新八も神楽のその話を聞くと
ゆっくりと起き上がりながら近づいてきた

「神楽ちゃんその夢ってまさかその後僕達でりとるさんの仲間を探すっていう……」

そして銀時と神楽に近づきながら喋っていた新八の言葉も途中で止まった

銀時は目線にあった冷蔵庫の中にあったものを取り出した

『万事屋さん、ありがとう?』

と書かれてあるメモの横にはお皿の上にラップに包まれている三つのおにぎりがあった

銀時はおにぎりののっている皿を机の上に置くとソファーの上に座った

それに続いて新八と神楽もソファーに座った

銀時がラップをはずすと新八と神楽と銀時は一つずつおにぎりをとった

そして、三人は同時におにぎりを一口食べた。

「冷て……」

確かにそれは冷たいおにぎりだった。

冷蔵庫の中に一晩入れてあったのだから。

だけど

それ以上に、そのおにぎりは三人が今まで食べたおにぎりの中でもっとも……

極上の味だったという……。

３５＃一晩後の料理の味（後書き）

それでは今回で、ｇａｎｍａさんとのコラボ話は終了です！

こんな自分のところに出張にきれくれありがとうさもん！りとる！

次回はちょっと季節が遅れましたけど〇〇〇〇〇の話です（笑）

３６＃季節遅れの虫採集（前書き）

灘
「今回は本当は夏の間に投稿しようと思って置いといた話です！！」

波弥斗
「あ～ハイハイ…だけどサボってたわけね」

灘
「失敬なことを言うな！お前アレ…アレだよアレ。色々あって」

広貴
「具体的に言うと暑かったわけね」

灘
「うっせーよ！こちとら頑張って節電してたんだよ！！
コンセントから抜いてたんだよ！！
そうでもしないと申し訳たたないだろーが！」

広貴
「それじゃ、３６話宜しくお願いします」

波弥斗
「ちなみに今回の話は新たな展開を迎える…らしいです」

36#季節遅れの虫採集

夏・夏といえば何か

海?プール?チッチッちげぇなぁ…それじゃあ祭り?屋台?そいつもちげぇなぁ…

「夏といえば…カブト狩りじゃあああああ!!」

「……」

先程まで外に出ていて急に帰ったと思った広貴は帰ってくるなりそう叫んだ

そんな広貴を無視して波弥斗は『週間・江戸のモテ男特集』という

雑誌を読んでいた

しばらくそのまま波弥斗が放置していると広貴はまた再び同じことを叫んだ

が、それもまた波弥斗は放置した。

「カブト狩りじゃああああ！！」

「うるせェェェェェェ！！！」

ずっと聞いてなかった波弥斗に我慢ならなくなったのか

広貴は波弥斗が読んでいる雑誌を取り上げ顔の目の前でそう叫んだ

「何だよお前はさっきから……

帰ってきたと思ったら急に叫びやがって……大体もう9月半ばだっつーの」

波弥斗はめんどくさそうに広貴から雑誌を取り戻しそう聞いた

すると広貴はこんなことを言い始めた元凶を勝手に話始めた

――――――――――――――――――――――――――――――――――――

――――

「えいっそれっ！そこだやれ！あ、ヤバイ…」

大勢の子供達が集まって何やら何かを囲んでおのおの叫んでいた

そして次の瞬間、子供達は一斉に叫んだ

「負けたーチキシシヨォもう完敗だよ！さすがよっちゃんの『曙X（あけぼの）』だな！」

「ムフフ…お前等の貧相なカブトムシとは食べてるものが違うんだよホラ次は誰だ？曙Xはいつでも誰の挑戦も受けるぞ」

そう、彼等が盛り上がっていたのは子供達の大好きな『カブト相撲』だった

今の所よっちゃんというガキ大将の曙Xというカブトムシが勝ち続けているらしい

「ハイ！ハイ！次　私が行くアル！」

そういって元気よく手をあげた少女は神楽だった。

するとよっちゃんはその生意気な鼻へし追ってやると言いながら承知した

「テメーらなめんなよ！

神楽さんの定春２８号はお前等とは食べてるもんが違うんだからな！」

そう言いながら神楽の横から叫んだ青年…
子供達の中に恥ずかしげもなく混ざっている青年はもちろん神楽大好き広貴である。

広貴がそう言うと神楽はいくぜ定春２８号！と叫びながらそのカブトムシを出した

「…食べ物が違うっつーか種類が違くね？」

神楽のカブトムシ…ではない物体を見てよっちゃんは何コレと問いた

「フンコロガシ」

神楽が普通にそう言うと子供達はみんな神楽から一歩さがった

「食べるもんが違うってそれウ〇コ食う奴じゃねーかよ！」

「そーだヨ自給自足じゃね？スゲくね？」

「それをわし掴みにしてるお前がスゲーよ！つか何処から拾ってきた！！」

よっちゃんは的確なツッコミを入れると改めて神楽にルールを説明した

これはカブトムシ同士で相撲をとらせる遊びということを…

「おやおやそーいう閉鎖的な考えまで相撲界と酷似してるのですなぁ」

しかし神楽は全然納得せず、逆にドヤ顔のような顔で反論した

「どこの世界にクソまみれで土俵にあがる力士がいるよ！もういいから帰れお前！」

そんな神楽によっちゃんはすかさずそう叫んだ。

そんなよっちゃんを見て広貴は苛立ちが来たのかよっちゃんの胸倉を掴んだ

「テメェ神楽さんの言うことに文句でも…「オゥオゥ仲良く遊ばなくちゃいけねーよ」

広貴が話しを始めた瞬間ちがう声が話を中断させた

その声の主の方を見ると一人の男が屋根の上に座っていた

「ってことで俺も混ぜてくれねーかィ？
もう隊内じゃ俺の相手になる奴いなくなっちまってよォ」

そういうと男は何処からか取り出した馬鹿でかいカブトムシを取り出し続けた

「誰かこいつと闘り合わねーかィ？

俺のサド丸２１号とな」

―――

「…こうして…突然現れた真撰組の憎っくきあの沖田とかいう奴のカブトムシのせいで定春２８号はご愁傷様になってしまって…神楽さんは悲しんでいるんだ…」

「……ふーん……」

顔に手をあて悲しみながら喋っている広貴の話を波弥斗はどうでもよさそうに雑誌を読みながら聞いた

「だからな、そんな神楽さんのために…俺がカブトムシをプレゼントしてあげようと思ってな、なぁ聞いてんのか？」

広貴は雑誌を読んでいる波弥斗の体を揺すりながらそう聞いた

すると波弥斗はあー聞いてる聞いてると言いながら広貴の方を向いた

「アレだよお前、曙（あけぼの）はプロレスに転向した方が俺はいいと思…」

「最初の部分しか聞いてねーじゃねぇか！！！」

そう言いながら波弥斗の顔面を広貴は思いっきり殴った

殴られたことで波弥斗は出てきた鼻血を手で押さえながら喋った

「あのね…カブト狩りだか曙狩りだか知らねーが行くなら一人で行きゃいいでしょが
何で俺までつき合わそうとするわけ？いい年こいてカブト狩りなんて…」

「一人だと挟み打ちとかできないだろーが」

んなお前の勝手知るかと言いながら波弥斗は雑誌の次のページをめくった

波弥斗がめくったページはカブトムシ特集というページだった。そしてそこには…

＊大人を巻き込むカブトムシブーム＊

なんと車を買える値段のカブトムシが！？
そんな高いカブトムシを持っている男性は年上の女性からモテるという現象が？

・高いカブトムシを持っている男性のモテ度グラフ・

持っている　　７６％

持っていない　３４％

さぁ今こそ君もカブトムシ狩りへＧＯＯ↓☆

「「……」」

それを見た波弥斗はフッと笑うと何も言わずに立ち上がり棚の中から網・かご・帽子。を取り出して自身に装着、そして…

「カブト狩りじゃあああああああ！！」

一人、そう叫んだ。

そんな波弥斗を見た広貴はやる気になってくれたのかと嬉しそうに問いた

すると波弥斗は広貴の方に顔を向け、歯を見せ、ニッコリ笑った

「何言ってんだよ広貴、お前と俺の仲だろうが。あったりまえだろ」

先程までの言葉が嘘のようにそういう波弥斗を広貴は輝かしい目で見た

「ん?何処かに行くのか?波弥斗、広貴」

突然自分達の後ろから聞こえた声に二人は一緒に振り向いた

「九兵衛?」「若さん!」

後ろを向いたところにいた九兵衛を見て二人は同時にいった

「ちょうどよかった何処かに行くなら頼みが……」

「悪ィ九兵衛!俺達急いでんだ!!話なら帰ってきくわ!」

「すんません若さん!!」

二人は九兵衛の話を中断させると一斉に走っていった

「……」

そんな二人の姿を九兵衛はよく分からない顔で見ていた

(……将軍の…ペットを…探してもらおうと思ったんだがな……)

九兵衛はそう思うとクルリと向きを替え、屋敷の方に入っていった。

一方二人は森の方に行く道を全力で走っていた

カブトムシを狩って女の人達にモテモテ
カブトムシを狩って神楽さんがメロメロ

この馬鹿二人は考える事が一緒だった。
そうこう考えている内に二人はかなり走ってきていた

「アラ、悠基波弥斗くんではありませんか？」

急に声をかけられ二人は一生懸命止まって誰だ邪魔すんのは。と苛立ちながら見た

「…あ…」

その声の主を見た瞬間、波弥斗は苛立ちなんぞフッ飛んでしまった

「どうもお久しぶりです足の方は…もう大丈夫ですの？」

声の主とは浅生家の桃であった。無論波弥斗の苛立ちが消えるのは当たり前であった

「も、桃ちゃん！いやー久しぶりだなーどったのこんな所で？」

波弥斗はカブトムシのことなど完全に忘れて桃に話しかけた

そんな波弥斗を見て、広貴は冷めた表情で口を開いた

「おい波弥斗、早くカブト狩りに行こうぜ…「カブト狩り？？」

その言葉に一番反応したのは桃だった。

「あの…カブト狩りというのは…カブトムシ狩りのことでございましょうか？」

「へ？あ…ああ…」

波弥斗がそう言うと桃は波弥斗と広貴の手を勢いよく握った

「私も、ご一緒させてくださいませ！」

「「へ？」」

そんなこんなで波弥斗、広貴、桃の三人は一つの森の中にやってきた

「つーわけで、ここを宿営地にしまーす」

波弥斗はテントをたてた前に立ち、二人を見てそう言った

「それじゃ波弥斗！桃ちゃん！カブト狩りに行こうぜ！！」

「おおぅ！！」

「…ちょっと待ってくださいません？」

これからやっとカブト狩りに行こうと気張った時に桃はそう言った

そんな桃に二人はどうしたという問いた。そして桃は不思議そうな顔をして

「…なぜ私(わたくし)はあなた方より３つも年上なのにちゃんずけなのでしょうか？」

「「……作者の好み」」

「……」

＃＃

「しっかし意外に見当たらねーなー」

…そん感じでカブトムシを探し始めた三人だが、中々見当たらないので

広貴は顔に落ちてきた汗を取りながら呟いた

「確かにそうですわね、まぁ簡単に見つかれば私達も苦労はしませんけど…」

そういった広貴の呟きに桃は納得しながら返事を返した。

その桃の返事に広貴は疑問を感じ、そもそもの理由はなんなんのかと聞いた

「理由？」

「ああ…何で浅生家のあんたがカブト狩りなんてしにきたのかなー？って…」

「ああ…それでしたら…実は……「んーな話より」

先頭を歩いている波弥斗は桃の話を中断させると続けて口を開いた

「二人共喋るばっかしねーでちゃんと探せよな、遊びできてんじゃねーんだから」

「そんなこと言われても…全然いませんし…どうすればいいんですの？」

桃はそう聞くと、波弥斗はちょっと間をあけて、また口を開いた

「…『桃ちゃん』が…体中にハチミツ塗りたくって立っててみたらすぐ寄ってくるんじゃねーの？」

「そんなことしてもあなたみたいな変態しか寄ってきませんわ」

波弥斗の変態的発言にビシッとツッこむと桃は先程と同じように歩き出した

そんな二人の会話を聞くと広貴は回りをキョロキョロ見渡した

「流行ってるってたし…この辺はもう取りつくされてるのかもしれねーな…ん〝？」

広貴がそう言いながらふとすぐ横の林の方を見た、そこには…

ポタ　ポタ…

体中にハチミツを塗り褌(ふんどし)一丁のどこかでみたことあるゴリラ男が立っていた

「「「「・・・・・・・・」」」」

三人は無言でそれを見ながら通り過ぎた

そして、その男から少し離れると広貴は引きつった顔をして口を開いた

「波弥斗違う森にしようぜ、この森怖い」

「体中にハチミツ塗りたくってましたわ」

「気にするな妖精だ、妖精。樹液の妖精だよああして森を守ってるんだよ」

一通りそんな会話をすると広貴は間をあけずに続けた

「でもなんか見たことある人だったんだけど……」

「以前テレビで見た真撰組という所のゴリラ局長さんでしたわ」

「じゃあゴリラの妖精だ、ああしてゴリラを守ってんだよ」

波弥斗がすかさずそう言うと広貴はゴリラを守るのってなんか意味があるのかと
言いながらふと横の林の方を見た、そこには…

ぬり　ぬり…

木にマヨネーズを塗りたくっているどこかでみたことがある瞳孔開き気味男がいた

「「「・・・・・・・」」」

三人は無言でそれを見ながら通り過ぎた
そして、その男から少し離れると広貴は先程より引きつった顔をして口を開いた

「波弥斗、やっぱり変えようぜこの森怖い」

「マヨネーズを木に塗りたくっていましたわ」
「気にするな、妖怪魔妖根(マヨネーズ)衛図だよ、
ああして縄張りにマーキングしてんだよ」

一通りそんな会話をすると広貴は間をあけずに続けた
ちなみにさっきまでと同じパターンだな、サボッてんだろコピーだろとか
違いますからちゃんと打ち直してますから。

「でも明らかに見たことある人だったんだけど……」

「以前テレビで見た真撰組という所のマヨラー副長さんでしたわ」

「じゃあ妖怪マヨランだ。ああしてマヨを交尾させてんだよ」

波弥斗がすかさずそういうと広貴はいやマヨ交尾しねーからと言いながら
ふと横の大きな木を見た

「「「……」」」

そこには、今までに見たこともないような馬鹿でかい…
一メートル以上はあると思われるカブトムシがいた

「なっ何ですのアレ……あんなカブトムシ……ん?」

桃があっけにとられてる間に波弥斗と広貴はすでにそのカブトムシがいる
大きな木の下にいきカブトムシを落とすといわんばかりの勢いで木を力強く蹴っていた

「ちょ!?あなた達何をやっていますの!?」

その光景を見た桃がそう言うと波弥斗達はただ怒鳴っていいから手伝えと桃に言った

桃は慌てて返事をすると急いで持っていた網を投げて
二人の横に並んで同じように木を蹴り始めた

そして、数秒程それを繰り返すとついにその大きなカブトムシは地面に落ちた

広貴はその大きなカブトムシに喜びながら近づいた

「これで神楽さんも喜んでくれ……」

しかし、そのカブトムシをひっくり返した瞬間広貴の顔は今までにないほど濁った

「何しやがんでィ」

ドガァァァ！！！！

三人はそのカブトムシ…正確には真撰組の沖田総悟の顔を思いっきり蹴りまくった

蹴った後沖田総悟の顔からは何やら煙のようなものが出てきた

「お前こんなとこで何やってんだぁ！！
ていうかそんな格好して何してんだコラァ！！」

広貴が怒りながらそう聞くと沖田は見たらわかるだろィと仰向けの

まま言った

「分かんねーよお前が馬鹿だということ以外は」

波弥斗が続けてそう言っていると沖田の後ろから草に何かあたる音が聞こえた

「おい何の騒ぎだ?」

「あ!君達!こんなとこで何やってんだ!?」

沖田の後ろからでてきたのは、先程まで不可解な行動をしていた土方と近藤だった

「おぃおぃ…14話以降前書き以外に出てきてない奴等が……何やってんだってお前、全身ハチミツ塗れの奴が言っていいセリフだと思ってんのか?」

二人の姿をみて挑発的な口調でいう波弥斗に対し近藤はあくまで職務だと答えた

「そんなことより君達こそ一体こんな所で何をしてるんだまさか俺達と同じでカブトムシとりとか言うんじゃないだろうないい年して」

「その言葉、そのままバットで打ち返すぜ」

波弥斗がすかさずツッこむと近藤はこっちは職務、邪魔だから森か

ら出てけとのことだ。

「ふざけんなよ！！俺だって幻の大カブトをとりにきてんだ！お前のせいで殉職なさった神楽さんの定春２８号の仇を討つためにな！」

広貴は沖田を指差しながらそう宣言した、沖田の方は普段のポーカーフェイスのままだが。

「何言ってやがんでィあいつのフンコロガシはアレ、試合みて興奮したあいつが勝手に握り潰したんだろーが」

沖田そう言うと広貴は身を乗り出し、さらに怒ったような口調で言った

「誰が興奮させたか考えてみろ！誰が一番悪いか考えみろ！」

「神楽だよ」

全然分かっていない広貴に冷めた目で波弥斗はツッこんだ

「……どうでもいいですけど……」

すると、先ほどまで黙っていた桃が急に静かに口を開いた

「その方達は勝手に、私達は勝手に、カブトムシ狩りを再開いたし

ましょう波弥斗君」

「んな勝手許されると思ってんのか、いいからさっさとこの森から出て行け」

桃の提案をあっさり断り土方は煙草を一旦ふいた

その言動と行動にカチンときたのか、桃は土方の目の前に一歩出た

「真撰組の副長さんといえば…クールで二枚目で有名でしたけど……思ってたより随分と『ぶさいく』ですのね～瞳孔何て開き気味じゃないですか
後、煙草止めていただけません?見ていて不快ですわ、それかっこいいと思って?」

そして桃の言葉にもカチンときたと思われる土方もキレ気味な顔で煙草をもう一度ふいた

「そりゃ悪かったなぁ後、勝手な想像で人を勝手に批判するのは止めてもらおうか?
こっちも迷惑でな、そういう勘違いであーだこーだ言われるのそれとあんたもその『ぶさいく』な顔は止めた方がいい、折角の美人が台無しだぞ」

土方がそういい終えると二人は火花をバチバチと力強くあわせた

そんな桃と土方を汗をかきながら波弥斗は見ると一度だけ咳払いをして近藤を見た

「ま、とにかく…俺等はカブトムシを捕まえるまで…この森を出るつもりはねぇんで
出て行くんならあんたらが先に出るんだな。じゃーな」

波弥斗は最後にそう言うと自分達が立てたテントの方へと歩き出したそれに続いて広貴と桃も後ろからついていった。最後の最後まで沖田と土方を睨んで。

#

「とんだ邪魔が入ったもんだなートシ」

「ああ、ただでさえこの広い森の中から一匹の虫を探すなんて至難の技なのにな」

波弥斗達から分かれた後、真撰組の者達も自分達の宿営地にきていた

当たりはもうすでに真っ暗になっており、奴等が囲んでいる炎だけが火を灯してる

「一刻も早く、『瑠璃丸（るりまる）』を将軍様の元へお返しするんだ！」

「オオォーー！！！」

そう近藤が叫ぶと隊士達は気合を入れなおすように大声で叫んだ

そんな中、一人木の上に上っている一人の青年……

「あの男、チャイナの前に決着つけてやらァ」

沖田総悟はそう言うとニヤリと不気味な笑いを見した。

36#季節遅れの虫採集（後書き）

ハイそんなわけでちょっと季節が遅れたカブトムシ狩りの話でした

今回の話で本当に前々…可憐楔篇が始まる前から考えていたことをしたいと思っています！

いやずっと憧れてたんですよね、その話だすの♪

前々からドラエモンの映画を見てはいいな～って思っててずっと考えてました

何のことかさっぱりですよね（汗）

でも皆さん直感で、ほんとに直感で波弥斗と広貴だったらどっちがいいんでしょうね？

もし皆さんが答えてくださったらそれにより次回の話を変えようかなー？ってうっすら思ったりしてるんですが……

次回も宜しくお願いします！！！

３７＃少年はカブト虫を通し生命の尊さを知る（前書き）

波弥斗
「ほい、第３７話お開きいただきありがとうございます！」

広貴
「いやー気付けばこの小説も３７話ですよ３７」

灘
「時とは早いものさ…ていうか何で３７なんて中途半端な数字でそうなる？」

波弥斗・広貴
「「何言ってんだよ、んなこと分かってんだろ」」

灘
「はい……（テンションだだ下がり）

美衿
「それでは、作者にとっては不吉な数字３７話どうか宜しくお願いします♪
それと、今回は物語の最後にお知らせがあるのでどうか見てくださいね♪」

37#少年はカブト虫を通し生命の尊さを知る

テントに戻った波弥斗達は少し遅めの夕食にとりかかる…はずだった。

「全く信じられませんわ!!食べ物を一つも持ってきてないってどういうことですか!!」

波弥斗達が持ってきたかばんの中には食材所かお菓子すら入ってなかった

そのせいで、桃の怒りを生ませたのか、ただいま二人は桃の前で正座中である

「いやあの…俺達はちゃんと持ってきてたんだけど……その…無くなったっていうか…
あ、でも俺のおやつはほら…ちゃんと残ってたよ?ほら……」

波弥斗はそういうと自身のカバンからおそるおそる取り出しそれを桃に渡した。

「……一体にぼしで…どんな料理を作るっていうんですか！！！」

桃は波弥斗から受け取ったにぼしや漬物が入った袋を地面にたたきつけた

すると桃はガサガサと自分のかばんの中をあさりはじめた

「あの…桃ち…さん？何を……」

波弥斗がおそるおそるそう聞くと桃は自分のかばんの中から懐中電灯を取り出した

「あなた達のせいで無くなったのですから…あなた達で買って来てくださいませ」

桃はそういうと懐中電灯を波弥斗に渡した。

「それじゃ、宜しくお願いしますわね」

桃はそれだけ言うとクルッと向きを変えテントへと向かった

波弥斗と広貴はしばらく状況を理解できなかったがお互い顔を見合して桃の方へと駆けた

「いやいやいや！？無理だって！！もう当たり真っ暗だし！！
どんだけ歩くと思ってんだよ！しかも何で懐中電灯一本だけ！？」

「信じてくれよ桃ちゃん！！俺達本当に持ってきてたんだって！！」

テントの中に入ってしまった桃にテントの前で二人は訴えるが、応答はない

「「だーーー！！！信じてくれーーーー！！！」」

夜の森に、二人の叫び声は大きく響いたという。

そんな光景を、物陰から見ている二人の黒い物体……

「やりましたね副長、ていうか奴等の食材盗んだだけでこの有様…何て単純な奴等なんでしょうね。
あの調子なら早々に森から出て行くでしょ」
と土方に話しかけた男は山崎退（やまざきさがる）、真撰組の密偵だ。
新八と並ぶ地味さと言われている。

「……」

おっと気付かれたか？

「どうした山崎」

「いえ……」

土方にそう聞かれて山崎は苛立ちそうなのを押さえた
そして土方は立ち上がると念には念を入れておくぞといい宿営地に向かった。

「……結局…道が分からなくて戻ってきたと?」

「「もう…何とでも言ってください……」」

桃に散々な目に合わされ見も心もボロボロになってしまったのか、波弥斗と広貴は力なく答えた

しかし、そんな二人にはおかまいなしに桃は続けて説教を入れようとするが…

「わはははは～!」

三人の近くから何やら明るい光とともに騒がしい声と良い匂いが入ってきた

三人は顔を見合わせゆっくりとその声の方向へと足を踏み出した

「美味ェェェ!!やっぱキャンプはバーベキューだよなー!!」

「カレーなんて家でも食えるし!福神漬け持ってくんのめんどくせ

ーし！」

三人が見たものとは、わざと自分達に聞こえるような大声でバーベキューを
おいしそうに食べている真撰組の連中であった。

それを美味しげに、妬ましげに三人は見ていた

「よォ、あんた方まだいたんですかィ」

そんな三人にクチャクチャとバーベキューを食べながら沖田が近づいてきた

そして次の瞬間、沖田はわざとらしくバーベキューを三人の目の前に落とした

「いっけね落としちまった」

「おーい沖田隊長ーそんなのもういいってー
こっちにいっぱいあるから戻ってこいよう」

沖田は全く残念そうな顔をせずそういいながら顔に手をあてた

その行動を待っていたかのように隊士達は沖田に声をかけた

「おーうじゃ俺はこれで。あっ別にそれ食べてもいいですぜィ」

沖田は最後の最後までわざとらしくそう言うと、土方達のいる所へゆっくり歩いていった

「「「……」」」

三人はそれを黙って見ていた

「波弥斗くん」

「ああ、分かってるぜ桃ちゃん」

桃が一言そう言うと波弥斗は自分達のテントの中に入っていった

土方達の所へと戻ってきた沖田は誇らしげな顔していた

「くく…見なせェあの奴等の羨ましげな顔
腹すかして森から出て行くのも時間の問題……ん?」

沖田はそう言っていたがふと三人の方を見た瞬間、その言葉は止まった

「ウフフ、やっぱりキャンプといえばにぼしですね〜」

「全くだなーこっちには女の子の桃ちゃんがいるからより美味く感じるし」

「ほんとだな、男だけでバーベキュー食って何が楽しいんだか」

・・・にぼし…焼いてくってるウゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥ!!!・・・

おそらく真撰組隊士のほとんどがそう心の中で思ったと思われる言葉を山崎が口にした

「にぼし焼いて食ってるよ!!
いたいたしい!!いたいたしいよ!!」

そうこうしている真撰組の奴等の前にはにぼしを食べながら波弥斗がやってきた

「よーう税金泥棒ーお前等まだ居たのかー」

「誰が税金泥棒だコラ、言っとくがバーベキューはやらんぞ」

土方がそういうと波弥斗は誰がそんなものいるかと小さく呟いた

「ただ…これを食ってもらおうと思って…なっ!!」

波弥斗はそう言いながら手に持っていた物を投げそれがちょうど山崎の口の中へと入った

山崎は反射的にそれを飲み込んでしまったが食べた後不思議に思う

「……あの…何を…」

「カエル」

その瞬間、隊士達は山崎からザザッと一歩はなれた

「え、ちょ…マジ…？えええええエエエエエエエエエ！？？ちょマジでエエエエ！？？」

一通り叫んだ後、山崎は確かにやわらかかったようなと青ざめていった

そして、次の瞬間みんなのバーベキューの上に大量に吐いた

「ギャアアアアアア！！！」

「くさっ！！山崎どこに吐いてんだァアアアア！！」

隊士達はそういうともう食べる気がしねーと何処かに走っていった

そして、その場に残った土方は波弥斗に問う

「……テメェ…ほんとに食べさしたのカエルか」

「んなわけねーだろ、こいつだよこいつ」

波弥斗はそういうとポケットから何かの袋を出し手の上で投げたとったりをした

それは、様々な色をした丸い『グミキャンデー』…グミであったその中には緑色もあって……。

「奇跡的に俺のポケットに入ってたんでな、
でもまさかこんなに引っ掛かってくれるとは思わなかったな~…ダッセ」

波弥斗は最後の言葉をニヤリと憎みたらしくいうと広貴達のもとへといった

「流石だな波弥斗、完璧だったぜ」

広貴はそういいながら波弥斗と手を握って軽くコツンと当てた

「それでは、私達も寝ましょうか」

桃がそういうとあと言いながら波弥斗はテントの中へと入っていった

広貴も続けて入ろうとしたが、入る前にまだバーベキューの近くに

いた沖田を見た

「「……」」

沖田は広貴を睨んでいるような顔をし、広貴は勝ち誇ったかのような憎らしい顔をした

##

「……そうか…やはり一筋縄では行かん連中だな」

次の日の朝、近藤は昨日と同じように体中にハチミツを塗りたくって褌姿でいた

しかし昨日と違うのは…今日は隊士全員が体中にハチミツを塗っているということだ

「おい皆…別に局長が言ったことでも嫌なことは嫌と言っていいんだぞ」

「いやでも…ハニー大作戦何で」

「だからって何で体に塗るんだよ」

土方が一通りツッこんだ後、近藤は今の状況を整理するように言った

将軍様はこの森の別邸に御静養の折、瑠璃丸と生き別れてしまったらしい

拾われた可能性も考え　市中を探索したがこれもアタリナシ

一体どこにいるのか瑠璃丸は……そういえば総悟はどうした?

ふと話しながら回りを見たときに気付いたのか、近藤は土方に問う

「また単独行動だありゃ駄目だ、ガキどもからカブト巻き上げたりやり方が無茶苦茶だ」

そういいながら煙草をふく土方にまぁまぁと言いながら近藤は続けて喋った

そういうなトシ、なにせ瑠璃丸は陽の下で見れば黄金色にに輝くい

わば
生きた宝石のような出で立ちをしているようだが…
パッと見は普通のカブトと見分けがつかんらしい
総悟のように手当たりしだいやっていかんと見つけられんかもしれん

近藤の話を一通り聞いた土方は、思いつめたように口を開いた
「黄金色に輝く生きた宝石ねェ
そんなもんほんとうに…「波弥斗!桃ちゃん!見ろよアレ!!」」
土方が話している途中に聞こえたその声の方を見ると、そこには昨日の三人がいた
そして、まだ真撰組の連中に気付いていない三人は広貴がいう方を見た

「何だよ広貴、ま~た変なモンでも見つけたんか?」
「アレだよアレ!…『黄金色のカブトムシ』」

広貴がそういった瞬間、近藤と土方は同時に何ともいえない顔をした

え〝え〝え〝え〝え〝え!?あっさり見つけやがったァァァァァァ!!!!

心の中でそう思うと近藤はすぐに出て回収に図ろうとした

しかし土方はそれを様子をみようと近藤の腕を掴んで止めた

「おもちゃか何かじゃありません?」

「いや、アレはアレだよアレ。銀蠅の一種だってきたねーから触るな広貴」

桃と波弥斗が瑠璃丸を見ながらそう言うと広貴それを見ながら黙っていた

「ほら見ろ、馬鹿だ馬鹿」

土方は瑠璃丸の価値を知らない二人がそんなことを言っているのを見てそう言った

その後しばらく瑠璃丸について会話をすると三人は違うところにいってしまった

それを確認すると、土方・近藤を始めとする真撰組の連中が瑠璃丸のいる木に一斉にかけよった。

「あ!」

しかしタイミングの悪いことに瑠璃丸は真撰組の連中が近づいた瞬間に木から離れてた

そして、そのまま瑠璃丸は広貴の頭の上へと乗ってしまった

げェェェェ!!!最悪だァァァァァァァ!!!

その光景を見た真撰組全員がそう思った

「うおっ汚ね!!広貴お前頭に金蠅のってんぞ!!」

「へ?」

それに気付いた波弥斗が広貴から後ずさりながらそう叫んだ、
広貴はいまいち分かっていないようだが…

波弥斗は広貴にじっとしてろよと言いながら自分の帽子を掴み広貴の頭を叩き出した

(やめてェェェェェェ!!!それ将軍のペットォォォォォォ!!!)

近藤はその光景を見て泣きながら波弥斗達のところへ走っていった

「待てェェェ!!待て待て!!それやばいんだって!!それ…!!」

近藤が駆けてあと少しという所で近藤の足がすべって広貴の頭に乗っている
カブトムシ…瑠璃丸にチョップする形となった

「え〝え〝え〝え〝え!?」

そのせいで瑠璃丸は広貴の頭から地面に落ちてしまい、広貴は頭をさすりながら
瑠璃丸を片手で救い上げた

「いってーな!!金蠅だって生きてんだぞ!?
それなのにお前等よってたかって金蠅イジメやがって!!!
おーよしよし大丈夫そうだなー」

「待てェェェ!!それホントは金蠅じゃねぇんだ!それほんとは…」

瑠璃丸を心配そうにそう言う広貴に近藤は説明をするが広貴は全く聞いてない様子である

「こいつきっと俺を慕って飛んできてくれたんだ
神楽さんにあげたいところだけど…折角俺を慕ってきてくれたんだから
俺のペットとして定春２８号の仇を討ってやるぜ!」

広貴はそう言うと瑠璃丸を自分のかごの中に入れて、憎き沖田のもとへ向かった

「おい待てェェ！！それ将軍の……！！」

土方は近藤に続いて広貴を止めに行こうとしたが、波弥斗と桃によってふさがれた

土方は後ろから波弥斗と桃の二人に刀を首の一ミリぐらいまで近づけられた

「「将軍の…何？」」

土方がおそるおそる後ろを見るとそこには一人は黒い笑顔を、一人は無表情の顔があった

#

「ハアアアアア！？？将軍のペットォ！？」

その後、土方から事情を聞いた波弥斗は驚きを隠せないでいた

「……まさか…真撰組にも同じ命が着ていたなんて……」

そう、桃がカブトムシ狩りをしていたのは同じく将軍のペットの瑠璃丸を探すためだった

浅生家にも同じことが将軍から言い渡され三兄弟で分かれて探すことになったらしい

そして波弥斗と広貴の二人に出会った…ということだ。

「しかし、あの虫が瑠璃丸だったなんて……全然気付きませんでしたわ」

「聞いてなかったのかよ!!」

土方がそうツッこむと桃は銀蠅だと思いましたからと目を合わせず答えた

「しかしどうりでおかしいと思いましたわ」

「たかだか虫一匹のためにここまで手ェ下すのかよ
大変ですね～お役人さまも～（棒読み）」

桃と波弥斗がそう言うと土方はだから言いたくなかったんだというつきながら言った

そうこう言いながら4人は歩いていくと前にある大きな崖の上に沖田と広貴がいた

「総悟？」

「……ちょアイツ何してんの、嫌な予感すんだけど……」

四人が崖の下から二人に声で呼びかけるが、二人は集中しているようで聞こえてないようだ

「神楽さんの大切な定春２８号の仇俺が討たせてもらう、お前に決闘を申し込む」

「くると思ってたぜィ、この時のためにとっておきの上玉を用意した」

沖田がそう言うと広貴はかごの中から瑠璃丸を取り出し勝負の体勢をとった

「凶悪肉食怪獣カブトーンキング
サド丸２２号に勝てるかな？」

神楽がカブトムシを出すと沖田もどこからともなく超危険そうな大型のカブトを出した

「おいぃぃぃぃ！！総悟！お前そんなもんで相撲とったら瑠璃丸がどうなると…！！」

粉々にしてやるぜィ

「そう粉々になるから！広貴！？それ神楽にあげたら喜ぶぞ！？粉

々にされてもいいのか！？」

ケンカはがたいじゃねぇ！度胸じゃあ！！！

「度胸があるのはお前だけだから！ボンボン何だよ！
ロリ丸は将軍に甘やかされて育ったボンボンなの！」

「波弥斗君、瑠璃丸ですわ」

そんな風にもはや全員が天パっていると沖田と広貴のカブトムシ相撲は始まった

その瞬間、言葉を交わさずとも全員の思いは一致した何も言わず

近藤が一番下、次に土方となりその上で桃が刀の上に波弥斗をのせてジャンプした

そして、桃は刀にのっている波弥斗を思い切り沖田のカブトムシへと投げた

「おおおぉぉぉーー！！カァーブートー…狩りじゃあああああああ！！！！」

ドカアァァァ！！！

波弥斗は桃に投げられた勢いを使い沖田のカブトムシを思い切り蹴

った

沖田のカブトムシは森の方まで飛ばされ、戦闘不能となった

その光景を見た沖田と広貴は波弥斗に文句をいいながら近づいた

「何しやがんでィ!!俺のサド丸が!」

「波弥斗何すんだよ!!真剣勝負の邪魔するなんてヤボだと思わねーのか!?」

しかし、二人の言葉を批判するように波弥斗は二人の頭を思いっきり殴った

「バッキャロー!!テメーら何年生きてきたんだ!!
遊び半分で生き物の命もてあそぶんじゃねーよ!殺すぞコノヤロー!!
カブトだってミミズだってアメンボだってみんなみんな……!」

プチッ

波弥斗がそう言って説教をしている途中に足元から何か不可解な音…

そして波弥斗はゆっくりと自分の足をどけてみた

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

そこには無残に波弥斗に踏み潰されご愁傷様になっている瑠璃丸の姿があった…

「……みんなみんな…死んじゃったけど…友達なんだ……だから……連帯責任で…お願いします」

波弥斗はとても青ざめた顔と弱弱しい声で…そう言った……。

#

「あの…波弥斗…マジで悪かったって…いやほんと……」

波弥斗達は結局カブトムシをとることもなくそのままゆっくり森をおりていいた

そして、先程のことで完全に落ち込んでいる波弥斗の横で広貴はひ

たすら謝っていた

そんな波弥斗達のことを哀れな感じで見ながら桃はふと前の方を見てみた

「…？どうした桃ちゃん」

前の方を見た後立ち止まった桃に広貴は声をかけた

「いえ…あそこに……」

桃が指差す方には何やら1つの物体があるようで…

三人はよく分からないままその物体にちかづいていった

「「「あ……」」」

そこにいたのは茶色で尻尾が太く柔らかそうで何とも愛らしい栗鼠（りす）だった。

「……何だ？？これ」

広貴がよく分からないままその栗鼠を見るようにしゃがんで見た

「栗鼠だよ、知らねーのか？」

波弥斗は実は動物大好きなので嬉しそうに興味津々で栗鼠を抱き上げた

「……あ！」

波弥斗が栗鼠を抱き上げた瞬間広貴は突然何かを発見したかのような声をあげた

そんな広貴に波弥斗はどうした？と神妙そうに聞いた

「この栗鼠けがしてる！さっさと柳生家戻って手当てしてやろうぜ！」

「マジでか！？」

波弥斗は先程までの落ち込んでいた姿とは別人のように活発に動き始めた

「……」

そんな風に桃一人を残して森を出ている二人を桃はあっけにとられてみていた

＃

「…よかったよかった、ただのかすり傷で……」

広貴は栗鼠の怪我を手当てした後、ホッとしたように呟いた
そして広貴はそっと自分の枕の上に置いた
スヤスヤと気持ちよさそうに寝ている栗鼠を波弥斗と広貴は癒されるような顔で見ていた

「か、可愛いなぁー？」

「俺もこんなに動物で可愛いと思えたのは猫以来だよ…」

二人はそのまま気持ちよさそうに見ていたが栗鼠の耳がピクッと動いたのを見て
シャキッとした顔になった

そしてそのまま栗鼠はゆっくり目を開けた…

（注：ここから先は栗鼠視点でお送りいたします）

ここはどこかしゅら？あたち一体どうしたのかしゅら？
たしかクソガキがなげた石があたって気絶して…

あー痛かったわ…まったく腹立たしいガキども…

「！……」
（目の前には波弥斗と広貴がいます）

・・・・ポッ？

ガバッ！！

「「うおっ！？」」

栗鼠は突然波弥斗と広貴を押し倒した。その目はハートになっているが……。

「キィキィキィ…？！！」

「？？どしたんだ？？」

「……さぁ？？でもさ……」

急に抱きついてきた栗鼠に二人は戸惑っていたがすぐに可愛いなとのろけてしまった

こうして、波弥斗達に家族が増えた……。

＊～お知らせ～＊

波弥斗
「……ちゅーわけで！今回俺達二人のペットとなったこのリス！ちなみにメス。
の『名前』を募集します！」

広貴
「応募（？）方法は、メッセージ、感想、何でもいいです！」

灘
「募集日数は一応今日、９月１８日から一週間後の９月２５日を予定してます！！
あ、でも後々変わるかもしれませんけど……」

美衿
「それでは、たくさんのご応募お待ちしてますね♪」

３７＃少年はカブト虫を通し生命の尊さを知る（後書き）

第３７話お開き真にありがとうございます……。

それでは、『くそ下手くそ本当に下手くそ皆様が想像しているのより本当に下手くそいやも死ねばいいのにっていうぐらい』…下手くそな栗鼠の絵をどうぞ！

＞ｉ３１３９２―２４５８＜

もうノーツッコミでお願いします……。

それでは！栗鼠の名前たくさんのご応募お待ちしております！！！

38#歌ってはじけてBON　VOYAGE（前書き）

灘
「えー…この度はたくさんのリスの名前応募…真にありがとうございました！！」

波弥斗
「いやー…ほんとありがとうございます。
こんな馬鹿の呼びかけに答えてくださって……」

広貴
「リスの名前は次回の話でご報告いたします！」

美衿
「という訳で……第38話…楽しんでいってくださいね♪」

38#歌ってはじけてBON　VOYAGE

かぶき町、万事屋には皆さん知っている坂田ファミリーがいる。
そしてその万事屋にはいつもいつも仕事が入ってないわけで……。

「……」
「……」
「……」

もうそれが日常のように普通にのびのびと三人（一匹も）おくっていた

ピンポーン……

いつもは滅多にならないチャイムが珍しいことになるので、
新八は返事をしながら玄関に向かっていった

「はーいどちらさま……」

新八の声が次第に小さくなっていったので不思議そうに銀時は玄関に言ってみた

「新八？依頼だったらさっさと中に――――――――――――――――――」

そして、見にいった銀時の声も新八同様小さくなっていくのを聞き、神楽も面白そうに見に行った

「おーいどうしたアルカーヅラでもきたアルカ？」

神楽が遊び半分に玄関に続く廊下へとゆっくりと歩くとその動きは止まった

「……どうも、お久しぶりです」

そう言いながら頭を丁寧に下げたのは浅生家三兄弟長女・桃であった。

そしてその後ろには弟二人も……。

#

「……お茶です」

ソファーに座っておとなしく座っている三兄弟の前に新八は警戒しながらお茶を置いた

その姿を見た近くの端に座っていた源はため息をつきながら口を開いた

「そんな警戒しないでも大丈夫だよ。僕達はもう君らのことを敵だなんて思ってないし…もう戦う理由もないしね」

源がそう言う声はだんだんと小さくなっていった。おそらく栄一郎のことを思い出したのだろう

源は確かに強いがまだ１４歳。自分が何よりも大切に、大事にしていて慕っていたお方が亡くなった、失った悲しみはそう簡単には癒せていないのだろう

それも分かって…理解してか銀時はハァと肩の力を抜いた

「んで…今日は一体どうしたんだ?」

「はい…実は万事屋さんにご依頼の方がありまして……」

銀時にそう聞かれて真ん中にいた桃がテキパキと口を開いた

～3日前～

栄一郎亡き後、浅生家を取り立てていたのは主に竜彦であった

竜彦は栄一郎がいなくなっても何とか浅生家が滅ばないよう、これまでと同じように
浅生家が将軍家にとって必要と思われるよう、なんとか頑張っていた

毎日毎日寝る間もおしんで……

そんな竜彦を見て、三兄弟は竜彦がお体を悪くされるのではないかと心配だった

「あ、おはようございます関白様」

「あぁ…おはようございます桃さん」

そんな風にここ最近は日常となっている竜彦の歩きながらの書類読み、竜彦は桃に挨拶を言われ笑顔で返したがすぐにまた書類の方に

目をやってしまった

桃は自分の横を通り過ぎる竜彦の姿をずっと見ていると桃の横を完全に通り過ぎた後
竜彦は倒れてしまった

「関白様!?関白様!?しっかりしてください関白様!!」

その後竜彦を自室のベットへと運び三兄弟で看病していたが起きたらきっとまた
無茶をするのだろうということは三人とも分かっていた

「……姉ちゃん、オイラ達にも何か手伝えることないかな」

郷はいつもの元気はなく寝ている竜彦の姿をみて悲しそうに桃に聞いた

「分かりませんわ…私もどうしたらいいのか……」

弟の問いにも答えてやれず、桃をはじめ三人はただただ静まり返っていた

「……ということでございますの」

回想らしきことが終わると桃は小さく口を開いた

「はぁ…でもなぁ…そんなまとめて言われても……」

回想を聞いてもいまいちピンとこないのか銀時は頭をかきながら続けた

「で？お前等も馬鹿じゃねぇんだから…自分等で何か考え付いたこととかはねーのか？」

その言葉を待ってましたと言わんばかりの勢いで三人は目をピカーンと輝かせた

「よく聞いてくれましたわ、万事屋さん」

そして桃達三人はバッとソファーからおりて押入れの前の広い空間へと出た

「私達（わたくし）が考え付いた秘策…それは！！…私、桃（もも）！」

「そして僕、源（みなもと）！」

「俺、郷（ごう）！」

そう言うと三人は三人でできる決めポーズをとった

「三人合わせて、『桃源郷（とうげんきょう）エイリアン』！！」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

その時、万事屋三人の中で桃達に感じる何かが変わったという……。

「どうでしょう？万事屋さん」

決めポーズが終わった後、桃は誇らしげにウキウキしながら銀時達に聞いた

「……いや、それは誰の趣味？つーか話が唐突すぎて全然わか…」

「実は今日これから大会がありまして……

私達はその大会に出て、浅生家のすごさを見せてやろうと思うのです」

つまり、桃の話をまとめると今日かぶき町である大会に桃達は三人一組ででて…

そして優勝したアカツキには浅生家のすごさを下々の者達に教えてやろうと。

そうすれば浅生家のすごさが伝わりまた注目がきて竜彦の仕事が減るのではないかと…

なんだかその話だけ聞くととても頭の悪い考えではあるが……

自信満々の顔をしている三人の顔を見ると万事屋三人は何もいえなくなった。

「…まぁ大体の話はわかった、で?その大会ってのは何の大会なんだ?」

すると桃は口元を笑ったまま何かのはりがみをテーブルに置いた

「それは…これですわ!!」

「「「はぁ??」」」

#

「さぁ源!郷!今日は絶対優勝しますわよ!」

「「おおー!」」

大会の場所についた桃は二人に気合を入れるように声をかけた。

その三人を近くから呆れた顔をしながら万事屋三人と一匹は見ていた

「…銀さん、もしかして…桃さん達って『馬鹿』何ですかね？」

「『もしかして』じゃないネ、迷いのない馬鹿アル」

「どうりであのヤローに仕事を手伝わせてもらえないわけだ」

「クゥ～ン……」

そんな感じに静かに会話をしている銀時達とは違い桃達は元気に準備をしていた。

そして桃達が準備をしていると大会のステージの上からマイクを通じて声が入ってきた

「会場におこしの皆様！只今より第一回『かぶき町のどじまん大会』を開催します！」

司会の者が元気良くそう言うと会場にいる全員がおおぉ～と盛り上がった声をだした

そう、桃達が出て浅生家の強さを教えると言っていた大会とはのど

じまん大会だった…

回りを見渡すと老人や子供が多いがその中で唯一と言っていい程の若者達が近寄ってきた

「ジジイやババアばかりだったから余裕で優勝と思ってたけど……まさか君等みたいなのもいたんだなー」

そう言いながら今時風の若者達の中でリーダー的な位置にいる男が桃達に話しかけてきた

「どうもこんにちわ、今日はどうかお手柔らかにお願いいたします」

桃はそう言いながら軽くおじきをするとリーダーは笑いながら返事した

「あー宜しくねーそれにしても君さー超可愛いよねぇー
この大会終わったらちょっと俺等と遊ばな…いてっ!?」

リーダーの言葉は最後を迎えそうな少し前で止まった、いや正解に言うと止められた

なぜならリーダーが手を伸ばし桃の手を握ろうとした際に銀時がその手を逆に握ったからだ

「今練習中なんだよ、挨拶だけ済んだならさっさと帰りな坊ちゃん」

銀時はそこまで言うとリーダーの手首を握っている力をより一層強

めた

リーダーは苦い顔をすると銀時の手を振り払い仲間を連れてどこかに行った

「あ…ありがとうございました万事屋さ…「銀時な」

銀時はそのまま続ける。

「坂田銀時、万事屋さんっても何か長ェーしめんどいだろーし名前の方で呼んでくれやまぁ別にどっちでもいいけど…俺等も名前で呼ばれた方がお前等の名前呼びやすいし…」

「え……」

桃は少し驚きながら新八と神楽の顔を見るとにかっといい笑顔を見せてくれた

桃は弟二人と顔を見合わせると弟二人は微笑みながら身を乗り出した

「「宜しく銀さん!」」

そして二人はそのまま万事屋三人と仲良く話し始めた

「あ……」

桃は何かを訴えようとするように一瞬だけ手を伸ばしたがすぐにふ

せた

#

「エントリーナンバー1！若者ブラザーズ！！どうぞ！」

司会者がそう言った瞬間、万事屋三人はズルッと崩れた

「ダセェ…」
「ダサいですね」
「ダサすぎアル」

定春に寄りかかって三人が呟いている桃達にも聞こえてなく歌に集中しようとしている

『えー…俺達の曲……”坂の下の向日葵畑”聞いてくれ』

若者ブラザーズはライブとかでよくありそうな感じの言い方でマイクを通じてそう言った

あ～♪お前を自転車の後ろに乗せて～よく行った～坂の下の向日葵

畑～♪

俺はお前につかまって～俺のハートを捕まえた～♪

「「「……」」」

この曲を聴いて万事屋三人が揃って苦い顔をしたのはいうまでもない

ちなみにこの大会は１５組出場していて桃達の順番は１２番目である。

そして一組一組自分達で作ったオリジナル曲を歌っていく仕組みとなっている

曲の時間は3分までと決まっている

大体がこんなルールだが、そうこうしている内に桃達の順番は近づいてきて、

桃達は色々準備の時間もいるということでステージの方に向かっていった

「あっれーさっきの可愛い子はー？」

万事屋しかいなくなったその場に現れたのは若者ブラザーズ達だった

「ねぇねぇお兄さん、さっきの可愛い子は？ねぇー？」

「うるせー黙れ酸素を吸うなクソガキ」

リーダーの喋り方にイラッときたのか銀時は目を合わせずそう返した

「俺の聞いてくれてた？？なんかいってなかった？？かっこいーとかー」

それでもリーダーは懲りずにそのむかつく口調のまま聞いてくる

「神楽」

「がってんアル、定春行くネ」

銀時が一言そう言うと神楽は定春を触っていた手をパッと離した

すると定春はリーダーに向かっていて吠えながらかみつきにいった

リーダーやそのチームの奴等は驚きながらどこかに逃げていった定春はそのまま追いかける

「ふん…ちょろいもんネ、定春ゥー戻っておいでー」

神楽がそう言うと舞台から司会の声が流れ込んできた。どうやら桃達の番がくるらしい

ステージの方を見ると桃がマイクを持ち、源がバイオリン、そして郷がオルガンの楽器を担当しているという風になっていた

全員衣装に着替えており桃は白いワンピースの白いハイヒール、髪型も服装に合わしておとなしい髪形になっていてまるで人形のように可愛らしかった

源と郷はおそろいの黒い服を着ており源はともかく郷は見た目をカバーしているように見える

『…曲名…”大切な人”……聞いてください』

桃がマイクを通じてそう言うと最初は源のバイオリンと郷のオルガンの
バラードメロディーから始まっていた

二人共どこかで楽器でも習ったのかと思うくらい綺麗な音を奏でている

「へぇー、源君と郷さんって楽器上手何ですねーねぇ銀さん…って銀さん!?」

新八が言いながら銀時の方を見ると銀時と神楽は屋台の食べ物を食べるのに夢中だった

「え何?もう始まってんの?しっかしこのたこ焼き案外いけるぜ新八」

「お前ら何しにきたんだァァァ!!!」

「もちろんタダ食いアル」

「ちげーよ！！」

そして新八は二人の食べ物を取り上げるとちゃんと聞きなさいと叱ったりしていた

「ていわれてもなぁ…こんなかったりー曲聴くになれ……」

『突然いなくなったー大切な人ー……』

銀時の言葉は歌い始めた桃の歌声によって止まった

いや、銀時の言葉だけでなく会場にいる全員の動きが一瞬止まった

『世界でもっとも大切な人ー……』

最初のその部分を歌っただけでその場にいる全員が分かる真実

”桃がどれだけ歌がうまい”ということだ。

うまいなんてものじゃない、桃は元々綺麗なソプラノ声であったが……

歌を歌うとなるとそれがまた違う
ただそのソプラノ声を歌うのではなく見事に自分の声をコントロールしている

『私はとても無力……たった一人大切な人も守れないほどー……』

歌の歌詞にあわせて感情的に、激しく、優しく、悲しく、楽しく、すべてを持ち合わせて…

誰もが今まで聴いたこともないような綺麗な歌声に、会場中が虜となった

『それでもあなたが決めたその道はー……私は止めることはできないー……』

曲を聴いていくにつれ万事屋三人、特に銀時は感じた

この曲は栄一郎を想って作られた歌――――――――――

『だけどずっと忘れないーあなたのことをー……』

栄一郎のためだけの歌……

『あなたの偉大さ、優しさすべてー……ずっと私達の心の中にあるからー……』

「「「……」」」

こうして、桃達の曲は終わった……

#

『それでは皆様！すべての曲が終わりました！！これより結果を発表したいと思います！！』

三兄弟の演奏が終わりそれから数十分後、すべての演奏を終え結果

の時間となった

三兄弟は今ステージの上にいる

『優勝は……”桃源郷エイリアン”チーム！！！素晴らしい演奏ありがとうございました！」

司会者が元気良く結果を発表すると会場の全員がわぁっと声をあげた

そして司会者は三兄弟に近づきながら喋り続けた

『優勝した桃源郷エイリアンチームには賞金５０万が贈られます！さて、優勝した桃源郷エイリアンチームの皆さん、今のお気持をどうぞ！』

「え……」

司会者はそこまで言うとマイクを桃に渡した、何やら戸惑っているようだが……

「桃…どうしたアルカ？何か様子変ヨ……」

「銀さん……」

「……」

万事屋三人が心配しているとやっとマイクを通じて桃の声が入ってきた

『わ…私達が…優勝だなんて…とっても嬉しゅう思います……あの……』

一旦桃はマイクから声をはずし、またすぐに喋り始めた

『あ…浅生家は…これからも…将軍家に忠義を誓い…あなた達をお守りしますな、なので!どうかこれからも浅生家のことを……!宜しくお願い致します……』

桃は不安そうな声でそれだけ言うと桃はすぐにマイクを司会者へと返した

そして会場の人達は何で急に浅生家の話?など色々でたが…

しばらくすると会場中から拍手が起こり、喜びの声が上がった

「……」

そして、三兄弟達は驚いた様子でそれを見ていた……

#

「おめでとうございます！！、三人方」

「よかったネ！私には適わなくても桃もうまかったアルヨ！」

ステージでのやり取りを終えて戻ってきた三兄弟は新八と神楽の言葉で迎えられた

「……ありがとうございます、この優勝賞金は…依頼金として万事屋さんに……」

桃はそう言いながら袋を渡した優勝したというのに…三兄弟の表情は暗い。

そんな三人を見て新八と神楽は口をつぐんでしまった

「……ったく……折角優勝したってのに……何暗ェー顔してんだオメーら」

「銀{さん／ちゃん}…」

新八と神楽の後ろから口を開いた銀時の顔を見上げながら二人は言った

そして銀時はゆっくりと三兄弟の目の前に来た

「…大丈夫だ……お前等がどれだけ栄一(あいつ)郎を想ってくれたかも……どれだけ浅生家を大事に想ってるかも……きっとあいつに届いたはずだ」

「！……」

銀時がそういうと桃はグッとつぐんでいた口を小さく振るわせた

そして銀時は一番前にいた桃の頭にポンと手のひらをおいた

「……頑張ったな……」

…………――――――――――――――！！

その言葉により桃は今まで我慢していたものが切れたようだった

「銀……さんっ私……ずっと……ずっと……我慢して……」

＞ｉ32264―2458＜

「……私が泣いたら……源と郷も……よけい悲しくなるから……」

桃は言葉を一つ一つ言うたびに涙がこみ上げてきていた

「でも……今日は……今日だけは……！！」

栄一郎様……今日だけあなたの死を想って泣くことを許してください……

弱い私を許してください……

あなたはこれからも私達にとって『大切な人』だから、誰よりも大切な人だから……

38#歌ってはじけてBON　VOYAGE（後書き）

今回は久しぶりに挿絵を描いてみました！

ほんとは二枚描こうと思ったんですが…何回も書き直して限界がきたので……

一枚だけといういいことに…すいません！

次回に出来れば今回の三兄弟の格好でも描きたいと思います

後、今回三兄弟が歌った『大切な人』のイメージメロディーでも今度活動報告に書いてみますね（笑）

そして、今回明らかになった桃達の名前の由来！

ももとみなもととごうを漢字で並べると『とうげんきょう』になるんです！

気付いてた人…いらしたでしょうか？？

ていうか何で年下の源の方が『げん』何だって話ですけど……

ぶっちゃけこれ後付けとかじゃなく理由があります。

それはまたいつか原作ででもサラリとお話しようかと思います♪

それでは次回も宜しくお願いします！

39#焼きもち焼きの彼女を持つと彼氏は大変（前書き）

灘
「え～募集してもらったリスの名前ですが…選ばれたのはこの方のこの名前！」

元：ｇａｎｍａさん

現：杉村祐介さん

命名：『栗乃（くりの）』

です！

波弥斗
「ちなみにこの名前は作者が決めていません」

広貴
「作者が名前を弟や友人にみしてその中から『リスっぽいから』とかという理由等でこの『栗乃』が選ばれました」

灘
「でも、たくさんのご応募本当に嬉しかったです！
真に真にありがとうございました！」

美衿

「それでは、３９話のはじまりです♪」

39#焼きもち焼きの彼女を持つと彼氏は大変

「ほーれ栗乃（くりの）、どんぐりだぞどんぐり♪」

「キキィキキッ♪（やだー波弥斗ったらー♪）」

土曜の昼、波弥斗は自分達の部屋で寝転びリスの栗乃にどんぐりをあげていた

何やらリスの言葉がはみ出ているがそこはあえて無視の方向で……。

「ほんっと栗乃は可愛いなぁー……あ、栗も食べるか？」

「キィ♪」

栗乃が短くそう返事をすると波弥斗は自分の横においてある籠の中いっぱいにある
どんぐりやら栗やらの中から栗を取り出した

栗乃はそれを受け取るとおいしそうに音を立てながら食べ始めた

「おーい波弥斗ーオババがりんごくれたから食べようぜー」

「おー広貴ーオババがりんごをって…あのオババもたまにはまともなモンくれんのな」

「キキィー？（広貴ー？）」

栗乃がちょうど食べ始めた時に広貴は手にりんごを2，3個持って笑顔でやってきた

それを見て波弥斗はりんごに手を伸ばし栗乃は喜びながら広貴に飛びついた

「おいおい栗乃ーちゃ～んとお前にもやるからおとなしくするんだぞー」

広貴は飛びついてきた栗乃を落ちないように支えると笑顔で甘やかすように言う

そしてそのまま広貴はそこに座るとりんごを綺麗な手さばきで切っていた

「ほい栗乃」

切り終えると広貴は持ってきたフォークでりんごをさし栗乃の口に持っていってやった

「キキィキキッ？」

それを栗乃は嬉しそうに食べると波弥斗と広貴もそれを見ながら和むような顔をしてりんごを食べ始めた

「お祖父様、最近波弥斗と広貴が部屋に入っている時間が多い気がしませんか？」

一方九兵衛は最近食事や稽古（広貴のみ）やその他の生活に必要なこと以外、波弥斗達が部屋から出ていないことが気がかりだったそのことを何やら庭でごみのようなものを運んでいる敏木斎に聞いた

「あやつらなら…可愛らしいメスのリスを拾ったようでそれの世話をしておるそうじゃ」

「……リス？？」

「ああ、気になるなら様子を見にいけばよかろうて」

敏木斎は最後にそういうとまたごみのようなものを運び出した

その後姿を九兵衛は見ていたがしばらくすると顔に手をあてて考えるような格好をした

「……リスか……」

それだけ呟くと九兵衛はゆっくりと部屋から出て行った

#

敏木斎の話を聞き部屋から出た九兵衛は波弥斗達の部屋に向かっていた

先ほどと同じように顔に手をあてたまま。

（メスのリスか…と言うよりあの波弥斗が動物の面倒……以外に動物好きだったのか??）

そんなことを考えながら九兵衛はきちんと前も見ずに曲がり角をま

がった

ドンッ！！

「てっ！？」
「うわっ！？」

角をまがると同時に響いた二つの声

九兵衛はその場にしりもちをついたがどうやら相手も同じらしい

「ってて～…あ、若さん！！」

「…広貴…」

九兵衛がぶつかった相手とは広貴だった。どうやら急いでいたようだが……

「すいません若さん、怪我とかしてませんか？」

「ああ…大丈夫だ……」

広貴はそういいながら九兵衛の手を掴み立ち上がらせようとした

「うわあああぁぁぁぁぁぁぁ！！！」

その瞬間、広貴は横の壁へと思いっきり投げられた

広貴がぶつかった壁は深くへこみ、広貴が気絶寸前なのは言うまでもないだろう…

「おいっ！？何の音だよ！？」

「…波弥斗！？？いやコレは……！！」

その音を聞きつけ曲がりかどの方からやってくる波弥斗の方へ振り向きながら
九兵衛は慌てた声を出した

「……」

「……」

波弥斗の肩の上にはリス。

九兵衛の横には気絶寸前の広貴。

「お前広貴に何したんだよ！？」

「何で肩の上に乗っているんだ??」

お互いは声が重なってよく聞こえなかったという……。

#

「ったくバカ広貴が…アレだけ九兵衛には触んなってたのに……」

「……すまん広貴」

あの後波弥斗は広貴を自分の部屋へと運んで只今布団にて睡眠中である

九兵衛は寝ている広貴を見て申し訳なさそうにしていた

「……それで波弥斗それがその…拾ったというリスか?」

クルッと向きを変え、波弥斗の肩にのっている栗乃を指差しながら九兵衛は問う

「ああ、栗乃ってんだ可愛いだろ」

波弥斗は栗乃を撫でながら微笑みながらそう言った

「……ふーん…」

その様子をジーッと見てくる九兵衛に気付いたのか波弥斗は撫でるのを止めた

「……触るか？」

「は？」

波弥斗は九兵衛の隣に座ると栗乃を手のひらにおいて九兵衛の前に差し出した

そして九兵衛は最初は戸惑ったがその後ゆっくりと栗乃に手を伸ばした

「……（ドキドキ）」

ゆっくりだけどそのまま栗乃に触れると九兵衛は小さく笑顔を見せた

「…可愛いな」

「！……だろ？？」

そんな九兵衛の姿を見て波弥斗もつい笑顔になったが。

その光景を見て、一人…いや一匹…不機嫌になった者がいた……

（……何なのかしゅら、男の子同士だってのにこの二人を見てるとイライラしゅるわ……）

栗乃は九兵衛に触られながらそんなことを考えていた

「あぁそうだ栗乃、こいつの紹介するよ
こいつは柳生九兵衛ってな、こいつこう見えて実は『女』何だぜ～」

「！！！」

波弥斗は笑いながら栗乃に九兵衛の紹介をした

（な…何でしゅって……女？こいつが……）

栗乃はふつふつとあからさまに怒りを見せ始めた

「……おい波弥斗、気のせいだろうか栗乃何だか熱い……うおっ！？？」

九兵衛が喋っている途中、栗乃のライダーキックが九兵衛の顔にジャストフィットした
そして着地した栗乃は少林寺拳法のような構えをしている

「栗乃！？おい九兵衛大丈夫か！！」

急いで波弥斗が九兵衛に駆け寄ろうとすると栗乃は二人の間に素早く入った

「キキィ！！キキッキキッ！（波弥斗達は誰にも渡しゃないわ！）」

栗乃が殺意丸出しで九兵衛にそれを言っているの見て波弥斗はよく分からない顔をした

そうこうしていると九兵衛はムクリとゆっくりと起き上がった

「……なるほど…そういうことか…いいだろう栗乃、その勝負受けてたってやる！」

九兵衛はおきると同時によく分からない発言をした

「キキィ…キキィ…（ふん…このあたちの勝負を買うなんていい度胸じゃない…）

「僕は柳生家次期当主、それぐらい当然だ……」

何で通じてんだよ、波弥斗はうっかりツッこんでしまいそうだったそうな……。

「キキィキキッキキッー！！（あたちの方がお前より波弥斗を愛してるわーーー！！）」

「ぬかせ栗乃！！僕だっ……て……？？」

しばらくしてから栗乃を言っている意味に気付く柳生家次期当主。

「ち…違う！！／／僕はそういう事はない！！」

「キキィキキッ！！
（嘘をおっしゃい！さっき波弥斗のことを愛しそうな顔で見てたじゃない！！）」

「？？？（↑波弥斗には言葉が分かりません）」

しばらく二人（？）は言い争いをしていると九兵衛はついに部屋を出て行ってしまった

「ちょ九兵衛！？おい！？」

波弥斗は九兵衛を追いかけようとしたが栗乃の抱きつき（というか突撃）にあい
しばらくそこから動けなかった

＃

「あら九ちゃん、おでかけ？」

「！お妙ちゃん……」

部屋を飛び出した九兵衛はそのまま玄関を出て門を出ようとした

しかしその時ちょうど柳生家の門をくぐってきたお妙と遭遇してしまったのだった

「おっ…お妙ちゃんどうしてここに…？？」

「ああ、気にしないで。ちょっとこの近くに来る用があって……よかったら九ちゃんと一緒にショッピングでもしようかと思っただけだし」

お妙はいつも九兵衛などに見せる優しい笑顔でそう言った

「…いや全然大丈夫だよ、妙ちゃん」

「本当？それじゃあ行きましょう」

大好きなお妙にそういわれて九兵衛はそのまま出かけようとした

「九兵衛！！」

「！」

出かけようとした九兵衛をとどまらせた声はさっきまで同じとこにいた…

「波弥斗……」

九兵衛はゆっくりと目を見開きながら後ろを振り向いた

そして、目に見えた波弥斗の肩にはやっぱり栗乃がいるわけで。

九兵衛はとっさに波弥斗から目をそらしてしまった

「どうしたんだよお前…
ってあんたぁ確か…新八の姉ちゃんの……妙さん??」

「あら、あなたはいつぞやの…確か悠基…波弥斗くん…でしたっけ??」

波弥斗とお妙は約27話ぶりぐらいに会った。（ゲームのナレーション風に）

「あら作者兼ナレーションさん誰のせいで私はこんなに出れなかったのかしら
どうして原作キャラの私を差し置いてオリキャラ達の方が活躍してるのかしら」

「妙さん、妙さん、笑顔怖いっすマジ怖いっす」

すいませんすいませんすいませんすいませんすいませんすいませんすいませんすいませんすいま…

「ちょおおおお作者が!!作者兼ナレーションが!!」

波弥斗は天の声の人にツッこんでいる間にお妙は九兵衛を連れて階段をおりていった

それから二人はいつものように広い町の方に出ていつものように買い物をしたり
お話をしたりしていた

ただいつもと違うのは、九兵衛が少し元気がないということか。

「九ちゃんどうしたの?今日は元気がないわね」

そんな九兵衛の様子に気付いたお妙が声をかけてみた

「え?そんなことないよお妙ちゃん、僕はいつだって元気さ」

そういいながら九兵衛は無理に作ったような笑顔を見せて見せた

自分に心配かけさせまいとか、それとも…
九兵衛自身が自分に元気がないことに気付いてないのか。

親友のそんな姿を見かねたお妙は九兵衛を自分の家へと連れて行った

#

「九ちゃん、何に悩んでいるかは知らないけど…あまり一人で悩みすぎないでね」

お妙はお茶を九兵衛と自分の前に置くと九兵衛の向かい側に座りながら口を開いた

「私ね、九ちゃんが嬉しい時は一緒に喜びたいし…
九ちゃんが悩んでいる時は一緒に悩みたいの、だって私達…友達でしょ？」

優しく笑いながらいつも九兵衛に見せるような笑顔をしながらお妙は言った

「そうですよ九兵衛くんお妙さんの言うとおり！！
何でも悩みは自分だけに留まらせずちゃんと吐き出した方すっきりするよ！！うん！」

「そうそう…吐き出した方が……って
何でここにいるんじゃゴリラァァァァァ！！！」

「グボオォォォォォ！！！

お妙は先程までとまるで別人のような顔、口調で近藤（ゴリラ）に裏拳をくらわした

近藤はそのまま志村家の庭の石まで吹き飛んでいった

「……それで？九ちゃんは何に悩んでいるの？」

お妙は庭にあるゴリラの存在を何事もなかったかのように話を切り替えた

そして九兵衛は一息考えるようにお妙から目を一旦逸らすとすぐバッと目を合わせた

「……実は……」

その後、九兵衛は今日起こった出来事についてや自分の心情をお妙に話し始めた

＃

「……なるほど、リスねぇ……」

お妙はそう納得したように呟くと湯飲みを机の上にそっと置いた

「……それは、所謂『やきもち』なんじゃない？」

「やきもち？？何だそれは妙ちゃん」

九兵衛がほんとに分からないような顔をして聞き返すとお妙は
ほんとに九ちゃんしらないの？という顔をして教えてくれた

「やきもちっていうのはね…ほら兄弟とかで親が片方の子ばかり可愛がっていると
なんだかムカムカしちゃったりするでしょ？あーいうのよ」

「なるほど……」

お妙が分かりやすく説明してくれると九兵衛は顔に手をあて納得したように言った

「お妙さん！！僕は常にやきもちを妬いていますよ！！
お妙さんの半径５０m以内に近づいた男には皆…ゴフッ！！」

次はお妙はツッこむ間もなく攻撃をくらわした
今度こそ立ち上がれないだろうと思うくらい。
そしてストーカーの処分が済むとお妙はとにかく！と言いながら立ち上がった
「家に帰ったら…もう一度話しみなさい、そうすれば解決するかもしれないでしょ？」
「う、うん……」
九兵衛は小さく返事をするとお妙に見送られ志村家を後にした
（……やきもち…か…）
志村家を出た後、九兵衛はトボトボゆっくりと足を動かしていた
『キキィキキッキキッー！！（あたちの方がお前より波弥斗を愛してるわーーー！！）』
『九ちゃんどうしたの？今日は元気がないわね』
「……」

『やきもちっていうのはね…ほら兄弟とかで親が片方の子ばかり可愛がっていると
なんだかムカムカしちゃったりするでしょ？あーいうのよ』

「……！」

九兵衛はなんとなく今日印象的だった言葉一つ一つ思い出している途中に立ち止まった

（……もしかして…僕は……波弥斗のことを……）

そこまで考えると九兵衛はまったく別人のような走りを見せ、柳生家へと向かった

#

「…おっせーなぁ…九兵衛のやつ……」

一方波弥斗はと言うと九兵衛が出ていった後、栗乃を広貴に預け玄関にずっと座っていた

栗乃と九兵衛がいるとまた（理由はしらないけど）喧嘩をしそうだったからだ

そんなこんなで今日何回目か分からないため息を波弥斗はした

「……あ…」

ふと前を見ると息を切らしながら走って門をくぐっている九兵衛の姿が見えた

波弥斗は急いで駆け寄ると九兵衛はちょうどその場にひざをついてしまった

「おい九兵衛!?お前…一体どこから走ってきたんだよ!大丈夫か!?」

「だい…丈夫…だ」

波弥斗も九兵衛と同じようにしゃがみそう質問をすると九兵衛は途切れ途切れにそう言った

辛そうな九兵衛の姿を見て、

波弥斗は水持ってきてやるといいながら屋敷の中に入ろうとした

「大…丈夫…そんなことより…言いたいことが……」

だいぶ楽になってきたのか、九兵衛はゆっくりと立ち上がった

「言いたい…こと??」

「ああ、僕は…波弥斗のことを……」

回りには誰もいない。後ろには夕日。見事といえば見事なシュチュエーションである

「僕は…波弥斗のことを……」

「九兵衛……」

（おいおいおい…ちょっと待てこれって……）

いや別に嫌いじゃないけど、いや別に嫌いじゃないけど！
お付き合いとかそーいうんはちょっと…ほら！俺達ご主人様と召使いみたいな関係じゃん！
だから…ほら！！

内心波弥斗めちゃくちゃ天パッていたそうな……。

「僕は……！！君のことを……！！」

嫌いじゃないけど！嫌いじゃないよ！？でもほらやっぱり俺達――
――――――……

「兄弟だと思ってたんだ」

「……はい？」

あまりに予想外の言葉に理解できない波弥斗。

「だから、僕は君のこと兄弟だと思っていると言っている
だから栗乃に対してそう感じていたのも理解できる、そういう訳だ」

「いやあのお譲さん??…何を……」

一人勝手に納得してうんうんと頷いている九兵衛に
目を点にして波弥斗は何かを訴えるようにした

しかしそんな言葉は聞こえていない九兵衛は清清しい笑顔をして屋敷の中へと入ってった

「いやーやっと解決できた、よかったよかった、それじゃあ栗乃とでも遊んでくるよ」

などと言いながら……

「・・・・・・」

一人取り残された波弥斗はしばらくボーッとしていた

#

（ったく……無駄になんか勘違いしちまった自分が恥ずかしいな…）

我に帰った波弥斗は自分の部屋へと頭をかきながら帰っていた

（ていうか、あの九兵衛に限ってそんなことあるわけねーのに……）

そして、自分の部屋までたどり着き波弥斗は部屋をゆっくりあけた

「ただいまー……・・・・」

「キキィ！！キキッーーー！！（まだまだこれからよーっ！！）」

「望むところだ！リスだからって手加減はしないぞ！！」

部屋を開けた瞬間に見えたのはまたもや人間とリスのド派手な喧嘩。

「……」

波弥斗はその光景を呆れた顔をして見ていた

が、しばらくするとクスッと笑った

（こいつらが仲良くすんのは、まだまだ時間がかかりそうだなー…
…）

喧嘩に巻き込まれ気絶している広貴をほっとき、
波弥斗はしばらくその喧嘩を楽しそうに見ていたそうな――

39#焼きもち焼きの彼女を持つと彼氏は大変（後書き）

ありがとうございました！

後、前回載せるっていってた絵はちょっと見逃し（？）です

すいません！

それではまた次回もどうか宜しくお願いします！

４０#オカマは男のバカさも女のズルさも全部知ってる（前書き）

灘
「今回は…たぶん初めてになる後書きも合わせて3枚挿絵を載せてみました！」

波弥斗
「下手くそなのにな」

広貴
「え、何？お前３８話の挿絵からＧペンで描いてんの？どーりでよりペン使いが悪くなったと思……」

灘
「わーーーー！！！
それは言ったら駄目だろお前ェェェェェェェ！！」

銀時
「おい…まさかとは…まさかとは思うけど今回の話……」

新八
「タイトルからして……」

神楽
「『あいつ』が出てくるアルカ…？」

灘
「その通りです！」

万事屋全員
「ふざけんなあぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！」

美衿
「それじゃあ４０話、宜しくお願いします♪」

４０#オカマは男のバカさも女のズルさも全部知ってる

「…眠ィ…ったくあのクソババァ…人使い荒ェーんだよな……」

ＡＭ：７時半。波弥斗はかぶき町のあるお茶屋まで来ていた

肩には栗乃もいる。

なぜ波弥斗がこんな朝早くからそんな所に向かっているかは理由があった

今朝のことだ。オババはいつものように朝食を作る準備をしていた

しかし、いつも食後に輿矩にお出ししている紅茶の葉がないことに気付いたのだった

以前お出し忘れた時１ヵ月近くグチグチ文句を言われた記憶があったのでオババは考えた

自分がここで抜け出しては朝食の作りが遅くなる、かといって出さないわけにはいかない

そこでまだスヤスヤと睡眠中だった波弥斗を叩き起こして買出しに行かしたのだ

しかもかぶき町のその店のじゃないと奥矩は飲まないというのでわざわざこんな所まで。

「本当なら俺はまだ夢の中でハーレムだったはずなのに……なぁ栗乃」

「キィ」

現実で起きてないことをせめて夢の中だけは起こそうとするモテない17歳男子の執念

(でもおかしいな、俺結構顔も悪くない方だと思うのに…何でモテないんだろ……)

そんな風に文句をグチグチ言ったり考えたりしながら波弥斗は目的の場所にたどりついた

「すいませーん、あの電話した柳生の者なんすけどー……」

「あ～ハイハイ、いつもありがとうございます、ちょっと待っててくださいね～」

店の店員は朝からだが元気良く笑顔でそう返事をすると横から何かを探し始めた

ウィーン……

「ん？」

店のガラスの箱に入っている色んな種類のお茶ッ葉を波弥斗が見ていると
後ろから自動ドアが開く音が聞こえたのだった

こんな朝早くから俺以外にも客がくるんだなとか思いながら波弥斗はそちらを見てみた

「！！！」

波弥斗はその入ってきた人の方を見るやすぐに目をそらしてしまった
青ざめた顔をして

なぜならその者とは……

「お茶屋さんいつものお茶っ葉よろしいからしら～？
ごめんなさいね～朝早くから～昨日の内に店の子が買うの忘れてて……」

「あ、西郷さんおはようございますー」

お登勢と同じくかぶき町四天王の一人で究極のオカマ、『鬼神マドマーゼル西郷』だった

一度、波弥斗も西郷が経営している店に入ったことがあったが3秒も持たなかった

何かもう恐ろしすぎて波弥斗は必死でそちらに顔を向けないようにしてた

（こっこここここ怖エエエェェェェェェェェェ！！！
超怖ェーよ！超恐ろしいよ！！間近で見るとこんな破壊力があんのかアアァァァァ）

（キキィキキーッ！！
※何なのこの化け物はーー！！）

大量に汗を出しながら波弥斗は内心超テンぱりながら背をむけていた

「はいどうぞ西郷さんいつものお茶ッ葉です」

「悪いわね～」

「！！」

関わらまい関わらまいと考えていた波弥斗だが、この展開には質問

するおえなかった

「ちょっと待てよ!!何で俺の方が早いのに何でそっちの人の方が早ェーんだよ!!」

そんな小さなことを気にするからモテないんだろうなぁとか思ったりもしましたが

波弥斗は店員さんに怒りを見せながら怒鳴った

すると店員は申し訳なさそうに手を顔の横でふった

「すいませんお客さん!!でもこの方はその…」

「人は皆、生まれたときに平等の権利を持ってんだよ!!」

波弥斗はずいずいと前に出ながら怒鳴り続けると西郷は横からわった

「まぁまぁそんな固いことといわないでよ、
たまたま私が頼んだ物が近くにあったからってだけの話よ、ねぇ?」

「黙れ化け物!!」

その刹那、波弥斗はやっちまったと思った同時に体に痛みが感じた

ドゴォォォン！！！

とてつもなく大きな拳が波弥斗の顔にクリーンヒットした

虚ろになる意識の中で、栗乃が悲鳴っぽい声をあげてる鳴き声だけが頭に響いてた

そしてそのまま波弥斗の体は店の外にまでぶっ飛ばされた

「……誰が、化け物だコラ」

ＡＭ：８時　柳生家にて

「……広貴…波弥斗はどうした??」

柳生家の朝食の時間、時間はいつも通りだが一つ違う所といえば、波弥斗が朝食の場にいないという所だ。

それに気付いた九兵衛は自分の朝食がおいてある座布団の上に座りながら聞いた

「ん～…あぁおはようございます若さん
波弥斗なら…今朝おつかいに一緒に行った栗乃がしばらく帰ってこれないって書かれた手紙と紅茶の葉を預かって帰ってきましたよ」
すでに食べ始めていた広貴は一旦箸を止め、九兵衛の問いに答えた

「帰ってこない…？またどうして…？」

「さぁ～？？あの年の男ってのは色々あるんすよ
まぁ気にするだけ無駄ですよ」

大して気にしてないのか、広貴は短くそれだけ言うとまた食事を食べ始めた

「……」

少し気がかりではあったが九兵衛も黙って朝食を食べ始めた

#

「ったくあのクソババァが…
家賃払えないんだったら強盗でも何でもしてこいなんぞと無茶ばっかいいやがって…」

「しょうがないでしょ払ってない銀さんが悪いんだから」

万事屋三人はたまった家賃を払う為に人手が足りなさそうな『かまっ子倶楽部』に
足を運んでいた

たまに家賃が払えない時はこうして西郷の所に行ってるのだ

そしてかまっ子倶楽部の前まで来るといつもと違い店は活気があった

万事屋三人は首をかしげながら店の中をのぞきに行った

「ほ～んと別嬪だなぁ～『悠(ゆう)ちゃん』は～」

「も～おだてたって何にも出ませんよ～」

「いやいやおだてじゃねーよ悠ちゃんがいるなら俺毎日店通うよー」

「もー♪」

＞ｉ３３０１３―２４５８＜

一つのテーブルに集まってるおっさん達の人だかりの中で楽しそうに笑っている美少女
それは万事屋達もよく知っている……

「……波弥斗??」

銀時はテーブルの近くまでくるとその美少女の前でそういった

「……ア…アニキ……」

銀時にそう言われ、美少女は引きつった顔になった。

仕事の休憩をもらった悠ちゃんこと波弥斗は店の裏にて万事屋達に状況説明中だった

「のわりにはノリノリだったアルナ」

「いやだって!やったら給料くれるっていうから!」

説明を終えた後、神楽は酢昆布を食べながら波弥斗にそう言った

「俺ァてっきり波弥斗が何か目覚めたのかと思っ……」

「いや止めてくんない!?ほんと違うからな!!
だからこのことはどうか広貴や九兵衛達には内緒で……!!」

必死に頼んでいる波弥斗を見て万事屋三人は何か考え付いたのか黒い笑顔をした

その瞬間、波弥斗はしまった…と、とても後悔したのだった

「くっそ〜…かまっ子倶楽部で働いた給料よこせだなんて、山賊かあいつら……」

あの後、銀時達の脅しにあい波弥斗は今回ここで働いた給料を万事屋に渡すことになった

働く手間が省けた万事屋はそのまま家に帰っていった

折角頑張って働いていたのに、とブツブツ文句をいいながら波弥斗は裏口のドアを開けた

「あ、悠ちゃんーどこいってたのよぉーママが呼んでたわよぉ」

店に入るといつもの君の悪い声が、自分に飛んでくる
ここ数日間毎日その繰り返しだ
（……こんなに広貴や九兵衛達の声が恋しいと思ったのは初めてだな……）
ここに来てからもう何度目か分からないため息をして店の方のドアをあけた
「ママ、呼んだ？」
だるそうな声で波弥斗は店の子達を掻き分けながら西郷の元へ行った
「あぁ…やっと来たの悠、遅いわよ」
”悠”それがここでの波弥斗の名前だ（悠基波弥斗の悠から）
「悪ィママ、ちょっと知り合いが来てたもんでな。で？用って何？」
「実は新しい子が入ってねぇ悠、面倒みてちょうだい」
えーっと文句を一度言うと西郷に怖い形相で睨まれたので
波弥斗はそれ以上文句を言うのを止めた
そして波弥斗はその新しい子って誰？と波弥斗は小さく回りを見渡した

「この子よ」

そう言いながら西郷は新しい子がいると思われる方向を指差した

「「……」」

まるで時が止まったかのような瞬間だった

「ん？どうしたの？悠、『広美』」

そういって波弥斗の次に言われた新しい子…つーかオカマは……

「何してんの……波弥斗……」

「お前こそ何してんの……広貴……」

＞ｉ３３０４６―２４５８＜

波弥斗の前に姿を見したオカマとは、広貴だった…

#

「今日の朝……」

夕方、自分達の出番が来る前にかまっ子倶楽部の楽屋で広貴は女装を解き説明を始めた
（ちなみに部屋は波弥斗と同じ）

帰ってくるのが遅いお前を心配した若さんが、お前を探しに行くって言い始めたんだ

だけどそれは駄目だって話になって…そこで話し合いで俺が行く事になったんだけど…

とりあえずお前が最後に言ったと思われるお茶屋に行って話しを聞いたら、

お前が西郷って奴に連れて行かれたっつーのを聞いてその場所聞いてここにきたら

バイト希望者だと誤解されてこうなった……

「……みたいな感じだ」

話し終えると広貴は後悔したように肩を落とした

「……まっまぁ…俺はちょっと違うけど…大体俺もそんな感じだ」

広貴の話を聞いた後、波弥斗は今できる精一杯の引きつった笑顔で広貴にそう返してあげた

「とにかく！俺はもうこんな所にいたくねぇ！！何とかして逃げる機会を見つけて二人で逃げるぞ！広貴！！」

「とーぜんだ！！こんなオカマじゃ神楽さんに会いにいけねーしな！！」

そして二人はお互いそういい終わるとガシッと手を握った

「悠ー広美ーそろそろ出番よ準備してー」

楽屋のドアを開け、アゴ美ことあずみがそう言うと二人は慌てて女装した

二人はこの後舞台で踊ることになっている波弥斗の人気があまりに

も出たので
西郷が踊り子として出すことにしたのだ

ベンベケベン♪　ベンベケベン♪

三味線の愉快な音を奏でながら波弥斗と広貴の二人は扇子を持って
踊っている
客に笑顔を向けながら踊っている波弥斗とは対照的に広貴は無愛想だ

「おい広貴、お前腰の動きがなってねーぞもっと腰をふれ
後、笑顔を忘れるな笑顔を。そんな笑顔じゃ客は喜こばねーぞ」

「……波弥斗、お前ここの空気を吸いすぎたな
もうシャバには戻るのは無理なんじゃねーか」

とんでもない事を言ってきた波弥斗に広貴は常識をツッこんだ

「ふざけんな俺は外に出て年上の女の人にモテるという大事な使命
があるんだ」

「こんなとこでノリノリで踊ってる奴なんか誰も好きにならねーよ」

広貴との会話のせいで、波弥斗も気だるそうになったのを見て
一旦三味線を止めてアゴ美は二人の方を見た

「ちょっとぉ～悠も広美もノリが悪いわよー」

「「うっせぇよアゴ美！」

「誰がアゴ美だあずみだクラァ！！」

お客さんは見てると言うのに三人の言い争いが始まってしまった
するとカウンターの方で飲んでいた一人のおっさん客が野次をとばすようになってきた

「いい加減にしろよ！グダグダじゃねぇーか！
こっちはわざわざお前等みたいな化け物を笑いにきてやってるっつーのに！」

「んだとクソジジィ、お前二度と笑えねぇ体にしてやろうか」

「止めとけ広美」

今にも客とケンカを始めようとしている広貴を波弥斗は肩を掴んで止めた

するとその客の後ろに大きな黒い影が現れた

「お客様舞台上の踊り子に触れたりきたないヤジをとばすのは禁止といいましたよね？」

西郷はそういいながらヤジをとばしたおっさんの頭を大きな手で掴んだ

そしてそのまま西郷はその豪腕で客を思いっきり投げ飛ばした

「オカマなめんじゃねェェェ！」

そういった怒声と一緒に。

その光景を、波弥斗と広貴は驚いた顔をして見ていた

＃

女より気高く
男より逞しく
それがママの口癖

買出し中にアゴ美は波弥斗と広貴に言った言葉だ
アゴ美は続ける

「私達みたいな中途半端な存在はそれぐらいの気位がないと世の中
わたっていけない
オカマは誰よりも強くなくちゃいけないの」

広貴は自販機で買った缶コーヒーを一口飲むとアゴ美の方を見た

「それにしてもさいご…ママの強さは常軌を逸してるよな
ただのオカマってわけじゃねーんだろ？」

その質問の答えは波弥斗も興味があった。
波弥斗はそれを先程買ったソーダアイスを食べながら聞いた

広貴の問いにアゴ美はそうよと答えながら何かを思い出すかのよう
に人差し指をたてた

「昔はすごかったらしいわよ
確か…白フンの西郷だとか呼ばれてて、何かよく知らないけど
白フン一丁で暴れまわってた豪傑らしいわ」

「いやそれだけの情報じゃただの変態じゃねーか」

真面目に答えたアゴ美に波弥斗がツッこむと三人が通った道の下か

ら子供の声が聞こえた

「お前の父ちゃんオーカーマ！
キショいんだよお前！」

見ると二人の意地の悪そうな子供二人が男の子に向かってそう言葉を放っている

そして水のようなものをその子にかけながらまた先程のようなことを言ってる

それを見かねた波弥斗と広貴は口からさっき飲んだり食べたりしたものを
二人の子供にむかってきたなくかけた

「うわっきたねぇオカマビームだ！」

子供二人は懲りずにそんなことを言って逃げて言った

悪ガキ二人がどこかに行くとアゴ美はいじめられていた子に声をかけに行った

その時、アゴ美はその男の子の顔を見た瞬間ハッと目を見開いた

「てっ…てる君！」

「「？？」」

男の子は名前を呼ばれるとタハハと冷や汗をかきながら作り笑いをした

二人が女装に目覚めてから数日……

「「目覚めてねぇよ!!」」

……何かが起きそうな感じです。

４０#オカマは男のバカさも女のズルさも全部知ってる（後書き）

西郷さんは結構好きです。アゴ美もかなり好きです（笑）

今回波弥斗と広貴どっちの女装の絵を載せてみましたけど……

特徴的に言うと波弥斗はショートヘアのおとなしそうな、小悪魔的な感じの子

広貴はツインテールの無愛想な子。みたいな感じです

自分的には描いている時とかすごく楽しかったですけど…どうでしょうか…

それでは＊書きたい書かせるお絵かきコ～ナ～＊です！

＞ｉ３３０１４―２４５８＜

今回は桃だけです。びみょ～に桃の服の色白っぽくしてあるのですが…（汗）

また源と郷のやつも載せたいと思います…

それでは次回も宜しくお願いします！！

４１#可愛い顔にはかならず何かが隠れてる（前書き）

灘
「どうも皆様お久しぶりでございます
灘でございます、もうお忘れになってしまったでしょうか…」

広貴
「しかーし！いつもそんな空気だが、今回は違う！
なぜならぁ！」

波弥斗
「我らが美衿さんの……！！」

灘・波弥斗・広貴
「誕生日だからだアァァァァァァ！！！」

新八
「……え、とハイ、美衿さん、誕生日おめでとうございます」

美衿
「わー♪まさかこの年でこんな風に祝ってもらえるなんて思っても
みなかったなぁ
ありがとうございます♪」

神楽
「だけどまさかのオカマ話が次回も続くっていうアレアルけどナ…」

銀時
「見てるこっちほんっと勘弁してほしいんだけど……」

灘
「す…すいません…
今回はなるべく間を空けないように…しようと…思ってます…」

広貴
「まぁ何はともあれ、母ちゃん誕生日おめでとう♪」

41#可愛い顔にはかならず何かが隠れてる

三人はその後、てる彦と呼ばれた少年を店に連れて帰っていた
そして店を開けると同時に四人の目の前に入ってきたのはすごい形相の西郷の顔
西郷はてる彦の怪我や様子を見てとても慌てた様子を見せた

「大丈夫だよ父ちゃ…「父ちゃんじゃねぇ母ちゃんと呼べェェェェェェェェ!!!」

そう言いながらてる彦を叱る姿を見て、その二人を親子……とは思わず子供ライオンを食おうとしている百獣の王、ライオンに見えたそうな……。

「しっ心配しないでよ　母ちゃん
帰りに友達とチャンバラごっこしてるだけだから」

言いながら無理した笑顔を見せるとてる彦は外へ出て行った

その様子を全員が黙ってみていると先程てる彦がいたと思われる所から一枚の紙が出てきた

何かと思い波弥斗はその紙を拾って見てみた

「……これ……」

部屋を出て行ったてる彦は店の屋上で一人町を眺めていた

「おーい小僧」

そんなてる彦に声をかけたのは波弥斗。
波弥斗はてる彦がこっちを見ると手に持っていた紙をヒラヒラと振って見せた

その紙には『父兄の皆様に授業参観のお知らせ』と書いてあった

「安心しろ、親父には見せてねーよ
それとも…見せたほうがよかったか？」

ニカッとイタズラっぽく笑うと波弥斗はてる彦にその紙を渡した

「いや…ありがとうお姉ちゃん」

「キッショイんだけど、もう一回お姉ちゃんって言ったらお前オカ

マにするぞ」

受け取りながら波弥斗をそう呼んだてる彦に波弥斗は本気でやりそうな感じで言った

「……お姉ちゃんって呼ばれたいから父ちゃんとこで働いてるんじゃないの？」

オカマ達が働いているあの店にいながらそう呼んだら怒った波弥斗に、
てる彦は不思議そうな顔で聞いた

「ちげーよ」

いかにも不服そうな顔と口調で返事をすると自身の体を屋上の囲いに伸しかかった

「……いいのか？親父に来てもらわなくて」

「……来てほしいけど……」

僕は馬鹿にされたっていいよ、慣れっこだから
でも父ちゃんが笑われて傷つくところは見たくないんだ
僕父ちゃんが大好きだよ、面白くて優しくて時々ちょっと怖いけど…

でもたまに……

「……」

続けるてる彦の言葉を波弥斗は何かを考えるように黙って聞いていた

『父ちゃんが普通の人だったらって思うこともある』

#

「ママ～ちょっと飲みすぎよ～どうしたっていうの？急に……」

てる彦が出てから、店の中では西郷が一人大量に酒を飲んでいた

その様子を見ていた店の子（？）達は少し注意をしてみたが西郷の

耳には届いてないようだ

「……」

広貴は西郷が飲んでいるテーブルから少し離れて見ていたがしばらくすると
何かを思い込んだように動きを見せた

「まぁまぁ皆、オカマにだって飲みたくなる時ぐらいあるわよさ、ママがつぶれたら私が介抱するから皆はもうあがって」

テーブルの回りに集まっていた皆の肩を軽く叩きながら広貴はテーブルの側に来た

「そう…？じゃあお願いね広美」

皆は納得したのか、最後にあんまり飲みすぎないようにねと最後に付け足して
ゾロゾロと店の奥のほうに行った

「……何の用よ、広美……」

「別に。あ、俺未成年だから酒は勘弁な」

広貴がここに残ったのは自分に用があるからだと悟った西郷は皆がいなくなると小さく聞いた

が広貴は何かを聞こうとするわけもなく西郷の隣のテーブルに座って

テーブルの上に散らばっているスルメなど酒のつまみを食べはじめた
そんな広貴をしばらく見ていたが西郷はふと何かを思ったように酒を飲むのを止めた

「……あの子にはホントに申しわけないと思ってる」

「！……あんた……」

西郷は酒を置くと腕を組んで話し出した

こんな親父をもって馬鹿にされない方がおかしいものね

全部私のせいなんだわ

「……なんだ、知ってたのか？」

少し驚いたように聞いた広貴の問いに西郷は黙って頷いた

てる彦がもの心つく前に母親が死んで……

それからは私が母親代わりもしなきゃいけないって、

それが行き過ぎてこうなっちまったけど

今までそれを後悔したことは一度もないしこれからもするつもりはない

確かにこのみにくい姿を見て笑う奴等もいるけどね……

『この魂だけは、男よりも女よりも美しいつもりだからさ』

そう答える西郷の目は強く迷いがなかった……

#

「……今度は、広貴も帰ってこなくなったということか？」

「申し訳ありません、若様！！」

一方柳生家では、波弥斗に続き広貴も帰ってこなくなったということで一族総出で捜索されていた。

大人数の男達の前で新たな指示を出している九兵衛を見て周りの者達はヒソヒソと会話しだした

「…なぁ若様、波弥斗さん達がいなくなってからあんま睡眠とってねーんじゃねぇの？」

「みたいに見えるなぁ…無理して若様が倒れないか心配だな…」

そんな感じで九兵衛がまた新たに探しに行こうとした

「おーい九兵衛」

「！…銀時…？？」

門をくぐろうとした九兵衛の前に現れたのは万事屋一行だった。
アポなしで急にきた万事屋に九兵衛は急いでいるのだがと言いながら質問した
すると一番前にいた銀時はニヤーッと不気味な笑いを見せた

「九兵衛よォ…面白いモン見たくねーか?」

「面白いもの?」

少し気になったものの、今は波弥斗達の捜索が先だと言い銀時達を通り過ぎて
九兵衛は階段を下りようとした

「その波弥斗のことつったら?」

「!」

階段の最初を踏み出そうとした九兵衛の足を止めたのは紛れもなく波弥斗のことだった

「波弥斗がどこにいるのか、知っているのか?銀時」

「あーそりゃもうバッチリ

だからそこに連れてってやろうかなーっていう俺の親切心よ」

それを斜め後ろで聞いている新八は銀時が連れて行くのは親切心ではなく、

間違いなく楽しんでいるからだと心の中でツッこんだ

「…そこに連れてってくれ、銀時」

#

どうも、小宮広貴です。

好きなものは神楽さん

嫌いなものは神楽さんの敵、及び神楽さんに近寄る男（むし）

そんな俺ですが、ただいまどんな状況かと言うと……

「……助けて」

はさまっていた・

ちなみに波弥斗は広貴の目の前で少しあきれたように広貴を見下ろしている

こんなことになったのは数十分前に遡る……

俺と波弥斗が店からしばらくのところうろついている所に
西郷さんの息子のてる彦君をいじめていた悪ガキ達が血相を抱えて走っているのを目撃

それを不思議に思った俺と波弥斗は二人を捕まえて事情を聞いた

二人が言うには最近子供達の間で流行っている『度胸試し』というものがあるらしく

化け物がいるという噂の空き家の庭の木から木の実をとってくるというものらしい

それをてる彦に言ってからかってみたところ本当に実行してしまい

俺達はそのてる彦が通った穴を見つけそこから中に入ろうとし

波弥斗はいとも簡単に入ったが俺は……。

そんなわけで今にいたる

「……」

「……」

二人はお互いに無言のまましばらくそのままでいた

「……えっと…この場合俺はどうすればいいですか？」

「いや知らねーよ、下手に出ても知るか」

一応毛一本くらいの期待をこめて広貴は波弥斗に助けを求めたが、
無駄だった

「おいマジ勘弁しろってこんな所で噂の何かでてきでもしたら……」

”ガササッ！！
”

「「！」」

波弥斗が話している途中に後ろの茂みが動く音がした

その音を聞いてまず一番にさっきガキ達が言っていた…が頭をよぎった

そこからもうダッシュで逃げようと波弥斗は足を動かそうとするが広貴に下から
?まれて身動きがとれなくなった

その後二人でヤーヤー言い合いをしだすと茂みを音はどんどんこちらに近づいてきていた

「何をやっとるんだ……おぬし達」

「「はい？」」

「ほうほうそれではその子供がここに入って戻ってこなくておぬし達はそれを探しにきたわけじゃな」

「おうありがとなちっちゃいおっさん、おかげで助かったよ」

助けてくれたので一応お礼を言いながら広貴は片手をあげた

挟まっていた広貴を助けてくれたのは央国星の皇子の天人『ハタ皇子』

それとハタ皇子の側近っぽい人の『じい』こちらも天人である

「何にしても、美人が困っているのにほっておくわけにもいくまいこの方等の人探し手伝ってしんぜよう、のう　じい？」

困っている波弥斗達を手伝ってくれるようで、ハタ皇子はじいに向かって言った

（（美人…？））

→引っ掛かり

「あ、俺パス４時からゲートボール大会あっから」

「クソジジー地獄のゲートくぐらせてやろうか」

そんな会話を二人が繰り広げている中、波弥斗と広貴はまわりを見渡してる彦を探す

しかし、周りは木ばかりでてる彦の姿は見当たらない

”ガササッ！！”

「「！」」

するとまたさっきと同じように向こうの林の方から何かが来る音が聞こえた

今度こそてる彦か？という期待と今度は何が出てくるんだという焦りと一緒に
姿を現すのをまった

「ギャオ～ス」

「「……あり？」」

そこから姿を現したのは普通の犬よりは大型だがとても愛らしい見た目の犬だった

「お～うラブミーぽち～」

その犬の首の下などを撫でながらハタ皇子は犬の説明をしだした

この庭は余のペット、ぽちのために用意した庭でな

空き家だった武家屋敷を購入してぽちの遊び場にしておるんじゃ

心配しなくてもぽちは子供に危害などくわえたりせんよ

「……皇子、僕も触っていいですか」

ハタ皇子の説明が終わると波弥斗は嬉しそうにぽちを触りにいこうとした

「お、おい波弥斗！危ねぇぞ、お前が動物好きなのはしってっけど止めとけって」

止める広貴の声も無視して波弥斗はウキウキしながら犬に触りはじめた

「馬鹿かお前は、確かに見た目はちっとデケーが…
こんなに可愛い見た目の奴が化け物なわけねーだろ、むしろ天使だ天使」

そういうと波弥斗はクルッと１８０度頭だけを回転し広貴を見た

「……！！」

見れば広貴が波弥斗の頭上をみて引きつった顔をしている

「……ん？」

一体何なんだと、波弥斗も自分の頭上を見上げた

プツン……

そして、波弥斗の悲鳴と共にそこにいる全員の意識が途絶えた……

「なっ…なぁよっちゃん！
今のオカマ達の悲鳴だよな！？どうしよう？」

その頃、外にいる悪ガキのよっちゃんとその友達はうろたえていた

困ったようによっちゃんに声をかけるとよっちゃんは何かを考え付いたように
走り出した

「よっちゃん!?どこにいくのよっちゃん!」

呼びながら、少年もよっちゃんの後に続いて走り出した

41#可愛い顔にはかならず何かが隠れてる（後書き）

な、なんとか…更新速度を上げたいと思っている今日この頃です……

ですが受験生って思ったより時間なくて……

どうか…次回も宜しくお願いします！！

４２#男も女もオカマも親（前書き）

灘
「どうも！４２話をお開きいただきありがとうございます！！」

広貴
「今回でオカマ話は終わりですよ！（やっと）」

灘
「後、今回が終わった後は長編の始まる前にする
『ぶっちゃけ話』あれをします！」

広貴
「ハイ、まさかの二回目ですよ…マジで」

灘
「さて、ここでお気づきの方もいらっしゃると思いますが…
そうです！もうすぐしたら長編です！」

広貴
「また前の長編みたく……」

灘
「だいじょぶ！今回はちゃんと考えてある！」

広貴
（ほ、ほんとだろぉなぁ……）

42#男も女もオカマも親

「お姉ちゃん！しっかりしてよお姉ちゃん！！」

「ん～？」

二人が気がつくと目の前にはてる彦が心配そうな顔をして自分達の顔を見ていた

その顔を見ると二人はホッとしたような顔をした

「よぉ…元気だったかお前」

「ったく心配させやがって…怪我とかねーか？」

「その言葉、そのままバットで打ち返すよ」

見ると二人は生首に…首以外の体が土に埋まっていた
そこで二人はハッとして思い出した。あの悪魔の顔を……

「なっなな何だったんだあの天使とヤクザが同居してたような生物はァァァァ！！！」

そう、こうなった元凶はあの愛くるしい見た目のポチ。
だがポチには実は本当の姿があって恐ろしい化け物が上についていた
いや…正確に言うとあの愛くるしい姿が偽者で恐ろしい姿が本当の姿だったのだ

「……お前…よく無事だったな」

あの化け物から、と付け加えて波弥斗はてる彦に言った

「うん…僕怖くてずっと木の上にいたから…
それで降りれなくなって困っていたらお姉ちゃん達が運ばれてきて……」

あの皇子達はどうしたんだろう…ふとそんなことを思いあまり動かない首を
小さく動かし周りをキョロキョロと探してみた

「ポチめ～こんな遊びを覚えおってうい奴じゃの～」

「皇子…ポチはねぇエサを保管するときこうやって埋めるクセがあるのです」

いた……、しかも自分達の真横に……。

その間にてる彦はなんとか二人を出そうとちょっとずつだが掘り出していた

今やっと二人の首だけから肩あたりまで見えてきた

「グス……皆ごめん
僕のせいでこんなことになっちゃって」

「……てる…彦……？」

二人の土を掘っている途中にてる彦は小さく泣きはじめた

何やってるんだろ僕……こんなにたくさんの人に迷惑かけて……

何が男の証拠を見せてやるだよ、こんなの男のすることじゃないよね

でもやっぱり父ちゃんのこと馬鹿にされるのくやしくて……父ちゃ

んはあんなだけど…
誰よりも男らしいの僕は知ってる
誰よりも心がキレイなのも知ってる
…でも誰もそんなの見えないし見ようとしない

「くやしい……僕くやしいよ」

こぼれ落ちる涙をぬぐいながらてる彦はくやしそうに言う

「……お前」

そんなてる彦を見て、波弥斗は何かを思い出すかのような表情をとった

”ガサッガサッガサッ！！！”

「！…あいつだ！！」

するとちょうどその時後ろから、波弥斗達をこんな風にした化け物

がやってきた

「きっ来たアァァァァ！！
ポッポチ！食べるならじいにせい！！余は脂ばっかで体に悪いぞ！
！」

「何言ってんだアァァァ！！
じい食べたら骨ささるぞ絶対！！皇子にしとけ！」

横で醜くも二人が口々に言い出している中、てる彦はなお掘り続けていた

「おい！こっちきてんぞ！！
俺達のことはもういいから逃げろてる彦！！」

広貴がそう言ってもてる彦は聞く耳を持たない

「うるさーい！！僕は男だ！絶対逃げない！！」

泣きながらてる彦は叫ぶとがむしゃらにもっと掘り続けた

「んなこと言ってる場合か！いいから早く……！！」

波弥斗が言い出している途中で後ろのぽちは加速をつけるようにしていた

そして次の瞬間とてつもないスピードでてる彦に向かって走ってきた

「逃げろォォォ！！！」

終わった、そんな風に感じたてる彦は力強く目を閉じた

「……！」

「……？」

しかし、おかしなことにてる彦にはいつまで立っても突進がこない

確かに後ろにあの化け物がいる気配がするのに……

「俺は男だって？」

その声と共にてる彦はおそるおそるも目を開けた、そして。

「「知ってるよんなこたァ」」

てる彦の目に映ったのは、
土の中から一人片腕ずつだしてぽちの角を掴んでいる波弥斗と広貴だった

「オメーもオメーの父ちゃんも男だ」

「誰も見てくれねーって？バカ言うな」

見えてる奴には見えてるよんなモン

少なくともここに二人はいることを忘れんな

「お…お姉ちゃ……」

二人の声はどこまでも真っ直ぐ、てる彦は驚いた顔をして二人を見ていた

「ふん、生意気いいやがって」

「「「!?」」」

突然、三人の後ろから低い声が聞こえたと思うとぽちは波弥斗達の腕から開放され…
いやフッ飛んで木にぶつかった

あの大きな化け物が吹き飛ぶなんて一体何が起こったんだろうと三人は目を丸くしていた

そして吹き飛んだ元凶があると思われる方向に顔を向けた

「かっ母ちゃん!??」

三人の目の前には白い褌姿の西郷と、よっちゃん達悪ガキ…それと銀時達と九兵衛

「ママ、アニキ…それに新八……きゅ…九兵衛!??」

「かっ…神楽さん!??」

その面子に驚いた三人はびっくりして叫んだ

一方驚いたのはこちらだけでなく、向こう…特に九兵衛は驚きを隠せないようだった

「は…波弥斗、それに広貴まで……その格好は……」

信じられないものを見るような目でこちらを見ている九兵衛を見てなんだかとても恥ずかしくなったそうな

全員が驚いている間に先程西郷に思いっきり殴られて飛ばされたぽちは体制を戻して

また攻撃をしかけてこようとしていた

そんなぽちを待ち構えて西郷が待っている間に
銀時達は波弥斗と広貴を掘り起こそうと寄ってきた

「おーい大丈夫か波弥斗ーお前首からしたどこやったー」

「いや、今はもう肩まで見えてますから。んなことよりアニキ……ママのあれ…」

先程ぽちをフッ飛ばしたあの腕力、それにあの気迫

あんな怪物を目の前にしてもビクともしてない西郷を疑問に思いながら銀時に問う

「ああ…あいつはなァ……」

天人襲来の折、白フン一丁で敵の戦艦に乗り込んで
白い褌が敵の血で真っ赤に染まるまで暴れまくった伝説の男……

「『鬼神・西郷特盛（とくもり）』だ」

ゴッ！！！

その声と同時に西郷の重い拳がぽちにあたり、ぽちはその場に崩れ落ちた

ぽちが倒れるとてる彦は西郷に急いで駆け寄った

「かっ母ちゃんごめん！！ぼく……」

ゴッ！

弁解していたてる彦の言葉は中断し、てる彦の体はその場に崩れ落ちた

「ばかやろー…父ちゃんと呼べェ」

倒れたてる彦を担ぐと西郷は出口の方に歩き出した

「オイ」

と歩き出しながら西郷は波弥斗達に低い声を出した

「テメーらはクビだ
いつまでたっても踊りは覚えねーしロクに役にもたたねぇ
今度私らを化け物なんて言ったら承知しねーからな、それから……」

そこまできつい言葉を言っていた西郷だったがそこで一息をついた

『なんかあったらいつでも店に来な
たっぷりサービスするわよ♪』

最後に振り向きウインクをするとまた前を向き西郷は出口へと向かった

「……こわいよ～」

「なんか俺らいらん世話をしたみてーだな……」

西郷が行った後波弥斗と広貴がそれぞれ一言ずつ感想を言い終えると銀時は小さく笑った

「たりめーだ、あいつも侍と変わんねー……立派な求道者だからな」

ぼくのお父さんお母さん

西郷てる彦

ぼくのお母さんはお母さんでもありますがお父さんでもあります

みんな自分を蝶と言い張りますがどっちかというと蛾です

でも　みんないい人ばかりで

心はどんな人たちよりもキレイだとぼくは思います

お母さんみんないつまでもキレイな蛾でいて下さい

そんなみんながぼくは大好きです

おわり

#

が、実はこれで終わりではなかった

皆さん気になっているかたもいると思いますが、

土の中から掘り出された波弥斗と広貴はどうなったかと言うと……

「……」

「……」

オカマの姿から元に戻った波弥斗と波弥斗の女装を見た九兵衛は

横に並んで無言でお互い顔を気まずそうに目をそらしたまま歩いて

いた

そんな二人を銀時達と広貴は５ｍくらい後ろから見ていた

「…え、何？なんなのあの二人。
なんか見ていてかゆいんだけど、なんか見ていてイライラするんだけど」

話もせずただ並んで歩いているだけの二人を見て銀時は口を開いた

「まぁまぁ銀さん、ここはほっといてやろーぜ…面白そうだし」

最後の言葉を言うときだけ黒い笑顔を浮かべた広貴は銀時の肩を軽く叩いた

「面白そうって…？広貴さんどういう意味ですか？」

「ああ、それはなァ……」

そこまで広貴は楽しそうに話していたが新八に聞かれ何かを考えたように
喋るを中断した

「……広貴？『それはなァ』なにアルカ？」

「……いや、何でもないですよ神楽さん
そんなことより！この近くにおいしいお茶屋さんがあるんですよ！

団子でも食べながらお茶しませんか？」

金欠万事屋三人はその言葉にテンションを一気にあげた

「ヒャッホウ！！団子なんて久しぶりアル！！
何個でもいいアルカ！？」

「ちょっと神楽ちゃん！一応遠慮して２０本くらいにしないと……！！」

「気にするこたァねぇどうせ払うのは広貴なんだからな」

「ちょ！？俺は神楽さんには奢るけどあんたらは別だぞ！？」

そんな感じにギャーギャー後ろで４人が騒ぎながら波弥斗達から離れていった

「……」

騒ぎながら、広貴はチラリと波弥斗の方を見た。

そして小さく笑うと銀時達をつれてお茶屋の方に向かった

「……えーと、お嬢さん」

騒いでいた４人の声がだんだん小さくなっていくのを聞くと
波弥斗は小さく横にいる九兵衛を呼んだ

「…最初に言わせてもらいますけど……俺はオカマとかじゃねーからアニキに何言われたのかしらねーけど…むしろ逆と言っていいから」

「……逆？」

そこに引っ掛かったのか、九兵衛は小さく反応を見せ聞き返した

「当たり前だろ、俺は年上の女の人好きな１７歳だぞ？その俺が好き好んでオカマになるわけねーし」

「……そ、そうだな
そういえば…どうして土の中なんかに埋まっていたんだ？」

少し調子を取り戻した波弥斗とまだ何か引っ掛かっている九兵衛は話を続けた

＃

「そうか、そんなことが……
だけどあの親子もうまくいったみたいでよかったな」

「ああ、ほんっとはた迷惑な親子だったよ」

二人はすっかりいつもどおりになったようであっという間に柳生家まで帰ってきていた

「それにしても…二人が親子のいざこざに顔を突っ込むなんて意外だな」

門の前の階段を上っている途中に九兵衛は意外そうな顔をして口を開いた

「……そうか？」

その言葉に波弥斗は少し合間を空けてから答えた

「あ、おーい！波弥斗！！若さーん！！！」

その時ちょうど階段の下の所から銀時達と別れてきた広貴が笑顔で手を振ってきた

広貴はそのまま笑いながら階段を走って上ってきた

そんな広貴を考えたように波弥斗と九兵衛は見ていた

「……あいつはさ……」

あのガキと同じくらいの歳に大好きな父ちゃんを亡くしちまってんだ

まだまだたくさん父親に甘えていたかったはずなのに。

それで…父親にうまく甘えられてなかったあいつをなんとかしてあげたかったんだと思う

「……」

今、笑顔で駆け上がっている広貴を少し悲しそうな目で見ながら波弥斗は言った

「……」

そんな波弥斗の横顔を九兵衛は何かを思うように見つめていた

「じゃあ……」

「ん？」

聞いたら駄目だ、人には聞かれたくないことの一つや二つぐらいあるはずだ

『聞いたら駄目だ』その言葉が頭の中で、何度もこだまする

「なんだよ？」

聞いたもののその後の言葉をなかなか出せないでいる九兵衛

「……波弥斗は……」

その後の言葉をなんとなく出したらいけないような気がする。

だけど、聞かせてほしい。知らせてほしい。打ち明けてほしい…

「波弥斗は……どうしてあの親子を助けようとしたんだ？」

やっと言えた、九兵衛は少し重荷からとれたような感覚が走った

しかしそれを言われた波弥斗自身は少し瞳が暗くなった

「……――――――――から…かな…」

「……は？」

急に目線を外して屋敷の方に歩き出したと思ったら小さくそう言った

「お互いがお互いを想ってる。
口には出さなくても……それが親子だろ」

寂しそうで、一人で、遠い。そんな背中……

「はや……「九兵衛」

歩いていたのをピタリと止めて悲しそうな目で笑うと

波弥斗は瞬きをすると見逃してしまいそうな口の開き方で声を出した

『愛のある親子っていいな』

４２#男も女もオカマも親（後書き）

さて、なんだか毎回長編に入る前は波弥斗の過去に若干触れて入ってますよね

そこんとこちゃんと計算してます

……ハイ、嘘です。

それでは次回も宜しくお願いします！！

43#Merry Christmas good today（前書き）

灘
「波弥斗てめコラァァァァァァァァ！！！」

波弥斗
「ぶへっ！？」

決めポーズ的な感じで蹴りを入れた後着地する灘。
そして無様に、本当に無様に倒れる波弥斗。

波弥斗
「お前いきなり何すんだよ！？」

灘
「うるせぇぇぇ！！よくも九ちゃんに…！！九ちゃんと…！！」

波弥斗
「知らねーよ！！何で俺を怒るんだよ！テメーが書いたんだろーが！」

灘
「誰も見たくねーんだよ！お前のラウ　話なんか！！
ましてや九ちゃんとなんて絶対にな！」

波弥斗

「はぁ！？お前何言って……」

灘
「口を開くなハゲェェェェェェェェ！！！」

波弥斗
「ぐへっ！！」

万事屋三人
「「「……」」」

銀時
「醜く……」

新八
「同意」

神楽
「同じくアル」

広貴
「えっと…今回も長いのでご承知していただいたら光栄です！！
それでは第４３話どうぞ！」

43#Merry Christmas good today

「ふわぁ～あ」

広い柳生家の屋敷のある一室の廊下に寝そべり、波弥斗は大きなあくびをした

そんな彼を九兵衛はいかにもだらしないなぁというような目で部屋の中から見ていた

一通り体を伸ばすと波弥斗はもう一度気持ちよさそうにうたた寝に入ろうとする

「…波弥斗、いくら天気がいいからって午前中からそれはどうなんだ」

部屋の中から九兵衛がそう言って注意をするが、彼は聞く耳をもたない

「るせーな…冬なのにこんなに天気がいいんだぞ
起きてろっつー方が無茶何だよ。滅多にないことなんだから文句なら太陽に言え」

屁理屈を一言だけ言うとまた寝そべり気持ちよさそうに目を瞑った

「……」

呆れたように、ため息をつくと九兵衛は部屋から出て行った

「あ、若さん」

「…広貴」

廊下を歩いていると丁度稽古が終えたのか、汗を拭きながら歩いている広貴がいた

「波弥斗のヤツ、何処にいますか?」

「え、ああ…波弥斗なら庭のある部屋で転がっているが……」

九兵衛の言葉に広貴はこんなに良い天気なのに、と苦笑いしながら返した

「……」

目の前で笑いながら話している広貴を九兵衛は改めるようにジッと見た

黙ってジッと見つめられ、広貴は何なんだろうと言う顔をした

「……あの若さん？俺の顔に何かついてますか？」

聞かれた瞬間、九兵衛はハッとしたように顔を俯き広貴の横を通り過ぎていった

「……？」

通り過ぎた九兵衛の後姿を広貴はよく分からないような顔をして見ていた

一方波弥斗といえば、気持ちの良い晴れの下本格的に眠りに入っていた

「……ＺＺ…」

いつしか枕代わりにしていた座布団は庭に落ちてしまっているが、そんなこと気にしない

そこへやっと見つけたと言わんばかりに広貴は小さな笑みを浮かべながら近寄る

「おーい波弥斗、俺神楽さんとこ行こうと思ってんだけどお前も…」

「くー…くー……」

話をかけた所で、波弥斗が気持ちよさそうに寝ていることに広貴は気づいた

良い天気の日に廊下で寝るなんてこいつは爺さんか、
心の中で思うと広貴は石の下においてある草履を履き目の前の水を汲む所へ足を運ぶ

そして柄杓にいっぱい水を入れるとそれをこぼさないように運び…

”バチャ!!”

「ぶわっぷ!?」

突然顔に水をかけられた波弥斗は勢いよく飛び上がった

「な…にすんだテメー!!人が折角気持ちよく寝てたっつーのに!」

当然、波弥斗は目の前に行動の証拠を持っている広貴に怒鳴りつける

「うるせー見ていてイライラするぐうたら何だよお前
今から神楽さんとこ行くつもりなんだけどお前も来いよ」

すると波弥斗はいかにも嫌そうな顔をして廊下の下に落ちた座布団
をあげた

「んなどーでもいいことのために俺の睡眠を邪魔したのか？
神楽んトコに行きたいならお前一人で行けよ、めんどくせー……」

それだけ言うとゴロンと転がり再び眠りにつこうと波弥斗はする

枕代わりにしている座布団のうえに頭が乗っかろうとした瞬間、
広貴は座布団をサッと素早く取り上げた

「って！？」

波弥斗の頭はそれにより木の廊下の上にゴツンと音をたてぶつかった

「いいからさっさと支度しろこの馬鹿」

座布団を取り上げられた上に広貴が若干怒ったような雰囲気で言う
ので、
しぶしぶと波弥斗は出かける準備をした

＃

万事屋に行く前に通る街中では日曜日ということもありざわついていた

広貴はクリスマスが近い寒空の下いつもの着物の上に手袋だけをして出てきていた

そこへいかにも嫌そうな顔で青いチェックのマフラーをしてゆっくりと歩いている
波弥斗を広貴は苦笑いで見た

「ったく…いい加減そのツラ止めろって。
それにほら、こうやって外の空気吸いながら歩くのもいい感じだろ？」

「いや、俺一応外の空気吸いながら寝てましたから
大体なァ…俺をお前みたいな年中無休の奴と一緒にすんなこのアホ体力」

素早く反論すると広貴は笑いながらため息をしてまた歩き始めた

その後ろをめんどくさそうに付いていこうと足を波弥斗も踏み出した

「……ん？」

彼の目に移ったのはクリスマス特別フェアをしている小さなお店だった

可愛らしい見た目のその店はいかにも女の子が喜びそうなものがたくさん置いてある

しばらくその店を眺めていた波弥斗だが、広貴がその店に入っていくのを見て
驚いて追いかけていった

「お、おい広貴！何でこんな女モンの店に入ってんだよ」

追いついた波弥斗が店の品を手に取ったりして見ている広貴に向かって聞く

「ん～？何って…神楽さんへのクリスマスプレゼントだよ」

自分のほうには見向きもせずそう言った広貴に波弥斗はハァ？という顔をした

そして波弥斗のその驚いた顔に気づいたのか広貴は小さく笑って話し出した

この前銀さん達とここらへんきた時にな、
神楽さんクリスマスのイベントしてたこの店をちょっと羨ましそうに超見てたんだよ

銀さんにどうした、って声掛けられたらすぐに目を離して何でもないって答えて…

ホラ、神楽さんはあれはあれで色々男勝りな性格してるけど……

ああ見えてやっぱり女の子らしいとこがある人なんだよ

嬉しそうにそう言う広貴の横顔を見て、波弥斗はふーん…と物珍しそうに言った

広貴が店のものを見ている間少し暇ができた波弥斗は店の中をグルッと回ってみた

「……」

ああ見えてやっぱり女の子らしいとこがある人なんだよ

（……九兵衛も…こういうのほしがったりするのかな……）

目の前にあった青い着物を着て、腰に刀をさしている可愛らしいトナカイの
キーホルダーを持ち上げ眺めながら波弥斗はふと思った

考えたようなしぐさをし広貴が向こうの方にいるのを確認し、波弥斗はレジへ向かった

「いらっしゃいませー♪」

レジに行くと可愛らしいサンタの格好をした店員さんが笑顔で出迎えてくれた

「４３０円になりまーす」

言われたとおりのお金を出し、お金をレジにしまった店員さんは袋に入れようとした

「あ…えと…それ……」

「はい、何でしょうか」

普通の袋にいれようとした店員さんに波弥斗は戸惑いがちな声を出した

その後の言葉が言いにくいのか波弥斗はマフラーで口を隠して少し赤い顔をした

そして店員さんの手の上にあるトナカイを小さな動作で指差し、俯いた

「……プレゼント用にしてくだ……さい……」

最後の方など本当に小さな声で言うと
店員さんは笑顔でかしこまりましたー♪と答えてくれた

「……」

可愛い袋に入れられ可愛くラッピングされた袋を店の外で波弥斗は眺めていた

崩れるようにその場にしゃがみこむと波弥斗は顔に手をあて少し赤い顔をしていた

（……いや何だって俺はこんなモン買ったんだよ
マジはじーんだけど、馬鹿だろ、馬鹿だろ俺。あ、馬鹿か…）

とは思いつつわざわざ金を出してまで買った物を捨てるのも嫌だし、ましてやプレゼント用にしてもらってまで返品するなんてもっと嫌だ

（……不本意だけど、折角買ったったんだし渡すだけ渡すか？）

う〜ん…と頭に手をのせて考えていると店の扉が開く音がした

「あぁ…波弥斗またせて悪かったな……」

「いや別にいいけど……お前それ買ったの？」

見た限り、何やらとても大きな袋を抱えている広貴に波弥斗は指差しながら問う

質問をされフッと勝ち誇ったかのように広貴は笑うと袋の中をガサガサあさり出した

「俺が神楽さんに買ったのは、この『クリスマス特別詰め合わせ酢昆布』だ！」

「……」

それはわざわざあの店で買わなくてもいいんじゃねぇか？

つーかよくあんな店にそんなモン置いてたな

ツッコミたい気持ちをグッと押し込めてとりあえず冷めた空気を広貴に送ってみた

だが当然ながらその冷めた空気はＫＹ広貴（↑ここ母親似？）に通じることはなく……

片やルンルンな気分で、片や脱力感丸出しで、万事屋へ向かうこととなった

「「……あ……」」

万事屋に向かっている途中の公園の前で二人は声をそろえて声を発した

二人の目の前には万事屋3人と万事屋の天敵で、自分たちにとってもあまり良い存在とは言えない真撰組の土方と沖田だった

万事屋に行く前に見つかったのは良いが…どうにも近寄りがたいような雰囲気である

「……アリ？」

が、気が付くと横にいた広貴がいない

冷や汗をしながらバッと万事屋や真撰組の方を見ると

案の定、広貴と神楽が揃って沖田を睨んでいる光景が視界に入った

まさにあちゃーという感じで波弥斗は顔に手をあてた

「沖田ァ……何でテメェがここにいんだよ

何で神楽さんと一緒にお前の顔を見なけりゃいけねーんだよアァン？」

「生憎、こっちはそっちと違って勤務でここにいるんでさァ
道塞ぐってなら公務執行妨害で堂々と逮捕するぜィ……土方が」

「何で俺だよ!!巻き込むんじゃねぇ!」

お約束のそんな会話を繰り広げている所へ、波弥斗とゆっくりと近づいた

「すいませ～んおまわりさん、うちの子が騒がしちゃって……
今度はちゃんと目ェ離さないようにしますから」

「あぁ気をつけてくださいよ奥さん……ってお前!!」

「おぉ…波弥斗も居たのか」

「こんにちわ波弥斗さん」

ゆる口調で言った言葉にノリツッコミしてくれた土方と挨拶をしてくれた二人に
波弥斗は　よぉ　と言いながら手を上げた

「悪いね～毎度毎度あの広貴(ばか)がそちらさんに迷惑かけて……」

「いや…それに毎度毎度乗っかる総悟も総悟だ」

「まぁあの三人が最近喧嘩するのはほとんどうちの神楽せいなんだけどな」

波弥斗と土方と銀時は目の前の公園で激しいバトルを繰り広げている三人を見た。
その姿はまるで子供を心配する親のように

「ウラァ！！」

「「「「…？」」」」

急に沖田の大きな声が聞こえたと思うとこちらに広貴が飛んできていた

「え、ちょおま…待っ……！！」

”ガシャーン！！！”

次の瞬間、広貴と波弥斗は思いっきりぶつかった

本当にこんな音がするんだなと思わせるぐらい大きな音をして、痛そうな音がした。

「お、おい…大丈夫か…？」

少し心配そうに銀時が声をかけるとムクッと広貴は起き上がった

「こ…の野郎!!沖田テメー!!!」

起き上がったと思うと広貴はまた素早く沖田の元へと吠えながら走っていった

「「……（丈夫な奴…）」」

なんてことを思いながらまた喧嘩をし始めている広貴を銀時と土方は眺めた

が、うっかり忘れていたが広貴の下敷きとなった少年は……

「……」

「「「……」」」

これはまぁ見事に下敷きに……いや、波弥斗（ひと）がごみのようだ

「止めんか!!ム○カの名言俺に言うの止めんか!!」

ツッコミの際はなんとか起き上がったものの流石に年中無休の広貴とは違い痛そうだ

「いてて……あの馬鹿思いっきりぶつかってきやがって……」

先程の衝撃でキーホルダーが壊れてないと良いが……

そう心配そうにキーホルダーを入れてあるポケットに手を入れてみた

「……！！」

「…？どうしたー波弥斗」

……ない…彼女のために買ったはずのプレゼントが……

さっきのぶつかった衝撃でどこかへ飛んでいったのか、それとも別のどこかで……

慌ててあたりを見渡したが見当たらない

「……あの、波弥斗さん？どうかしたんですか？」

新八にそう聞かれてハッとして波弥斗は急いで起き上がった

「……何でもねーよ…俺先帰るわ、広貴にもそう言っといてくれ」

「え？あ、はい……」

それだけ言うと波弥斗はポケットに手を突っ込み柳生家の方に歩いていった

「「「……」」」

その後姿を銀時達三人はジッと見ていた

「……銀さん、波弥斗さんどうしたんですかね」

「……」

”ガラララ……”

「…！」

玄関の方が開く音が聞こえ、九兵衛は急いで走っていった

「あ……おかえりなさい波弥斗」

「おー……ただいま」

玄関にいたその姿を見て九兵衛は嬉しそうに声をかけた

「今オババと一緒にクリスマス用の食事を作っているんだ、広貴が帰ってきたらすぐ…」

「あぁ…できたら呼んでくれや」

しかし、波弥斗は九兵衛の話を中断させるようにそう言うとスッと横を通り過ぎた

「あ…ああ…わかった……」

何かあったんだろうか、という顔で自分の横を通り過ぎる波弥斗を見た

それから2時間後に広貴が帰ってきて、クリスマス風に飾られた16畳ぐらいの部屋に皆集まった

敏木斎、輿矩、オババは早速クリスマス用のシャンパンを飲み散らかし酔っている

柳生四天王も無論最初のシャンパンだけでは足りずと勢いよく飲み食いをしている

広貴も神楽にプレゼントをあげて喜んでもらえたのか上機嫌でパーティーを楽しんでいた

いつもは武士らしく、とか堅苦しい柳生家でもあるが今日だけはただの

クリスマスを楽しむ一つの家としてパーティーをしていた

「ささっ若もたくさん食べないと！」

「ああ……」

が、九兵衛もパーティーを楽しんでいるものの…

部屋から出て一人廊下で食べたり飲んだりしている波弥斗のことが心配であったりもした

#

クリスマス当日

チュンチュン……

クリスマスの朝というのはサンタさんからの贈り物が楽しみな日。

しかし年を重ねる度にそのワクワクは小さくなっていく……

「ん……？」

ＡＭ：７時

「う～…ねむ…さむ……」

波弥斗はそう言いながら珍しく早く起きて廊下を歩いていた

ちなみに広貴は波弥斗よりも早く起きて稽古に行っているらしいが……

何時に起きているのかは分からない

すると目の前から九兵衛が歩いてくるのが見えた。

皆皆いつも朝早くからご苦労なこったぁ、そんな感じに能天気なことを思いながら

ペースをあげることもなく歩き続けた

「おはよう波弥斗、今日は珍しく早起きだな」

「るせー…サンタさんからのプレゼントでもあると思ったんだ……よ……」

横を通るときに声を掛けてきた九兵衛を見て波弥斗は一瞬時間が止

まるかと思った

なぜなら、九兵衛の腰にいつも差している刀の鞘に
昨日自分が落としたトナカイのキーホルダーがつけてあったからだ

「お…おまっ…！！それ……！！」

「え？これは…今朝目が覚めたら枕元に置いてあったんだ」

わけが分からなかった。

昨日自分が落としたそのキーホルダーがなぜ彼女の枕元に置いてあった？

それを買ったことを知っているのは自分だけのはずなのに……

「そういえば……」

色々なことが波弥斗の頭で思考回路でグルグル回っていた時に、
九兵衛が思い出したかのように声を出した

「さっき道場に行った時広貴が波弥斗に……
『俺と銀さん達と一応真撰組のあの二人にも感謝しろよ』
と伝えてくれと言われたが……」

・・・・・・・・・

…まさか……広貴（あいつ）……

俺がキーホルダーを買った所を見てた？

それで俺が急に帰ったのを見てキーホルダーを無くしたと思って……

2時間もしてから帰ってきたのはずっとあいつらと探してたから…

…？

「……」

「……？どうした、波弥斗」

九兵衛にそう聞かれ、ああ…とごまかすと改めてキーホルダーを見た

「……気に入ったか？」

「ああ、すごく可愛いし…でも正直僕には合わないんじゃないかと思って…」

「んなことねーよ」

珍しく波弥斗にそう褒められて（？）九兵衛は驚いた顔をした

「……あ、りがとう」

驚いたようだが、確かに嬉しそうに九兵衛はお礼を言った

＞ｉ３７５３６―２４５８＜

そしてその九兵衛の笑った顔を見て波弥斗もまた、珍しく優しく笑った

『……メリクリお嬢さん』

『メリークリスマス　波弥斗』

43#Merry Christmas good today（後書き）

はい、自分が最初どうして波弥斗をあんなに怒ったのか……

もう…本当に怒り爆発です（苦笑）

それでは最後に一言…

波弥斗のブワァカ！調子乗んなコノヤロー！！

それでは次回も宜しくお願いします！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7179q/

Vivre toute ma vie

2011年12月24日10時52分発行